

それから

夏目漱石

青空文庫

一の一

誰か慌たゞしく門前を馳けて行く足音がした時、代助の
 頭の中には、大きな俎下駄が空から、ぶら下つてゐた。けれど
 も、その俎下駄は、足音の遠退くに従つて、すうと頭から抜け
 出して消えて仕舞つた。さうして眼が覺めた。
 枕元を見ると、八重の椿が一輪畳の上に落ちてゐる。代
 助は昨夕床の中で慥かに此花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、
 それが護謨毬を天井裏から投げ付けた程に響いた。夜が更けて、
 四隣が静かな所為かとも思つたが、念のため、右の手を心臓の上

に載せて、^{あばら}肋のはづれに正しく^{たゞ}中る^{あた}血の音^ちを確^{おと}かめながら^{たし}眠^{ねむり}に就いた。

ぼんやりして、少^{しばらく}時、赤ん坊^{あたま}の頭程もある大きな花の色を見詰めてゐた彼は、急に思ひ出した様に、寐ながら胸^{みやく}の上に手^あを当てゝ、又心臓の鼓動を検し始めた。寐ながら胸の脈を聴いて見るのは彼の近来の癖になつてゐる。動悸は相変らず落ち付いて確^{たしか}に打つてゐた。彼は胸に手を当てた儘、此鼓動の下に、温^{あたた}かい紅^{くれなゐ}の血潮の緩く流れる様^{さま}を想像して見た。是^いが命^{いのち}であると考えた。自分は今流れる命^{いのち}を掌^{のひら}で抑へてゐるんだと考えた。それから、此掌^{てのひら}に^{こた}応へる、時計の針に似た響^{ひびき}は、自分を死^しに誘^{いざな}ふ警鐘の様なものであると考えた。此警鐘を聞くことなしに生^いきてゐられたなら、

——血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねなかつたなら、如何に自分は氣樂だらう。如何に自分は絶対に生を味はひ得るだらう。けれども——代助は覺えず悚とした。彼は血潮によつて打たる、掛念のない、静かな心臓を想像するに堪へぬ程に、生きたがる男である。彼は時々寐ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、此所を鉄槌で一つ撲されたならと思ふ事がある。彼は健全に生きてゐながら、此生きてゐるといふ大丈夫な事実を、殆んど奇蹟の如き僥倖とのみ自覺し出す事さへある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。夜具の中から両手を出して、大きく左右に開くと、左側に男が女を斬つてゐる絵があつた。彼はすぐ外の頁へ眼を移した。其所には学

校騒動が大きな活字で出てゐる。代助は、しばらく、それを読んでゐたが、やがて、倦怠だるさうな手から、はたりと新聞を夜具の上うへに落した。夫から烟草を一本吹ふかしながら、五寸許り布団を摺ずり出して、畳の上の椿つばきを取つて、引つ繰り返して、鼻の先へ持もつて来た。口くちと口くちひげ鬚と鼻の大部分が全く隠かくれた。烟りは椿の瓣つばきはなと蕊すいに絡からまつて漂たゞよふ程濃く出た。それを白しろい敷布しきふの上に置くと、立ち上あがつて風呂場へ行つた。

其所そこで叮ていねい嚙はに齒みかを磨いた。彼は齒並はならびの好いのを常に嬉しく思つてゐる。肌はだを脱ぬいで綺麗きれいに胸むねと脊せを摩擦まさつした。彼の皮膚かれひふには濃こまやかな一種の光沢つやがある。香油かうゆを塗ぬり込んだあとを、よく拭き取とつた様に、肩かたを揺うごかしたり、腕うでを上げたりする度たびに、局所きよくしよの

脂肪しぼうが薄うすく漲みなぎつて見える。かれは夫それにも満足である。次に黒い髪かみを分わけた。油あぶらを塗つけないでも面白い程自由になる。髭ひげも髪かみ同様に細ほそく且かつつ初うい々くしく、口くちの上うへを品よく蔽おほふてゐる。代助だいすけは其そのふつくらしした頬ほを、両手で両三度撫でながら、鏡の前まへにわが顔かほを映うつしてゐた。丸をんなで女おしろいが御白粉おしろいを付つける時の手付てつきと一般であつた。實際彼は必要があれば、御白粉おしろいさへ付つけかねぬ程に、肉体ほこりに誇ほこを置おく人である。彼の尤も嫌ふのは羅漢の様な骨骼さうごうと相好さうごうで、鏡に向ふたんびに、あんな顔うまに生れなくつて、まあ可よかつたと思ふ位である。其代り人から御洒落おしやれと云はれても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は旧時代の日本を乗り超えてゐる。

一の二

やく
約三十分の後^{のち}彼は食卓に就いた。熱^{あつ}い紅茶を啜^すりながら焼^{やき}麵^{ぱん}麩^ふに牛酪^{バタ}を付けてゐると、門野^{かどの}と云ふ書生が座敷から新聞を畳んで持つて来た。四つ折りにしたのを座布団^{わき}の傍へ置きながら、

「先生、大変な事が始まりましたな」と仰山な声で話しかけた。

此書生は代助を捕^{つか}まへては、先生先生と敬語を使ふ。代助も、はじめ一二度は苦笑して抗議を申し込んだが、えへへ、だつて先生と、すぐ先生にして仕舞ふので、已を得ず其儘にして置いたのが、いつか習慣になつて、今では、此男に限^{かぎ}つて、平氣に先生として通^{とほ}してゐる。實際書生が代助の様な主人を呼ぶには、先生以

外に別段適当な名称がないと云ふことを、書生を置いて見て、代助も始めて悟つたのである。

「学校騒動の事ぢやないか」と代助は落付いた顔をして麵麩ぼんを食つて居た。

「だつて痛快ぢやありませんか」

「校長排斥がですか」

「えゝ、到底辞職もんでせう」と嬉うれしがつてゐる。

「校長が辞職でもすれば、君は何か儲ことかる事でもあるんですか」
「冗談云つちや不可いけません。さう損そん得とくづくで、痛快がられやしません」

代助は矢つ張り麵麩ぼんを食くつてゐた。

「君、あれは本当に校長が悪らしくつて排斥するの、他に損得問題があつて排斥するの、か知つてますか」と云ひながら鉄瓶の湯を紅茶々碗の中へ注した。

「知りません。何ですか、先生は御存じなんですか」

「僕も知らないさ。知らないけれども、今の人間が、得にならないと思つて、あんな騒動をやるもんかね。ありや方便だよ、君」

「へえ、左様なもんですかな」と門野は稍真面目な顔をした。代

助はそれぎり黙つて仕舞つた。門野は是より以上通じない男であ

る。是より以上は、いくら行つても、へえ左様なもんですかなで

押し通して澄ましてゐる。此方の云ふことが応へるの、か、応へ

ないの、か丸で要領を得ない。代助は、其所が漠然として、刺激

が必要なくつて好いと思つて書生に使つてゐるのである。其代り、
 学校へも行かず、勉強もせず、一日いつにちごろ／＼してゐる。君、ち
 つと、外国語でも研究しちやどうだなど、云ふ事がある。すると
 門野かどのは何時いつでも、左様さうでせうか、とか、左様そんななもんでせうか、と
 答こたへる丈である。決して為しませうといふ事は口くちにしない。又か
 う、怠惰なまけものでは、さう判然はつきりした答こたが出来ないのである。代助
 の方でも、門野かどのを教育うましに生れて来た訳でもないから、好加減いゝかげん
 にして放ほうつて置く。幸さいひ頭はたまと違つて、身体からだの方は善く動うごくので、
 代助はそこを大いに重宝がつてゐる。代助ばかりではない、従来
 からゐる婆さんも門野かどのの御蔭で此頃は大変助かる様になつた。そ
 の原因で婆さんと門野かどのとは頗なかる仲が好い。主人の留守などには、

よく二人で話を^{ふたり}する。

「先生は一体何を^{いつたいなに}為る気なんだらうね。小母^{おば}さん」

「あの位^{くらゐ}になつて入らつしやれば、何^{なん}でも出来^{でき}ますよ。心配する

がものはない」

「心配はせんがね。何か^{なに}為たら好^よささうなもんだと思ふんだが」

「まあ奥様でも御貰ひになつてから、緩つくり、御役でも御探^{おさが}しなさる御積りなんでせうよ」

「いゝ積^{つも}りだなあ。僕も、あんな風^{いちんぽん}に一日本を読んだり、音楽を聞^ききに行つたりして暮^{くら}して居たいな」

「御前^{おまへ}さんが？」

「本^{ほん}は読まんでも好^{いい}いがね。あゝ云ふ具合に遊んで居たいね」

「夫^{それ}はみんな、前世^{ぜんせ}からの約束だから仕方がない」

「左様^{そん}なものかな」

まづ斯う云ふ調子である。門野^{かどの}が代助の所へ引き移る二週間^{かん}前には、此若い独身の主人と、此食^{あさうらふ}客との間に下の様な会話が
あつた。

一の三

「君は何方^{どつか}の学校へ行つてゐるんですか」

「もとは行きましたがな。今は廃^やめちまいしました」

「もと、何処^{どこ}へ行つたんです」

「何処どこつて方々ほう／＼行きました。然しどうも厭あきつぽいもんだから」

「ぢき厭いやになるんですか」

「まあ、左様さうですな」

「で、大たいして勉強する考もないんですか」

「えゝ、一寸ちよつと有りませんな。それに近頃家うちの都合が、あんまり

好よくないもんですから」

「家の婆うちばあさんは、あなたの御母さんおつかを知つてゐるんだつてね」

「えゝ、もと、直近所ちきに居たもんですから」

「御母さんおつかは矢つ張り……」

「矢つ張りつまらない内職をしてゐるんですが、どうも近頃ちかごろは

不景氣で、余あまり好よくない様です」

「好よくない様ですつて、君、一いつしよ所に居るんぢやないですか」

「一いつしよ所に居ることは居ますが、つい面倒だから聞きいた事こともありません。何でも能よくこぼしてゐる様です」

「兄にいさんは」

「兄あには郵便局の方へ出てゐます」

「家うちは夫それ丈ですか」

「まだ弟がゐます。是は銀行の——まあ小使こつかひに少し毛の生えた位な所なんでせう」

「すると遊あそんでゐるのは、君許きりぢやないか」

「まあ、左様そんなもんですな」

「それで、家うちにあるときは、何をしてゐるんです」

「まあ、大抵寐ねてゐますな。でなければ散歩でも為しますかな」

「外ほかのものが、みんな稼かせいでるのに、君許り寐ねてゐるのは苦痛ぢやないですか」

「いえ、左様さうでもありませんな」

「家庭が余よつ程円満なんですか」

「別段喧嘩けんかもしません。妙なもんで」

「だつて、御母おつかさんや兄にいさんから云つたら、一日いちにちも早く君に独立して貰もらひたいでせうがね」

「左様さうかも知れませんか」

「君は余つ程気楽な性しやうぶん分ぶんと見える。それが本当の所なんです

か」

「えゝ、別に嘘うそを吐つく料簡りょうかんもありませんな」

「ぢや全くの呑氣屋のんきなんだね」

「えゝ、まあ呑氣屋のんきつて云ふもんでせうか」

「兄にいさんは何歳いくつになるんです」

「斯かうつと、取とつて六ろくになりますか」

「すると、もう細君でも貰もらはなくちやならないでせう。兄にいさんの

細君が出来ても、矢やつ張り今の様ようにしてゐる積しほですか」

「其時そのときに為なつて見なくつちや、自分でも見当みあたが付きませんが、何なに

しろ、どうか為なるだらうと思おもつてます」

「其外そのほかに親類しんるいはないんですか」

「叔母おばが一人ひとりありますがな。こいつは今、浜はまで運漕業をやつてます」

「叔母おばさんが？」

「叔母おばが遣やつてゐる訳でもないんでせうが、まあ叔父おぢですな」

「其所そこへでも頼たのんで使もちつて貰もらつちや、どうです。運漕業なら大分人ひとが要いるでせう」

「根なまけが怠惰なまけもんですからな。大方断ことわわるだらうと思おもつてゐるんです」

「さう自任おづかしてゐちや困る。実は君の御母おつかさんが、家うちの婆おばあさんに

頼たのんで、君を僕うぢの宅うちへ置いて呉くれまいかといふ相談があるんですよ」

「えゝ、何だかそんな事を云つてました」

「君自身は、一体どう云ふ気なんです」

「えゝ、成るべく怠^{なま}けない様にして……」

「家^{うち}へ来る方が好^いいんですか」

「まあ、左^{さう}様ですな」

「然し寐て散歩する丈ぢや困る」

「そりや大丈夫です。身^{からだ}体の方は達者ですから。風呂でも何でも

汲みます」

「風呂は水道があるから汲まないでも可^いい」

「ぢや、掃除でもしませう」

「^{かどの}門野は斯う云ふ条件で代助の書生になつたのである。

一の四

代助はやがて食事を済まして、烟草を吹かし出した。今迄茶筴だの陰に、ぽつねんと膝を抱へて柱に寄り懸つてゐた門野は、もう好い時分だと思つて、又主人に質問を掛けた。

「先生、今朝は心臓の具合はどうですか」

此間このあひだから代助の癖を知つてゐるので、幾分か茶化した調子である。

「今日はまだ大丈夫だ」

「何だか明日にも危しくなりさうですな。どうも先生見た様に身体を気にしちや、——仕舞には本当の病氣に取つ付かれるかも知

れませんよ」

「もう病氣ですよ」

門野は只へえゝと云つた限、代助の光沢の好い顔色や肉の豊かな肩のあたりを羽織の上から眺めてゐる。代助はこんな場合になると何時でも此青年を気の毒に思ふ。代助から見ると、此青年の頭は、牛の脳味噌で一杯詰つてゐるとしか考へられないのである。話をすると、平民の通る大通りを半町位しか付いて来ない。たまに横町へでも曲ると、すぐ迷兎になつて仕舞ふ。論理の地盤を豎に切り下げた坑道などへは、てんから足も踏み込めない。彼の神経系に至つては猶更粗末である。恰も荒縄で組み立てられたるかの感が起る。代助は此青年の生活状態を観察して、彼は必

竟何の爲に呼吸を敢てして存在するかを怪しむ事さへある。それでゐて彼は平氣にのらくらしてゐる。しかも此のらくらを以て、暗に自分の態度と同一型に属するものと心得て、中々得意に振舞^ひたがる。其上頑強一点張りの肉体を笠^{かさ}に着^きて、却つて主人の神経的な局所へ肉薄して来る。自分の神経は、自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感応性に対して払ふ租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響の苦痛である。天爵的に貴族となつた報^{むくひ}に受る不文の刑罰である。是等の犠牲に甘んずればこそ、自分は今の自分に為^なれた。否、ある時は是等の犠牲そのものに、人生の意義をまともに認める場合さへある。門野^{かどの}にはそんな事は丸で分らない。

「門野^{かどの}さん、郵便は来て居^ゐなかつたかね」

「郵便ですか。斯^かうつと。来^きてゐました。端書^{はがき}と封書が。机の上

に置きました。持つて来^きますか」

「いや、僕^{あつち}が彼方^{あつち}へ行つても可^いい」

齒切^{はぎ}れのわるい返事^{はがき}なので、門野^{かどの}はもう立つて仕舞つた。さう

して端書^{はがき}と郵便を持つて来た。端書^{はがき}は、今日二時東京着、たゞち

に表面へ投宿、取敢へず御報、明日午前^{あす}会^あひたし、と薄墨^{うすずみ}の走^{はし}

り書^{がき}の簡単極るもので、表に裏神保町の宿屋^{やどや}の名と平岡常次郎^{な ひらをかつね}

といふ差出人の姓名が、表と同じ乱暴さ加減で書いてある。

「もう来^きたのか、昨日着^{きのふつ}いたんだな」と独^{ひとごと}り言^{こと}の様に云ひながら、

封書の方を取り上^あげると、是は親爺^{おやぢ}の手蹟^てである。二三日前帰つ

て来た^き。急ぐ用事でもないが、色々話があるから、此手紙が着いたら来てくれると書いて、あとには京都の花がまだ早かつたの、急行列車が一杯で窮屈だつた杯といふ閑文字が数行列ねである。

代助は封書を巻きながら、妙な顔をして、両方見較べてゐた。

「君、電話を掛けて呉れませんか。家^{うち}へ」

「はあ、御宅^{おたく}へ。何^{なん}て掛^かけます」

「今日^{けふ}は約束があつて、待^まち合^あせる人があるから上^あがれないつて。
あした あさつて
明日か明後日屹度伺ひますからつて」

「はあ。何^ど方^{なた}に」

「親爺^{おやぢ}が旅行から歸つて来て、話があるから一寸^{ちよつと}来^こいつて云ふんだが、——何親爺^{なにおやぢ}を呼^よび出さないでも可^いいから、誰^{だれ}にでも左様^{さう}

云つて呉れ給へ」

「はあ」

門野は無雑作に出て行つた。代助は茶の間から、座敷を通つて、書齋へ歸つた。見ると、奇麗に掃除が出来てゐる。落椿も何所かへ掃き出されて仕舞つた。代助は花瓶の右手にある組み重ねの書棚の前へ行つて、上に載せた重い写真帖を取り上げて、立ちながら、金の留金を外して、一枚二枚と繰り始めたが、中頃迄来てびたりと手を留めた。其所には廿歳位の女の半身がある。代助は眼を俯せて凝と女の顔を見詰めてゐた。

二の一

着物きものでも着換きかへて、此方こつちから平岡ひらをかの宿やどを訪ね様かと思つてゐる所へ、折よく先方むかふから遣つて来た。車くるまをがらくと門前迄乗り付けて、此所こゝだくと梶棒かぢを下さした声は慥たしかに三年前分れた時そつくりである。玄関で、取次とりつきの婆さんを捕つかまへて、宿やどへ墓がまぐ口ちを忘れて来たから、一寸ちよつと二十錢借してくれと云つた所などは、どうしても学校時代の平岡を思ひ出さずにはゐられない。代助は玄関迄馳かけ出して行つて、手てを執とらぬ許りに旧友を座敷あへ上げた。

「何どうした。まあ緩ゆつくりするが好い」

「おや、椅子いすだね」と云ひながら平岡は安樂椅子いすへ、どさりと身か

体を投げ掛けた。十五貫目以上もあらうと云ふわが肉に、三文の価値を置いてゐない様な扱かひ方に見えた。それから椅子の脊に坊主頭を靠たして、一寸部屋の中を見廻しながら、

「中々、好い家だね。思つたより好い」と賞めた。代助は黙つて巻蓑入の蓋を開けた。

「それから、以後何うだい」

「何うの、斯うのつて、——まあ色々話すがね」

「もとは、よく手紙が来たから、様子が分つたが、近頃ぢや些とも寄さないもんだから」

「いや何所も彼所も御無沙汰で」と平岡は突然眼鏡を外して、脊広の胸から皺だらけの手帛を出して、眼をぱち／＼させなが

ら拭き始めた。学校時代からの近眼である。代助は凝と其様子を眺めてゐた。

「僕より君はどうだい」と云ひながら、細い蔓を耳の後へ絡みつけに、両手で持つて行つた。

「僕は相変らずだよ」

「相変らずが一番好いな。あんまり相変るものだから」

そこで平岡は八の字を寄せて、庭の模様を眺め出したが、不意に語調を更へて、

「やあ、桜がある。今漸やく咲き掛けた所だね。余程氣候が違ふ」と云つた。話の具合が何だか故の様にしんみりしない。代助も少し気の抜けた風に、

「向ふは大分暖かいだらう」と序同然の挨拶をした。すると、今度は寧ろ法外に熱した具合で、

「うん、大分暖かい」と力の這入った返事があつた。恰も自己の存在を急に意識して、はつと思つた調子である。代助は又平岡の顔を眺めた。平岡は巻蕨に火を点けた。其時婆さんが漸く急須に茶を注いで持つて出た。今しがた鉄瓶に水を射して仕舞つたので、煮立てるのに暇が入つて、つい遅くなつて済みませんと言訳をしながら、洋卓の上へ盆を載せた。二人は婆さんの喋舌てる間、紫檀の盆を見て黙つてゐた。婆さんは相手にされないのひと、独りで愛想笑ひをして座敷を出た。

「ありや何だい」

「婆ばあさんさ。雇やとつたんだ。飯めしを食くはなくつちやならないから」

「御世辞ごせじが好いいね」

代助は赤くちびるい唇はしの両端はしを、少ゆみし弓ゆみなりに下したの方まへ彎さげすげて蔑さげすむ様に笑わらつた。

「今迄斯いかんな所ところへ奉公ほうこうした事ことがないんだから仕方しほうがない」

「君きみの家うちから誰だれか連つれて呉くれれば好いいのに。大勢おほぜいあるだらう」

「みんな若わかいの許ゆるりでね」と代助は真面目まじめに答こたへた。平岡ひらおかは此時このとき始めて声こゑを出でして笑わらつた。

「若わかけりや猶結構むすかまぢやないか」

「兎うに角家かくの奴やつは好よくないよ」

「ああの婆ばあさんの外ほかに誰だれかゐるのかい」

「書生が一人ゐる」

かどの
門野は何時の間にか歸つて、

だいどころ
台所の方で婆さんと話をし

ゐた。

「それ限りかい」

「それ限りだ。何故」

「細君はまだ貰はないのかい」

代助は心持赤い顔をしたが、すぐ尋常一般の極めて平凡な調子になつた。

「妻を貰つたら、君の所へ通知位する筈ぢやないか。夫よりか君の」と云ひかけて、ぴたりと已めた。

二の二

代助と平岡とは中学時代からの知り合で、殊に学校を卒業して後、^{のち}一年間といふものは、殆んど兄弟の様に親しく往来した。其時分は互に凡てを打ち明けて、互に力に^{ちから}為り合ふ^あ様なことを云ふのが、互に娯樂の尤もなるものであつた。この娯樂が變じて実行となつた事も少なくないので、彼等は双互の^{くち}為めに口にした凡ての言葉には、娯樂どころか、常に一種の犠牲を含んでゐると確信してゐた。さうして其犠牲を即座に払へば、娯樂の性質が、忽然苦痛に變ずるものであると云ふ陳腐な事實にさへ気が付かず^{つと}にゐた。一年の後平岡は結婚した。同時に、自分の勤^{つと}めてゐる銀行の、

京坂地方のある支店詰になつた。代助は、しつたつ出立の当時、新夫婦を新橋の停車場に送つて、愉快さうに、ちき直歸つて来給へと平岡の手を握つた。平岡は、仕方がない、当分辛抱するさと打遣る様に云つたが、其眼鏡めがねの裏には得意の色が羨ましい位動いた。それを見た時、代助は急に此友達を憎らしく思つた。うち家へ歸つて、一いちに日部屋に這入つたなり考へ込んでゐた。あによめ嫂を連れて音楽会へ行ちく筈はずの所を断わつて、大いあによめに嫂に氣を揉ました位である。

平岡からは断えずたより音信があつた。安着はがきの端書、向ふで世帯を持つた報知、それが済むと、支店勤務の模様、自己将来の希望、色々あつた。手紙の来くるたびに、代助は何時いつも丁寧な返事を出した。不思議な事に、代助が返事を書くときは、何時いつでも一種の不安に

襲はれる。たまには我慢するのが厭いやになつて、途中で返事を已めて仕舞ふ事がある。たゞ平岡の方から、自分の過去の行為に対して、幾分か感謝の意を表して来る場合に限つて、安やす々と筆が動いて、比較的なだらかな返事が書けた。

そのうち段々手紙の遣り取りが疎遠になつて、月に二遍が、一遍になり、一遍が又二月ふた、三月みに跨がる様に間あひだを置いて来ると、今度は手紙を書かない方が、却つて不安になつて、何の意味もないのに、只この感じを駆逐する為に封筒の糊のりを湿しめす事があつた。それが半年ばかり続くうちに、代助の頭あたまも胸むねも段々組織が變つて来る様に感ぜられて来たき。此變化に伴ともなつて、平岡へは手紙を書かいても書かなくなつても、丸で苦痛を覚えない様になつて仕舞つた。

現げんに代助が一戸を構へて以来、約一年余と云ふものは、此この春年賀状の交換のとき、序を以て、今の住所を知らした丈である。

それでも、ある事情があつて、平岡の事は丸で忘れる訳には行かなかつた。時とき々思ひ出だす。さうして今頃はどうして暮くらして

ゐるだらうと、色々に想像して見る事がある。然したゞ思ひ出す丈で、別段問ひ合せたり聞き合せたりする程に、氣を揉む勇氣も必要もなく、今日迄過すこして来きた所へ、二週間前に突然平岡からの書信が届いたのである。其手紙には近々当地を引き上あげて、御地へまかり越す積りである。但し本店からの命令で、栄転の意味を含んだ他動的の進退と思つてくれては困る。少し考があつて、急に職業替をする氣になつたから、着京の上は何なに分宜ぶんいしく頼たのむと

あつた。此何分宜しく頼むたのの頼むたのは本当の意味の頼むたのか、又は単に辞令上の頼むたのか不明だけれども、平岡の一身上に急劇な変化のあつたのは争ふべからざる事実である。代助は其時はつと思つた。

それで、逢ふあや否や此變動の一部始終を聞かうと待設けて居たのだが、不幸にして話が外それて容易に其所そこへ戻もどつて来ない。折を見て此方こつちから持ち掛けると、まあ緩ゆつくり話すとか何とか云つて、中々なか／＼うち埒あを開けない。代助は仕方なしに、仕舞に、

「久し振ひさびさりだから、其所そこいらで飯めしでも食はう」と云ひ出した。平岡は、それでも、まだ、何れいづ緩ゆくりを繰返したがるのを、無理に引張つて、近所の西洋料理へ上あがつた。

二の二

兩人は其所で大分飲んだ。飲む事と食ふ事は昔の通りだねと言
 つたのが始まりで、硬い舌が段々弛んで来た。代助は面白さうに、
 二三日前自分の觀に行つた、ニコライの復活祭の話をした。御
 祭が夜の十二時を相図に、世の中の寐鎮まる頃を見計つて始
 る。参詣人が長い廊下を廻つて本堂へ歸つて来ると、何時の間
 にか幾千本の蠟燭が一度に点いてゐる。法衣を着た坊主が行列
 して向ふを通るときに、黒い影が、無地の壁へ非常に大きく映る。
 —平岡は頬杖を突いて、眼鏡の奥の二重瞼を赤くしながら聞
 いてゐた。代助はそれから夜の二時頃広い御成街道を通つて、深

夜の鉄軌が、暗い中を真直に渡つてゐる上を、たつた一人上野の森迄来て、さうして電燈に照らされた花の中に這入つた。

「人気のない夜桜は好いもんだよ」と云つた。平岡は黙つて盃を干したが、一寸氣の毒さうに口元を動かして、

「好いだらう、僕はまだ見た事がないが。——然し、そんな真似が出来の間はまだ氣樂なんだよ。世の中へ出ると、中々それ所ぢやない」と暗に相手の無経験を上から見た様な事を云つた。代助には其調子よりも其返事の内容が不合理に感ぜられた。彼は生活上世渡りの経験よりも、復活祭当夜の経験の方が、人生に於て有意義なものと考へてゐる。其所でこんな答をした。

「僕は所謂処世上の経験程愚なものはないと思つてゐる。苦痛が

ある丈ぢやないか」

平岡は酔つた眼めを心持大きくした。

「大分考だいぶんへが違ちがつて来た様だね。——けれども其苦痛あつが後くから薬すりになるんだつて、もとは君の持説ぢやなかつたか」

「そりや不見識な青年が、流俗ことわざの諺に降参して、好加減な事を云つてゐた時分の持説だ。もう、とつくに撤回しちまつた」

「だつて、君だつて、もう大抵世の中なかへ出でなくつちやなるまい。

其時それぢや困るよ」

「世の中なかへは昔むかしから出でてゐるさ。ことに君と分わかれてから、大變世の中ひろが広くなつた様な氣がする。たゞ君の出でてゐる世よの中なかとは種

類ちがが違ちがふ丈だ」

「そんな事を云つて威張つたつて、今に降参する丈だよ」

「無論食ふに困る様になれば、何時いつでも降参するさ。然し今日に不自由のないものが、何を苦しんで劣等な経験なを嘗めるものか。

印度人が外套を着て、冬の来た時の用心をすると同じ事だもの」

平岡の眉あひだの間に、一寸不快の色が閃ひらめいた。赤い眼めを据ゑて

ぷか／＼烟草たばこを吹かしてゐる。代助は、ちと云ひ過ぎたと思つて、

少し調子すこを穩おだやかにした。――

「僕の知つたものに、丸で音楽の解わからないものがある。学校の教師をして、一軒ぢや飯めしが食くへないもんだから、三軒も四軒も懸け持をやつてゐるが、そりや氣の毒なもんで、下読したよみをするのと、教場へ出でて器械的に口くちを動うごかしてゐるより外に全く暇ひまがない。た

まの日曜杯は骨休めとか号して一日ぐうぐう寐てゐる。だから何
 所^こに音楽会があらうと、どんな名人が外国から来^きやうと聞^きに行く
 機会がない。つまり楽^{がく}といふ一種の美しい世界には丸で足を踏
 み込まないで死んで仕舞はなくつちやならない。僕から云はせる
 と、是程憐れな無経験はないと思ふ。麵^ば麩^んに關係した経験は、切
 実かも知れないが、要するに劣等だよ。麵^ば麩^んを離れ水を離れた贅
 沢な経験をしなくつちや人間の甲斐はない。君は僕をまだ坊っ
 ちやんだと考へてゐるらしいが、僕の住んでゐる贅沢な世界では、君
 よりずっと年長者の積りだ」

平岡は卷^{まきた}苘^{たばこ}の灰を、皿^{さら}の上^{うへ}にはたきながら、沈^{しづ}んだ暗^{くら}い調
 子で、

「うん、何時いつ迄もさう云ふ世界に住んでゐられゝば結構さ」と云つた。其おも重い言葉の足あしが、富とみに対する一種の呪咀ひを引き摺ずつてゐる様に聴きこえた。

二の四

兩人ふたりは酔よつて、戸外おもてへ出た。酒さけの勢で變な議論をしたものだから、肝心の一身上の話はまだ少しも發展せずにある。

「少し歩すこかないか」と代助さそが誘つた。平岡も口程くちいそ忙いそがしくはないと見えて、生返事なまへんじをしながら、一所に歩ほを運はこんで来た。通とほりを曲まがつて横町へ出でて、成なる可べく、話はなしの為ために閑な場所を撰えらんで行くう

ちに、何時か緒口が付いて、思ふあたりへ談柄が落ちた。

平岡の云ふ所によると、赴任の当時彼は事務見習のため、地方の経済状況取調のため、大分忙がしく働らいて見た。出来得るならば、学理的に実地の応用を研究しやうと思つた位であつたが、地位が夫程高くないので、已を得ず、自分の計画は計画として未来の試験用に頭の中に入れて置いた。尤も始めのうちは色々支店長に建策した事もあるが、支店長は冷然として、何時も取り合はなかつた。六つかしい理窟杯を持ち出すと甚だ御機嫌が悪い。青二才に何が分るものかと云ふ様な風をする。其癖自分は實際何も分つて居ないらしい。平岡から見ると、其相手にしない所が、相手にするに足らないからではなくつて、寧ろ相手にするのが怖い

からの様に思はれた。其所そこに平岡の癪はあつた。衝突しかけた事ことも一度いちどや二度にどではない。

けれども、時日じじつを経過するに従つて、肝癪が何時いつとなく薄らい

できて、次第に自分の頭あたまが、周囲の空氣と融和する様になつた。

又成るべくは、融和する様に力つとめた。それにつれて、支店長の自

分に対する態度も段々變つて來た。時々とき／＼は向ふから相談をか

ける事さへある。すると学校を出たての平岡でないから、先方むかふに

解わからない、且つ都合のわるいことは成るべく云はない様にして置

く。

「無暗に御世辞を使つたり、胡麻すを摺るのとは違ふが」と平岡は
わざ／＼断つた。代助は真面目まじめな顔をして、「そりや無論さうだ

らう」と答へた。

支店長は平岡の未来みらいの事に就て、色々心配してくれた。近いうちに本店に帰る番に中あたつてゐるから、其時そのときは一所に來給きへ杯などと冗談半分に約束迄した。其頃そのころは事務じむにも慣なれるし、信用も厚くなるし、交際も殖えるし、勉強をする暇ひまが自然となくなつて、又勉強が却つて実務じつむの妨さまたげをする様に感ぜられて來たき。

支店長が、自分に万事を打ち明ける如く、自分は自分の部下の関せきといふ男を信任して、色々と相談相手にして居つた。所ところが此男がある芸妓ばくろと関係かゝりあつて、何時いつの間にか會計に穴を明けたあ。それが曝露ばくろしたので、本人は無論解雇しなければならぬが、ある事情からして、放ほうつて置くと、支店長に迄多少の煩わづらひが及んで來さう

だつたから、其所^{そこ}で自分が責を引いて辞職を申し出^でた。

平岡の語る所は、ざつと斯うであるが、代助には彼が支店長から因果を含められて、所決を促がされた様にも聞えた。それは平岡の話しの末に「会社員なんてものは、上^{うへ}になればなる程^{うま}旨い事が出来^{でき}るものでね。実は関^{せき}なんて、あれつ許^{ばかり}の金を使ひ込んで、すぐ免職になるのは氣の毒な位なものさ」といふ句があつたのから推したのである。

「ぢや支店長は一番^{うま}旨い事をしてゐる訳だね」と代助が聞いた。

「或はそんなものかも知れない」と平岡は言葉を濁^{にご}して仕舞つた。

「それで其男の使ひ込んだ金^{かね}は何^どうした」

「千^{せん}に足^たらない金^{かね}だつたから、僕が出して置^おいた」

「よく有つたね。君も大分旨い事をしたと見える」

平岡はひらをか苦い顔にがをして、ぢろりと代助を見た。

「旨い事うまをしたと仮定しても、皆使つて仕舞つてゐる。生活くらしにさへ足りない位だ。其金は借かりたんだよ」

「さうか」と代助は落ち付き払つて受けた。代助は何どんな時でも平生の調子を失はない男である。さうして其調子には低ひくく明あきらかなうちに一種の丸味まるみが出てゐる。

「支店長から借かりて埋うめて置いた」

「何故支店長がぢかに其関せきとか何とか云ふ男に貸して遣やらないのかな」

平岡ひらをかは何とも答へなかつた。代助も押しては聞かなかつた。

ふたり
二人は無言の儘しばらくの間並んで歩いて行つた。

二の五

代助は平岡が語つたより外に、まだ何かあるに違ないと鑑定した。けれども彼はもう一步進んで飽迄其真相を研究する程の權利を有つてゐないことを自覺してゐる。又そんな好奇心を引き起すには、實際あまり都会化し過ぎてゐた。二十世紀の日本に生息する彼は、三十になるか、ならないのに既に nil 《ニル》 admirari 《アドミラリ》の域に達して仕舞つた。彼の思想は、人間の暗黒面に出逢つて喫驚する程の山出ではなかつた。彼の神経は

斯様に陳腐な秘密を嗅^かいで嬉しがる様に退屈を感じてはゐなかつた。否、是より幾倍か快よい刺激でさへ、感受するを甘んぜざる位、一面から云へば、困憊してゐた。

代助は平岡のそれとは殆んど縁故のない自家特有の世界の中^{なか}で、もう是程に進化——進化の裏面を見ると、何時^{いつ}でも退化であるのは、古今を通じて悲しむべき現象だが——してゐたのである。それを平岡は全く知らない。代助をもつて、依然として旧態を改めざる三年前の初心^{うぶ}と見てゐるらしい。かう云ふ御坊つちやんに、洗^{あら}ひ浚^{ざら}ひ自分の弱点を打ち明^あけては、徒^{いたづ}らに馬糞^{まぐそ}を投^なげて、御嬢さまを驚ろかせると同結果に陥^{おち}いり易い。余計な事をして愛想^{あいそ}を尽^つかされるよりは黙^{だま}つてゐる方が安全だ。——代助には平岡の腹

が斯^かう取れた。それで平岡が自分に返事もせず^{むごん}に無言^{ある}で歩いて行くのが、何となく馬鹿らしく見えた。平岡が代助を小供^{こども}視する程度に於て、あるひは其^それ以上の程度に於て、代助は平岡を小供^{こども}視^{はじ}し始めたのである。けれども両人^{ふたり}が十五六間^す過ぎて、又^{はなし}話を遣^やり出した時は、どちらにも、そんな痕迹は更^{さら}になかった。最初に口を切つたのは代助であつた。

「それで、是^{これ}から先^{さき}何うする積^{つもり}かね」

「さあ」

「矢^やつ張り今迄の経験もあるんだから、同じ職業が可^いいかも知れないね」

「さあ。事情次第だが。実は緩^{ゆつ}くり君に相談して見様と思つてゐる

たんだが。何うだらう、君の兄さんの会社の方に口はあるまいか」
「うん、頼んで見様、二三日内に家へ行く用があるから。然し何うかな」

「もし、実業の方が駄目なら、どつか新聞へでも這入らうかと思ふ」

「夫も好いだらう」

兩人は又電車の通る通へ出た。平岡は向ふから来た電車の軒を見てゐたが、突然是に乗つて帰ると云ひ出した。代助はさうかと答へた儘、留めもしない、と云つて直分れもしなかつた。赤い棒の立つてゐる停留所迄歩いて来た。そこで、

「三千代さんは何うした」と聞いた。

「難有う、まあ相変らずだ。君に宜しく云つてゐた。実は今日連れて来やうと思つたんだけど、何だか汽車に揺れたんで頭が悪いといふから宿屋へ置いて来た」

電車が二人の前で留まつた。平岡は二三步早足に行きかけたが、代助から注意されて已めた。彼の乗るべき車はまだ着かなかつたのである。

「子供は惜しい事をしたね」

「うん。可哀想な事をした。其節は又御丁寧に難有う。どうせ死ぬ位なら生れない方が好かつた」

「其後は何うだい。まだ後は出来ないか」

「うん、未だにも何にも、もう駄目だらう。身体があんまり好く

ないものだからね」

「こんなに動く時は小供のない方が却つて便利で可いかも知れない」

「夫もさうさ。一層君の様に一人身なら、猶の事、氣樂で可いかも知れない」

「一人身になるさ」

「冗談云つてら——夫よりか、妻が頻りに、君はもう奥さんを持つたらうか、未だだらうかつて氣にしてみたぜ」

所へ電車が来た。

三の一

代助だいすけの父ちちは長井得ながゐとくといつて、御維新のとき、戦争に出た経験のある位な老人であるが、今でも至極達者に生きてゐる。役人を已やめてから、実業界に這入つて、何か彼なにかかしてゐるうちに、自然と金が貯たまつて、此十四五年來は大分の財産家になつた。

誠吾せいごと云ふ兄あにがある。学校を卒業してすぐ、父ちちの關係してゐる会社へ出たので、今では其所そこで重要な地位を占める様になつた。梅子といふ夫人に、二人ふたりの子供こどもが出来た。兄は誠太郎と云つて十五になる。妹は縫ぬいといつて三つ違である。

誠吾せいごの外に姉がまだ一人あるが、是はある外交官に嫁いで、今は夫おつとと共に西洋にゐる。誠吾せいごと此姉の間にもう一人ひとり、それから此

姉と代助の間にも、まだ一人兄弟があつたけれども、それは二人とも早く死んで仕舞つた。母も死んで仕舞つた。

代助の一家は是丈の人数から出来上つてゐる。そのうちで外へ出てゐるものは、西洋に行つた姉と、近頃一戸を構へた代助ばかりだから、本家には大小合せて四人残る訳になる。

代助は月に一度は必ず本家へ金を貰ひに行く。代助は親の金と

も、兄の金ともつかぬものを使つて生きてゐる。月に一度の外に

も、退屈になれば出掛けて行く。さうして子供に調戲つたり、書

生と五目並をしたり、嫂と芝居の評をしたりして歸つて来る。

代助は此嫂を好いてゐる。此嫂は、天保調と明治の現代調を、

容赦なく継ぎ合せた様な一種の人物である。わざ／＼仏蘭西にゐ

る義妹いもうとに注文して、六づかしい名のつく、頗る高価な織物おりものを取寄せて、それを四五人で裁たつて、帯に仕立て、着きて見たり何かする。後あとで、それは日本から輸出したものだと言ふ事が分つて大笑ひになつた。三越陳列所へ行つて、それを調べて来たものは代助である。夫それから西洋の音楽が好すきで、よく代助に誘ひ出されて聞きに行く。さうかと思ふと易断うらなひに非常な興味を有もつてゐる。石せきりうし龍子と尾島某おじまなにかしを大いに崇拜する。代助も二三度御相伴しやうばんに、俚くるまで易者えきしやの許迄食付もとくつついて行つた事がある。

誠太郎と云ふ子は近頃ベースボールに熱中してゐる。代助が行つて時とき々／＼球たまを投なげてやる事がある。彼は妙な希望を持つた子供である。毎年夏の初めに、多くの焼芋屋やきいもが俄然として氷こほり

水屋みづに変化するとき、第一番に馳けつけて、汗も出ないのに、
 アイスクリーム
 氷菓こほりみづを食ふものは誠太郎である。氷菓アイスクリームがないときには、
 氷水で我慢する。さうして得意になつて歸つて来る。近頃では、もし相撲の常設館が出来たら、一番先へ這入さきつて見たいと云つてゐる。叔父さん誰おぢだれか相撲を知りませんかと代助に聞いた事がある。

縫ぬいといふ娘むすめは、何か云ふと、好よくつてよ、知らないわと答へる。さうして日に何遍となくリボンを掛け易へる。近頃はワイオリンの稽古に行く。歸つて来ると、鋸のこぎりの目立めだての様な声を出して御浚ひをする。たゞし人が見てゐると決して遣やらない。室へやを締め切きつて、きい／＼云はせるのだから、親おやは可なり上手だと思つてゐる。

代助丈が時々、そつと戸を明けるので、好くつてよ、知らないわと叱られる。

兄は大抵不在勝である。ことに忙がしい時になると、家で食ふのは朝食位なもので、あとは、何うして暮してゐるのか、二人の子供には全く分らない。同程度に於て代助にも分らない。是は分らない方が好ましいので、必要のない限りは、兄の日々の戸外生活に就て決して研究しないのである。

代助は二人の子供に大変人望がある。嫂にも可なりある。兄には、あるんだか、ないんだか分らない。会に兄と弟が顔を合せる時、たゞ浮世話をする。双方とも普通の顔で、大いに平気で遣つてゐる。陳腐に慣れ抜いた様子である。

三の二

代助の尤も^{もつとこた}応へるのは親爺^{おやぢ}である。好い^{いい}年^{とし}をして、若い^{わかめかけ}妾^{めかけ}を持つてゐるが、それは構^{かま}はない。代助から云^いふと寧ろ賛成^{さんせい}な位^{くらい}なもので、彼は妾^{めかけ}を置く余裕^{あゆ}のないものに限^{かぎ}つて、蓄^{ちくしやう}妾^{めかけ}の攻撃^{こうげき}をするんだと考へてゐる。親爺^{おやぢ}は又大分^{だいぶ}の八釜^{やかま}し屋^やである。小供^{こども}のうち^{うち}は心魂^{しんこん}に徹^{てつ}して困却^{こんけつ}した事がある。しかし成人^{せいじん}の今日^{こんにち}では、それにも別段^{べつだん}辟易^{ひやくえき}する必要^{ひつやう}を認め^{みと}ない。たゞ^{ただ}応^{こた}へるのは、自分の青年時代^{せいねんじだい}と、代助の現今^{けいこん}とを混同^{こんどう}して、両方共大^{たい}した変^へりはないと信じてゐる事である。それだから、自分の昔^{むかし}し世^よに処^{しょ}した

時の心掛こころがけでもつて、代助も遣やらなくつては、嘘うそだといふ論理になる。尤も代助の方では、何なにが嘘うそですかと聞き返した事がない。だから決して喧嘩にはならない。代助は小供の頃非常な肝癰持で、十八九の時分親爺おやぢと組打をした事が一二返ある位だが、成長して学校を卒業して、しばらくすると、此肝癰がぱたりと已やんで仕舞つた。それから以後ついぞ怒おこつた試ためしがない。親爺おやぢはこれを自分の薫育の効果と信じてひそかに誇ほこつてゐる。

實際を云ふと親爺おやぢの所謂薫育は、此父子の間に纏綿あひだする暖かい情味を次第に冷却せしめた丈である。少なくとも代助はさう思つてゐる。所が親爺おやぢの腹のなかでは、それが全く反対あべこべに解釈されて仕舞つた。何なにをしやうと血肉けつにくの親子おやこである。子が親おやに對する

天賦の情合あひが、子を取扱ふ方法の如何に因つて変る筈はずがない。教育の為ため、少しの無理はしやうとも、其結果は決して骨肉の恩愛に影響を及ぼすものではない。儒教の感化を受けた親爺おやぢは、固く斯う信じてゐた。自分が代助に存在を与へたといふ單純な事實が、あらゆる不快苦痛に対して、永久愛情の保証になると考へた親爺おやぢは、その信念をもつて、ぐんぐん押して行つた。さうして自分に冷淡な一個の息子むすこを作り上げた。尤も代助の卒業前後からは其待遇法も大分變つて來きて、ある点から云へば、驚ろく程寛大になつた所もある。然しそれは代助が生れ落ちるや否や、此親爺おやぢが代助に向つて作つたプログラムの一部分の遂行に過ぎないので、代助の心意の變移を見抜いた適宜の処置ではなかつたのである。自分

の教育が代助に及ぼした悪結果に至つては、今に至つて全く気が付かずにある。

親爺おやぢは戦争に出たのを頗る自慢にする。稍やゝもすると、御前まへ杯は

まだ戦争をした事がないから、度胸すわが据らなくつて不可いかんと一概

にけなして仕舞ふ。恰も度胸が人間にんげん至上な能力であるかの如き

言いひぐさ草である。代助はこれを聞きかせられるたんびに厭いやな心持がす

る。胆力いのちは命の遣り取りやとの劇はげしい、親爺おやぢの若い頃の様な野蛮時代

にあつてこそ、生存に必要な資格かも知れないが、文明の今日か

ら云へば、古風な弓術撃剣たぐひの類と大差はない道具と、代助は心得

てゐる。否、胆力とは両立し得ないで、しかも胆力以上に難有が

つて然るべき能力が沢山ある様に考へられる。御父おとうさんから又胆

力の講釈を聞いた。御父おとうさんの様に云ふと、世なかの中で石地藏が一

番偉えらいことになつて仕舞ふ様だねと云つて、嫂あによめと笑つた事がある。

斯う云ふ代助は無論臆病である。又臆病で恥づかしいといふ氣

は心しんから起らない。ある場合には臆病を以て自任したくなる位で

ある。子供の時、親爺おやぢの使噺で、夜中よなかにわざ／＼青山あをやまの墓地迄

出掛けた事がある。氣味のわるいのを我慢して一時間も居たら、

たまらなくなつて、蒼青な顔をして家うちへ歸つて來た。其折は自分

でも残念に思つた。あくる朝親爺あさおやぢに笑はれたときは、親爺おやぢが憎にくら

しかつた。親爺おやぢの云ふ所によると、彼かれと同時代の少年は、胆力修

養たの爲め、夜半やはんに結けつ束そくして、たつた一人ひとり、御城しろの北一里きたにある

劍つるぎが峰みねの天頂てつぺん迄登つて、其所そこの辻堂よあかしで夜明でをして、日の出を

おが 拝んで帰かへつてくる習慣であつたさうだ。今の若いものとは心得かた方からして違ふと親爺が批評した。

斯んな事を真面目まじめに口くちにした、又今でも口くちにしかねまじき親爺おやぢは気の毒なものだと、代助は考へる。彼は地震きざひが嫌である。瞬間の動揺でも胸むねに波なみが打うつ。あるときは書齋しつで凝すはと坐つてゐて、何かの拍子に、あゝ地震が遠くから寄せて来るなど感ずる事がある。すると、尻の下に敷しいてゐる坐蒲団も、畳たたみも、乃至床板ゆかも明らかふるに震へる様に思はれる。彼かれはこれが自分の本来だと信じてゐる。親爺おやぢの如きは、神経未熟みじゆくの野人か、然らずんば己おのれを偽いつはる愚者おろとしか代助には受け取れないのである。

三の二

代助は今此親爺と対坐してゐる。廂の長い小さな部屋なので、居ながら庭を見ると、廂の先で庭が仕切られた様な感がある。少なくとも空は広く見えない。其代り静かで、落ち付いて、尻の据り具合が好い。

親爺は刻み烟草を吹かすので、手のある長い烟草盆を前へ引き付けて、時々灰吹をぽん／＼と叩く。それが静かな庭へ響いて好い音がする。代助の方は金の吸口を四五本手烙の中へ並べた。もう鼻から烟を出すのが厭になつたので、腕組をして親爺の顔を眺めてゐる。其顔には年の割に肉が多い。それでゐて

頬ほは瘦こけてゐる。濃こい眉まゆの下したに眼めの皮かはが弛たるんで見える。髭ひげは真まつし白ろと云はんよりは、寧きろ黄色いろである。さうして、話はなをするとき
 に相手あいての膝ひざ頭がしらと顔かほとを半はん々くに見較くらべる癖くせがある。其時の眼め
 の動うごかし方かたで、白眼しろめが一ち寸よつとちらつて、相手あいてに妙もな心持もちをさせ
 る。

老ろう人じんは今いま斯いまんな事を云つてゐる。――

「さう人にん間げんは自分丈おのればかりを考へるべきではない。世なかの中なかもある。国
 家もある。少ひとしは人ひとの為ために何なにかしなくつては心持こころもちのわるいものだ。
 御前ごぜんだつて、さう、ぶら／＼してゐて心持こころもちの好いい筈はずはなからう。
 そりや、下等社会の無教育のものなら格別だが、最高の教育を受
 けたものが、決して遊んで居て面白い理由がない。学んだものは、

実地に応用して始めて趣味が出るものだからな」

「左様さうです」と代助は答へてゐる。親爺おやぢから説法されるたんびに、

代助は返答に窮するから好加減な事を云ふ習慣になつてゐる。代

助に云はせると、親爺おやぢの考は、万事中途半端ちうとはんぱに、或物あるものを独り勝

手に断定してから出立するんだから、毫も根本的の意義を有して

ゐない。しかのみならず、今利他本位でやつてゐるかと思ふと、何

時つの間にか利己本位に變つてゐる。言葉丈は滾々として、勿体ら

しく出るが、要するに端倪くうだんすべからざる空談である。それを基

礎から打ち崩して懸かかるのは大変な難事業だし、又必竟出来ない

相談だから、始めより成るべく触さはらない様にしてゐる。所が親爺おやぢ

の方では代助を以て無論自己の太陽系に属すべきものと心得てゐ

るので、自己は飽までも代助の軌道を支配する権利があると信じて押して来る。そこで代助も已を得ず親爺おやぢといふ老太陽の周囲を、行儀よく廻転する様に見せてゐる。

「それは実業が厭いやなら厭いやで好い。何も金かねを儲ける丈が日本の為ためになるとも限るまいから。金かねは取らんでも構かまはない。金かねの為ために兎や角云ふとなると、御前も心持がわるからう。金かねは今迄通り己おれが補助して遣やる。おれも、もう何時いつ死ぬしか分わからないし、死しにや金かねを持つて行く訳にも行いかないし。月つき々々御前の生計位くらゐどうでもしてやる。だから奮発して何か為するが好い。国民の義務としてするが好い。もう三十だらう」

「左様さようです」

「三十になつて遊民として、のらくらしてゐるのは、如何にも不体裁だな」

代助は決してのらくらして居るとは思はない。たゞ職業の爲に汚され^{けが}ない内容の多い時間を有する、上等人種と自分を考へてゐる丈である。親爺^{おやぢ}が斯んな事を云ふたびに、実は氣の毒になる。親爺^{おやぢ}の幼稚な頭脳には、かく有意義に月日^{つきひ}を利用しつゝある結果が、自己の思想情操の上に、結晶して吹き出^だしてゐるのが、全く映ら^{うつ}ないのである。仕方がないから、真面目^{まじめ}な顔をして、

「えゝ、困ります」と答へた。老人^{ろうじん}は頭^{あたま}から代助を小僧視してゐる上^{うへ}に、其返事^{こたへ}が何時^{いつ}でも幼氣^{おさなげ}を失はない、簡単な、世帯^{しよたい}離^{はな}れをした文句^{ぶんぐ}だものだから、馬鹿^{ばか}にするうちにも、どうも坊

ちやんは成人しても仕様がな、困つたものだと言ふ氣になる。さうかと思ふと、代助の口調が如何にも平氣で、冷静で、はにかまず、もぢ付かず尋常極まつてゐるので、此奴こいつは手の付け様がないといふ氣にもなる。

三の四

「身体からだは丈夫だね」

「二三年このかた風邪かぜを引いた事こともありません」

「頭あたまも悪い方ぢやないだらう。学校の成績も可かなりだつたんじゃないか」

「まあ左様です」

「夫で遊んでゐるのは勿体ない。あの何とか云つたね、そら御前の所へ善く話しに來た男があるだらう。己も一二度逢つたことがある」

「平岡ですか」

「さう平岡。あの人などは、あまり出来の可い方ぢやなかつたさうだが、卒業すると、すぐ何処かへ行つたぢやないか」

「其代り失敗て、もう歸つて來ました」

老人は苦笑を禁じ得なかつた。

「どうして」と聞いた。

「詰り食ふ為に働らくからでせう」

老人には此意味が善く解らなかつた。

「何か面白くない事でも遣つたのかな」と聞き返した。

「其場合々々で当然の事を遣るんでせうけれども、其当然が矢つ張り失敗になるんでせう」

「はあゝ」と氣の乗らない返事をしたが、やがて調子を易へて、説き出した。

「若い人がよく失敗といふが、全く誠実と熱心が足りないからだ。
己も多年の経験で、此年になる迄遣つて来たが、どうしても此
二つがないと成功しないね」

「誠実と熱心があるために、却つて遣り損ふこともあるでせう」
「いや、先ないな」

親爺おやぢの頭あたまの上に、誠者天之道也と云ふ額が麗々と掛けてある。

先代の旧藩主に書いて貰つたとか云つて、親爺おやぢは尤も珍重してゐる。代助は此額が甚だ嫌である。第一字が嫌だ。其上文句が氣に喰はない。誠は天の道なりの後あとへ、人の道にあらざと附け加へた様な心持がする。

其昔し藩の財政が疲弊して、始末が付なくなつた時、整理の任に當つた長井は、藩侯に縁故のある町人を二三人呼び集めて、刀かたなを脱いで其前あたまに頭さを下げて、彼等に一時の融通を頼んだ事がある。固より返かへせるか、返せないか、分らなかつたんだから、分らないと真直に自白して、それがために其時成功した。その因縁で此額がくを藩主かに書いて貰もらつたのである。爾来長井は何時いつでも、之を

自分の居間ゐまに掛けて朝夕眺めてゐる。代助は此額の由来を何遍聞きかされたか知れない。

今から十五六年前に、旧藩主の家で、月々つき／＼の支出が嵩かさんできて、折角持ち直した経済が又崩れ出した時にも、長井は前年の手腕によつて、再度の整理を委託された。其時長井は自分で風呂の薪まきを焚もいて見て、実際の消費高と帳面づらの消費高との差違だかから調しらべにかゝつたが、終日終夜この事丈に精魂を打ち込んだ結果は、約一ヶ月内に立派な方法を立て得るに至つた。それより以後藩主の家では比較的豊かな生計くらしをしてゐる。

斯う云ふ過去の歴史を持つてゐて、此過去の歴史以外には、一歩も踏み出して考へる事を敢てしない長井は、何なんによらず、誠実

と熱心へ持つて行きたがる。

「御前は、どう云ふものか、誠実と熱心が欠けてゐる様だ。それぢや不可ん。だから何にも出来ないんだ」

「誠実も熱心もあるんですが、たゞ人事上に応用出来ないんです」
「何^どう云ふ訳で」

代助は又返答に窮した。代助の考によると、誠実だらうが、熱心だらうが、自分^{できあひ}が出来合^{やつ}の奴^{やつ}を胸^{たく}に蓄^{たく}はへてゐるんぢやなくつて、石と鉄と触れて火花^{ひばな}の出る様に、相手次第で摩擦の具合がうまく行けば、当事者二人^{ににん}の間に起るべき現象である。自分の有する性質と云ふよりは寧ろ精神の交換作用である。だから相手^{わる}が悪くつては起^{おこ}り様がない。

「御父おとうさんは論語だの、王陽明だのといふ、金きんの延金のべがねを呑んで入いらつしやるから、左様さういふ事を仰しやるんでせう」

「金きんの延金のべがねとは」

代助はしばらく黙だまつてゐたが、漸だやく、

「延金のべがねの儘で出て来くるんです」と云つた。長井は、書物癖のある、

偏窟へんくつな、世慣れない若輩のいひたがる不得要領の警句として、好奇心のあるにも拘はらず、取り合ふ事を敢てしなかつた。

三の五

それから約四十分程して、老人は着物きものを着換きかえて、袴はかまを穿はいて、

くるまの俵に乗つて、何処かへ出て行つた。代助も玄關迄送つて出たが、又引き返して客間の戸を開けて中へ這入つた。是は近頃になつて建て増した西洋作りで、内部の装飾其他の大部分は、代助の意匠に本づいて、専門家へ注文して出来上つたものである。ことに欄間の周囲に張つた模様画は、自分の知り合ひの去る画家に頼んで、色々相談の揚句に成つたものだから、特更興味が深い。代助は立ちながら、画卷物を展開した様な、横長の色彩を眺めてゐたが、どう云ふものか、此前来て見た時よりは、痛く見劣りがする。是では頼もしくなれないと思ひながら、猶局部々に見眼を付けて吟味してゐると、突然嫂が這入つて来た。

「おや、此所に入らつしやるの」と云つたが、「一寸其所らに私

の櫛くしが落ちて居ゐなくつて」と聞いた。櫛くしは長椅子ソファの足あしの所ところにあつた。昨日きのふ縫子ぬひこに貸かして遣やつたら、何所どこかへ失なくなして仕舞しまつたんで、探さがしに來きたんださうである。両手あたまで頭あたまを抑おさへる様ようにして、櫛くしを束たば髪ねがたの根方ねがたへ押し付つけて、上眼うはめで代助だすけを見みながら、

「相変あひらず茫ぼん乎や乎りしてゐるぢやありませんか」と調戲からかつた。

「御父おとうさんから御談義ごだんぎを聞きかされちまつた」

「また？ 能よく叱しかられるのね。御歸ごきり匆々きんきん、随分氣きが利きかないわね。然しかし貴方あなたもあんなまり、好よかないわ。些ちとも御父おとうさんの云いふ通とおうりになさらないんだもの」

「御父おとうさんの前で議論ぎろんなんかしやしませんよ。万事控ばんじくえ目に大人おとなしくしてゐるんです」

「だから猶始末が悪いのよ。何か云ふと、へい／＼つて、さうして、些ちつとも云ふ事を聞かないんだもの」

代助は苦笑して黙だまつて仕舞つた。梅子うめこは代助の方へ向いて、椅子へ腰を卸した。脊せいのすらりとした、色の浅黒い、眉この濃い、唇の薄い女である。

「まあ、御掛おかけなさい。少し話し相手になつて上げるから」
代助は矢つ張り立つた儘、嫂あによゆがたの姿を見守つてゐた。

「今日けふは妙な半襟はんえりを掛けてますね」

「これ？」

梅子あこは顎あごを縮ちぢめて、八の字を寄せて、自分の襦袢の襟を見やうとした。

「此間こないだ買ったの」

「好いい色だ」

「まあ、そんな事は、何どうでも可いいから、其所そこへ御掛おかけなさいよ」
代助は嫂あによめの真正面へ腰を卸した。

「へえ掛かけました」

「一いつたい体けふ今日は何を叱しかられたんです」

「何を叱しかられたんだか、あんまり要領を得ない。然し御父おとうさんの
国家社会こくさの為ために尽すには驚ろいた。何でも十八の年としから今日迄こんにちまで
のべつに尽つくしてゐるんだつてね」

「それだから、あの位に御成りになつたんぢやありませんか」

「国家社会こくさの為ために尽つくして、金かねが御父おとうさん位儲かるなら、僕も尽つくし

ても好い

「だから遊んでないで、御尽しなさいな。貴方は寐てゐて御金を取らうとするから狡猾よ」

「御金を取らうとした事は、まだ有りません」

「取らうとしなくつても、使ふから同じぢやありませんか」

「兄さんが何とか云つてましたか」

「兄さんは呆れてるから、何とも云やしません」

「随分猛烈だな。然し御父さんより兄さんの方が偉いですね」

「何うして。——あら悪らしい、又あんな御世辞を使つて。貴方

はそれが悪いのよ。真面目な顔をして他を茶化すから」

「左様なものでせうか」

「左様なもんでせうかつて、他の事ぢやあるまいし。少しや考へて御覧なさいな」

「何うも此所へ来ると、丸で門野と同じ様になつちまふから困る」
 「門野つて何です」

「なに宅にゐる書生ですがね。人に何か云はれると、屹度左様なもんでせうか、とか、左様でせうか、とか答へるんです」

「あの人？ 余つ程妙なのね」

三の六

代助は一寸話を已めて、梅子の肩越に、窓掛の間から、

奇麗な空を透かす様に見てゐた。遠くに大きな樹が一本ある。薄
 すちやいろめ 茶色の芽を全体に吹いて、柔らかな梢の端が天に接く所は、
 かあめ ぼか 雨で暈されたかの如くに霞んでゐる。

「好い氣候になりましたね。何所か御花見にでも行きませうか」

「行きませう。行くから仰しやい」

「何を」

「御父さまから云はれた事を」

「云はれた事は色々あるんですが、秩序立てて繰り返すのは困

るですよ。頭が悪いんだから」

「まだ空つとぼけて居らつしやる。ちゃんと知つてますよ」

「ぢや、伺ひませうか」

梅子は少しつんとした。

「貴方あなたは近頃余つ程減へらず口ぐちが達者におなりね」

「何なに、姉ねえさんが辟易する程ぢやない。——時に今日けふは大変静かです。ね。どうしました、小供達は」

「小供は学校です」

十六七の小間使こまづかひが戸とを開あけて顔かほを出した。あの、旦那様が、奥様ちよつとに一寸電話口迄ぐちと取り次ついだなり、黙もつて梅子の返事を待つてゐる。梅子はすぐ立つた。代助も立つた。つゞいて客間きやくまを出やうとすると、梅子は振り向いた。

「あなたは、其所そこに居ゐらつしやい。少し話しがあるから」

代助には嫂あによめのかう云ふ命令的の言葉が何時いつでも面白く感ぜられ

る。御ご緩ゆづりと見送つた儘、又腰を掛けて、再び例の画を眺め出だした。しばらくすると、其色が壁かべの上に塗り付けてあるのでなくつて、自分の眼球めだまの中なかから飛び出して、壁かべの上うへへ行つて、べた／＼喰くつ付く様に見えて来たき。仕舞には眼球めだまから色を出す具合一つで、向ふにある人物樹木が、此方こちらの思ひ通りに変化出来る様になつた。代助はかくして、下手へたな個所々々を悉く塗り更かへて、とう／＼自分の想像し得る限りの尤も美しい色彩に包围されて、恍惚すはと坐つてゐた。所へ梅子うめこが歸つて来たので、忽ち当り前の自分に戻つて仕舞つた。

梅子の用事と云ふのを改まつて聞いて見ると、又例の縁談の事であつた。代助は学校を卒業する前から、梅子の御蔭で写真実物

色々な細君の候補者に接した。けれども、何づれも不合格者ばかりであつた。始めのうちは体裁の好い逃口^{にげ}上で断わつてゐたが、二年程前からは、急に凶迂^{づう}々々しくなつて、屹度相手にけちを付ける。口^{くち}と顎^{あご}の角度が悪いとか、眼^めの長さが顔の幅^{はば}に比例しないとか、耳の位置が間違^{まちが}つてるとか、必ず妙な非難を持つて来る。それが悉く尋常^{いひぐさ}な言草でないので、仕舞には梅子も少々考へ出した。是は必竟世話を焼き過ぎるから、付け上つて、人を困^{こま}らせろのだらう。当分打遣^{うつちや}つて置いて、向ふから頼み出させるに若くはない。と決心して、夫からは縁談の事をついぞ口^{くち}にしなくなつた。所が本人は一向困つた様子もなく、依然として海のものとも、山のものとも見当が付かない態度で今日迄暮^{くら}して来^きた。

其所へ親爺が甚だ因念の深いある候補者を見付けて、旅行先から歸つた。梅子は代助の来る二三日前に、其話を親爺から聞かされたので、今日の会談は必ずそれだらうと推したのである。然し代助は實際老人から結婚問題に付いては、此日何にも聞かなかつたのである。老人は或はそれを披露する気で、呼んだのかも知れないが、代助の態度を見て、もう少し控えて置く方が得策だといふ了見を起した結果、故意と話題を避けたとも取れる。

此候補者に対して代助は一種特殊な關係を有つてゐた。候補者の姓は知つてゐる。けれど名は知らない。年齢、容貌、教育、性質に至つては全く知らない。何故その女が候補者に立つたと云ふ因念になると又能く知つて居る。

三の七

代助の父には一人の兄があつた。直記と云つて、父とはたつた一つ違ひの年上だが、父よりは小柄なうへに、顔付眼鼻立が非常に似てゐたものだから、知らない人には往々双子と間違へられた。其折は父も得とは云はなかつた。誠之進といふ幼名で通つてゐた。

直記なほきと誠之進とは外貌のよく似てゐた如く、氣質きだても本当の兄弟であつた。両方に差支のあるときは特別、都合さへ付けば、同じ所に食くつ付き合つて、同じ事をして暮してゐた。稽古も同時同刻

に往き返りをする。読書にも一つ燈火ともしびを分つた位親したしかった。

丁度直記なほきの十八の秋あきであつた。ある時二人ふたりは城下外じやうかはづれの等覺

寺といふ寺へ親おやの使に行つた。これは藩主の菩提寺で、そこにある

楚水といふ坊さんが、二人ふたりの親おやとは昵じつこん近なので、用の手紙を、

此楚水さんに渡しに行つたのである。用は囲碁の招待か何かで返

事にも及ばない程簡略なものであつたが、楚水さんに留とめられて、

色々話してゐるうちに遅おそくなつて、日の暮れる一時間程前に漸く

寺を出た。その日は何か祭のある折で、市中しちうは大分雑沓してゐた。

二人ふたりは群集のなかを急いで帰る拍子に、ある横町を曲らうとする

角かどで、川向かうひの方ほう限ぎりの某なにがしといふものに突き当つた。此某なにがしと二人

とは、かねてから仲なかが悪わるかつた。其時某なにがしは大分酒氣を帯びてゐた

と見えて、二言三言いひ争ふうちに刀を抜いて、いきなり斬り付けた。斬り付けられた方は兄であつた。已を得ず是も腰の物を抜いて立ち向つたが、相手は平生から極めて評判のわるい乱暴もの丈あつて、酩酊してゐるにも拘はらず、強かつた。黙つてゐれば兄の方が負ける。そこで弟も刀を抜いた。さうして二人で滅茶苦茶に相手を斬り殺して仕舞つた。

其頃の習慣として、侍が侍を殺せば、殺した方が切腹をしなねばならない。兄弟は其覚悟で家へ歸つて来た。父も二人を並べて置いて順々に自分で介錯をする氣であつた。所が母が生憎祭で知己の家へ呼ばれて留守である。父は二人に切腹をさせる前、もう一遍母に逢はしてやりたいと云ふ人情から、すぐ母を迎にや

つた。さうして母の来る間くあひだふたり、二人に訓戒を加へたり、或は切腹する座敷の用意をさせたり可成愚図々々してゐた。

母は、の客に行つてゐた所は、その遠縁とほえんにあたる高木たかぎといふ勢力

家であつたので、大變都合が好よかつた。と云ふのは、其頃は世の

中なかうごの動き掛けた当時で、侍さむらひの掟おきても昔の様には嚴重に行はれなかつ

た。殊更殺された相手は評判の悪い無頼の青年であつた。ので高

木は母とともに長井の家いへへ来て、何分の沙汰が公おもてむき向むきからある

迄は、当分其儘にして、手を着けずに置くやうにと、父を諭さとした。

高木はそれから奔走を始めた。さうして第一に家老を説き付け

た。それから家老を通して藩主を説き付けた。殺された某なにがしの親おやは

又、存外訳わかの解わけつた人で、平生から倅せがれの行跡ぎやうせきの良くないのを

苦に病んでゐたのみならず、斬り付けた当時も、此方こつちから狼藉をしかけたと同然であるといふ事が明瞭になつたので、兄弟を寛大に処分する運動に就ては別段の苦情を持ち出さなかつた。兄弟はしばらく一間ひとまの内に閉ぢ籠うちつて、謹慎の意を表して後、二人ともふたり人知れず家いへを捨すてた。

三年の後兄は京都で浪士に殺された。四年目に天下が明治となつた。又五六年してから、誠之進は両親を国元から東京へ呼び寄せた。さうして妻を迎へて、得とくといふ一字名なになつた。其時は自分の命いのちを助けてくれた高木はもう死んで、養子の代になつてゐた。東京へ出て仕官の方法でも講じたらと思つて色々勧めて見たが応じなかつた。此養子に子供ふたりが二人あつて、男の方は京都へ出て同

志社へ這^{はい}入った。其所^{そこ}を卒業してから、長らく亜米利加に居つたさうだが、今では神戸で実業に従事して、相当の資産家になつてゐる。女の方は県下の多額納税者の所へ嫁^{よめ}に行つた。代助の細君の候補者といふのは此多額納税者の娘である。

「大變込み入つてるのね。私^{わたし}驚^{おどろ}ろいちまつた」と嫂^{あによめ}が代助に云つた。

「御父^{おとう}さんから何返も聞いてるぢやありませんか」

「だつて、何時^{いつ}もは御嫁^{よめ}の話^{はなし}が出ないから、好^いい加減に聞^きいてるのよ」

「佐川^{さがは}にそんな娘があつたのかな。僕も些^ちつとも知らなかつた」

「御貫^{おもらひ}なさいよ」

「賛成なんですか」

「賛成ですとも。因念つきぢやありませんか」

「先祖の掙らえた因念よりも、まだ自分の掙えた因念で貰ふ方が貰ひ^{もら}好い様だな」

「おや、左様^{そん}なのがあるの」

代助は苦笑して答へなかつた。

四の一

代助は今読み切^きつた許^{ばかり}の薄^{うす}い洋書を机の上に開^あけた儘、両^{ひだち}脇^{わき}を突^ついて茫^{ぼんやり}乎考へた。代助の頭^{あたま}は最後の幕^{まく}で一杯になつてゐる。

——遠くの向ふに寒さうな樹が立つてゐる後に、二つの小さな角燈が音もなく揺めいて見えた。絞首台は其所にある。刑人は暗い所に立つた。木履を片足失くした、寒いと一人が云ふと、何を？ と一人が聞き直した。木履を失くなして寒いと前のものを？ と同じ事を繰り返した。Mは何処にゐると誰か聞いた。此所にゐると誰か答へた。樹の間に大きな、白い様な、平たいものが見える。湿っぽい風が其所から吹いて来る。海だとGが云つた。しばらくすると、宣告文を書いた紙と、宣告文を持つた、白い手——手套を穿めない——を角燈が照らした。読上げんでも可からうといふ声がした。其の声は顫へてゐた。やがて角燈が消えた。……もう只一人になつたとKが云つた。さうして溜息を吐いた。S

も死んで仕舞った。Wも死んで仕舞った。Mも死んで仕舞った。

只一人ただひとりになつて仕舞った。……

海から日ひがあがつた。彼等は死骸を一つの車に積み込んだ。さうして引き出した。長くなつた頸くび、飛び出した眼めくちびるうへ、唇の上に咲いた、怖ろしい花の様な血の泡あはに濡ぬれた舌したを積み込んで元の路へ引き返した。……

代助はアンドレーフの「七刑人」の最後の模様を、此所迄頭こゝあたのなかで繰り返して見て、竦ぞつと肩かたを縮すくめた。斯かう云ふ時に、彼かれが尤も痛切かんに感ずるのは、万一自分がこんな場に臨のぞんだら、どうしたら宜からうといふ心配である。考へると到底死ねさうもない。と云つて、無理にも殺されるんだから、如何いかにも残酷である。彼は生せい

の慾望と死の圧迫の間に、わが身を想像して、未練に両方に往つたり来たりする苦悶を心に描き出しながら凝と坐つてゐると、脊中なかいちめん一面の皮が毛穴かはけあなごとにむづ／＼して殆んど堪らなくなる。彼かれの父は十七のとき、家中かちうの一人を斬り殺して、それが為め切腹をする覚悟をしたと自分で常に人に語つてゐる。父の考では兄の介錯を自分がして、自分の介錯を祖父に頼む筈であつたさうだが、能くそんな真似が出来るものである。父が過去を語る度に、代助は父をえらいと思ふより、不愉快な人間だと思ふ。さうでなければ嘔吐うそつきだと思ふ。嘔吐の方がまだ余つ程父らしい気がする。

父ちうばかり許ではない。祖父に就ても、こんな話がある。祖父が若

い時分、擊劍の同門の何とかといふ男が、あまり技芸に達してゐ
 た所から、他の嫉妬を受けて、ある夜縄手道を城下へ歸る途中で、
 誰かに斬り殺された。其時第一に馳け付けたものは祖父であつた。
 左の手に提灯を翳して、右の手に拔身を持つて、其拔身で死骸を
 叩きながら、軍平確かりしろ、創は浅いぞと云つたさうである。
 伯父が京都で殺された時は、頭巾を着た人間にどやくと、旅
 宿に踏み込まれて、伯父は二階の廂から飛び下りる途端、庭石に
 爪付いて倒れる所を上から、容赦なく遣られた為に、顔が膾の様
 になつたさうである。殺される十日程前、夜中、合羽を着て、傘
 に雪を除けながら、足駄がけで、四条から三条へ歸つた事がある。
 其時旅宿の二丁程手前で、突然後から長井直記どのと呼び懸け

られた。伯父おぢは振り向きもせず、矢張り傘かさを差した儘、旅宿やどの戸と口ぐち迄き来て、格子こうしを開あけて中なかへ這はいつ入つた。さうして格子をぴしやりと締しめて、中うちから、長井直記なほきは拙者だ。何御用か。と聞いたさうである。

代助は斯んな話を聞たく度たびに、勇いましいと云ふ氣持きよりも、まづ怖い方が先たに立たつ。度胸を買たつてやる前に、腥なまぐさい臭におが鼻はな柱はしらを抜はける様ように応こたへる。

もし死が可能であるならば、それは発作ほつさの絶高頂に達した一瞬にあるだらうとは、代助のかねて期待する所である。所が、彼は決して発作性ほつさの男でない。手も顫ふるへる、足も顫ふるへる。声の顫ふるへる事や、心臓の飛び上あがる事は始終ある。けれども、激する事は近

来殆んどない。激すると云ふ心的状態は、死に近づき得る自然の階段で、激するたびに死に易くなるのは眼に見えてゐるから、時には好奇心で、せめて、其近所迄押し寄せて見たいと思ふ事もあるが、全く駄目である。代助は此頃の自己を解剖するたびに、五六年前の自己と、丸で違つてゐるのに驚ろかすにはゐられない。

四の二

代助は机の上の書物を伏せると立ち上がった。縁側の硝子戸を細目に開けた間から暖かい陽気な風が吹き込んで来た。さうして鉢植のアマランスの赤い瓣をふらふと揺かした。日は大きな

花の^{うへ}上に落ちてゐる。代助は曲^こんで、花の中^{なか}を覗^{のぞ}き込んだ。やがて、ひよろ長い雄蕊^{ずゐ}の頂^{いた}きから、花粉^{くわふん}を取つて、雌蕊^{しずゐ}の先^{さき}へ持つて来て、丹念^{たんねん}に塗^ぬり付^つけた。

「蟻^{あり}でも付^つきましたか」と門野^{かどの}が玄関^{げん}の方^{かた}から出^でて来^きた。袴^{はか}を穿^はいてゐる。代助は曲^こんだ儘^{まま}顔を上^あげた。

「もう行^いつて来^きたの」

「えゝ、行^いつて来^きました。何^{なん}ださうです。明日^{あした}御引移^{おひきうつ}りになる

さうです。今日^{けふ}是^{こゝ}から上^あがらうと思^{おも}つてた所^{ところ}だと仰^{おつ}しやいました」

「誰^{だれ}が？ 平岡^{へいおか}が？」

「えゝ。——どうも何^{なん}ですな。大分^{だいぶ}御忙^{いそ}がしい様^{よう}ですな。先生^{せんせい}た

余^あつ程^{ちが}違^{ちが}つてますね。——蟻^{あり}なら種^{たね}油^{あぶら}を御注^{おつ}ぎなさい。さう

して苦しがつて、穴から出て来る所を、一々殺すんです。何なら殺ころしませうか」

「蟻ぢやない。斯かうして、天氣の好い時に、花粉を取とつて、雌蕊しずゐへ塗り付けて置くと、今に実みが結なるんです。暇ひまだから植木屋から聞きいた通り、遣やつてゐる所だ」

「なある程。どうも重宝な世の中なかになりましたね。——然し盆栽は好いいもんだ。奇麗で、楽しみになつて」

代助は面倒臭めんどくさいから返事をせず黙つてゐた。やがて、

「悪いたづら戯いも好加減い、かげんに休よすかな」と云ひながら立ち上あがつて、縁

側すゑへ据付つけの、籐との安樂椅子いすに腰を掛けた。夫れ限りぎぽかんと何か考へ込んでゐる。門野かどのは詰つまらなくなつたから、自分の玄關傍わきの

三畳敷^{じぎ}へ引き取つた。障子^{しじ}を開けて這入らうとすると、又縁側へ呼び返^{かへ}された。

「平岡が今日^{けふ}来ると云つたつて」

「えゝ、来^くる様な御話しでした」

「ぢや待^まつてゐやう」

代助は外出を見合せた。実は平岡の事が此^{この}間^{あひだ}から大分氣に掛^かつてゐる。

平岡は此前^{このぜん}、代助を訪問した当時、既^{すで}に落ち付いてゐられない身分であつた。彼自身^{かれ}の代助に語つた所によると、地位の心当りが二三ヶ所あるから、差し当り其方面へ運動して見る積りなんださうだが、其二三ヶ所が今どうなつてゐるか、代助は殆んど知ら

ない。代助の方から神保町の宿を訪ねた事が二返あるが、一度は留守であつた。一度は居つたには居つた。が、洋服を着た儘、部屋敷居の上に立つて、何か急い調子で、細君を極め付けてゐた。——案内なしに廊下を伝つて、平岡の部屋の横へ出た代助には、突然ながら、たしかに左様取れた。其時平岡は一才振り向いて、やあ君かと云つた。其顔にも容子にも、少しも快よさうな所は見えなかつた。部屋の内から顔を出した細君は代助を見て、蒼白い頬をぽつと赤くした。代助は何となく席に就き悪くなつた。まあ這入れと申し訳に云ふのを聞き流して、いや別段用ぢやない。何うしてゐるかと思つて一寸来て見た丈だ。出掛けるなら一所に出様と、此方から誘ふ様にして表へ出て仕舞つた。

其時平岡は、早く家を探して落ち付きたいが、あんまり忙しい
 んで、何うする事も出来ない、たまに宿のものが教へてくれるか
 と思ふと、まだ人が立ち退かなかつたり、あるひは今壁を塗つて
 最中だつたりする。などと、電車へ乗つて分れる迄諸事苦情
 づくめであつた。代助も氣の毒になつて、そんなら家は、宅の書
 生に探させやう。なに不景氣だから、大分空いてるのがある筈だ。
 と請合つて歸つた。

夫から約束通り門野を探しに出した。出すや否や、門野はすぐ
 恰好なを見付けて來た。門野に案内をさせて平岡夫婦に見せ
 ると、大抵可からうと云ふ事で分れたさうだが、門野は家主の
 方へ責任もあるし、又其所が氣に入らなければ外を探す考もある

からと云ふので、借りるか借りないか判然した所を、もう一遍確かめさしたのである。

「君、家主の方へは借りるつて、断わつて来たんだらうね」

「えゝ、歸りに寄つて、明日引越すからつて、云つて来ました」

四の三

代助は椅子に腰を掛けた儘、新らしく二度の世帯を東京に持つ、夫婦の未来を考へた。平岡は三年前新橋で分れた時とは、もう大分變つてゐる。彼の経歴は処世の階子段を一二段で踏み外したと同じ事である。まだ高い所へ上つてゐなかつた丈が、幸と

云へば云ふ様なものゝ、世間の眼めに映ずる程、身体からだに打撲だぶくを受け
 てゐないのみで、其実精神状態には既に狂ひが出来てゐる。始め
 て逢つた時、代助はすぐ左様思つた。けれども、三年間に起つた
 自分の方の變化を打算ださんして見て、或は此方こつちの心が向こころむかに反響を起し
 たのではなからうかと訂正した。が、其後平岡の旅宿へ尋ねて行
 つて、座敷へも這入らないで一所そこに外そとへ出た時の、容子ようこから言語
 動作を眼の前に浮べて見ると、どうしても又最初の判断に戻もどらな
 ければならなくなつた。平岡は其時顔かほの中心ちゅうしんに一種の神経を寄
 せてゐた。風かぜが吹ふいても、砂すなが飛とんでも、強い刺激を受けさうな
 眉まゆと眉まゆの継目つぎめを、憚はゞからず、ぴくつかせてゐた。さうして、口くちにす
 る事ことが、内容の如何に關はらず、如何にも急せわしく、且つ切せつなさ

うに、代助の耳みみに響ひびいた。代助には、平岡の凡ひんてが、恰も肺の強くない人の、重おも苦くるしい葛湯くづゆの中なかを片息かたいきで泳およいでゐる様ように取れた。

「あんなに、焦あせつて」と、電車へ乗つて飛んで行く平岡の姿すがたを見送つた代助は、口くちの内うちでつぶやいだ。さうして旅宿に残されてゐる細君の事を考へた。

代助は此細君を捕つかまへて、かつて奥さんと云つた事がない。何時いつでも三千代さんみちよくと、結婚しない前の通りに、本ほん名なを呼よんでゐる。代助は平岡に分わかれてから又引き返して、旅宿りよしゆくへ行つて、三千代さんみちよに逢つて話はなしをしようかと思つた。けれども、何なんだか行けなかつた。足あしを停とめて思案しあんしても、今の自分には、行くのが

悪いと云ふ意味はちつとも見出せなかつた。けれども、気が咎めて行かれなかつた。勇氣を出せば行かれると思つた。たゞ代助には是丈の勇氣を出すのが苦痛であつた。夫で家へ歸つた。其代り歸つても、落ち付かない様な、物足らない様な、妙な心持がしたので、又外へ出て酒を飲んだ。代助は酒をいくらでも飲む男である。ことに其晩はしたゝかに飲んだ。

「あの時は、何うかしてゐたんだ」と代助は椅子に寄りながら、比較的冷やかな自己で、自己の影を批判した。

「何か御用ですか」と門野が又出て来た。袴を脱いで、足袋を脱いで、団子の様な素足を出してゐる。代助は黙つて門野の顔を見た。門野も代助の顔を見て、一寸の間突立つてゐた。

「おや、御呼およびになつたんぢやないですか。おや、おや」と云つて

引込んで行つた。代助は別段可笑おかしいとも思はなかつた。

「小母おぼさん、御呼およびになつたんぢやないとき。何うども変だと思つた。だから手も何も鳴らないつて云ふのに」といふ言葉が茶の間まの方で聞えた。夫から門野かどのと婆ばあさんの笑ふ声でした。

其時、待ち設けてゐる御客が来た。取次とりつぎに出た門野かどのは意外な顔をして這入つて来た。さうして、其顔を代助の傍そば迄持つて来て、先生、奥さんですと囁ささやく様に云つた。代助は黙だまつて椅子を離れて坐敷へ這入つた。

四の四

平岡の細君は、色の白い割に髪かみの黒い、細ほそおもて面に眉毛まみへの判はつき然りうつ映る女である。一寸ちよつと見ると何所どことなく淋さみしい感じの起る所が、古版こはんの浮世絵に似てゐる。帰京後は色光沢いろつやがことに可よくないやうだ。始めて旅宿で逢つた時、代助は少し驚すころいた位である。汽車で長く揺られた疲れが、まだ回復しないのかと思つて、聞いて見たら、左様さうぢやない、始終斯かうなんだと云はれた時は、氣の毒になつた。

三千代みちよは東京を出て一年目に産をした。生れた子供はぢき死んだが、それから心臓を痛めたと見えて、兎角具合がわるい。始めのうちは、ただ、ぶら／＼してゐたが、何どうしても、はか／＼

しく癒らないので、仕舞に医者に見て貰つたら、能くは分らないが、ことに依ると何とかいふ六づかしい名の心臓病かも知れないと云つた。もし左様だとすれば、心臓から動脈へ出る血が、少しづつ、後戻りをする難症だから、根治は覚束ないと宣告されたので、平岡も驚ろいて、出来る丈養生に手を尽した所為か、一年許りするうちに、好い案排に、元気が滅切りよくなつた。色光沢も殆んど元の様に冴々して見える日が多いので、当人も喜んでゐると、帰る一ヶ月ばかり前から、又血色が悪くなり出した。然し医者の話によると、今度のは心臓の為ではない。心臓は、夫程丈夫にもならないが、決して前よりは悪くなつてゐない。弁の作用に故障があるものとは、今は決して認められないと

いふ診断であつた。——是は三千代が直に代助に話した所である。代助は其時三千代の顔を見て、矢つ張り何か心配の為ぢやないかしらと思つた。

三千代は美くしい線に重ねた鮮かな二重瞼を持つてゐる。眼の恰好は細長い方であるが、瞳を据ゑて凝と物を見るときに、それが何かの具合で大変大きく見える。代助は是を黒眼の働らきと判断してゐた。三千代が細君にならない前、代助はよく、三千代の斯う云ふ眼遣を見た。さうして今でも善く覚えてゐる。三千代の顔を頭の中に浮べやうとすると、顔の輪廓が、まだ出来上がらないうちに、此黒い、湿んだ様に暈された眼が、ぽつと出て来る。

廊下伝ひに坐敷へ案内された三千代は今代助の前に腰を掛けた。さうして綺麗な手を膝の上に置ねた。下にした手にも指輪を穿めてゐる。上にした手にも指輪を穿めてゐる。上のは細い金の枠に比較的大きな真珠を盛つた当世風のもので、三年前結婚の御祝として代助から贈られたものである。

三千代は顔を上げた。代助は、突然例の眼を認めて、思はず瞬を一つした。

汽車で着いた明日平岡と一所に来る筈であつたけれども、つい気分が悪いので、来損なつて仕舞つて、それから一人でなくつては来る機会がないので、つい出ずにゐたが、今日は丁度、と云ひかけて、句を切つて、それから急に思ひ出した様に、此間来て

呉れた時は、平岡が出掛際でかけぎはだったものだから、大變失礼して済まなかつたといふ様な詫わびをして、

「待つてゐらつしやれば可よかつたのに」と女らしく愛想をつけ加へた。けれども其調子は沈んでゐた。尤も是これは此女の持調子もちで、代助は却つて其昔を憶おもひ出だした。

「だつて、大變忙いそがしさうだつたから」

「えゝ、忙いそがしい事は忙いそがしいんですけれども——好いいぢやありませんか。居ゐらしたつて。あんまり他人行儀ですわ」

代助は、あの時、夫婦の間に何があつたか聞いて見様と思つたけれども、まづ已めにした。例いつもなら調戲からかひ半分に、あなたは何か叱しかられて、顔かほを赤くしてゐましたね、どんな悪い事わるをしたんですか

位言ひかねない間あひだ柄がらなのであるが、代助には三千代の愛嬌が、
 後あとから其場そのばを取り繕とふ様に、いたましく聞えたので、冗談を云ひ
 募る元氣も一寸ちよつと出なかつた。

四の五

代助は烟草たばこへ火ひを点つつけて、吸すひ口くちを啣くわへた儘、椅子の脊せに頭あたまを
 持もたせて、寛くつろいだ様に、

「久し振ぶりだから、何か御馳走ごちそうしませうか」と聞きいた。さうして
 心こゝろのうちで、自分の斯う云ふ態度が、幾分か此女の慰藉ごうさいになる様
 に感じた。三千代は、

「今日は沢山たくさん。さう緩りしちやゐられないの」と云つて、昔むかしの金齒きんばを一寸見せた。

「まあ、可いいでせう」

代助は両手を頭あたまの後へ持つて行つて、指ゆびと指ゆびを組み合せて三千代を見た。三千代はこゝんで帯の間あひだから小さな時計を出だした。代助が真珠の指輪を此女に贈おくるものにする時、平岡は此時計を妻に買つて遣やつたのである。代助は、一つ店みせで別々べつべつの品物しなものを買つた後あと、平岡と連れ立つつて其所そこの敷居しきゐを跨またぎながら互に顔を見合せて笑つた事を記憶してゐる。

「おや、もう三時過ぎね。まだ二時位かと思つてたら。——少し寄り道みちをしてゐたものだから」

と独り言ごことの様に説明を加へた。

「そんなに急いそぐんですか」

「えゝ、成なり丈たけ早く歸りたいの」

代助は頭あたまから手てを放はなして、烟草たばこの灰をはたき落した。

「三年さんねんのうちに大分世帯染だいぶんせたいしめちまつた。仕方しかたがない」

代助は笑つて斯う云つた。けれども其調子には何処どこかに苦にがい所があつた。

「あら、だつて、明日引越あしたひっこすんぢやありませんか」

みちよ 三千代の声は、此時急このときいきに生々いきと聞えた。代助は引越ひっこしの事を

丸で忘れてゐた。

「ぢや引越ひっこしてから緩ゆつくり来れば可いいのに」

代助は相手の快こころよささうな調子に釣つり込まれて、此方こつちからも他た愛あいなく追窮しした。

「でも」と云つた、三千代は少し挨拶に困つた色を、額ひたひの所へあらはして、一寸下ちよつとを見たが、やがて頬ほを上げあげた。それが薄赤く染そまつて居た。

「実は私じつわたくし少し御願おねがひがあつて上あがつたの」

疳かんの鋭えいどい代助は、三千代の言葉を聞くや否や、すぐ其用事の何であるかを悟つた。実は平岡が東京へ着いた時から、いつか此問題に出逢ふ事だらうと思つて、半意識はんいしきの下で覚悟したしてゐたのである。

「何ですか、遠慮なく仰しやい」

「少し御金おかねの工面くめんが出来できなくつて？」

三千代の言葉ことばは丸で子供の様に無邪気であるけれども、両方の頬ほは矢つ張り赤くなつてゐる。代助は、此女に斯んな氣恥きはづかしい思ひをさせる、平岡の今の境遇を、甚だ氣の毒に思つた。

段々聞いて見ると、明日引越あしたをする費用や、新らしく世帯を持つ為ための金かねが入用なのではなかつた。支店の方を引き上あげる時、向ふへ置き去ざりにして來た借金きが三口みくちとかあるうちで、其一ひとくち口を是非片付けなくてはならないのださうである。東京へ着ついたら一週間うちに、どうでもすると云ふ堅かたい約束うへをして來た上に、少し訳があつて、他の様ほかに放ほうつて置おけない性質たのものだから、平岡も着ついた明日あくるひから心配して、所々奔走してゐるけれども、まだ出

来さうな様子が見えないので、已を得ず三千代に云ひ付けて代助の所に頼みに寄よこしたと云ふ事が分わかつた。

「支店長から借りたと云ふ奴やつですか」

「いゝえ。其方そのほうは何時いつ迄延ばして置いても構はないんですが、此方こつちの方を何どうかしないと困るのよ。東京で運動する方に響ひびいて来るんだから」

代助は成程そんな事があるのかと思つた。金高かねだかを聞くと五百円と少し許である。代助はなんだ其位と腹なかの中で考へたが、實際自分は一文もない。代助は、自分が金かねに不自由しない様であつて、其実大いに不自由してゐる男だと気が付いた。

「何なんでまた、そんなに借金をしたんですか」

「だから私考^{わたくし}へると厭^{いや}になるのよ。私も病氣^{わたくし}をしたのが、悪い^{わる}に
は悪い^{わる}けれども」

「病氣の時の費用なんですか」

「ぢやないのよ。藥^{くすりだい}代^{だい}なんか知れたもんですわ」

三千代は夫^{それ}以上を語^{かた}らなかつた。代助も夫^{それ}以上を聞^きく勇氣がな
かつた。たゞ蒼白^{あをしろ}い三千代の顔を眺めて、その中^{うち}に、漠然たる未
来の不安を感じた。

五の一

翌^{よく}日^{じつ}朝^{あさ}早^{はや}く門^{かど}野^のは荷^に車^{ぐるま}を三^{さん}台^{だい}雇^{やと}つて、新^{しん}橋^{はし}の停^{てい}車^{しや}場^ば迄^{やば}平

岡の荷物にもつを受取りうけとに行つた。実は疾とうから着ついて居たのであるけれども、宅うちがまだ極きまらないので、今日けふ迄其儘にしてあつたのである。往復の時間と、向ふで荷物を積み込む時間を勘定して見ると、何どうしても半日仕事である。早く行かなけりや、間まに合はないよと代助は寐床を出るとすぐ注意した。門野かどのは例の調子で、なに訳わけはありませんと答へた。此男は、時間の考などは、あまりない方だから、斯う簡便な返事が出来たんだが、代助から説明を聞いて始めて成程と云ふ顔をした。それから荷物を平岡の宅うちへ届とどけた上に、万事奇麗に片付く迄手伝をするんだと云はれた時は、えゝ承知しました、なに大丈夫ですと気軽に引き受けて出て行つた。

それから十一時過すぎ迄代助は読書してゐた。が不図ダヌンチオと

云ふ人が、自分の家の部屋いへを、青色あをいろと赤色あかいろに分わかつて裝飾してゐると云ふ話を思ひ出した。ダヌンチオの主意は、生活の二大情調の発現は、此二色ほかに外ほかならんと云ふ点に存するらしい。だから何でも興奮を要する部屋、即ち音楽室とか書斎とか云ふものは、成るべく赤く塗り立てる。又寢室とか、休息室とか、凡て精神の安静を要する所は青に近い色で飾り付をする。と云ふのが、心理学者の説を応用した、詩人の好奇心の満足と見える。

代助は何故なぜダヌンチオの様な刺激を受け易い人に、奮興色とも見倣し得べき程強烈な赤あかの必要があるだらうと不思議に感じた。代助自身は稲荷の鳥居を見ても余り好いい心持はしない。出来得るならば、自分の頭丈あたまでも可いいから、緑みどりのなかに漂はして安らかに

眠りたい位である。いつかの展覧会に青木と云ふ人が海の底に立つてゐる脊の高い女を画かいた。代助は多くの出品のうちで、あれ丈が好いい氣持に出来てゐると思つた。つまり、自分もああ云ふ沈んだ落ち付いた情調に居りたかつたからである。

代助は縁側へ出て、庭にはから先さきにはびこる一面の青いものを見た。花はいつしか散つて、今は新芽若葉しんめわかばの初期である。はなやかな緑みどりがぱつと顔かほに吹き付けた様な心持ちがした。眼めを醒さます刺激の底そこにどこどこか沈しづんだ調子のあるのを嬉しく思ひながら、鳥打帽とりうちを被かむつて、銘仙めいせんの不斷着ぎの儘門もんを出た。

平岡の新宅へ来て見ると、門もんが開あいて、がらんとしてゐる丈で、荷物の着ついた様子もなければ、平岡夫婦きの来てゐる氣色も見えな

い。たゞ車夫体の男が一人縁側に腰を懸^かけて烟草を呑んでゐた。

聞いて見ると、先刻^{さつき}一返御出^{おいで}になりましたが、此案排ぢや、どう

せ^{ひるすぎ}午過だらうつて又御歸りになりましたといふ筈である。

「旦那と奥さんと一所に來^きたかい」

「えゝ御一所です」

「さうして一所に歸つたかい」

「えゝ御一所に御歸りになりました」

「荷物もそのうち着^つくだらう。御苦労さま」と云つて、又通りへ出^でた。

神田へ來^きたが、平岡の旅館へ寄る氣はしなかつた。けれども二^ふ人^{たり}の事が何だか氣に掛る。ことに細君の事が氣に掛る。ので一^{ちよつ}

寸^と顔^{かほ}を出^だした。夫婦^{ふうふ}は膳^{ぜん}を並^{なら}べて飯^{めし}を食^くつてゐた。下女^{げじよ}が盆^{ぼん}を持^もつて、敷居^{しき}に尻^{しり}を向^むけてゐる。其^{うしろ}後^ごから、声^{こゑ}を懸^かけた。

平岡^{へいおか}は驚^{おどろ}ろいた様^{よう}に代助^{だいすけ}を見^みた。其^{その}眼^めが血^ちばしつてゐる。二三日^{ふたみづか}能^よく眠^{ねむ}らない所^せ為^ゐだと云^いふ。三千代^{さん千代}は仰^{おほ}山^{さん}な物^{もの}、云^いひ方^{かた}だと云^いつて笑^{わら}つた。代助^{だいすけ}は氣^きの毒^{どく}にも思^{おも}つたが、又^{また}安心^{あんしん}もした。留^{とど}めるのを外^{そと}へ出^でて、飯^{めし}を食^くつて、髪^{かみ}を刈^かつて、九段^{くうだん}の上^{うへ}へ一寸^{いちゆつと}寄^よつて、又^{また}歸^{かへ}りに新宅^{しんたく}へ行^いつて見^みた。三千代^{さん千代}は手拭^{てふき}を姉^{ねえ}さん被^{かぶ}りにし、友禪^{ゆうぜん}の長繻絆^{ちやうそばん}をさらりと出^だして、襷^{たすき}がけで荷物^{にもの}の世話^{よわ}を焼^やいてゐた。旅宿^{りょしゆく}で世話^{よわ}をして呉^くれたと云^いふ下女^{げじよ}も来^きてゐる。平岡^{へいおか}は縁側^{えんがわ}で行李^{りやうぎ}の紐^{ひも}を解^ひいてゐたが、代助^{だいすけ}を見^みて、笑^{わら}ひながら、少^{少し}し手伝^{てつだ}はないかと云^いつた。門野^{かどの}は袴^{かまど}を脱^ぬいで、尻^{しり}を端折^{はしり}つて、重^{かさ}ね

簞笥を車夫と一所に坐敷へ抱へ込みながら、先生どうです、此服な装りは、笑わらつちや不可いけませんよと云つた。

五の二

翌よくじつ日、代助が朝食あさめしの膳ぜんに向むかつて、例の如く紅茶を呑のんでゐると、門野かどのが、洗あらひ立ての顔かほを光ひからして茶の間まへ這入きつて来た。
 「昨夕ゆふべは何時いつ御歸おかへりでした。つい疲つかれちまつて、仮うたゝ寐ねをしてゐたものだから、些ちつとも氣が付きませんでした。——寐ねてゐる所を御覽ごらんになつたんですか、先生も随分ひと人わるが悪いな。全体何時頃ごころなんです、御歸りになつたのは。夫それまで迄何所どこへ行いつて居ゐらした」と

平生の調子で苦もなく※舌り立てた。代助は真面目で、

「君、すっかり片付迄居て呉れたんでせうね」と聞いた。

「えゝ、すっかり片付けちました。其代り、何うも骨が折れ

ましたぜ。何しろ、我々の引越と違つて、大きな物が色々ある

んだから。奥さんが坐敷の真中へ立つて、茫然、斯う周囲を

見回してゐた様子つたら、——随分可笑なもんでした」

「少し身体の具合が悪いんだからね」

「どうも左様らしいですね。色が何だか可くないと思つた。平岡

さんとは大違ひだ。あの人の体格は好いですね。昨夕一所に湯に

入つて驚ろいた」

代助はやがて書齋へ歸つて、手紙を二三本書いた。一本は朝鮮

の統監府に居る友人宛で、先達て送つて呉れた高麗焼の礼状である。一本は仏蘭西に居る姉婿宛で、タナグラの安いのを見付けて呉れといふ依頼である。

昼過散步の出掛けに、門野の室を覗いたら又引繰り返つて、

ぐうぐう寐てゐた。代助は門野の無邪気な鼻の穴を見て羨ましく

なつた。実を云ふと、自分は昨夕寐つかれないで大変難義したのである。例に依つて、枕の傍へ置いた袂時計が、大変大きな音を

出す。夫が氣になつたので、手を延ばして、時計を枕の下へ押し

込んだ。けれども音は依然として頭の中へ響いて来る。其音を

聞きながら、つい、うとくする間に、凡ての外の意識は、全く

暗窖の裡に降下した。が、たゞ独り夜を縫ふミシンの針丈が刻

暗窖の裡に降下した。が、たゞ独り夜を縫ふミシンの針丈が刻

み足に頭あたまの中なかを断たえず通とほつてゐた事を自覚してゐた。所そのが其その音おとが何時いつかりん／＼といふ虫ねの音ねに變つて、奇麗な玄関わきの傍うきの植込うきごみの奥で鳴いてゐる様になつた。――代助は昨夕ゆふべの夢を此所こゝ迄たどつて来て、睡眠みんと覚醒かくせいとの間あひだを繋つなぐ一種の糸を発見した様な心持がした。

代助は、何事によらず一度いちど氣にかゝり出だすと、何処どこ迄も氣にかゝる男である。しかも自分で其馬鹿げ氣さ加減の程度を明らかに見積みつもる丈の脳力があるので、自分の氣にかゝり方かたが猶眼めに付いてならない。三四年前、平生の自分が如何いかにして夢ゆめに入るかと云ふ問題を解決しやうと試みた事がある。夜よる、蒲団へ這入つて、好いい案排にうと／＼し掛けると、あゝ此所こゝだ、斯かうして眠ねむるんだなと思つ

てはつとする。すると、其瞬間に眼が冴えて仕舞ふ。しばらくして、又眠りかけると、又、そら此所だと思ふ。代助は殆んど毎晩の様に此好奇心に苦しめられて、同じ事を二遍も三遍も繰り返した。仕舞には自分ながら辟易した。どうかして、此苦痛を逃れ様と思つた。のみならず、つく／＼自分は愚物であると考へた。自分の不明瞭な意識を、自分の明瞭な意識に訴へて、同時に回顧しやうとするのは、ジエームスの云つた通り、暗闇を檢査する^{ため}に蠟燭を点^{とも}したり、独楽の運動を吟味する^{ため}に独楽を抑^{おさ}へる様なもので、生涯寐^ねられつこない訳になる。と解^{わか}つてゐるが晩^{ばん}になると又はつと思ふ。

此困難は約一年許りで何時^{いつ}の間にか漸く遠退^{とほの}いた。代助は昨夕^{ゆうふべ}

の夢ゆめと此困難とを比較して見て、妙に感じた。正氣の自己じこの一部
 分を切り放はなして、其儘すがたの姿として、知らぬ間まに夢の中なかへ譲ゆづり渡す
 方おもむきが趣があると思つたからである。同時に、此作用は氣狂きちがひにな
 る時の状態と似て居はせぬかと考へ付いた。代助は今迄、自分は
 激昂しないから氣狂きちがひにはなれないと信じてゐたのである。

五の三

それから二三日は、代助も門野かどのも平岡の消息を聞きかずに過すごし
 た。四日よつかめ目の午過ひるすぎに代助は麻布あさぶのある家いへへ園遊会に呼ばれて行
 った。御客は男女を合せて、大分だいぶん来たが、正賓と云ふのは、英国

の国会議員とか実業家とかいふ、無暗に脊の高い男と、それから鼻眼鏡をかけた其細君とであつた。これは中々の美人で、日本杯へ来るには勿体ない位な容色だが、何処で買つたものか、岐阜出来の絵日傘を得意に差してゐた。

尤も其日は大変な好い天気で、広い芝生の上にフロツクで立つてゐると、もう夏が来たといふ感じが、肩から脊中へ掛けて著るしく起つた位、空が真蒼に透き通つてゐた。英国の紳士は顔をしめ空を見て、実に美くしいと云つた。すると細君がすぐ、ラツヴレイと答へた。非常に瘠の高い声で尤も力を入れた挨拶の仕様であつたので、代助は英国の御世辞は、また格別のものだと思つた。

代助も二言三言ふたことみこと此細君から話はなしかけられた。が三分さんぶんと経たないうちに、遣り切れなくなつて、すぐ退却した。あとは、日本服を着て、わざと島田に結いつた令嬢と、長らく紐ニューヨーク育で商業に従事してゐたと云ふ某が引き受けた。此某は英語を喋舌しゃべる天才を以て自ら任ずる男で、欠かかさず英語会へ出席して、日本人と英語の会話を遣つて、それから英語で卓上演説をするのを、何よりの楽たのしみにしてゐる。何か云つては、あとでさも可笑おかしさうに、げら／＼笑ふ癖がある。英国人が時によると怪訝けげんな顔かほをしてゐる。代助はあれ丈は已めたら可よからうと思つた。令嬢も中々うま旨い。是は米国婦人を家庭教師に雇つて、英語を使ふ事を研究した、ある物持ちの娘である。代助は、顔より言葉の方が達者だと考へながら、

つく／＼感心して聞いてゐた。

代助が此所へ呼ばれたのは、個人的に此所の主人や、此英国人夫婦に關係があるからではない。全く自分の父と兄との社交的勢力の余波で、招待状が廻つて来たのである。だから、万遍なく方々へ行つて、好い加減に頭を下げて、ぶら／＼してゐた。其中に兄も居た。

「やあ、来たな」と云つた儘、帽子に手も掛けない。

「何うも、好い天氣ですね」

「あゝ。結構だ」

代助も脊の低い方ではないが、兄は一層高く出来てゐる。其上この五六年来次第に肥満して来たので、中々立派に見える。

「何うです、彼方へ行つて、ちと外国人と話でもしちや」

「いや、真平だ」と云つて兄は苦笑ひをした。さうして大きな腹にぶら下がつてゐる金鎖を指の先で弄つた。

「何うも外国人は調子が可いですね。少し可すぎる位だ。あゝ賞められると、天気の方でも是非好くならなくつちやなくなる」
 「そんなに天気を賞めてゐたのかい。へえ。少し暑過ぎるぢやないか」

「私にも暑過ぎる」

誠吾と代助は申し合せた様に、白い手巾を出して額を拭いた。
 兩人共重い絹帽を被つてゐる。

兄弟は芝生の外れの木蔭迄来て留つた。近所には誰もゐない。

向ふの方で余興か何か始まつてゐる。それを、誠吾は、宅にゐると同じ様な顔をして、遠くから眺めた。

「兄の様になると、宅にゐても、客に来て同じ心持ちなんだろう。斯う世の中に慣れ切つて仕舞つても、楽しみがなくなつて、詰らないものだらう」と思ひながら代助は誠吾の様子を見てゐた。

「今日は御父さんは何うしました」

「御父さんは詩の会だ」

誠吾は相変らず普通の顔で答へたが、代助の方は多少可笑しかつた。

「姉さんは」

「御客の接待掛りだ」

また嫂あによめあとが後で不平を云ふ事だらうと考へると、代助は又可おか笑し
 くなつた。

五の四

代助は、誠吾の始終忙いそがしがつてゐる様子を知つてゐる。又その
 忙いそがしさの過半は、斯かう云ふ会合から出来上できあがつてゐるといふ事實
 も心得てゐる。さうして、別に厭いやな顔かほもせず、一ひと口くちの不平等も零こぼ
 さず、不規則に酒を飲んだり、物ものを食くつたり、女を相手にしたり、
 してゐながら、何時いつ見ても疲つかれた態たいもなく、噪さわぐ気色もなく、物
 外に平然として、年々肥満してくる技倆に敬服してゐる。

誠吾が待合へ這入つたり、料理茶屋へ上つたり、晚餐に出たり、午餐に呼ばれたり、倶楽部に行つたり、新橋に人を送つたり、横浜に人を迎へたり、大磯へ御機嫌伺ひに行つたり、朝から晩迄多勢の集まる所へ顔を出して、得意にも見えなければ、失意にも思はれない様子は、斯う云ふ生活に慣れ抜いて、海月が海に漂ひながら、塩水を辛く感じ得ない様なものだらうと代助は考へてゐる。

其所が代助には難有い。と云ふのは、誠吾は父と異つて、嘗て小六つかしい説法杯を代助に向つて遣つた事がない。主義だとか、主張だとか、人生觀だとか云ふ窮窟なものは、てんで、これつ許も口にしないんだから、有んだか、無いんだか、殆んど要領を得

ない。其代り、此窮窟な主義だとか、主張だとか、人生観だとかいふものを積極的せききよくてきに打ち壊うして懸かつた試ためしもない。実に平凡で好い。

だが面白くはない。話し相手としては、兄あによりも嫂あによめの方が、代助に取つて遙かに興味がある。兄あにに逢ふと屹度ど何うだいと云ふ。以太利に地震があつたぢやないかと云ふ。土耳其の天子が廃されたちやないかと云ふ。其外、向ふ島の花はもう駄目になつた、横浜にある外国船の船底ふなぞこに大蛇だいぢやが飼かつてあつた、誰だれが鉄道で轢ひかれた、ぢやないかと云ふ。みんな新聞に出た事許ばかりである。其代り、当らず障らずの材料はいくらでも持つて居る。いつ迄た経つても種たねが尽きる様子が見えない。

さうかと思ふと。時にトルストイと云ふ人は、もう死んだのかね。杯と妙な事を聞く事がある。今日いまにほん日本の小説家では誰だれが一番偉いのかねと聞く事もある。要するに文芸には丸で無頓着で且つ驚ろくべく無識であるが、尊敬と輕蔑以上に立つて平氣で聞くんだから、代助も返事がし易い。やす

斯かう云ふ兄あにと差し向むかひで話をしてゐると、刺激の乏しい代りには、灰汁あくがなくつて、氣樂いきで好い。たゞ朝から晩迄出歩でいてゐるから滅多に捕つかまへる事が出来できない。嫂あによめでも、誠太郎でも、縫子でも、兄あにが終しうじつうち日宅に居て、三度の食事を家族と共に欠かかさず食くふと、却めづつて珍らしがる位である。

だから木蔭こかげに立つて、兄あにと肩かたを比ならべた時とき、代助は丁度好い機会

だと思つた。

「兄さん、貴方あなたに少し話はなしがあるんだが。何時いつか暇ひまはありませんか」

「暇ひま」と繰り返した誠吾は、何なんにも説明せずに笑つて見せた。

「明日あしたの朝あさは何どうです」

「明日あしたの朝あさは浜はま迄行いつて来こなくつちやならない」

「午ひるからは」

「午ひるからは、会社の方に居る事はあるが、少すこし相談があるから、

来きても緩ゆつくり話はなしちやゐられない」

「ぢや晩ばんなら宜よからう」

「晩ばんは帝国ホテルだ。あの西洋人夫婦を明日あしたの晩ばん帝国ホテルへ呼

ぶ事になつてゐるから駄目だ」

代助は口を尖がらかして、兄を凝と見た。さうして二人で笑ひ出した。

「そんなに急ぐなら、今日ぢや、何うだ。今日なら可い。久し振りで一所に飯でも食はうか」

代助は賛成した。所が倶楽部へでも行くかと思ひの外、誠吾は鰻が可からうと云ひ出した。

「絹帽で鰻屋へ行くのは始めてだな」と代助は逡巡した。

「何構ふものか」

二人は園遊会を辞して、車に乗つて、金杉橋の袂にある鰻屋へ上つた。

五の五

其所そこは河かはが流れて、柳やなぎがあつて、古風いへな家であつた。黒くろくなつた床とこ柱ばしらの傍わきの違ちがひ棚だなに、絹シルク帽ハットを引繰ひつくりかへ返しに、二つ並ならべて置いて見て、代助は妙だなど云いつた。然し明あけ放はなした二階の間まに、たつた二人ふたりで胡坐あぐらをかいてゐるのは、園遊会より却さかつて樂らくであつた。

二人ふたりは好いい心こゝろもち持もちに酒を飲のんだ。兄あには飲のんで、食くつて、世せけん間ま話わをすれば其外ほかに用はないと云ふ態度たいどであつた。代助も、うつかりすると、肝心の事件を忘わすれさうな勢であつた。が下女が三本目の銚子を置いて行つた時に、始めて用談に取り掛かつた。代助

の用談と云ふのは、言ふ迄もなく、此間三千代から頼まれた金策の件である。

実を云ふと、代助は今日迄まだ誠吾に無心を云つた事がない。

尤も学校を出た時少々芸者買をし過ぎて、其尻を兄になすり付け

た覚はある。其時兄は叱るかと思ひの外、さうか、困り者だな、

親爺には内々で置けと云つて嫂を通して、奇麗に借金を払つてく

れた。さうして代助には一口の小言も云はなかつた。代助は其

時から、兄に恐縮して仕舞つた。其後小遣に困る事はよくある

が、困るたんびに嫂を痛めて事を済ましてゐた。従つて斯う云ふ

事件に関して兄との交渉は、まあ初対面の様なものである。

代助から見ると、誠吾は蔓のない葉鏝と同じことで、何処か

ら手を出して好いか分らない。然しそこが代助には興味があつた。

代助は世間話の体にして、平岡夫婦の経歴をそろ／＼話し始

めた。誠吾は面倒な顔色もせず、へえ／＼と拍子を取る様に、飲みながら、聞いてゐる。段々進んで三千代が金を借りに来た一段になつても、矢つ張りへえ／＼と合槌を打つてゐる丈である。代助は、仕方なしに、

「で、私も氣の毒だから、何うにか心配して見様つて受合つたんですがね」と云つた。

「へえ。左様かい」

「何うでせう」

「御前金が出来るのかい」

「わたし私や一文も出来やしません。借りるんです」

「誰から」

代助は始めから此所へ落す積だつたんだから、判然した調子

で、

「貴方から借りて置かうと思ふんです」と云つて、改めて誠吾の

顔を見た。兄は矢つ張り普通の顔をしてゐた。さうして、平氣に、

「そりや、御廃しよ」と答へた。

誠吾の理由を聞いて見ると、義理や人情に關係がない許ではな

い、返す返さないと云ふ損得にも關係がなかつた。たゞ、そんな

場合には放つて置けば自から何うかなるもんだと云ふ單純な断定

である。

誠吾は此断定を証明する為めに、色々な例を挙げた。誠吾の門内に藤野と云ふ男が長屋を借りて住んでゐる。其藤野が近頃遠縁のものゝ息子むすこを頼たのまれて宅うちへ置いた。所が其子が徴兵検査で急に国へ歸らなければならなくなつたが、前まへ以て国から送つてある學資も旅費も藤野が使つかひ込んでゐると云ふので、一時の繰り合せを頼たのみに來た事がある。無論誠吾が直ちかに逢つたのではないが、妻さいに云ひ付つけて断ことわらした。夫でも其子そのこは期日迄に国へ歸つて差支なく検査を済すましてゐる。夫から此藤野の親類の何とか云ふ男は、自分の持つてゐる貸家かしやの敷金しききんを、つい使つかつて仕舞つて、借家人しゃくやにんが明日あす引越すといふ間際になつても、まだ調達が出來ないとか云つて、矢つ張り藤野から泣き付いて來た事がある。然し是も断ことわら

した。夫でも別に不都合はなく敷金は返せてゐる。——まだ其外にもあつたが、まあ斯んな種類の例ばかりであつた。

「そりや、姉さんが蔭へ廻つて恵んでゐるに違ない。ハ、ハ、ハ、ハ。」
兄さんも余つ程呑気だなあ」

と代助は大きい声を出して笑つた。

「何、そんな事があるものか」

誠吾は矢張当り前の顔をしてゐた。さうして前にある猪口を取つて口へ持つて行つた。

六の一

其日誠吾は中々金なか／＼かねを貸して遣らうと云はなかつた。代助も三
 千代ちよが氣の毒だとか、可哀想だとか云ふ泣言なきげんは、可成避ける様
 にした。自分が三千代に對してこそ、さう云ふ心持もあるが、何
 にも知らない兄あにを、其所迄連れて行くのには一通りでは駄目だと
 思ふし、と云つて、無暗にセンチメンタルな文句を口くちにすれば、
 兄あにには馬鹿にされる、ばかりではない、かねて自分を愚弄する様
 な氣がするので、矢つ張り平生の代助の通り、のらくらした所を、
 彼方あつちへ行つたり此方こつちへ来たりして、飲んでゐた。飲みながらも、
 親爺おやぢの所謂熱誠が足りないとは、此所こゝの事だなどと考へた。けれど
 も、代助は泣いて人を動かさうとする程、低級趣味のものではな
 いと自信してゐる。凡そ何が氣障きざだつて、思はせ振りの、涙や、

煩悶や、真面目や、熱誠ほど氣障きざなものはないと自覺してゐる。
兄あにには其辺の消息がよく解わかつてゐる。だから此手で遣やり損そこなひで
もしやうものなら、生涯自分の価値を落おとす事になる。と氣が付つい
てゐる。

代助は飲むに従つて、段々金かねを遠とほざかつて來た。たゞ互が差し
向ひであるが為めに、旨うまく飲のめたと云ふ自覺を、互に持ち得る様
な話をした。が茶漬ぢんを食ふ段になつて、思ひ出した様に、金かねは借
りなくつても好いいから、平岡を何處どこか使つかつて遣やつて呉れないかと
頼たのんだ。

「いや、さう云ふ人間は御免蒙る。のみならず此不景氣ぢや仕様
がない」と云つて誠吾はさく／＼飯めしを掻き込んでゐた。

あくるひめ 明日眼が覚めた時、代助は床とこの中なかでまづ第一番に斯う考へた。

「兄あにを動かすのは、同じ仲間なかまの実業家でなくつちや駄目だ。単にけうだい よしみ 兄弟の好丈では何うする事も出来ない」

斯かう考へた様なものゝ、別に兄あにを不人情と思ふ氣は起らなかつた。寧ろその方が当然であると悟つた。此兄が自分の放蕩費を苦情も云はずに弁償して呉れた事があるんだから可笑しい。そんなら自分が今茲こゝで平岡たいめの為ために判はんを押おして、連借でもしたら、何どうするだらう。矢つ張り彼あの時の様に奇麗に片付けて呉れるだらうか。兄あには其所そこ迄考へてゐて、断わつたんだらうか。或は自分がそんな無理な事はしないものと初から安心して借さないのかしらん。

代助自身の今の傾向から云ふと、到底人の為ために判なぞを押しさ

うにもない。自分もさう思つてゐる。けれども、兄が其所^{あにそこ}を見抜いて金^{かね}を貸さないとすると、一寸^{ちよつと}意外な連帶をして、兄がどんな態度に変わるか、試験して見たくもある。——其所^{そこ}迄来て、代助は自分ながら、あんまり性質^{たち}が能くないなと心^{こころ}のうちで苦笑した。けれども、唯一^{ひとたしか}つ慥^{ひた}な事がある。平岡は早晚借用証書を携へて、自分の判を取りにくるに違ない。

斯う考へながら、代助は床^{とこ}を出た。門野^{かどの}は茶^{ちや}の間^まで、胡坐^{あぐら}をかいて新聞を読んでゐたが、髪^{かみ}を濡^ぬらして湯殿^{ゆどの}から歸^{かへ}つて来る代助を見るや否や、急に坐^ゐ三昧^{さんまい}を直^{なほ}して、新聞を畳^ざんで坐蒲団^{そば}の傍^{そば}へ押^おし遣^やりながら、

「何^どうも『煤^{ばい}烟^{えん}』は大変な事になりましたな」と大きな声で云

つた。

「君読んでるんですか」

「えゝ、毎まいあさよ朝読んでます」

「面白おもしろいですか」

「面白おもしろい様ですな。どうも」

「何どんな所が」

「何どんな所がつて。さう改あらたまつて聞きかれちや困ります。何ぢやありませんか、一体に、斯う、現代的の不安でが出てゐる様ぢやありませんか」

「さうして、肉の臭におひがしやしないか」

「しますな。大いに」

代助は黙^{だま}つて仕舞つた。

六の二

紅茶々碗を持つた儘、書斎へ引き取つて、椅子へ腰^{こし}を懸けて、
 茫^{ぼん}然^{なり}には眺^{なが}めてゐると、瘤^{こぶ}だらけの柘榴^{ざくろ}の枯^{かれ}枝^{えだ}と、灰^{はい}色^{いろ}の
 幹^{みき}の根^ね方^{がた}に、暗^{あん}緑^{りよく}と暗^{あん}紅^{かう}を混^まぜ合^あはした様^{よう}な若^{わか}い芽^めが、一
 面^{めん}に吹^ふき出^だしてゐる。代助の眼^めには夫^{それ}がぱつと映^{えい}じた丈^{だけ}で、すぐ
 刺^さ激^{げき}を失^うつて仕舞つた。

代助の頭^{あたま}には今^{いま}具^ぐ体的^{てき}な何^{なに}物^{ぶつ}をも留^{とど}めてゐない。恰^さかも戸^こ外^{ぐわい}の
 天^{てん}氣^きの様^{よう}に、それ^{しづ}が静^{じつ}かに凝^{じつ}と働^{はた}らいてゐる。が、其^{その}底^{そこ}には微^み塵^{じん}

の如き本体の分らぬものが無数に押し合つてゐた。乾酪ちいずの中なかで、いくら虫むしが動うごいても、乾酪ちいずが元もとの位置あひだにある間は、気が付かないと同じ事で、代助も此微震びしんには殆んど自覚を有してゐなかつた。たゞ、それが生理的に反射して来る度たびに、椅子の上うへで、少し宛身づか体の位置らだを変かへなければならなかつた。

代助は近頃流行語の様に人が使ふ、現代的とか不安とか云ふ言葉くちを、あまり口くちにした事がない。それは、自分が現代的であるのは、云はずと知れてゐると考へたのと、もう一つは、現代的であるがために、必ずしも、不安になる必要がないと、自分丈で信じて居たからである。

代助は露西亜文学でに出て来る不安を、天候の具合と、政治の圧

迫で解釈してゐる。仏蘭西文学に出てくる不安を、有夫姦の多いためと見てゐる。ダヌンチオによつて代表される以太利文学の不安を、無制限の墮落から出る自己欠損の感と判断してゐる。だから日本の文学者が、好んで不安と云ふ側からのみ社会を描き出すのを、舶来の唐物の様に見倣してゐる。

理智的に物を疑ふ方の不安は、学校時代に、有つたにはあつたが、ある所迄進行して、ぴたりと留つて、夫から逆戻りをして仕舞つた。丁度天へ向つて石を抛げた様なものである。代助は今では、なまじい石杯を抛げなければ可かつたと思つてゐる。禪坊さんの所謂大疑現前杯と云ふ境界は、代助のまだ踏み込んだ事のない未知国である。代助は、斯う真卒性急に万事を疑ふには、あ

まりに利口りこうに生れ過ぎた男である。

代助は門野かどのの賞ほめた「煤烟」を読んでゐる。今日は紅茶々碗けふの傍そばに新聞を置いたなり、開あけて見る気にならない。ダヌンチオの主人公は、みんな金かねに不自由のない男だから、贅ぜいたく沢の結果けつぐわあゝ云ふ悪戯いたづらをしても無理とは思へないが、「煤烟」の主人公に至つては、そんな余地のない程に貧まづしい人である。それを彼所迄あすこまで押おして行くには、全く情じやうあい愛の力でなくつちや出来る筈まことのものでない。所が、要吉といふ人物にも、朋子ともこといふ女にも、誠まことの愛で、已むなく社会の外そとに押し流されて行く様子が見えない。彼等うづこを動かす内面の力は何であらうと考へると、代助は不審である。あゝいふ境遇に居て、あゝ云ふ事を断行し得る主人公は、恐らく

不安ぢやあるまい。これを断行するに躊躇する自分の方にこそ寧ろ不安の分子があつて然るべき筈だ。代助は独りで考へるたびに、自分は特殊^{オリヂナル}人だと思ふ。けれども要吉の特殊^{オリヂナル}人たるに至つては、自分より遥かに上手^{うはて}であると承認した。それで此^{このあひだ}間迄は好奇心に駆^かられて「煤烟」を読んでゐたが、昨今になつて、あまりに、自分と要吉の間に懸隔がある様に思はれ出したので、眼^めを通さない事がよくある。

代助は椅子の上^{うへ}で、時々^{とき／＼}身を動^{うご}かした。さうして、自分で飽く迄落ち付いて居ると思つてゐた。やがて、紅茶を呑んで仕舞つて、例^{いつも}の通り読^{どく}書^{しょ}に取りかゝつた。約二時間ばかりは故障なく進行したが、ある頁^{ページ}の中頃まで来て急に休^やめて頬杖を突いた。

さうして、傍そばにあつた新聞を取つて、「煤烟」を読んだ。呼吸の合はない事は同じ事である。それから外ほかの雑報を読んだ。大隈伯が高等商業の紛擾に関して、大いに騒動しつゝある生徒側の味方をしてゐる。それが中々強い言葉で出でてゐる。代助は斯う云ふ記事を読むと、是は大隈伯が早稲田へ生徒を呼び寄せる為ための方便だと解釈する。代助は新聞を放り出だした。

六の三

午過ひるすぎになつてから、代助は自分が落ち付いてゐないと云ふ事を、漸く自覚し出だした。腹はらのなかに小ちいさな皺しわが無数に出来できて、其そ

のしわ 皺が絶えず、相互^{さうご}の位地と、形状^{かたち}とを変^かへて、一面^{うづこ}に揺いてゐる様な氣持がする。代助は時々^{とき／＼}斯う云ふ情調の支配を受ける事がある。さうして、此種の經驗を、今日迄、單なる生理上の現象としてのみ取り扱つて居つた。代助は昨日^{きのふ}兄と一所^{うなぎ}に鰻を食つたのを少し後悔した。散歩がてらに、平岡の所へ行て見^みやうかと思ひ出^だしたが、散歩が目的か、平岡が目的か、自分には判然たる區別がなかつた。婆さんに着物を出^ださして、着換^{きか}へやうとしてゐる所へ、甥^{をひ}の誠太郎が來^きた。帽子を手に持^もつた儘、恰好の好^い円^{まる}い頭^{あたま}を、代助の頭へ出して、腰^{こし}を掛^かけた。

「もう学校は引けたのかい。早過^{はやす}ぎるぢやないか」
「ちつとも早^{はや}かない」と云つて、笑^{わら}ひながら、代助の顔^{かほ}を見てゐる

る。代助は手を敲たたいて婆ばあさんと呼よんで、

「誠太郎、チヨコレートを飲のむかい」と聞いた。

「飲のむ」

代助はチヨコレートを二杯命じて置いて誠太郎に調戲からかひだした。

「誠太郎、御前はベースボール許遣ばかやるもんだから、此頃このごろ手が大

変大あたきくなつたよ。頭あたまより手の方が大きいよ」

誠太郎はにこ／＼して、右の手で、円まるい頭あたまをぐる／＼撫なでた。

実際大もきな手を持つてゐる。

「叔父おぢさんは、昨日御父きのおとうさんから奢おごつて貰もらつたんですつてね」

「あゝ、御馳走おかけになつたよ。御蔭かげで今日は腹具はらぐあひ合あひが悪わるくつて不

可けない」

「又また神經しんけいだ」

「神經しんけいぢやない本当まっだよ。全まったくに兄にいさんの所せ為ゐだ」

「だつて御父おとうさんは左様さう云つてましたよ」

「何なんて」

「明日あした学校の歸りに代助の所へ廻つて何か御馳走もちして貰もらへつて」

「へえゝ、昨日きのふの御礼おれにかい」

「えゝ、今日けふは己おれが奢おごつたから、明日あしたが向むふの番ばんだつて」

「それで、わざゝ遣やつて来きたのかい」

「えゝ」

「兄あにの子丈きあつて、中々なか拔ぬけないな。だから今チヨコレートを飲のまして遣やるから可いいぢやないか」

「チヨコレートなんぞ」

「飲^のまないかい」

「飲^のむ事は飲^のむけれども」

誠太郎の注文を能^よく聞^きいて見ると、相撲が始まつたら、回向院へ連^つれて行つて、正面の最上等の所で見物させろといふのであつた。代助は快^{こゝろ}よく引き受けた。すると誠太郎は嬉^{うれ}しさうな顔^{かほ}をして、突^{とつぜん}然^{ぜん}、

「叔父^{おぢ}さんはのらくらして居るけれども實際^{えんじ}偉^{えい}いんですつてね」と云つた。代助も是^{こゝろ}には一寸^{ちよつと}呆^{あき}れた。仕方なしに、

「偉^{えい}いのは知^しれ切^きつてるぢやないか」と答へた。

「だつて、僕^{ぼく}は昨^{けふ}夕^{ゆふ}始^{はじ}めて御父^{おとう}さんから聞^きいたんですもの」と云

ふ弁解があつた。

誠太郎の云ふ所によると、昨夕兄が宅へ歸つてから、父と嫂と三人して、代助の合評をしたらしい。小供のいふ事だから、能く分らないが、比較的頭が可いので、能く断片的に其時の言葉を覚えてゐる。父は代助を、どうも見込がなさうだと評したのださうだ。兄は之に對して、あゝ遣つてゐても、あれで中々解つた所がある。当分放つて置くが可い。放つて置いても大丈夫だ、間違はない。いづれ其内に何か遣るだらうと弁護したのださうだ。すると嫂がそれに賛成して、一週間許り前占者に見てもらつたら、此人は屹度人の上に立つに違ないと判断したから大丈夫だと主張したのださうだ。

代助はうん、それから、と云つて、始終面白さうに聞いて居たが、うらなひしや占ところ者の所へ来たら、本当に可笑しくなつた。やがて着物きものを着換きかへて、誠太郎を送りながら表へ出て、自分は平岡の家いへを訪ねた。

六の四

平岡ひらをかの家いへは、此十数年来の物価騰貴きに伴つれて、中流社会が次第々々に切り詰きめられて行く有様を、住宅じゅうたくの上うへに善よく代表してゐる、尤も粗悪な見苦みくるしき構かまへである。とくに代助には左様見え

もん 門と玄関の間が一間位しかない。勝手口も其通りである。さ

うして裏にも、横にも同じ様な窮屈な家が建てられてゐる。東京

市の貧弱なる膨脹に付け込んで、最低度の資本家が、なけなしの

もとで 元手を二割乃至三割の高利に廻さうと目論で、あたけなく拵

へ上げた、生存競争の記念である。

こんにち 今日の東京市、ことに場末の東京市には、至る所に此種の家

が散点してゐる、のみならず、梅雨に入つた蚤の如く、日毎に、

格外の増加律を以て殖えつゝある。代助はかつて、是を敗亡の発

展と名づけた。さうして、之を目下の日本を代表する最好の象

徴とした。

彼等のあるものは、石油缶の底を継ぎ合はせた四角な鱗で蔽

はれてゐる。彼等の一つを借りて、夜中よなかに柱はしらの割れる音おとで眼めを醒さまさないものは一人ひとりもない。彼等の戸には必ず節穴ふしあながある。彼等の襖ふすまは必ず狂くるひが出ると極つてゐる。資本あたまなかを頭の中へ注つぎ込んで、月々つき／＼其頭あたまから利息を取つて生活しやうと云ふ人間にんげんは、みんな斯かういふ所を借りて立て籠こもつてゐる。平岡も其一人いちにんである。代助は垣根かきねの前まへを通るとき、先づ其屋根やねに眼めが付いた。さうして、どす黒くろい瓦の色が妙に彼かれの心を刺激した。代助には此光ひかりのなつちい土の板いたが、いくらでも水みづを吸すひ込む様ように思はれた。玄関前こぼに、此このあひだ間引越まひこのときに解ほどいた菰こもづ包づみの藁屑わらくづがまだ零こぼれてゐた。座敷ざしきへ通とほると、平岡は机まへの前すはへ坐つて、長い手紙ながてがみを書かき掛かけてゐる所であつた。三千代みちよは次の部屋つぎへやで簞笥くわんの環わをかたかた鳴らして

ゐた。傍そばに大きな行李こりが開あけてあつて、中なかから奇麗きれいな長繻絆ながじゆばんの袖そでが半分はんぶん出でかかつてゐた。

平岡が、失敬ちよつとだが鳥渡待まつて呉あひだれと云つた間に、代助は行李こりと長繻絆ながじゆばんと、時とき々々行李こりの中なかへ落おちる織ほそい手てとを見てゐた。ふすまあ襖ふすまは明あけた儘た閉きて切る様子ようすもなかつた。が三千代の顔かほは陰かげになつて見えなかつた。

やがて、平岡は筆ふでを机つくえの上うへへ抛なげ付つける様ようにして、座ざを直なほした。何なんだか込み入いつた事を懸命けんめいに書かいてゐたと見えて、耳みみを赤あかくしてゐた。眼めも赤くしてゐた。

「何どうだい。此このあひだ間まは色々いろく難有なんう。其後ごちよつと一寸礼れいに行いかうと思おもつて、まだ行いかない」

平岡の言葉は言訳いひわけと云はんより寧ろ挑戦せんの調子を帯びてゐる様に聞きこえた。襯衣シヤツも股引もゝひきも着つけずにすぐ胡坐あぐらをかいた。襟えりを正たゞしく合せないので、胸毛むなげが少し出でゝゐる。

「まだ落ち付おかないだらう」と代助が聞いた。

「落ち付どころく所ところか、此このぶん分ぢや生涯落ち付きさうもない」と、いそがしさうに烟草を吹かし出だした。

代助は平岡が何故なぜこんな態度で自分に応接するか能く心得てゐた。決して自分に中あたるのぢやない、つまり世間せけんに中あたるのである、否おの己あたれに中あたつてゐるんだと思つて、却つて氣の毒になつた。けれども代助の様な神経には、此調子が甚だ不愉快に響いた。たゞ腹はらが立たない丈である。

「宅^{うち}の都合は、どうだい。間取^{まどり}の具合は可^よささうぢやないか」

「うん、まあ、悪^{わる}くつても仕方^{しかた}がない。氣に入^いつた家^{うち}へ這入^{はい}らう

と思^{おも}へば、株^{かぶ}でも遣^やるより外^{ぐわい}に仕様^{仕様}がなからう。此頃東京に出来

る立派^{うち}な家はみんな株屋^{こしら}が拵^{こしら}へるんだつて云ふぢやないか」

「左様^{さう}かも知れない。其代^{しろ}り、あゝ云ふ立派^{うち}な家が一軒^た立つと、

其陰^{かげ}に、どの位沢山^{うち}な家が潰^{つぶ}れてゐるか知れやしない」

「だから猶^{なほ}住^すみ好^いいだらう」

平岡^{ひらおか}は斯^かう云^いつて大^{おほ}いに笑^{わら}つた。其所^{そこ}へ三千代^{みちよ}が^で出^でて来^きた。先

達^{たち}ではと、輕^{かろ}く代助^{だいてすけ}に挨拶^{あいさつ}をして、手^てに持^もつた赤^{あか}いフランネル^{フランネル}の

くるくると卷^まいたのを、坐^{すは}ると共に、前^{まへ}へ置^おいて、代助^{だいてすけ}に見^みせた。

「何^{なん}ですか、それは」

「赤ん坊の着物きものなの。こしら拵へた儘、つい、まだ、解ほどかずにあつたのを、今行李こりの底そこを見たら有あつたから、出だして来きたんです」と云ひながら、附紐つけひもを解といて筒袖つゝそでを左右ひらに開いた。

「こら」

「まだ、そんなものを仕舞つといたのか。早く壊こわして雑巾にでもして仕舞へ」

六の五

三千代は小供こどもの着物きものを膝うへの上に乘せた儘、返事もせずしばらく俯向うつむいて眺めてゐたが、

「あなた おんな こしら
貴方と同じに拵へたのよ」と云つて夫の方を見た。

「是か」

平岡は緋の袷の下へ、ネルを重ねて、素肌に着てゐた。

「是はもう不可ん。暑くて駄目だ」

代助は始めて、昔の平岡を当面に見た。

「袷の下にネルを重ねちやもう暑い。縹緲にすると可い」

「うん、面倒だから着てゐるが」

「洗濯をするから御脱ぎなさいと云つても、中々脱がないのよ」

「いや、もう脱ぐ、己も少々厭になつた」

「話は死んだ小供の事をとう／＼離れて仕舞つた。さうして、来

た時よりは幾分か空気に暖味が出来た。平岡は久し振りに一

杯飲まうと云ひ出した。三千代も支度をするから、緩りして行つて呉れと頼む様に留めて、次の間へ立つた。代助は其後姿を見て、どうかして金を拵へてやりたいと思つた。

「君何所か奉公口の見当は付いたか」と聞いた。

「うん、まあ、ある様な無い様なもんだ。無ければ当分遊ぶ丈の事だ。緩くり探してゐるうちには何うかなるだらう」

云ふ事は落ち付いてゐるが、代助が聞くと却つて焦つて探してゐる様にしか取れない。代助は、昨日兄と自分の間に起つた問答の結果を、平岡に知らせやうと思つてゐたのだが、此一言を聞いて、しばらく見合わせる事にした。何だか、構へてゐる向ふの体面を、わざと此方から毀損する様な気がしたからである。其上金を

の事に付いては平岡からはまだ一言の相談も受けた事もない。
だから表^{おもてむき}向^{むか}挨拶をする必要もないのである。たゞ、斯^かうして
黙^{だま}つてゐれば、平岡からは、内心で、冷淡な奴^{やつ}だと悪^{わる}く思はれる
に極^{きま}つてゐる。けれども今の代助^{いま}はさう云ふ非難^{ひなん}に対して、殆ん
ど無感覺である。又實際自分はさう熱烈な人^{にんげん}間ぢやないと考へ
てゐる。三四年前の自分になつて、今の自分を批判して見れば、
自分は、墮落してゐるかも知れない。けれども今の自分から三四
年前の自分を回顧して見ると、慥かに、自己の道念を誇張して、
得意に使ひ回^{まは}してゐた。渡金^{めつき}を金^{きん}に通用させ様とする切^{せつ}ない工面
より、真鍮を真鍮で通^{とほ}して、真鍮相当の侮蔑を我慢する方が楽^{らく}
である。と今は考へてゐる。

代助が真鍮を以て甘んずる様になつたのは、不意に大きな狂瀾に捲き込まれて、驚ろきの余り、心機一転の結果を來たしたといふ様な、小説じみた歴史を有つてゐる為ではない。全く彼れ自身に特有な思索と觀察の力によつて、次第々々に渡金を自分で剥がして來たに過ぎない。代助は此渡金の大半をもつて、親爺が捺摺り付けたものと信じてゐる。其時分は親爺が金に見えた。多くの先輩が金に見えた。相當の教育を受けたものは、みな金に見えた。だから自分の渡金が辛かつた。早く金になりたいと焦つて見た。所が、他のものゝ地金へ、自分の眼光がちかに打つかる様になつて以後は、それが急に馬鹿な尽力の様に思はれ出した。

代助は同時に斯う考へた。自分が三四年の間に、是迄變化した

んだから、同じ三四年の間に、平岡も、かれ自身の経験の範囲内で大分変化してゐるだらう。昔しの自分なら、可成平岡によく思はれたい心から、斯んな場合には兄と喧嘩あにをしても、父と口論ちうをしても、平岡の為ために計つたらう、又其計つた通りを平岡の所へ来て事々しく吹聴したらうが、それを予期するのは、矢つ張り昔しの平岡で、今の彼は左程に友達を重くは見てゐまい。

それで肝心の話は一二言で已やめて、あとは色々な雑談に時を過すごすうちに酒が出でた。三千代が徳利の尻しりを持つて御酌をした。

六の六

平岡は酔ふに従つて、段々口が多くなつて来た。此男はいくら酔つても、中々平生を離れない事がある。かと思ふと、大變に元氣づいて、調子に一種の悦樂を帯びて来る。さうなると、普通の酒家以上に、能く弁する上に、時としては比較的眞面目な問題を持ち出して、相手と議論を上下して楽し氣に見える。代助は其昔し、麦酒の壘を互の間に並べて、よく平岡と戦つた事を覚えてゐる。代助に取つて不思議とも思はれるのは、平岡が斯う云ふ状態に陥つた時が、一番平岡と議論がしやすいと云ふ自覚であつた。又酒を呑んで本音を吐かうか、と平岡の方からよく云つたものだ。今日の二人の境界は其時分とは、大分離れて来た。さうして、其離れて、近づく路を見出し悪い事実を、双方共に腹の中

で心得てゐる。東京へ着いた翌日、三年振りで邂逅した二人は、
其時既に、二人ともに何時か互の傍を立退いてゐたことを発見
した。

所が今日は妙である。酒に親しめば親しむ程、平岡が昔の調子
を出して来た。旨い局所へ酒が回つて、刻下の経済や、目前の生
活や、又それに伴ふ苦痛やら、不平やら、心の底の騒がしさやら
を全然麻痺して仕舞つた様に見える。平岡の談話は一躍して高
い平面に飛び上がった。

「僕は失敗したさ。けれども失敗しても働らいてゐる。又是から
も働らく積だ。君は僕の失敗したのを見て笑つてゐる。——笑は
ないたつて、要するに笑つてると同じ事に帰着するんだから構は

ない。いゝか、君は笑つてゐる。笑つてゐるが、其^{その}君は何も為^しないぢやないか。君は世の中^{なか}を、有^{あり}の儘^{まま}で受け取る男だ。言葉を換えて云ふと、意志を發展させる事の出来ない男だらう。意志がないと云ふのは嘘^{うそ}だ。人間だもの。其証拠^{しやうこ}には、始終物足りないに違^{ちが}ひない。僕は僕の意志を現実社会^{げんじつしか}に働き掛けて、其現実社会が、僕の意志^{ため}の為に、幾分でも、僕の思ひ通りになつたと云ふ確証を握らなくつちや、生きてゐられないね。そこに僕と云ふものゝ存在^{かち}の価値^{かち}を認めるんだ。君はたゞ考へてゐる。考へてる丈だから、頭の中の世界と、頭^{あたま}の外^{そと}の世界を別々^{べつべつ}に建立^{こんりやう}して生きてゐる。此大不調和を忍んでゐる所が、既に無形の大失敗ぢやないか。何^な故^ぜと云つて見給へ。僕のは其不調和を外^{そと}へ出^だした迄で、君のは内

に押し込んで置く丈の話だから、外面ぐわいめんに押し掛けた丈、僕の方が本当の失敗の度は少ないかも知れない。でも僕は君に笑はれてゐる。さうして僕は君を笑ふ事が出来ない。いや笑ひたいんだが、世間から見ると、笑つちや不可いけないんだらう」

「何笑なにわらつても構はない。君が僕を笑ふ前に、僕は既に自分を笑つてゐるんだから」

「そりや、嘘うそだ。ねえ三千代みちよ」

三千代は先刻さつきから黙だまつて坐すはつてゐたが、夫おつとから不意に相談を受けた時、にこりと笑つて、代助を見た。

「本当でせう、三千代みちよさん」と云ひながら、代助は盃さかづきを出して、酒うを受けた。

「そりや嘘だ。おれの細君が、いくら弁護したつて、嘘だ。尤も君は人を笑つても、自分を笑つても、両方共頭の中で遣る人だから、嘘か本当か其辺はしかと分らないが……」

「冗談云つちや不可ない」

「冗談ぢやない。全く本氣の沙汰であります。そりや昔の君はさうぢや無かつたが、今の君は大分違つてるよ。ねえ三千代。昔の君はさうぢや無かつたが、今の君は大分違つてるよ。ねえ三千代。長井は誰が見たつて、大得意ぢやないか」
 「何だか先刻から、傍で伺がつてると、貴方の方が余つ程御得意の様よ」

平岡は大きな声を出してハ、ハと笑つた。三千代は爛徳利を持つて次の間へ立つた。

六の七

平岡は膳の上の肴を二口三口、箸で突つついて、下を向いた儘、むしやく／＼云はしてゐたが、やがて、どろんとした眼を上げて、云つた。――

「今日は久し振りに好い心持に酔つた。なあ君。――君はあんまり好い心持にならないね。何うも怪しからん。僕が昔の平岡常次郎になつてゐるのに、君が昔の長井代助にならないのは怪しからん。是非なり給へ。さうして、大いに遣つて呉れ給へ。僕も是から遣る。から君も遣つて呉れ給へ」

代助は此言葉のうちに、今の自己を昔に返さうとする真卒な又無邪氣な一種の努力を認めた。さうして、それに動かされた。けれども一方では、一昨日、食つた麵麩を今返せと強請られる様な気がした。

「君は酒を呑むと、言葉丈酔払つても、頭は大抵確かな男だから、僕も云ふがね」

「それだ。それでこそ長井君だ」

代助は急に云ふのが厭になつた。

「君、頭は確かい」と聞いた。

「確かだとも。君さへ確なら此方は何時でも確だ」と云つて、ちや

んと代助の顔を見た。實際自分の云ふ通りの男である。そこで代

助が云つた。――

「君はさつきから、働^{はた}らかない」と云つて、大分僕^{ほく}を攻撃したが、僕は黙^{だま}つてゐた。攻撃される通り僕は働^{はた}らかない積^{つも}りだから黙^{だま}つてゐた」

「何故働^{なげ}かない」

「何故働^{なげ}かないつて、そりや僕^わが悪いんぢやない。つまり世^よの中^{なか}が悪いのだ。もつと、大袈裟に云ふと、日本対西洋の關係が駄目だから働^{はたら}かないのだ。第一、日本程借金を拵^{はたら}へて、貧乏震^{ふる}ひをしてゐる国はありやしない。此借金が君、何時^{いつ}になつたら返せると思ふか。そりや外債位は返せるだらう。けれども、それ許^{ばか}りが借金ぢやありやしない。日本は西洋から借金でもしなければ、到

底立ち行かない国だ。それでゐて、一等国を以て任じてゐる。さうして、無理にも一等国の仲間入をしやうとする。だから、あらゆる方面に向つて、おくゆき奥行を削つて、けづ一等国丈の間口を張つちままぐちつた。なまじい張れるから、なほ悲惨なものだ。ひさん牛と競争をするうし蛙とかへる同じ事で、もう君、はら腹が裂けるよ。其影響はみんな我々個人うへの上に反射してゐるから見給へ。斯う西洋の圧迫を受けてゐる国民は、あたま頭に余裕がないから、碌な仕事は出来ない。悉く切り詰めた教育で、さうして目の廻る程こき使はれるから、揃つて神経衰弱になつちまふ。話をして見給へ大抵は馬鹿だから。自分の事と、自分の今日の、こんにち只今の事より外に、何も考へてやしない。考へられない程疲労してゐるんだから仕方がない。精神の困憊と、こんぱい身

体の衰弱とは不幸にして伴^{とも}なつてゐる。のみならず、道德の敗^{はいた}退^いも一所^きに来てゐる。日本国中何所^{どこ}を見渡したつて、輝^{かがや}いてる断^{だんめん}面^{めん}は一寸四方も無いぢやないか。悉く暗黒だ。其間^{あひだ}に立つて僕^{ひとり}一人が、何と云つたつて、何を為^したつて、仕様がな^ないさ。僕は元来^{なま}怠^{なま}けものだ。いや、君と一所に往来してゐる時分から怠^{なま}けものだ。あの時は強ひて景氣をつけてゐたから、君には有為多望の様に見えたんだらう。そりや今だつて、日本の社会が精神的、徳義的、身体的に、大体の上に於て健全なら、僕は依然として有為多望なのさ。さうなれば遣^やる事はいくらでもあるからね。さうして僕の怠惰性に打ち勝^かつ丈の刺激も亦いくらでも出来て来る^くだらうと思ふ。然し是ぢや駄目だ。今の様なら僕は寧ろ自分丈になつ

てゐる。さうして、君の所謂有の儘の世界を、有の儘で受取つて、
 其中僕に尤も適したものに接触を保つて満足する。進んで外の人
 を、此方の考へ通りにするなんて、到底出来た話ぢやありやしないもの——」

代助は一寸息を継いだ。さうして、一寸窮屈さうに控え
 てゐる三千代の方を見て、御世辞を遣つた。

「三千代さん。どうです、私の考は。随分呑気で宜いでせう。賛
 成しませんか」

「何だか厭世の様な呑気な様な妙なね。私よく分らないわ。け
 れども、少し胡麻化して入らつしやる様よ」

「へええ。何処ん所を」

「何処どこん所ところつて、ねえ貴方あなた」と三千代は夫を見た。平岡は股ももの上うへへ肱ひぢを乗のせて、肱ひぢの上へ顎あごを載のせて黙だまつてゐたが、何にも云はずさかづきに盃さかづきを代助の前に出だした。代助も黙つて受けた。三千代は又酌しやくをした。

六の八

代助は盃さかづきへ唇ちびるを付つけながら、是から先さきはもう云ふ必要がないと感じた。元来が平岡を自分の様に考なほへ直なほさせる為ための弁論べんろんでもなし、又平岡から意見きされに來た訪問ふたりでもない。二人はいつ迄た立つても、二人として離はなれてゐなければならぬ運命もを有もつてゐるんだと、

始めから心こころづい付てゐるから、議論は能い加減に引き上げて、三み千代ちよの仲間なかま入りの出来る様な、普通の社交上の題目に談話を持つて来きやうと試みた。

けれども、平岡は酔ふとしつこくなる男であつた。胸毛むなげの奥迄おく赤くなつた胸むねを突き出して、斯う云つた。

「そいつは面白い。大いに面白い。僕見た様に局部あたに当つて、現実あくとうと悪闘あくとうしてゐるものは、そんな事を考へる余地がない。日本が貧弱ひんじやくだつて、弱虫よはむしだつて、働はたらいてるうちは、忘れてゐるからね。世の中なかが墮落だらくしたつて、世の中なかの墮落だらくに気が付つかないで、其中うちに活動するんだからね。君の様な暇人ひまじんから見れば日本の貧乏びんぼうや、僕等の墮落だらくが氣になるかも知れないが、それは此社

会に用のない傍観者にして始めて口くちにすべき事だ。つまり自分の顔を鏡で見る余裕があるから、さうなるんだ。忙いそがしい時は、自分の顔の事なんか、誰だつて忘れてゐるぢやないか」

平岡は※舌しやべつてゐるうち、自然と此比喩に打ぶつかつて、大いなる味方を得た様な心持がしたので、其所そこで得意に一段落をつけた。代助は仕方しかたなしに薄笑うすわらひをした。すると平岡はすぐ後あとを附加つけくはへた。

「君は金かねに不自由いけしないから不可いけない。生活こまに困こまらないから、働はたらく気にならないんだ。要するに坊ぼつちゃんだから、品ひんの好いい様なこと許ばつかり云つてゐて、——」

代助は少々平岡が小憎こにくらしくなつたので、突然中途で相手を遮さへ

ぎつた。

「働らくのも可いが、働らくなら、生活以上の働でなくつちや名誉にならない。あらゆる神聖な労力は、みんな麵麩を離れてゐる」
平岡は不思議に不愉快な眼をして、代助の顔を窺つた。さうして、

「何故」と聞いた。

「何故つて、生活の為めの労力は、労力の為めの労力でないもの」
「そんな論理学の命題見た様なものは分らないな。もう少し實際的の人間に通じる様な言葉で云つてくれ」

「つまり食ふ為めの職業は、誠実にや出来悪いと云ふ意味さ」

「僕の考へとは丸で反対だね。食ふ為めだから、猛烈に働らく気

になるんだらう」

「猛烈には働^{はた}らせるかも知れないが誠実には働^{はた}らき悪いよ。食^くふため^{ため}はた^{はた}た^ための働^{はた}らきと云ふと、つまり食^くふのと、働^{はた}らくのと何方^{どつち}が目的だと思ふ」

「無論食^くふ方さ」

「夫れ見給へ。食^くふ方が目的で働^{はた}らく方が方便なら、食^くひ易^{やす}い様に、働^{はた}らき方^{かた}を合^あせて行くのが当然だらう。さうすりや、何を働^{はた}らいたつて、又どう働^{はた}らいたつて、構はない、只麵^{パン}麩^ふが得られ、ば好^いいと云ふ事に帰着して仕舞ふぢやないか。労力の内容も方向も乃至順序も悉く他から掣^{しやく}肘^{しゆ}される以上は、其労力は墮落の労力だ」

「まだ理論的だね、何うも。夫で一向差支ないぢやないか」

「では極上品な例で説明してやろう。古臭い話だが、ある本で斯んな事を読んだ覚えがある。織田信長が、ある有名な料理人を抱へた所が、始めて、其料理人の拵へたものを食つて見ると頗る不味かつたんで、大變小言を云つたさうだ。料理人の方では最上の料理を食はして、叱られたものだから、其次からは二流もしくは三流の料理を主人にあてがつて、始終褒められたさうだ。此料理人を見給へ。生活の為に働らく事は抜目のない男だらうが、自分の技芸たる料理其物のために働らく点から云へば、頗る不誠実ぢやないか、墮落料理人ぢやないか」

「だつて左様しなければ解雇されるんだから仕方があるまい」

「だからさ。衣食に不自由のない人が、云はゞ、物数奇にやる働^{はた}らきでなくつちや、真面目^{まじめ}な仕事は出来るものぢやないんだよ」
 「さうすると、君の様な身分のものでなくつちや、神聖の労力は出来ない訳だ。ぢや益遣^{ますみや}る義務がある。なあ三千代」

「本当ですわ」

「何だか話^{はなし}が、元^{もと}へ戻^{もど}つちまつた。是だから議論は不可^{いけ}ないよ」
 と云つて、代助は頭^{あたま}を搔^かいた。議論はそれで、とう／＼御仕舞になつた。

七の一

代助は風呂へ這入た。

「先生、何うです、御爛は。もう少し燃させませうか」と門野が突然入り口から顔を出した。門野は斯う云ふ事には能く気の付く男である。代助は、凝と湯に浸つた儘、

「結構」と答へた。すると、門野が、

「ですか」と云ひ棄て、茶の間の方へ引き返した。代助は門野の返事のし具合に、いたく興味を有つて、独りにやゝと笑つた。

代助には人の感じ得ない事を感じる神経がある。それが為時

々、苦しい思もする。ある時、友達の御親爺さんが死んで、葬式

の供に立つたが、不図其友達が装束を着て、青竹を突いて、柩のあとへ付いて行く姿を見て可笑しくなつて困つた事がある。又あ

る時は、自分の父ちちから御談義を聞いてゐる最中に、何の氣もなく父ちちの顔を見たら、急に吹き出しただくなくなつて弱ぬり抜いた事がある。自宅に風呂を買かはない時分には、つい近所の銭湯せんとうに行つたが、そこそこにひとり骨こつ格かくの逞ましい三助さんすけがゐた。是が行くたんびに、奥おくから飛び出だして来きて、流ながしませうと云つては脊中せなかを擦こする。代助は其奴そいつに体からだをごしく遣やられる度たびに、どうしても、埃エジプトじん及人じんに遣やられてゐる様な氣がした。いくら思ひ返しても日本人とは思へなかつた。

まだ不思議な事がある。此間、ある書物を読んだら、ウエーバーと云ふ生理学者は自分の心臓しんぞうの鼓動を、増したり、減へらしたり、随意に変化さしたと書いてあつたので、平生から鼓動を試験する

癖くせのある代助は、ためしに遣やつて見たくなつて、一日いちじつに二三回位怖こわ々ながら試ためしてゐるうちに、何どうやら、ウエーバーと同じ

様になりさうなので、急に驚ろいて已めにした。

湯のなかに、静しづかに浸つかつてゐた代助は、何の気なしに右の手を

左の胸うへの上へ持つて行つたが、どん／＼と云ふ命いのちの音を二三度聞

くや否や、忽ちウエーバーを思ひ出だして、すぐ流ながしへ下おりた。さ

うして、其所そこに胡坐あぐらをかけた儘、茫然と、自分の足あしを見詰めてゐ

た。すると其足あしが変になり始めた。どうも自分の胴はから生えてゐ

るんでなくて、自分とは全く無関係のものが、其所そこに無作法に横よこた

はつてゐる様に思はれて来きた。さうなると、今迄は気が付つかなか

つたが、実じつに見るに堪えない程醜みにくいものである。毛けが不揃むらに延の

びて、青い筋が所々^{あをすぢところ／＼はびこ}に蔓つて、如何にも不思議な動物である。

代助は又湯に這入つて、平岡の云つた通り、全たく暇^{ひま}があり過ぎるので、こんな事迄考へるのかと思つた。湯から出て、鏡に自分の姿を写した時、又平岡の言葉を思ひ出した。幅の厚い西洋髪^{みそり}剃で、顎と頬を剃る段になつて、其鋭^{あごそ}どい刃^だが、鏡の裏で閃く色が、一種むづ痒い様な氣持を起さした。是^{おこ}が烈敷^{はげしく}なると、高い塔の上から、遙かの下を見下すのと同じになるのだと意識しながら、漸く剃り終つた。

茶の間を抜け様とする拍子に、

「何^どうも先生は旨^{うま}いよ」と門野^{かどの}が婆^{ばあ}さんに話^{はな}してゐた。

「何^{なに}が旨^{うま}いんだ」と代助は立ちながら、門野^{かどの}を見た。門野は、

「やあ、もう御上りですか。早いですな」と答へた。此挨拶では、もう一遍、何が旨いんだと聞かれもしなくなつたので、其儘書齋へ歸つて、椅子に腰を掛けて休息してゐた。

休息しながら、斯う頭が妙な方面に鋭どく働き出しちや、身体の毒だから、些と旅行でもしやうかと思つて見た。一つは近来持ち上つた結婚問題を避けるに都合が好いとも考へた。すると又平岡の事が妙に氣に掛つて、転地する計画をすぐ打ち消して仕舞つた。それを能く煎じ詰めて見ると、平岡の事が氣に掛るのではない、矢つ張り三千代の事が氣にかかるのである。代助は其所迄押して来ても、別段不徳義とは感じなかつた。寧ろ愉快な心持がした。

七の二

代助が三千代と知り合になつたのは、今から四五年前の事で、代助がまだ学生の頃であつた。代助は長井家の関係から、当時交際社会の表面にあらはれて出た、若い女の顔も名も、沢山に知つてゐた。けれども三千代は其方面の婦人ではなかつた。色合から云ふと、もつと地味で、氣持から云ふと、もう少し沈んでゐた。其頃、代助の学友に菅沼と云ふのがあつて、代助とも平岡とも親しく附合つてゐた。三千代は其妹である。

此菅沼は東京近県のもので、学生になつた二年目の春、修業

の為^{ため}と号^{なづ}して、国^{くに}から妹^いを連^つれて来ると同時に、今迄の下宿^{しゆく}を引
 き払^{はら}つて、二人^{ふたり}して家^{いへ}を持^もつた。其時^い妹^もは国^{くに}の高等女学校^{こうとうにょがく}を卒業^{そつぎ}
 した許^{ばかり}で、年^{とし}は慥^{たしか}十八とか云^はふ話^{はなし}であつたが、派出^{はし}な半襟^{はんせき}を掛^かけ
 て、肩^{かた}上^{あげ}をしてゐた。さうして程^{ほど}なくある女学校^{にょがく}へ通^{かよ}ひ始^{はじ}めた。
 菅沼^{いへ}の家^やは谷中^{やなか}の清水町^{しみづちやう}で、庭^{には}のない代^{しろ}りに、椽側^{えんがわ}へ出^でると、
 上野^{もり}の森^{ふる}の古^{ふる}い杉^{すぎ}が高^{たか}く見^みえた。それがまた、錆^{さび}た鉄^{てつ}の様^{よう}に、頗^{すこぶ}
 る異^{あや}しい色^{いろ}をしてゐた。其^{その}一本^{いっぴん}は殆^{たいてい}んど枯^かれ掛^かつて、上^{うへ}の方に
 は丸^{まる}裸^{はだか}の骨^{ほね}許^{ばかり}残^{のこ}つた所^{ところ}に、夕^{ゆふ}方^{がた}になると鳥^{とり}が沢山^{さか}集^あま
 つて鳴^ないてゐた。隣^{わか}には若^{あか}い画^え家^かが住^すんでゐた。車^{くる}もあまり通^まら
 ない細^こい横町^{よこまち}で、至極^{すまゐ}閑静^{かんじやう}な住居^{すまゐ}であつた。

代助^{だいてすけ}は其所^{そこ}へ能^よく遊^{あそ}びに行^いつた。始^はめて三^み千代^{ちよ}に逢^あつた時^{とき}、三

千代はたゞ御辞儀をした丈で引込んで仕舞つた。代助は上野の森を評して歸つて来た^き。二返行つても、三返行つても、三千代はたゞ御茶を持^もつて出^でる丈であつた。其癖狭^{くせ}い家^{うち}だから、隣^{となり}の室^{へや}にゐるより外はなかつた。代助は菅沼と話^{はな}しながら、隣^{となり}の室^{へや}に三千代がゐて、自分の話を聴いてゐるといふ自覺を去る訳に行^ゆかなかつた。三千代と口^{くち}を利^きき出^だしたのは、どんな機^{はづみ}会であつたか、今では代助の記憶に残つてゐない。残つて居^ゐない程、瑣末な尋常の出来事から起つたのだらう。詩や小説に厭^あいた代助には、それが却つて面白かつた。けれども一旦口^{くち}を利^きき出^だしてから、矢つ張り詩や小説と同じ様に、二人はすぐ心^{こゝろ}安^{やす}くなつて仕舞つた。

平岡も、代助の様に、よく菅沼^{すがぬま}の家^{うち}へ遊^{あそ}びに來^きた。あるとき

は二人連れ立つて、来た事もある。さうして、代助と前後して、
 三千代と懇意になつた。三千代は兄と此二人に食付いて、時々池
 の端杯を散歩した事がある。

四人は此關係で約二年足らず過ぎした。すると菅沼の卒
 業する年の春、菅沼の母と云ふのが、田舎から遊びに出て来て、
 しばらく清水町に泊つてゐた。此母は年に一二度づつは上京して、
 子供の家に五六日寐起する例になつてゐたんだが、其時は帰る前
 日から熱が出だして、全く動けなくなつた。それが一週間の後
 望扶斯と判明したので、すぐ大学病院へ入れた。三千代は看護の
 為附添として一所に病院に移つた。病人の経過は、一時稍佳良
 であつたが、中途からぶり返して、とう／＼死んで仕舞つた。そ

れ許ばかりではない。窒扶斯ちふすが、見舞きに來た兄あにに伝染して、是も程なく亡なくなつた。国くににはたゞ父親ちゝおやが一人残ひとりつた。

それが母ははの死んだ時も、菅沼すがぬまの死んだ時も出でて來きて、始末をしたので、生前生前に關係の深ふかかつた代助とも平岡とも知り合になつた。三千代を連つれて国へ歸る時は、娘とともに二人ふたりの下宿を別々に訪たづねて、暇いとま乞こ旁礼かた／＼を述べた。

其年そのとしの秋、平岡は三千代と結婚した。さうして其間あひだに立つたものは代助であつた。尤も表向きは郷里の先輩を頼んで、媒酌人として式つらに連つなつて貰つたのだが、身体からだを動かうごかして、三千代の方を纏まとめたものは代助であつた。

結婚まして間もなく二人ふたりは東京を去つた。国くにに居あた父ちゝは思はざる

ある事情の為に余儀なくされて、是も亦北海道へ行つて仕舞つた。
 三千代は何方かと云へば、今心細い境遇に居る。どうかして、此
 東京に落付いてゐられる様にして遣りたい気がする。代助はもう
 一返嫂に相談して、此間の金を調達する工面をして見やうか
 と思つた。又三千代に逢つて、もう少し立ち入つた事情を委しく
 聞いて見やうかと思つた。

七の三

けれども、平岡へ行つた所で、三千代が無暗に洗ひ浚い※舌り
 散らす女ではなし、よしんば何うして、そんな金が必要になつ

たかの事情を、詳しく聞き得たにした所で、夫婦の腹の中なんぞは容易に探られる訳のものではない。——代助の心の底を能く見詰めてゐると、彼の本当に知りたい点は、却つて此所に在ると、自から承認しなければならなくなる。だから正直を云ふと、何故に金が入用であるかを研究する必要は、もう既に通り越してゐたのである。実は外面の事情は聞いても聞かなくつても、三千代に金を貸して満足させたい方であつた。けれども三千代の歡心を買ふ目的を以て、其手段として金を拵へる氣は丸でなかつた。代助は三千代に対して、それ程政略的な料簡を起す余裕を有つてゐなかつたのである。

其^{そのうへ}上平岡の留守へ行き中^あてゝ、今日迄^{こんにち}の事情を、特に經濟の

点に関して丈でも、充分聞き出すのは困難である。平岡が家^{うち}にゐる以上は、詳しい話^{はなし}の出来ないのは知れ切つてゐる。出来ても、それを一から十迄真^まに受ける訳には行かない。平岡は世間的な色々の動機から、代助に見栄^{みえ}を張つてゐる。見栄^{みえ}の入らない所でも一種の考から沈黙を守つてゐる。

代助は、兎も角もまづ嫂^{あによめ}に相談して見やうと決心した。さうして、自分ながら甚だ覺束^{あによめ}ないとは思つた。今迄嫂^{あによめ}にちびく、無心を吹き掛けた事は何度もあるが、斯^かう短兵急^{いた}に痛め付けるのは始めてゞである。然し梅子は自分の自由になる資産をいくら持^もつてゐるから、或は出来ないとも限らない。夫^{それ}で駄目なら、又高利でも借^かり^こるのだが、代助はまだ其所^{そこ}迄には氣が進んでゐなかつ

た。たゞ早晚平岡から表向きに、連帯責任を強ひられて、それを断わり切れない位なら、一層いつそこち此方から進んで、直接に三千代みちよを喜ばしてやる方が遥かに愉快だといふ取捨の念丈は殆んど理窟を離れて、頭あたまの中なかに潜ひそんでゐた。

生なま暖あたかい風かぜの吹く日であつた。曇くもつた天氣が何時いつまで迄も無精ぶせうに空そらに引掛ひつかつて、中々なか／＼暮れさうにない四時過うちから家を出て、

兄あにの宅たくまで迄電車で行つた。青山御所の少し手前すこ迄来ると、電車の左側ひだりがはを父ちちと兄あにが綱つな曳びきで急いそがして通つた。挨拶あいさつをする暇ひま

もないうちに擦すれ違ちがつたから、向ふは元より氣が付つかずに過すぎ去つた。代助は次の停留所つぎで下おりた。

兄あにの家の門いへを這入ると、客間きやくまでピアノの音おとがした。代助は一ち

よつと 寸砂利の上^{うへ}に立ち留^{どま}つたが、すぐ左へ切れて勝手口^{ぐち}の方へ廻つた。其所^{そこ}には格子^{そと}の外に、ヘクターと云ふ英国産の大きな犬が、大きな口^{くち}を革紐^{ひも}で縛^{しば}られて臥^ねてゐた。代助の足音を聞^きくや否や、ヘクターは毛の長い耳^{みみ}を振^{ふる}つて、斑^{まだら}な顔^{かほ}を急に上^あげた。さうして尾^{うご}を揺^{うご}かした。

入^{いりぐち}口の書生部屋を覗^{うへ}き込んで、敷居^{ふたこ}の上に立ちながら、二^{ふたこ}言^{とみこと}三言^{とみこと}愛嬌^{いとこ}を云^{あと}つた後、すぐ西洋間^まの方^きへ来て、戸^とを明^あけると、嫂^{あによめ}がピアノの前に腰^{こし}を掛^かけて両手^{うで}を動^{うご}かして居^ゐた。其傍^{そのそば}に縫子^{ぬひ}が袖^{そで}の長い着物^きを着^きて、例^{かみ}の髪^{かみ}を肩迄^{かた}掛^かけて立^たつてゐた。代助は縫子^{ぬひ}の髪^{かみ}を見^みるたんびに、ブランコに乗^のつた縫子^{ぬひ}の姿^{すがた}を思^{おも}ひ出^だす。黒^{くろ}い髪^{かみ}と、淡紅^{ときいろ}色のリボンと、それから黄色^{ちりめん}い縮緬^{ちりめん}の帯^いが、一

時に風に吹かれて空に流れる様を、鮮かに頭の中に刻み込んでゐる。

母子は同時に振り向いた。

「おや」

縫子の方は、黙つて馳けて来た。さうして、代助の手をぐい／＼引張つた。代助はピアノの傍迄来た。

「如何なる名人が鳴らしてゐるのかと思つた」

梅子は何にも云はずに、額に八の字を寄せて、笑ひながら手を振り振り、代助の言葉を遮ぎつた。さうして、向ふから斯う云つた。

「代さん、此所ん所を一寸遣つて見せて下さい」

代助は黙^{だま}つて嫂^{あによめ}と入れ替^{かは}つた。譜^ふを見ながら、両方^{ゆび}の指をしばらく奇麗^{はたら}に働^{あと}かした後、

「斯^かうだらう」と云つて、すぐ席を離れた。

七の四

それから三十分程の間、母子^{あひだ おやこ}して交^{かは}る／＼樂器^{がく}の前に坐^{すは}つては、一つ所^{ところ}を復習してゐたが、やがて梅子^{うめこ}が、

「もう廃^よませう。彼方^{あつち}へ行^いつて、御飯^{ごはん}でも食^{たべ}ませう。叔父^{おぢ}さんもゐらつしやい」と云ひながら立つた。部屋^{へや}のなかはもう薄暗^{うすぐら}くなつてゐた。代助^{だすけ}は先刻^{さつき}から、ピアノの音^{おと}を聞いて、嫂^{あによめ}や姪^{めい}の

白い手の動く様子を見て、さうして時々は例の欄間の画を眺
 めて、三千代の事も、金を借りる事も殆んど忘れてゐた。部屋を
 出るとき、振り返つたら、紺青の波が摧けて、白く吹き返す所
 丈が、暗い中に判然見えた。代助は此大濤の上に黄金色の
 雲の峰を一面に描かした。さうして、其雲の峰をよく見ると、真
 裸な女性の巨人が、髪を乱し、身を躍らして、一団となつ
 て、暴れ狂つてゐる様に、旨く輪廓を取らした。代助はワルキイ
 ルを雲に見立てた積で此図を注文したのである。彼は此雲の峰だ
 か、又巨大な女性だか、殆んど見分けの付かない、偉な塊を脳
 中に髣髴して、ひそかに嬉しがつてゐた。が偕出来上つて、
 壁の中へ嵌め込んでみると、想像したよりは不味かつた。梅子と

共に部屋を出た時は、此ワルキイルは殆んど見えなかつた。紺こんじ
やう青の波は固より見えなかつた。たゞ白い泡の大きな塊が薄白
 く見えた。

居間にはもう電燈が点いてゐた。代助は其所で、梅子と共に晩
あま食を済すました。子供二人も卓を共にした。誠太郎に兄の部屋
んしよくからマニラを一本取とつて来こさして、夫を吹ふかしながら、雑談をし
 た。やがて、小供は明日こどもの下読あしたをする時間だと云ふので、母か
 ら注意を受けて、自分の部屋へ引き取とつたので、後は差あとし向むかひにな
 った。

代助は突然例はなしの話を持ち出すのも、変なものだと思つて、関係
 のない所からそろ／＼進行を始めた。先づ父ちちと兄あにが綱曳なづびで車を急きう

がして何所^{どこ}へ行つたのだとか、此^{このあひだ}間は兄^{にい}さんに御馳走になつたとか、あなたは何故^{なぜ}麻布の園遊会へ来^こなかつたのだとか、御父^{おとう}さんの漢詩は大抵^{ほら}法螺^{ほら}だとか、色々^{いろいろ}聞いたたり答へたりして居^ゐるうちに、一つ新しい事実を発見した。それは外^{ほか}でもない。父^{ちち}と兄^{あに}が、近来目に立^たつ様に、忙^{いそが}しさうに奔走し始めて、此四五日は碌^{ろく}々寝^ねるひまもない位だと云ふ報知である。全体何が始^{はじ}まつたんですと、代助は平気な顔^{かほ}で聞いて見た。すると、嫂^{あによめ}も普通の調子で、さうです、何^{なに}か始^{はじ}まつたんでせう。御父^{おとう}さんも、兄^{にい}さんも私^{わたくし}には何^{なん}にも仰^{おつ}しやらないから、知^しらないけれども答へて、代さんは、それよりか此^{このあひだ}間の御嫁^{およめ}さんをと云ひ掛けてゐる所へ、書生が這入^きつて来た。

今夜も遅くなる、もし、誰と誰が来たら何とか屋へ来る様に云つて呉れと云ふ電話を伝へた儘、書生は再び出て行つた。代助は又結婚問題に話が戻ると面倒だから、時に姉さん、些御願があつて来たんだが、とすぐ切り出して仕舞つた。

梅子は代助の云ふ事を素直に聞いて居た。代助は凡てを話すに約十分許を費やした。最後に、

「だから思ひ切つて貸して下さい」と云つた。すると梅子は眞面目な顔をして、

「さうね。けれども全体何時返す気なの」と思ひも寄らぬ事を問ひ返した。代助は顎の先を指で撮んだ儘、じつと嫂の気色を窺つた。梅子は益眞面目な顔をして、又斯う云つた。

「皮肉ぢやないのよ。怒^{おこ}つちや不可^{いけ}ませんよ」

代助は無^{おこ}論怒^{おこ}つてはゐなかつた。たゞ姉^{けうだい}弟^{だい}から斯^かういふ質問を受けやうと予期してゐなかつた丈である。今更^{かへ}返^きす氣^きだの、貰^{もら}う積^{ふえん}りだのと布^ふ衍^{えん}すればする程馬鹿になる許^{ばかり}だから、甘^{あま}んじて打撃を受けてゐた丈である。梅子は漸^あやく手^てに余^ある弟を取^とつて抑^{おさ}えた様な氣がしたので、後^{あと}が大^や変^{へん}云^いひ易^{やす}かつた。――

七の五

「代^{ふだん}さん、あなたは不^ふ断^{だん}から私^{わたくし}を馬鹿にして御^{おい}出^でなさる。――いゝえ、厭^{いや}味^みを云^いふんぢやない、本^{ほん}当^{とう}の事^{こと}なんですもの、仕^し方^{かた}がない。

さうでせう」

「困こまりますね、左様真剣さうしんけんに詰問きつもんされちや」

「善よござんすよ。胡魔化ごまくわさないでも。ちやんと分わかつてゐるんだから。

だから正直さうに左様だと云つて御仕舞さうなさい。左様でないと、後あとが話はなせないから」

代助は黙だまつてにや／＼笑わらつてゐた。

「でせう。そら御覧かまなさい。けれども、それが当り前わたしよ。ちつとも構かまやしません。いくら私わたしが威張あなつたつて、貴方あなたに敵かなひつこないのは無論わたしですもの。私わたしと貴方あなたとは今迄どほ通りの関係どほで、御互それひに満あな足たなんだから、文句おとうはありやしません。そりや夫それで好いいとして、貴方あなたは御父おとうさんも馬鹿あなにして入あならつしやるのね」

代助は嫂あによめの態度の真卒な所が気に入った。それで、

「えゝ、少しは馬鹿にしてゐます」と答へた。すると梅子は左さも愉快さうにハハハと笑つた。さうして云つた。

「兄にいさんも馬鹿にして入らつしやる」

「兄にいさんですか。兄にいさんは大いに尊敬してゐる」

「嘘うそを仰おつしやい。序ついでだから、みんな打ち散ぶけて御仕舞しまひなさい」

「そりや、或あるてん点では馬鹿にしない事もない」

「それ御覧らんなさい。あなたは一家族中ぢゅう悉く馬鹿にして入らつしやる」

「どうも恐れ入りました」

「そんな言いひわけ訳はどうでも好いんですよ。貴方あなたから見れば、みん

な馬鹿にされる資格があるんだから」

「もう、廃^よさうぢやありませんか。今日^{けふ}は中^な中^なきびしいですね」

「本当なのよ。夫^{それ}で差^さ支^{しかへ}ないんですよ。喧嘩^なも何^{なに}も起^{おこ}らない

んだから。けれどもね、そんなに偉^{えら}い貴方^{あなた}が、何故^{なぜ}私^{わたし}なんぞから

御金^{おかね}を借^かりる必要があるの。可笑^{おか}しいぢやありませんか。いえ、

揚^{あげ}足^{あし}を取^とると思^{おも}ふと、腹^{はら}が立^たつでせう。左様^{そん}なんぢやありませ

ん。それ程^{えら}偉^{あなた}い貴方^{あなた}でも、御金^{おかね}がないと、私^{わたし}見た様^{よう}なものに頭^{あたま}を

下^さげなけりやならなくなる」

「だから先^{さつ}きから頭^{あたま}を下^さげてゐるんです」

「まだ本気で聞^きいてゐらつしやらないのね」

「是^{わたし}が私^{わたし}の本気な所^{ところ}なんです」

「ぢや、それも貴方あなたの偉い所えらかも知れない。然し誰も御金だれ おかねを貸し手てがなくなつて、今の御友達すくを救つて上げる事あが出来なかつたら、何どうなさる。いくら偉くつても駄目ぢやありませんか。無能力な事は車屋くるまや おんと同なしですもの」

代助は今迄あによめ嫂めが是程適切な異見を自分に向つて加へ得やうとは思はなかつた。実は金かねの工面を思ひ立つてから、自分でも此弱点を冥々うちの裡うちに感じてゐたのである。

「全く車屋ですね。だから姉ねえさんに頼たのむんです」

「仕方がないのね、貴方あなたは。あんまり、偉過えらすぎて。一人ひとりで御金かねを御取とんなさいな。本当の車屋なら貸かして上げない事もないけれど、貴方あなたには厭いやよ。だつて余りぢやありませんか。月々つき／＼兄にいさ

んや御父おとうさんの厄介うへになつた上に、人の分迄ひとぶん自分に引受けて、貸してやらうつて云ふんだから。誰も出し度だれだたくはないぢやありませんか」

梅子の云ふ所は実に尤もである。然し代助は此尤もつともを通り越して、気が付つかずにゐた。振り返つて見ると、後うしろの方に姉あねと兄あにと父ちちがたまつてゐた。自分も後あと戻もどりをして、世間並せけんなみにならなければならぬと感じた。家うちを出でる時とき、嫂あによめから無心を断ことわられるだらうとは氣遣きづかつた。けれども夫それが為ために、大いに働はたらいて、自から金を取らねばならぬといふ決心は決して起し得なかつた。代助は此事件を夫程重くは見てゐなかつたのである。

七の六

梅子は、此機会を利用して、色々の方面から代助を刺激しやうと力めた。所が代助には梅子の腹はらがよく解わかつてゐた。解わかれば解わかる程激する氣にならなかつた。そのうち話題は金かねを離れて、再び結婚もとに戻きつて来た。代助は最近の候補者に就て、此このあひだ間間から親爺おやぢに二度程悩なやまされてゐる。親爺おやぢの論理は何時間いづき聞いても昔し風に甚だ義理堅かたいものであつたが、其代り今度は左程権柄づくでもなかつた。自分の命いのちの親おやに当あたる人ひとの血統を受けたものと縁組をするのは結構な事であるから、貰もらつて呉れと云ふのである。さうすれば幾分か恩かへが返せると云ふのである。要するに代助から見ると、何

が結構なのか、何が恩返しに当るのか、丸で筋の立たない主張であつた。尤も候補者自身に就ては、代助も格別の苦情は持つてゐなかつた事丈は慥かである。だから父の云ふ事の当否は論弁の限にあらずとして、貰へば貰つても構はないのである。代助は此二三年来、凡ての物に対して重きを置かない習慣になつた如く、結婚つこんに対しても、あまり重きを置く必要を認めてゐない。佐川の娘といふのは只写真で知つてゐる許であるが、夫丈でも沢山な様な気がする。——尤も写真は十分美しくしかつた。——従つて、貰ふとなれば、左様面倒な条件を持ち出す考も何もない。たゞ、貰ひませうと云ふ確答が出なかつた丈である。

その不明晰な態度を、父に評させると、丸で要領を得てゐない

鈍物同様の挨拶振になる。結婚を生死の間に横はる一大要件と見倣して、あらゆる他の出来事を、これに従属させる考の嫂あによめから云はせると、不可思議になる。

「だつて、貴方あなただつて、生涯ひとり一人である気でもないんでせう。さう我儘を云はないで、好い加減な所で極めて仕舞つたら何どうです」と梅子は少し焦すこれつたさうに云つた。

生涯ひとり一人であるか、或は妾めかけを置いて暮くらすか、或は芸者と關係をつけるか、代助自身にも明瞭な計画は丸でなかった。只、今の彼は結婚といふものに対して、他の独身者の様に、あまり興味を持てなかつた事は慥たしかである。是は、彼の性情が、一図に物に向つて集注し得ないのと、彼の頭あたまが普通以上に鋭すどくつて、しかも其鋭すど

さが、日本現代の社会状況のために、イリュージョン 幻 像 打破の方面に向むかつて、今日迄多く費やされたのと、それから最後には、比較的金錢に不自由がないので、ある種類の女を大分多く知つてゐるのに帰着するのである。が代助は其所そこ迄解剖して考へる必要は認めてゐない。たゞ結婚に興味がないと云ふ、自己に明かな事實にぎを握つて、それに応じて未来を自然に延のばして行く氣である。だから、結婚を必要事件と、初手から断定して、何時いつか之を成立させ様と喘あせる努力を、不自然であり、不合理であり、且つあまりに俗臭を帯びたものと解釈した。

代助は固より斯こんな 哲フヒロソフヒー 理あによめを嫂に向つて講釈する氣はない。が、段々押し詰つめられると、苦し紛まぎれに、

「だが、姉さん、僕は何うしても嫁を貰はなければならぬのかね」と聞く事がある。代助は無論真面目に聞く積だけれども、嫂の方では呆れて仕舞ふ。さうして、自分を茶にするのだと取る。梅子は其晩代助に向つて、平生の手續を繰り返した後で、斯んな事を云つた。

「妙なね、そんなに厭がるのは。——厭なんぢやないつて、口では仰しやるけれども、貰はなければ、厭なと同なしぢやありませんか。それぢや誰か好きながあるんでせう。其方の名を仰やい」

代助は今迄嫁の候補者としては、たゞの一人も好いた女を頭の中に指名してゐた覺がなかつた。が、今斯う云はれた時、どう云

ふ訳か、不意に三千代といふ名が心に浮かんだ。つゞいて、だから先刻云つた金かねを貸して下さい、といふ文句が自おのづから頭あたまの中なかで出で来上きあがつた。——けれども代助はたゞ苦笑して嫂あによめの前に坐すはつてゐた。

八の一

代助あによめが嫂に失敗して歸つた夜は、大分更だいぶんけてゐた。彼は辛からうじて青山の通りで、最後さいごの電車つらを捕とらまえた位である。それにも拘こはらず彼かれの話してゐる間あひだには、父ちちも兄あにも歸つて来こなかつた。尤も其そのあひだ間あひだに梅子は電話口ぐちへ二返呼こつちばれた。然し、嫂あによめの様子に別段變つた所ところもないので、代助は此方こつちから進んで何にも聞きかなかつた。

其夜は雨そのよ あめもよひ 催そほの空そらが、地面ぢめん おなと同じ様な色いろに見えた。停留所の

赤い柱の傍そばに、たつた一人ひとり立つて電車を待ち合はしてゐると、遠とほ

い向むかふから小さい火の玉たまがあらはれて、それが一直線に暗い中なかを

上うへ下したに揺れゆつつ代助の方に近ちかづいて来るのが非常に淋しく感ぜら

れた。乗のり込んで見ると、誰だれも居なかつた。黒くろい着物きものを着た車掌

と運転手の間あひだに挟はさまれて、一種の音おとに埋うづまつて動うごいて行くと、動

いてゐる車くるまの外そとは真暗まつくらである。代助は一人明ひとりあかるい中なかに腰かを掛

て、どこ迄も電車に乗のつて、終ついに下おりる機会こが来ない迄引ひつ張はり

廻まはされる様な気がした。

神楽坂かぐらざかへかゝると、寂ひっそりとした路みちが左右の二階家にかいやに挟はさまれて、

細長ほそながく前まへを塞ふさいでゐた。中途迄のぼ上のぼつて来たら、それが急に鳴り

出した。代助は風が家の棟に当る事と思つて、立ち留まつて暗い軒を見上げながら、屋根から空をぐるりと見廻すうちに、忽ち一種の恐怖に襲はれた。戸と障子と硝子の打ち合ふ音が、見る／＼烈しくなつて、あゝ地震だと気が付いた時は、代助の足は立ちながら半ば竦んでゐた。其時代助は左右の二階家が坂を埋むべく、双方から倒れて来る様に感じた。すると、突然右側の潜り戸をがらりと開けて、小供を抱いた一人の男が、地震だゝ、大きな地震だと云つて出て来た。代助は其男の声を聞いて漸く安心した。家へ着いたら、婆さんも門野も大いに地震の噂をした。けれども、代助は、二人とも自分程には感じなかつたらうと考へた。寐てから、又三千代の依頼をどう所置し様かと思案して見た。然し

分別を凝らす迄には至らなかつた。父と兄の近来の多忙は何事だらうと推して見た。結婚は愚図々々にして置かうと了簡を極めた。さうして眠に入つた。

そのあくるひ

其明日の新聞に始めて日糖事件なるものがあらはれた。砂糖を製造する会社の重役が、会社の金を使用して代議士の何名かを買収したと云ふ報知である。門野は例の如く重役や代議士の拘引されるのを痛快だ々々と評してゐたが、代助にはそれ程痛快にも思へなかつた。が、二三日するうちに取り調べを受けるものゝ数が大分多くなつて来て、世間ではこれを大疑獄の様に囃し立てる様になつた。ある新聞ではこれを英国に対する検挙と称した。其説明には、英国大使が日糖株を買ひ込んで、損をして、苦情を

鳴らし出したので、日本政府も英国へ対する申訳に手を下したのだとあつた。

日糖事件の起る少し前、東洋汽船といふ会社は、壺割二分の配当をした後の半期に、八十万円の欠損を報告した事があつた。それを代助は記憶して居た。其時の新聞が此報告を評して信を置くに足らんと云つた事も記憶してゐた。

代助は自分の父と兄の關係してゐる会社に就ては何事も知らなかつた。けれども、いつ何んな事が起るまいものでもないとは常から考へてゐた。さうして、父も兄もあらゆる点に於て神聖であるとは信じてゐなかつた。もし八釜敷い吟味をされたなら、両方共拘引に値する資格が出来はしまいかと迄疑つてゐた。それ程

でなくつても、父ちと兄あにの財産が、彼等の脳力と手腕丈で、誰だれが見ても尤もつともと認める様に、作り上げつくあられたとは肯うけがはなかつた。明治の初年に横浜へ移住奨励のため、政府が移住者に土地を与へた事がある。其時たゞ貰もらつた地面の御蔭で、今は非常な金満家になつたものがある。けれども是は寧ろ天の与へた偶然である。父ちと兄あにの如きは、此自己にのみ幸福なる偶然を、人為的に且政略的に、暖む室ろを造つて、拵こしらえ上げあたんだらうと代助は鑑定してゐた。

八の二

代助は斯かう云ふ考で、新聞記事に対しては別に驚ろきもしなか

つた。父と兄ちゝあにの会社に就ても心配をする程正直ではなかつた。たゞ三千代の事丈が多少氣に掛つた。けれども、徒手てづからで行くのが面白くないんで、其うちの事と腹はらの中なかで料簡りょうかんを定めて、日にち々く読書に耽つて四五日過すした。不思議な事に其後例の金そのごの件かねに就いては、平岡からも三千代からも何とも云つて来なかつた。代助は心こゝろのうちに、あるひは三千代が又一人ひとりで返事を聞ききに来る事もあるだらうと、實じつは心こゝろ待まちに待つてゐたのだが、其甲斐はなかつた。

仕舞にアンニユイを感じ出だした。何処どこか遊びに行く所はあるまいかと、娯樂案内を捜さがして、芝居でも見やうと云ふ氣を起した。神樂坂から外そと濠線ぼりへ乗つて、御茶の水みづ迄来るうちに氣かが變かはつて、森川丁にゐる寺尾といふ同窓の友達を尋ねる事にした。此男は学

校を出ると、教師は厭いやだから文学を職業とすると云ひ出して、他ほかのものゝ留めるにも拘らず、危険な商買をやり始めてから三年になるが、未だに名声あがも上らず、窮きう々云つて原稿生活を持続してゐる。自分の関係のある雑誌に、何なんでも好いいから書けと逼せまるので、代助は一度面白いものを寄草した事がある。それは一ヶ月の間雑誌屋の店頭さくらに曝さらされたぎり、永久人間世界から何ど処こかへ、運命の為に持つて行かれて仕舞つた。それぎり代助は筆を執る事を御免蒙つた。寺尾は逢ふたんびに、もつと書け書けと勧める。さうして、己おれを見ろと云ふのが口癖くちくせであつた。けれども外ほかの人ひとに聞きくと、寺尾ももう陷落かんらくするだらうと云ふ評判であつた。大變露西亞ものが好すきで、ことに人が名前を知らない作家

が好^{すき}で、なけなしの錢^{ぜに}を工面しては新刊物^{もの}を買ふのが道楽であつた。あまり氣焰が高かつた時、代助が、文学者も恐露病に罹つてゐるうちはまだ駄目だ。一旦日露戦争を経過したものでないと話せない^{ひやかし}と冷評返した事がある。すると寺尾は真面目^{まじめ}な顔^{かほ}をして、戦争は何時^{いつ}でもするが、日露戦争後の日本の様に往生しちや詰^{つま}らんぢやないか。矢つ張り恐露病に罹つてゐる方が、卑怯でも安全だ、と答へて矢つ張り露西亞文学を鼓吹してゐた。

玄関から座敷へ通つて見ると、寺尾は真^ま中^{んなか}へ一貫張^{ばり}の机を据ゑて、頭痛がすると云つて鉢^{はち}巻^{まき}をして、腕まくりで、帝国文学の原稿を書いてゐた。邪魔ならまた来^くると云ふと、歸らんでもいい、もう今朝^{けさ}から五五^{ごご}、二円五十錢丈稼^{かせ}いだからと云ふ挨拶であ

つた。やがて鉢巻はちまきを外はずして、話を始めはじめた。始めるが早い、今の日本の作家と評家を眼の玉の飛び出る程痛快に罵倒し始めた。代助はそれを面白く聞いてゐた。然し腹の中では、寺尾の事を誰だれも賞ほめない、其對抗運動として、自分の方では他ひとを貶けなすんだらうと思つた。ちと、左様さう云ふ意見を發表したら好いいぢやないかと勧めると、左様さうは行いかないよと笑つてゐる。何故なぜと聞き返しても答へない。しばらくして、そりや君の様に氣樂くらに暮せる身分なら随分云つて見せるが――何なにしろ食くふんだからね。どうせ真面目まじめな商買ぢやないさ。と云つた。代助は、夫それで結構だ、確しつかり遣やり玉へと奨励した。すると寺尾は、いや些ちつとも結構ぢやない。どうかして、真面目まじめになりたいと思つてゐる。どうだ、君ちつと金かねを

借かして僕を真面目まじめにする了見はないかと聞きいた。いや、君が今の様な事をして、夫それで真面目まじめだと思ふ様になつたら、其時借してやらうと調戲からかつて、代助は表へ出でた。

本郷の通り迄来きたが倦怠アンニユイの感は依然として故もとの通りである。何處こをどう歩あるいても物足りない。と云つて、人ひとの宅うちを訪たづねる気はもう出でない。自分を検査して見ると、身体全体からだが、大きな胃病の様な心持がした。四丁目から又電車へ乗のつて、今度は伝通院前迄来きた。車中で揺ゆられるたびに、五尺何寸かある大きな胃囊ぶくろの中で、腐くさつたものが、波なみを打つ感じがあつた。三時過ぎにぼんやり宅うちへ歸かへつた。玄関で門野が、

「先刻御宅さつきたくから御使おつかいでした。手紙は書斎の机うへの上に載せて置き

ました。受取は一^ち寸^{よつ}私が書いて渡^{わた}して置^おきました」と云つた。

八の三

手紙^{てがみ}は古風^{こふう}な状^{じよう}箱^{ばこ}の中^{うち}にあつた。其^{その}赤^{あか}塗^{ぬり}の表^{おもて}には名宛^{なあて}も何^{なに}も書^かかないで、真^{しん}鍮^{ちう}の環^{くわん}に通^{とほ}した觀^{かん}世^{じん}撚^{より}の封^{ふう}じ目^めに黒^{くろ}い墨^{すみ}を着^きけてあつた。代助^{だいてすけ}は机^{つくえ}の上^{うへ}を一目^{ひとめ}見て、此^{この}手紙^{てがみ}の主^{ぬし}は嫂^{あによめ}だとすぐ悟^{さと}つた。嫂^{あによめ}は斯^かう云^いふ旧^{きう}式^{しき}な趣味^{そふい}があつて、それ^{それが}が時^{とき}々々^{／＼}思^{おも}はぬ方角^{はうかく}へ出^でてくる。代助^{だいてすけ}は鋏^{はさみ}の先^{さき}で觀^{かん}世^{じん}撚^{より}の結^{むす}目^{びめ}を突^つつきながら、面倒^{てめがず}な手数^{てかず}だと思^{おも}つた。

けれども中^{なか}にあつた手紙^{てがみ}は、状箱^{じようばこ}とは正^{ただ}反^{はん}対^{たい}に、簡^{かん}單^{たん}な言^{ごん}文^{ぶん}一

致で用を済^{すま}してゐた。此^{この}間^{あひだ}わざ／＼来^きて呉^くれた時は、御^{おたの}依^の頼^み

通^はり取^らり計^はひかねて、御^ご氣^きの毒^{どく}をした。後^{あと}から考^{かんが}へて見^みると、其^そ

のとき

時^{とき}色^{いろ}々無^む遠^{えん}慮^{りょ}な失^{しつ}礼^{れい}を云^いつた事^{こと}が氣^きにかゝる。どうか悪^{わる}く取^と

くだ

て下^{くだ}さるな。其^{その}代^かり御^ご金^{かね}を上^あげる。尤^{もつと}もみんなと云^いふ訳^{わけ}には行^いか

ない。二百円丈都^あ合^あして上^あげる。から夫^{それ}をすく御^ご友^{とも}達^{たち}の所^{ところ}へ届^{とど}

けて御^ご上^あげなさい。是^{これ}は兄^{にい}さんには内^{ない}所^{しよ}だから其^{その}積^{つも}り^りでゐな

くつては不^ふ可^けない。奥^{おく}さんの事^{こと}も宿^{しゆく}題^{だい}にするといふ約^{やく}束^{そく}だから、

よく考^{かんが}へて返^{へん}事^じをなさい。

手^て紙^{がみ}の中^{なか}に巻^まき込^こめて、二百円の小^{せう}切^{けつ}手^てが這^は入^いつてゐた。代^{だい}助^{すけ}

は、しばらく、それを見^みてゐるうちに、梅^{うめ}子^こに済^すまない様^{よう}な氣^き

がして来^きた。此^{この}間^{あひだ}の晩^{ばん}、歸^{かへ}りがけに、向^{むか}か^ふから、ぢや御^ご金^{かね}は要^いらな

いのと聞いた。貸して呉れと切り込んで頼んだ時は、あゝ手痛く跳ね付けて置きながら、いざ断念して帰る段になると、却つて断わつた方から、掛念がつて駄目を押して出た。代助はそこに女性よしやうの美しくさと弱さよはとを見た。さうして其弱さに付け入る勇氣を失つた。此美しい弱点うつくを弄ぶに堪えなかつたからである。えゝ要りません、何うかなるでせうと云つて分れた。それを梅子は冷かな挨拶と思つたに違ちがひない。其冷かな言葉が、梅子の平生の思ひ切つた動作どうさの裏うらに、何処どこにか引つ掛つてゐて、とう／＼此手紙になつたのだらうと代助は判断した。

代助はすぐ返事を書いた。さうして出来る丈暖かい言葉を使つて感謝の意を表した。代助が斯う云ふ気分になる事は兄あにに對して

もない。父ちちに対してもない。世間一般に対しては固よりない。近來は梅子に対してもあまり起おこらなかつたのである。

代助はすぐ三千代の所へ出掛け様かと考へた。実じつを云ふと、二百円は代助に取つて中途半端ちうとはんぱな額たかであつた。是これだけ丈呉れるなら、一層いっそう思ひ切つて、此方こつちの強請ねだつた通りにして、満足を買へばいゝにと云ふ氣も出たで。が、それは代助の頭あたまが梅子を離れて三千代の方むへ向いた時の事であつた。その上うへ、女は如何いかに思ひ切つた女でも、感情上中途半端ちうとはんぱなものであると信じてゐる代助には、それが別段不平にも思へなかつた。否女いなの斯う云ふ態度の方が、却つて男性の断然たる所置よりも、同情の弾力性を示してゐる点に於て、快こゝろよいものと考へてゐた。だから、もし二百円を自分に贈つたも

のが、梅子でなくつて、父ちちであつたとすれば、代助は、それを經濟ちゅうとはんば中途半端と解釈して、却つて不愉快な感に打たれたかも知れないのである

代助は晩食ばんめしも食くはずに、すぐ又表おもてへ出た。五軒町から江戸川の縁へりを伝つて、河かはを向へ越した時は、先刻散歩さつきからの歸りの様に精神の困憊を感じてゐなかつた。坂を上つて伝通院の横へ出ると、細く高い烟突が、寺てらと寺の間あひだから、汚きたない烟けむを、雲くもの多い空そらに吐はいてゐた。代助はそれを見みて、貧弱な工業が、生存ための為に無理に吐つく呼吸いきを見苦みぐるしいものと思つた。さうして其近ちかくに住すむ平岡と、此烟突とを暗々あんくの裏うちに連想せずにはゐられなかつた。斯かう云ふ場合には、同情の念より美醜の念さきが先に立つのが、代助の常つねであ

つた。代助は此瞬間に、三千代の事を殆んど忘れて仕舞つた位、
 空^{そら}に散^ちる憐れな石炭^{けむり}の烟に刺激された。

平岡^{ひらをか}の玄関^{くつぬぎ}の沓^は脱^{かさ}には女の穿^はく重^{かさ}ね草履^{すそ}が脱^ぬぎ棄^{すそ}てゝあつた。格子^あを開けると、奥^{おく}の方^{かた}から三千代^{みちよ}が裾^{すそ}を鳴^ならして出^でて来^きた。其時^{あがぐち}上^{じやう}り口^{くち}の二^{ふた}畳^{たた}は殆^{ほと}んど暗^{くら}かつた。三千代^{みちよ}は其^{その}暗^{くら}い中^{なか}に坐^{すは}つて挨拶^{あいさつ}をした。始め^{はじめ}は誰^{だれ}が来^きたのか、よく分^{わか}らなかつたらしかつたが、代助^{だいてすけ}の声^{こゑ}を聞^きくや否^{いな}や、何^ど方^{なた}かと思^{おも}つたら……と寧^なろ低^ひい声^{こゑ}で云^いつた。代助^{だいてすけ}は判^は然^{つかり}見^みえない三千代^{みちよ}の姿^{すがた}を、常^{つね}よりは美^{うつく}しく眺^{なが}めた。

八の四

平岡ひらをかは不在ふざいであつた。それを聞いた時とき、代助は話はなしてゐ易やすい様な、又話はなしてゐ悪い様にくな変な氣がした。けれども三千代の方は常つねの通り落ち付ついてゐた。洋燈ランプも点けな_いで、暗くらい室へやを閉たて切つた儘ふたり二人で坐すはつてゐた。三千代は下女も留守だと云つた。自分も先刻さつきそこ其所迄用達たしに出て、今歸つて夕食ゆふめしを済ました許りだと云つた。やがて平岡の話が出た。

予期した通り、平岡は相変らず奔走してゐる。が、此一週間程は、あんまり外そとへ出なくなつた。疲つかれたと云つて、よく宅うちに寐ねてゐる。でなければ酒さけを飲のむ。人ひとが尋ねて来くれば猶飲のむ。さうして善よく怒おこる。さかんに人ひとを罵倒する。のださうである。

「昔むかしと違ちがつて気が荒あらくなつて困こまるわ」と云つて、三千代は暗みちよに同情を求める様子であつた。代助は黙だまつてゐた。下女かへが歸かへつて来て、勝手口ぐちでがたく音おとをさせた。しばらくすると、胡摩竹ごまだけの台だいの着ついた洋燈ランプを持つて出た。襖ふすまを締しめる時とき、代助の顔かほを偷ぬすむ様に見て行つた。

代助は懷ふところから例の小切手ぎつてを出だした。二つに折をれたのを其儘三千代の前に置いて、奥さん、と呼び掛かけた。代助が三千代を奥さんと呼んだのは始めてゝあつた。

「先達せんだつて御頼おたのみの金かねですがね」

三千代は何にも答へなかつた。たゞ眼めを挙あげて代助を見た。

「実じつは、直すぐにもと思つたんだけれども、此方こつちの都合つが付つかなかつ

たものだから、遂つい遅おそくなつたんだが、何どうですか、もう始末は付つきましたか」と聞いた。

其時三千代は急に心細ひくさうな低い声になつた。さうして怨えんずる様に、

「未まだですわ。だつて、片付かたづく訳なが無いぢやありませんか」と云つた儘、眼めを睜みはつて凝じつと代助を見てゐた。代助は折をれた小切手を取り上げて二つに開ひらいた。

「是丈ぢや駄目だめですか」

三千代は手を伸のばして小切手を受取うけとつた。

「難有なう。平岡が喜びますわ」と静しづかに小切手を畳たゝみみうへおに置いた。代助は金かねを借りて来きた由来を、極きざつと説明して、自分は斯かう

いふ呑気な身分の様に見えるけれども、何か必要があつて、自分以外の事に、手を出^ださうとすると、丸で無能力になるんだから、そこは悪^{わる}く思つて呉れない様にと言訳を付け加へた。

「それは、私^{わたくし}も承知してゐますわ。けれども、困^{こま}つて、何^どうする事も出来^{でき}ないものだから。つい無理を御願して」と三千代は氣の毒さうに詫^{わび}を述べた。代助はそこで念を押した。

「夫^{それ}丈で、何^どうか始末が付^つきますか。もし何^どうしても付^つかなければ、もう一遍工面^{くめん}して見るんだが」

「もう一遍工面^{いつぺん}するつて」

「判^おを押して高い利のつく御金^{おかね}を借^かりるんです」

「あら、そんな事を」と三千代はすぐ打ち消^けす様に云つた。「そ

れこそ大變よ。貴方あなた」

代助は平岡の今苦しめられてゐるのも、其起りは、性質たちの悪いわる金を借り始めたのが転々てんくして祟つてゐるんだと云ふ事を聞いた。平岡は、あの地で、最初のうちは、非常な勤勉家として通つてゐたのだが、三千代が産後心臓が悪くなつて、ぶら／＼し出すと、遊び始めたのである。それも初めのうちは、夫程それほど烈しくもなかつたので、三千代はたゞ交際つきあひ上已を得ないんだらうと諦めてゐたが、仕舞にはそれが段々高じて、程度ほうぶが無くなる許なので三千代も心配をする。すれば身体からだが悪くなる。なれば放蕩が猶募る。不親切なんぢやない。私わたくしが悪いんですと三千代はわざ／＼断つた。けれども又淋しい顔かほをして、責せめて小供でも生きてゐて呉れ

たら嘸可^{さぞよ}かつたらうと、つく／＼考へた事もありましたと自白した。

代助は経済問題の裏面に潜んでゐる、夫婦の關係をあらまし推察し得た様な気がしたので、あまり多く此方^{こつち}から問ふのを控えた。歸りがけに、

「そんなに弱^{よは}つちや不可^{いけ}ない。昔^{むかし}の様に元氣に御成^{おな}んなさい。さうして些^{ちつ}と遊びに御出^{いで}なさい」と勇氣をつけた。

「本^{ほん}当^とね」と三千代は笑つた。彼等は互^{たがひ}の昔^{むかし}を互^{たがひ}の顔^{かほ}の上^{うへ}に認めた。平岡はどう／＼歸つて来^こなかつた。

八の五

中なか二日ふつか置おいて、突然平岡ひらおかが来きた。其日ひは乾かわいた風かぜが朗ほがらかな
天そらを吹ふいて、蒼あをいものあをが眼めに映うつる、常つねよりは暑あつい天あ気であつた。
朝あさの新聞に菖蒲あやむの案内あんないがで出でてゐた。代助だいてすけの買かつた大おほきな鉢はち植うの君くん
子蘭しらんはとう／＼縁側えんがわで散ちつて仕舞しまつた。其代そのしろり脇わき差程さぢやうも幅はちの
ある緑みどりの葉はが、茎くきを押おし分わけて長ながく延のびて来きた。古ふるい葉はは黒くろずん
だ儘まま、日ひに光ひかつてゐる。其一枚ひとまいが何なんかの拍子はつしに半はん分ぶんから折おれて、
茎くきを去さる五寸許ごすんごころの所ところで、急すに鋭えいく下さつたのが、代助だいてすけには見苦みくしく
見えた。代助だいてすけは鋏はさみを持もつて椽えんに出でた。さうして其葉はを折をれ込こんだ
手前てまへから、剪きつて棄すてた。時ときに厚あい切きり口くちが、急きに煮染にじむ様ように見
えて、しばらく眺ながめてゐるうちに、ぽたりと椽えんに音おとがした。切きりく

口ち あつまに集つたのは緑みどりいろ色の濃い重い汁おも しるであつた。代助は其そのにほひ香かを嗅かがうと思つて、乱みだれる葉はの中なかに鼻はなを突つつ込んだ。椽側したゝりの滴たは其儘はきみにして置いた。立ち上あがつて、袂たもとから手帛ハンケチを出だして、鋏はさみの刃はを拭ふいてゐる所へ、門野かどのが平岡さんことが御出おいでですと報しらせて来たのである。代助は其時平岡の事も三千代の事も、丸で頭あたまなかの中に考へてゐなかつた。只ただ不思議な緑みどりいろ色の液体えきたいに支配されて、比較的世間せけんに關係もとのない情調うごの下に動いてゐた。それが平岡の名を聞きくや否や、すぐ消えて仕舞つた。さうして、何だか逢あひたくない様な氣持こころがした。

「此方こつちへ御通とほし申しませうか」と門野から催促された時、代助はうんと云つて、座敷へ這入つた。あとから席せきに導みちびかれた平岡を見

ると、もう夏の洋服を着てゐた。襟も白襯衣も新らしい上に、流行の編襟飾あみえりかざりを掛けて、浪人とは誰にも受け取れない位、ハイカラに取り繕つくろつてゐた。

はな

話して見ると、平岡の事情は、依然として発展してゐなかつた。

もう近頃は運動しても当分駄目だから、毎日斯うして遊んで歩く。

それでなければ、宅に寐てゐるんだと云つて、大きな声を出して

笑つて見せた。代助もそれが可からうと答へたなり、後は当らず

障らずの世間話に時間を潰してゐた。けれども自然に出る世間

話といふよりも、寧ろある問題を回避する為の世間話だから、

両方共に緊張きんちようを腹の底に感じてゐた。

平岡は三千代の事も、金の事も口へ出さなかつた。従がつて三

つかまへ
日前代助が彼の留守宅を訪問した事に就ても何も語らなかつた。
代助も始めのうちは、わざと、その点に触れないで澄してゐたが、
何時迄経つても、平岡の方で余所々しく構へてゐるので、却つ
て不安になつた。

「実は二三日前君の所へ行つたが、君は留守だつたね」と云ひ出
した。

「うん。左様だつたさうだね。其節は又難有う。御蔭さまで。――
――なに、君を煩はさないでも何うかなつたんだが、彼奴があまり
心配し過ぎて、つい君に迷惑を掛けて済まない」と冷淡な礼を云つ
た。それから、

「僕も実は御礼に来た様なものだが、本当の御礼には、いづれ当

人が出るだらうから」と丸で三千代と自分を別物にした言分べつもの いひぶんであつた。代助はたゞ、

「そんな面倒な事をする必要があるものか」と答へた。話はなしは是で切れた。が又両方に共通で、しかも、両方のあまり興味を持もたない方面に摺ずり滑すべつて行いつた。すると、平岡が突然、

「僕はことによると、もう実業は已やめるかも知れない。實際内うちま幕くを知れば知る程厭いやになる。其上此方こつちへ来きて、少し運動をして見て、つくづく勇氣がなくなつた」と心底しんそこかららしい告白をした。代助は、一ひとくち口、

「それは、左様さうだらう」と答へた。平岡はあまり此返事の冷淡なのに驚ろいた様子であつた。が、又あとを付つけた。

「先達ても一寸話したんだが、新聞へでも這入らうかと思つて
る」

「口があるのかい」と代助が聞き返した。

「今、一つある。多分出来さうだ」

来た時は、運動しても駄目だから遊んでゐると云ふし、今は新聞に口があるから出様と云ふし、少し要領を欠いでゐるが、追窮するのにも面倒だと思つて、代助は、

「それも面白からう」と賛成の意を表して置いた。

八の六

平岡の歸りを玄関迄見送つた時、代助はしばらく、障子に身をみ寄せて、敷居しきゐの上に立つてゐた。門野かどのも御附合つきあひに平岡の後姿うしろすがたを眺ながめてゐた。が、すぐ口くちを出だした。

「平岡さんは思つたよりハイカラですな。あの服装なりぢや、少し宅すこうちの方が御粗末すぎ過る様です」

「左様さうでもないさ。近頃はみんな、あんなものだらう」と代助は立ちながら答へた。

「全まづたく、服装なり丈ぢや分わからない世の中なかになりましたからね。何処どこの紳士かと思ふと、どうも変へんちきりんな家うちへ這入はいてますからね」と門野かどのはすぐあとを付けた。

代助は返事も為しずに書齋へ引き返した。椽側たに垂れた君子蘭らんの

緑の滴がどろ／＼になつて、干上り掛つてゐた。代助はわざと、書齋と座敷の仕切を立て切つて、一人室のうちへ這入つた。来客に接した後しばらくは、独坐に耽るが代助の癖であつた。ことに今日の様に調子の狂ふ時は、格別その必要を感じた。

平岡はとう／＼自分と離れて仕舞つた。逢ふたんびに、遠くにあるて応対する様な気がする。実を云ふと、平岡ばかりではない。誰に逢つても左んな気がする。現代の社会は孤立した人間の集合体に過なかつた。大地は自然に続いてゐるけれども、其上に家を建てたら、忽ち切れ／＼になつて仕舞つた。家の中にある人間も亦切れ切れになつて仕舞つた。文明は我等をして孤立せしむるものだと、代助は解釈した。

代助と接近してゐた時分の平岡は、人に泣いて貰ふ事を喜ぶ人であつた。今でも左様かも知れない。が、些ともそんな顔をしてないから、解らない。否、力めて、人の同情を斥ける様に振舞つてゐる。孤立しても世は渡つて見せるといふ我慢か、又は是が現代社会に本来の面目だと云ふ悟りか、何方かに歸着する。

平岡に接近してゐた時分の代助は、人の為に泣く事の好きな男であつた。それが次第々々に泣けなくなつた。泣かない方が現代的だからと云ふのではなかつた。事實は寧ろ之を逆にして、泣かないから現代的だと言ひたかつた。泰西の文明の圧迫を受けて、其重荷の下に唸る、劇烈な生存競争場裏に立つ人で、真によく人の為に泣き得るものに、代助は未だ曾て出逢はなかつた。

代助は今の平岡に対して、隔離の感よりも寧ろ嫌悪けんをの念を催ふした。さうして向ふにも自己同様の念が萌きざしてゐると判じた。昔しの代助も、時々わが胸のうちに、斯う云ふ影を認めて驚ろいた事があつた。其時は非常に悲しかつた。今は其悲しみも殆んど薄く剥がれて仕舞つた。だから自分で黒い影を凝と見詰めて見る。さうして、これが真だと思ふ。已を得ないと思ふ。たゞそれ丈になつた。

斯う云ふ意味の孤独の底に陥つて煩悶するには、代助の頭はあまりに判然し過てゐた。彼はこの境遇を以て、現代人の踏むべき必然の運命と考へたからである。従つて、自分と平岡の隔離は、今の自分の眼に訴へて見て、尋常一般の径路を、ある点迄進行し

た結果に過^{すぎ}ないと見倣した。けれども、同時に、^{ふたり あひだ よこ}兩人の間に横たはる一種の特別な事情^{ため}の爲、此隔離が^{せけん なみ}世間並よりも早く到着したと云ふ事を自覺せずにはゐられなかつた。それは^{みちよ}三千代の結婚であつた。^{みちよ}三千代を平岡に周旋したものは元來が自分であつた。それを當時に悔^{くゆ}る様な薄弱な頭腦^{づのう}ではなかつた。^{こんにち}今日に至つて振り返つて見ても、自分の所作^{しよさ}は、過去を照^てらす鮮^{あざや}かな名譽であつた。けれども三年経過するうちに自然は自然に特有な結果を、彼等^{ににん}二人の前に突き付けた。彼等は自己の満足と光輝を棄てゝ、其前に頭^{あたま}を下げなければならなかつた。さうして平岡は、ちらり／＼と何故^{なぜ}三千代を貰^{もら}つたかと思ふ様になつた。代助は何処^{どこ}かしらで、何故^{なぜ}三千代を周旋したかと云ふ声を聞いた。

代助は書齋に閉ぢ籠つて一日考へに沈んでゐた。晩食の時、

門野が、

「先生今日は一日御勉強ですな。どうです、些と御散歩になりませんか。今夜は寅毘沙ですぜ。演芸館で支那人の留学生が芝居を演つてます。どんな事を演る積ですか、行つて御覧なすつたら何うです。支那人てえ奴は、臆面がないから、何でも遣る氣だから呑氣なもんだ。……」と一人で喋舌つた。

九の一

代助は又父から呼ばれた。代助には其用事が大抵分つてゐた。

代助は不斷から成るべく父を避けて会はない様にしてゐた。此頃になつては猶更奥へ寄り付かなかつた。逢ふと、叮嚀な言葉を使つて應對してゐるにも拘はらず、腹の中では、父を侮辱してゐる様な氣がしてならなかつたからである。

代助は人類の一人として、互に接觸を敢てし得ぬ、現代の社会を、二十世紀の墮落と呼んでゐた。さうして、これを、近来急に膨脹した生活慾の高圧力が道義慾の崩壊を促がしたものと解釈してゐた。又これを此等新旧兩慾の衝突と見做してゐた。最後に、此生活慾の目醒しい發展を、歐洲から押し寄せた海嘯と心得てゐた。

この二つの因數は、何処かで平衡を得なければならぬ。

けれども、貧弱な日本が、歐洲の最強国と、財力に於て肩を較べ
 る日の来る迄は、此平衡は日本に於て得られないものと代助は信
 じてゐた。さうして、斯ゝる日は、到底日本の上を照らさないも
 のと諦めてゐた。^{あきら}だからこの窮地に陥つた日本紳士の多数は、日
 毎に法律に触れない程度に於て、もしくはたゞ頭の中^{あたまなか}に於て、罪
 惡を犯さなければならぬ。さうして、相手が今如何なる罪惡を
 犯しつゝあるかを、互に黙知しつゝ、談笑しなければならぬ。
 代助は人類の一人^{いちにん}として、かゝる侮辱を加ふるにも、又加へらるゝ
 にも堪へなかつた。

代助の父^{ちち}の場合は、一般^{くら}に比べると、稍特殊^{やう}的傾向を帯びる丈
 に複雑であつた。彼は維新前の武士に固有な道義本位の教育を受

けた。此教育は情意行為の標準を、自己以外の遠い所に据ゑて、
事実の発展によつて証明せらるべき手近な真を、眼中に置か
ない無理なものであつた。にも拘はらず、父は習慣に囚へられて、
未だに此教育に執着してゐる。さうして、一方には、劇烈な生活
慾に冒され易い実業に従事した。父は實際に於て年々此生活慾の
ために腐蝕されつゝ今日に至つた。だから昔の自分と、今の自分の
間には、大いな相違のあるべき筈である。それを父は自認してゐ
なかつた。昔の自分が、昔通りの心得で、今の事業を是迄に
成し遂げたとばかり公言する。けれども封建時代にのみ通用すべ
き教育の範圍を狭める事なしに、現代の生活慾を時々刻々に充た
して行ける訳がないと代助は考へた。もし双方を其儘に存在させ

様とすれば、之これを敢てする個人は、矛盾の為ために大苦痛を受けなければならぬ。もし内心に此苦痛を受けながら、たゞ苦痛の自覺丈明あきらかで、何の為ための苦痛だか分別が付かないならば、それは頭腦の鈍にぶい劣等な人種である。代助は父に対する毎ごとに、父は自己を隠蔽いんべいする偽君子ぎくんしか、もしくは分別の足らない愚物ぐぶつか、何方どつちかでなくてはならない様な気がした。さうして、左さう云ふ気がするのが厭いやでならなかつた。

と云つて、父ちちは代助の手際で、何どうする事も出来ない男であつた。代助には明あきらかに、それが分わかつてゐた。だから代助は未いまだ曾かつて父ちちを矛盾の極端迄追ひ詰つめた事がなかつた。

代助は凡ての道德の出立しつたつてん点は社会的事実より外にないと信じ

てゐた。始めから頭あたまの中に硬張こわばつた道徳を据ゑ付けて、其道徳から逆に社会的事実を発展させ様とする程、本末を誤つた話はないと信じてゐた。従つて日本の学校でやる、講釈の倫理教育は、無意義のものだと考へた。彼等は学校で昔し風の道徳を教授してゐる。それでなければ一般歐洲人に適切な道徳を呑み込ましてゐる。此劇烈なる生活慾に襲はれた不幸な国民から見れば、迂遠の空談に過ぎすない。此迂遠な教育を受けたものは、他日社会を眼前に見る時、昔ときむかしの講釈を思ひ出して笑つて仕舞ふ。でなければ馬鹿にされた様な氣がする。代助に至つては、学校のみならず、現に自分の父ちちから、尤も嚴格で、尤も通用しない徳義上の教育を受けた。それがため、一時非常な矛盾の苦痛を、頭あたまなかの中に起した。代助は

それを恨めしく思つてゐる位であつた。

代助は此このまへ前梅子に礼を云ひに行つた時、梅子から一寸奥へ行つて、挨拶をしてゐらつしやいと注意された。代助は笑ひながら御父とうさんはゐるんですかと空そらとぼけた。ゐらつしやるわと云ふ確答を得た時でも、今日けふはちと急ぐから廃よさうと歸つて来た。

九の二

今日けふはわざく其そのため為に来たのだから、否いやでも応でも父ちやうに逢はなければならぬ。相変らず、内玄関ないの方から廻つて座敷へ来ると、珍めづらしく兄あにの誠吾が胡坐あぐらをかいて、酒さけを呑んでゐた。梅子も

傍そばに坐すつてゐた。兄あには代助を見て、

「何どうだ、一盃や遣らないか」と、前にあつた葡萄酒の壺びんを持つて振ふつて見せた。中なかにはまだ余程這入つてゐた。梅子は手を敲たたいて洋盞コップを取り寄せた。

「当あて、御覽らんなさい。どの位ふる古いんだか」と一杯注ついだ。

「代助に分わかるものか」と云つて、誠吾は弟くちびるの唇のあたりを眺ながめてゐた。代助は一口ひとくち飲んで盃さかづきを下さかづきしたへ下おろした。肴さかなの代りに薄いウエーファアざらが菓子皿にあつた。

「旨うまいですね」と云つた。

「だから時代を当あて、御覽なさいよ」

「時代じだいがあるんですか。偉えらいものを買かひ込んだもんだね。歸かへりに

「一本貰つて行かう」

「御生憎様、もう是限なの。到来物よ」と云つて梅子は椽側

へ出て、膝の上に落ちたウエーフアーの粉を払いた。

「兄さん、今日は何うしたんです。大変気楽さうですね」と代助が聞いた。

「今日は休養だ。此間中は何うも忙し過ぎて降参したから」と

誠吾は火の消えた葉巻を口に啣えた。代助は自分の傍にあつた燐寸を擦つて遣つた。

「代さん貴方こそ気楽ぢやありませんか」と云ひながら梅子が椽側から歸つて来た。

「姉さん歌舞伎座へ行きましたか。まだなら、行つて御覧なさい。

面白いから」

「貴方もう行つたの、驚ろいた。貴方も余つ程怠けものね」

「怠けものは可くない。勉強の方向が違ふんだから」

「押の強い事ばかり云つて。人の気も知らないで」と梅子は誠吾

の方を見た。誠吾は赤い瞼をして、ぽかんと葉巻の烟を吹いてゐ

た。

「ねえ、貴方」と梅子が催促した。誠吾はうるささうに葉巻を指

の股へ移して、

「今のうち沢山勉強して貰つて置いて、今に此方が貧乏したら、

救つて貰ふ方が好いちやないか」と云つた。梅子は、

「代さん、あなた役者になれて」と聞いた。代助は何にも云はずに、洋盞コップを姉の前に出しただ。梅子も黙だまつて葡萄酒の壺を取り上げあた。

「兄にいさん、此間このあひだちう中は何だか大変忙いそがしかったんだつてね」と代助は前へ戻つて聞いた。

「いや、もう大弱りだ」と云ひながら、誠吾は寐ねころ転んで仕舞つた。
「何なにか日糖事件に関係でもあつたんですか」と代助が聞いた。

「日糖事件に関係はないが、忙いそがしかった」

兄あにの答は何時いつでも此程度以上に明瞭になつた事がない。実は明瞭に話したくないんだらうけれども、代助の耳には、夫が本来の無頓着で、話すのが臆怯なためと聞える。だから代助はいつでも

楽らくに其返事なにかの中に這入はいてゐた。

「日糖つまも詰つらない事ことになつたが、あゝなる前に何どうか方法はないもんでせうかね」

「左さうさなあ。實際世よの中なかの事は、何なにが何どうなるんだか分わからないからな。——梅うめ、今日けふは直木なほきに云いひ付つけて、ヘクターを少し運動

させなくつちや不可いけいよ。あゝ大食おほぐひをして寐ねて許ばりあちや毒だ」

と誠吾ねむは眠ねむさうな瞼まぶたを指ゆびでしきりに擦こすつた。代助は、

「愈奥いよおくへ行いつて御父おとうさんに叱しかられて来くるかな」と云いひながら又洋コ盞ツプを嫂あによめの前だへ出でした。梅子は笑わらつて酒さけを注ついだ。

「嫁よめの事か」と誠吾きが聞きいた。

「まあ、左さうだらうと思おもふんです」

「貰^{もら}つて置く^おがいゝ。さう老人^{としより}に心配^{しんぱ}したつて仕様^{しやう}があるものか」と云つたが、今度はもつと判^は然^{つきり}した語勢^{ごせい}で、

「氣^きを付^つけないと不可^いん可^{かん}よ。少し低氣壓^{ていきあつ}が来^きてゐるから」と注意^{ちうい}した。代助^{たいてすけ}は立^たち掛^かけながら、

「まさか此^{この}間^{あひだ}中^{ちゆう}の奔走^{ほんそう}からきた低氣壓^{ていきあつ}ぢやありますまいね」と念^{ねん}を押^おした。兄^{あに}は寐^み転^{てん}んだ儘^{まま}、

「何^{なん}とも云^いへないよ。斯^{かく}う見^みえて、我^{われ}々^々も日糖^{にとう}の重役^{じゆうやく}と同じ様^{よう}に、何時^{いつ}拘^く引^{いん}されるか分^{わか}らない身体^{からだ}なんだから」と云つた。

「馬鹿^{ばか}な事^{こと}を仰^{おつ}しやるなよ」と梅子^{たけこ}が窘^{たしな}めた。

「矢^やつ張^はり僕^{ぼく}ののらくらが持^もち来^きたした低氣壓^{ていきあつ}なんだらう」と代助^{たいてすけ}は笑^{わら}ひながら立^たつた。

九の三

廊下伝つたひに中庭なかにはを越こして、奥おくへ来きて見ると、父ちちは唐机とうづくえの前まへへ坐すつて、唐本とうほんを見みてゐた。父ちちは詩うたが好すで、閑ひまがあると折々支那人の詩集よを讀んでゐる。然し時によると、それが尤も機嫌のわるい索引さくいんになる事があつた。さう云ふときは、いかに神経のふつくら出来上あがつた兄あにでも、成るべく近寄ちかよらない事にしてゐた。是非顔かほを合せなければならぬ場合には、誠太郎か、縫子か、何ど方つちか引張ひっぱつて父の前まへへ出でる手段を取とつてゐた。代助も椽側迄来きて、そこに氣が付ついたが、夫それほど程の必要もあるまいと思つて、座敷を

ひとつとほ一つ通り越して、父の居間に這入った。

父はまづ眼鏡を外した。それを読み掛けた書物の上に置くと、

代助の方に向き直った。さうして、たゞ一言、

「来たか」と云った。其語調は平常よりも却つて穏な位であつた。

代助は膝の上に手を置きながら、兄が真面目な顔をして、自分を

担いたんぢやなからうかと考へた。代助はそこで又苦い茶を飲ま

せられて、しばらく雑談に時を移した。今年は芍薬の出が早

いとか、茶摘歌を聞いてゐると眠くなる時候だとか、何所とか

に、大きな藤があつて、其花の長さが四尺足らずあるとか、話は

好加減な方角へ大分長く延びて行つた。代助は又其方が勝手

なので、いつ迄も延ばす様にと、後から後を付けて行つた。父も

仕舞には持て余あまして、とう／＼、時に今日御前を呼んだのはと云ひ出した。

代助はそれから後あとは、一言も口を利きかなくなつた。只謹んで親お爺やぢの云ふことを聴きいてゐた。父も代助から斯ちう云ふ態度に出られると、長い間自分一人あひだひとりで、講義でもする様に、述のべて行かなくてはならなかつた。然し其半分以上は、過去を繰り返す丈であつた。が代助はそれを、始めて聞くと同程度の注意を払きつて聞いてゐた。父ちやうなかの長談義のうちに、代助は二三の新しい点あたらしも認みとめた。その一つは、御前は一体是からさき何どうする料簡なんだと云ふ真面目な質問であつた。代助は今迄父ちやうからの注文ばかり受けてゐた。だから、其注文を曖昧はづに外はづす事に慣なれてゐた。けれども、斯う云ふ大

質問になると、さう口から出任せに答へられない。無暗な事を云へば、すぐ父を怒らして仕舞ふからである。と云つて正直を自白すると、二三年間父の頭を教育した上でなくつては、通じない理窟になる。何故と云ふと、代助は今此大質問に応じて、自分の未来を明瞭に道破る丈の考も何も有つてゐなかつたからである。彼はそれが自分に取つては尤もな所だと思つてゐた。から、父が、其通りを聞いて、成程と納得する迄には、大變な時間がかかる。或は生涯通じつこないかも知れない。父の氣に入る様にするのは、何でも、国家の爲とか、天下の爲とか、景氣の好い事を、しかも結婚と両立しない様な事を、述べて置けば済むのであるが、代助は如何に、自己を侮辱する氣になつても、是ばかりは馬鹿氣てゐ

て、口へ出す勇氣がなかつた。そこで已を得ないから、実は色々計画もあるが、いづれ秩序立てゝ来て、御相談をする積であると答へた。答へた後で、実に滑稽だと思つたが仕方がなかつた。

代助は次に、独立の出来る丈の財産が欲しくはないかと聞かれた。代助は無論欲しいと答へた。すると、父が、では佐川の娘を貰つたら好からうと云ふ条件を付けた。其財産は佐川の娘が持つて来るのか、又は父が呉れるのか甚だ曖昧であつた。代助は少し其点に向つて進んで見たが、遂に要領を得なかつた。けれども、それを突き留める必要がないと考へて已めた。

次に、一層洋行する気はないかと云はれた。代助は好いでせうと云つて賛成した。けれども、これにも、矢つ張り結婚が先決問

題として出て来た。

「そんなに佐川の娘を貰ふ必要があるんですか」と代助が仕舞に聞いた。すると父の顔が赤くなつた。

九の四

代助は父を怒らせる気は少しもなかつたのである。彼の近頃の主義として、人と喧嘩をするのは、人間の墮落の一範^{はん}鑄^{ちゆう}になつてゐた。喧嘩^{けんか}の一部分として、人を怒らせるのは、怒らせる事自身よりは、怒つた人の顔^{かほ}色^{いろ}が、如何に不愉快にわが眼^めに映ずるか云ふ点に於て、大切なわが生命^{きづつ}を傷ける打撃に外^{ほか}ならぬ

と心得てゐた。彼は罪惡に就ても彼れ自身に特有な考を有つてゐた。けれども、それが爲に、自然の儘に振舞ひさへすれば、罰を免かれ得るとは信じてゐなかつた。人を斬つたものゝ受くる罰は、斬られた人の肉から出る血潮であると固く信じてゐた。迸る血の色を見て、清い心の迷亂を引き起さないものはあるまいと感ずるからである。代助は夫程神經の鋭い男であつた。だから顔の色を赤くした父を見た時、妙に不快になつた。けれども此罪を二重に償ふために、父の云ふ通りにしやうと云ふ氣は些とも起らなかつた。彼は、一方に於て、自己の腦力に、非常な尊敬を払ふ男であつたからである。

其時父は頗る熱した語氣で、先づ自分の年を取つてゐる事、子

供の未来が心配になる事、子供に嫁よめを持たせるのは親おやの義務であ
 ると云ふ事、嫁よめの資格其他に就ては、本人よりも親おやの方が遙かに
 周到な注意を払つてゐると云ふ事、他ひとの親切は、其当時こそ余
 計な御世話に見えるが、後あとになると、もう一遍うるさく干渉かんして
 貰もらひたい時機が来るくものであるといふ事を、非常に叮嚀とに説いた。
 代助は慎重な態度で、聴きいてゐた。けれども、父の言葉が切れた
 時も、依然として許諾だくの意を表さなかつた。すると父ちちはわざと抑おさ
 えた調子で、

「ぢや、佐川は已やめるさ。さうして誰だれでも御前の好すきなのを貰もらつた
 ら好いいだらう。誰だれか貰もらひたいのがあるのか」と云つた。是は嫂あによめの
 質問と同様であるが、代助は梅子うめこに対たいする様に、たゞ苦笑くしやうばかり

してはゐられなかつた。

「別にべつそんな貰もらひたいのありません」と明あきらかな返事をした。すると父は急ちに肝かんの発はした様な声で、

「ぢや、少しは此方すこの事も考へて呉くれたら好よからう。何もさう自分の事ばかり思つてゐないでも」と急調子に云つた。代助は、突然父が代助を離れて、彼自身かれの利害に飛び移つたのに驚ろかされた。けれども其驚ろきは、論理なき急劇うへの変化の上に注そがれた丈であつた。

「貴方あなたにそれ程御都合が好いい事があるなら、もう一遍考へて見ませう」と答へた。

父は益機嫌をわるくした。代助は人と応対してゐる時、何どうし

ても論理を離れる事の出来ない場合がある。夫それが為ためめ、よく人ひとから、相手を遣やり込めるのを目的とする様に受取られる。實際を云ふと、彼程人かれを遣やり込める事の嫌な男はないのである。

「何も己おれの都合許ばかりで、嫁よめを貰へと云つてやしない」と父ちちは前まへの言葉まへを訂正した。「そんなに理窟を云ふなら、参考ための為、云つて聞かせるが、御前おまへはもう三十だらう、三十になつて、普通のものが結婚をしなれば、世間せけんでは何なんと思ふか大抵わか分るだらう。そりや今は昔いまむかしと違ふから、独身も本人の随意だけれども、独身の為ために親や兄弟が迷めい惑わくしたり、果はては自分の名譽くわんけいに關係する様な事しつたが出来たりしたら何どうする氣だ」

代助はたゞ茫然として父ちちの顔かほを見てゐた。父ちちは何どの点に向つて、

自分を刺した積りだか、代助には殆んど分らなかつたからである。
しばらくして、

「そりや私のことだから少しは道楽もしますが……」と云ひかけた。父はすぐ夫を遮ぎつた。

「そんな事ぢやない」

二人は夫限りしばらく口を利かずにゐた。父は此沈黙を以て代

助に向つて与へた打撃の結果と信じた。やがて、言葉を和らげて、

「まあ、よく考へて御覧」と云つた。代助はあゝと答へて、父の
室を退ぞいた。座敷へ来て兄を探したが見えなかつた。嫂はと尋

ねたら、客間だと下女が教へたので、行つて戸を明けて見ると、

縫子のピアノの先生が来てゐた。代助は先生に一寸挨拶をして、

梅子うめこを戸口とぐち迄よ呼び出した。

「あなたは僕ぼくの事を何か御父おとうさんに讒訴ざんそしやしないか」

梅子はハ、ハ、と笑つた。さうして、

「まあ御這入そばんなさいよ。丁度い好い所だから」と云つて、代助を樂器がくきの傍そば迄引張ひつて行つた。

十の一

蟻ありの座敷ざしきへ上あがる時候になつた。代助は大きな鉢はちへ水を張はつて、其中なかに真まつ白しろなりり、オフ、ゼ、ワレーを茎くきごと漬つけた。簇むらが細こまかい花はなが、濃こい模様ようの縁ふちを隠かくした。鉢はちを動うごかすと、花はなが零こぼれ

る。代助はそれを大きな字引の上に載せた。さうして、其傍に枕を置いて仰向けに倒れた。黒い頭が丁度鉢の陰になつて、花から出る香が、好い具合に鼻に通つた。代助は其香を嗅ぎながら仮寐をした。

代助は時々、尋常な外界から法外に痛烈な刺激を受ける。それが劇しくなると、晴天から来る日光の反射にさへ堪へ難くなる事があつた。さう云ふ時には、成る可く世間との交渉を稀薄にして、朝でも午でも構はず寐する工夫をした。其手段には、極めて淡い、甘味の軽い、花の香をよく用ひた。瞼を閉ぢて、瞳に落ちる光線を謝絶して、静かに鼻の穴丈で呼吸してゐるうちに、枕元の花が、次第に夢の方へ、躁ぐ意識を吹いて行く。是が成功

すると、代助の神経が生れ代つた様に落ち付いて、世間との連絡が、前よりは比較的楽に取れる。

代助は父に呼ばれてから二三日の間、庭の隅に咲いた薔薇の花の赤いのを見るたびに、それが点々として眼を刺してならなかつた。其時は、いつでも、手水鉢の傍にある、擬宝珠の葉に眼を移した。其葉には、放肆な白い縞が、三筋か四筋、長く乱れてゐた。代助が見るたびに、擬宝珠の葉は延びて行く様に思はれた。さうして、それと共に白い縞も、自由に拘束なく、延びる様な気がした。石榴の花は、薔薇よりも派出に且つ重苦しく見えた。緑の間にちらりと光つて見える位、強い色を出してゐた。従つて是も代助の今の気分には相応らなかつた。

彼の今の気分は、彼に時々起る如く、総体の上に一種の暗調を帯びてゐた。だから余りに明る過るものに接すると、其矛盾に堪えがたかつた。擬宝珠の葉も長く見詰めてみると、すぐ厭になる位であつた。

其^{そのうへ}上^{かれ}彼は、現代の日本に特有なる一種の不安に襲はれ出した。其不安は人と人との間に^{あひだ}信仰がない原因から起る野蛮程度の現象であつた。彼は此心的現象のために甚しき動揺を感じた。彼は神に信仰を置く事を^{よろこ}喜ばぬ人であつた。又頭腦の人として、神に信仰を置く事の出来ぬ性質^{たち}であつた。けれども、相互に^{さうご}信仰を有するものは、神に依頼するの必要がないと信じてゐた。相互が疑ひ合ふときの苦しみを^{げだつ}解脱する為めに、神は始めて存在の権利を有

するものと解釈してゐた。だから、神かみのある国では、人が嘘うそを吐くものと極きめた。然し今の日本は、神かみにも人ひとにも信仰くのない国柄からであるといふ事を発見した。さうして、彼かれは之をいつに日本の経済事情に帰着せしめた。

四五日前、彼は掏摸すりと結託して悪事を働らいた刑事巡査の話を新聞で読んだ。それが一人ひとりや二人ふたりではなかつた。他の新聞の記しるす所によれば、もし嚴重に、それからそれへと、手を延ばしたら、東京は一時殆んど無警察の有様おちいに陥るかも知れないさうである。代助は其記事を読んだとき、たゞ苦笑した丈であつた。さうして、生活の大難に対抗せねばならぬ薄給の刑事が、悪い事をするのは、實際尤もだと思つた。

代助が父に逢つて、結婚の相談を受けた時も、少し是同様の気がした。が、これはたゞ父に信仰がない所から起る、代助に取つて不幸な暗示に過ぎなかつた。さうして代助は自分の心のうちに、かゝる忌はしい暗示を受けたのを、不徳義とは感じ得なかつた。それが事実となつて眼前にあらはれても、矢張り父を尤もだと肯ふ積りだつたからである。

代助は平岡に対しても同様の感じを抱いてゐた。然し平岡に取つては、それが当然な事であると許してゐた。たゞ平岡を好く氣になれない丈であつた。代助は兄を愛してゐた。けれども其兄に對しても矢張り信仰は有ち得なかつた。嫂は実意のある女であつた。然し嫂は、直接生活の難関に當らない丈、それ丈兄よりも近

付き易いのだと考へてゐた。

代助は平生から、此位に世の中を打遣つてゐた。だから、非常な神経質であるにも拘はらず、不安の念に襲はれる事は少なかつた。さうして、自分でもそれを自覺してゐた。夫が、何う云ふ具合か急に揺き出した。代助は之を生理上の變化から起るのだらうと察した。そこである人が北海道から採つて来たと云つて呉れたリリー、オフ、ゼ、ワレーの束を解いて、それを悉く水の中に浸して、其下に寐たのである。

十の二

一時間いちぢかんの後のち、代助は大きな黒い眼めを開あいた。其眼めは、しばらくの間あひだ一つ所に留とどまつて全く動うごかなかつた。手ても足あしも寐ねてゐた時の姿勢くづを少しも崩くづさずに、丸まるで死人しにんのその様ようであつた。其時一匹くろの黒い蟻ありが、ネルの襟えりを伝つはつて、代助の咽喉のどに落おちた。代助はすぐ右の手を動うごかして咽喉のどを抑おさへた。さうして、額ひたひしに皺しわを寄せ、指ゆびの股またに挟はさんだ小ちいさな動物はな物を、鼻はなの上うへ迄持もつて来きて眺ながめた。其時蟻あやゆびはもう死しんでゐた。代助は人指指ひとさしゆびの先さきに着ついた黒いものを、親指おやゆびの爪つめで向むかふはぢいた。さうして起おき上あがつた。
 膝ひざの周圍まわりに、まだ三四匹しひき這はつてゐたのを、薄うすい象牙ぱーぱーの紙ナイ小刀フで打ち殺ころした。それから手たを叩ひいて人ひとを呼よんだ。
 「御目醒ざめですか」と云つて、門野かどのがででて来きた。

「御茶でも入れて来ませうか」と聞いた。代助は、はだかつた胸むねを搔かき合せながら、

「君きみ、僕ぼくの寐ねてゐるうちに、誰だれか来きやしなかつたかね」と、静しづかな調子で尋ねた。

「えゝ、御出おいででした。平岡の奥さんが。よく御存ぞんじですな」と門か野どのは平氣に答へた。

「何故起なぜおこさなかつたんだ」

「余あんまり能よく御休おやすみでしたからな」

「だつて御客おきやくなら仕方しかたがないぢやないか」

代助の語勢は少し強くなつた。

「ですがな。平岡の奥さんの方ほうで、起おこさない方が好いいつて、仰おつし

やつたもんですからな」

「それで、奥さんは帰つて仕舞つたのか」

「なに帰つて仕舞つたと云ふ訳でもないんです。一寸神楽坂

に買物があるから、それを済まして又来るからつて、云はれる

もんですからな」

「ぢや又来るんだね」

「さうです。実は御目覚になる迄待つてゐやうかつて、此座敷迄

上つて来られたんですが、先生の顔を見て、あんまり善く寐てゐ

るもんだから、こいつは、容易に起きさうもないと思つたんでせ

う」

「また出て行つたのかい」

「えゝ、まあ左うです」

代助は笑ひながら、両手で寐起ねおきの顔かほを撫なでた。さうして風呂場へ顔かほを洗いひに行つた。頭あたまを濡ぬらして、椽側えんがは迄歸かへつて来て、庭にはを眺ながめてゐると、前まへよりは気分が大分晴だいぶせい々くした。曇くもつた空そらを燕つばめが二羽飛はんでゐる様さまが大いに愉快に見えた。

代助は此このまへ前平岡の訪問を受けてから、心待こゝろまちに、後あとから三千代の来くるのを待まつてゐた。けれども、平岡ひらをかの言葉は遂ついに事實として現あらはれて来こなかつた。特別の事情があつて、三千代がわざと来こないのか、又は平岡が始めはじから御世辞ごせじを使つかつたのか、疑問であるが、それがため、代助は心こゝろの何処どこかに空虚くうきよを感じてゐた。然し彼かれは此この空虚くうきよな感じを、一つの経験として日常生活中に見出みいだし

た迄で、其原因をどうするの、斯うするのと云ふ気はあまりなかつた。此経験自身の奥を覗き込むと、それ以上に暗い影がちらついてゐる様に思つたからである。

それで彼は進んで平岡を訪問するのを避けてゐた。散歩のとき彼の足は多く江戸川の方角に向いた。桜の散る時分には、夕暮の風に吹かれて、四つの橋を此方から向へ渡り、向から又此方へ渡り返して、長い堤を縫ふ様に歩いた。が其桜はとくに散て仕舞つて、今は緑蔭の時節になつた。代助は時々橋の真中に立つて、欄干に頬杖を突いて、茂る葉の中を、真直に通つてゐる、水の光を眺め尽して見る。それから其光の細くなつた先の方に、高く聳える目白台の森を見上て見る。けれども橋を向へ渡つて、

小石川の坂を上る事はやめにして帰る様になつた。ある時彼は大曲ほまがりの所で、電車を下る平岡の影を半町程手前から認めた。彼は慥たしかに左様に違さうないと思つた。さうして、すぐ揚場あげばの方へ引き返した。

彼は平岡の安否を氣にかけてゐた。まだ坐食あぐひの不安な境遇に居るに違ちがひないとは思ふけれども、或は何の方面かへ、生活の行路を切り開く手掛りが出来たかも知れないとも想像して見た。けれども、それを確める為ために、平岡の後を追ふ氣にはなれなかつた。彼は平岡に面するめんときの、原因不明な一種の不快を予想する様になつた。と云つて、たゞ三千代の為ためにのみ、平岡の位地を心配する程、平岡を悪にくんでもゐなかつた。平岡の為ためにも、矢張り平岡の

成功を祈る心はあつたのである。

十の三

斯^ふんな風^{ふう}に、代助は空虚なるわが心^{こころ}の一角^{いっかく}を抱^{いだ}いて今日^{こんにち}に至^{いた}つた。いま先^{さき}方^が門^{かど}野^のを呼^よんで括^くり枕^{まくら}を取り寄^よせて、午^{ひる}寐^ねを貪^{むさ}ぼつた時は、あまりに澆^き漑^{あを}たる宇宙^{いう}の刺激^{しつ}に堪^かえなくなつた頭^{あたま}を、出^で来るならば、蒼^{あを}い色^{いろ}の付^ついた、深^{ふか}い水^{みづ}の中^{なか}に沈^{しづ}めたい位^{くらい}に思^{おも}つた。それ程^{かれい}彼^のは命^{いのち}を鋭^すく感^{かん}じ過^すぎた。従^{したが}つて熱^{あつ}い頭^{あたま}を枕^{まくら}へ着^つけた時は、平岡^{へいおか}も三千代^{さんさんだい}も、彼^{かれ}に取^とつて殆^{おほ}んど存在^{そんざい}してゐなかつた。彼は幸^{さい}にして涼^{すず}しい心持^{こころもち}に寐^ねた。けれども其^{その}穩^{おだ}やかな眠^{ねむり}のうちに、誰^{だれ}か

すうと来て、又すうと出て行つた様な心持がした。眼を醒まして起き上がつても其感じがまだ残つてゐて、頭から拭ひ去る事が出来なかつた。それで門野を呼んで、寐てゐる間に誰か来はしないかと聞いたのである。

代助は両手を額に当てゝ、高い空を面白さうに切つて廻る燕の運動を椽側から眺めてゐたが、やがて、それが眼ま苦しくなつたので、室の中に這入つた。けれども、三千代が又訪ねて来ると云ふ目の前の予期が、既に気分の方調を冒してゐるので、思索も読書も殆んど手に着かなかつた。代助は仕舞に本棚の中から、大きな画帖を出して来て、膝の上に広げて、繰り始めた。けれども、それも、只指の先で順々に開けて行く丈であつた。一つ画を半

分とは味はつてゐられなかつた。やがてブランギンの所へ来た。

代助は平生から此裝飾画家に多大の趣味を有つてゐた。彼の眼は

常の如く輝を帯びて、一度は其上に落ちた。それは何処かの港の

図であつた。背景に船と檣と帆を大きく描いて、其余つた所に、

際立つて花やかな空の雲と、蒼黒い水の色をあらはした前に、

裸体の労働者が四五人ゐた。代助は是等の男性の、山の如くに怒

らした筋肉の張り具合や、彼等の肩から脊へかけて、肉塊と

肉塊が落ち合つて、其間に渦の様な谷を作つてゐる模様を見

て、其所にしばらく肉の力の快感を認めたが、やがて、画帖を開

けた儘、眼を放して耳を立てた。すると勝手の方で婆さんの声が

した。それから牛乳配達があきびんを鳴らして急ぎ足に出て行つた。

宅のうちが静かなので、鋭い代助の聴神経には善くこたへた。

代助はぼんやり壁を見詰めてゐた。門野をもう一返呼んで、三

千代が又くる時間を、云ひ置いて行つたか何うか尋ねやうと思つ

たが、あまり愚だから憚かつた。それ許ではない、人の細君が訪

ねて来るのを、それ程待ち受ける趣意がないと考へた。又それ程

待ち受ける位なら、此方から何時でも行つて話をすべきであると

考へた。此矛盾の両面を双対に見た時、代助は急に自己の没論

理に恥ぢざるを得なかつた。彼の腰は半ば椅子を離れた。けれど

も彼はこの没論理の根底に横はる色々の因数を自分で善く承知

してゐた。さうして、今の自分に取つては、この没論理の状態が、

唯一の事実であるから仕方ないと思つた。且、此事実と衝突する

論理は、自己に無関係な命題^{めいだい}を繋ぎ合^{つな}はして出来上^{あが}つた、自己の本体を蔑視する、形式に過ぎないと思つた。さう思つて又椅子^{こし}へ腰を卸した。

それから三千代の来る迄^く、代助はどんな風に時を過^{とき}したか、殆んど知らなかつた。表^{おもて}に女の声^{こゑ}がした時、彼は胸^{むね}に一鼓動^{いつこどう}を感じた。彼は論理に於て尤も強い代りに、心臓の作用に於て尤も弱い男であつた。彼が近來怒^{おこ}れなくなつたのは、全く頭^まの御蔭^{おかげ}で、腹^{はら}を立てる程自分を馬鹿^{ばか}にすることを、理智^{りち}が許^{ゆる}さなくなつたからである。が其他の点に於ては、尋常以上^{しよ}に情緒の支配を受けるべく余儀なくされてゐた。取次^{とりつぎ}に出た門野^{かどの}が足音^{あしおと}を立て、書齋^{しよさい}の入口^{いりぐち}にあらはれた時、血色^{けつしよく}のいゝ代助の頬^ほは微^{かす}かに

つやうしな
光沢を失つてゐた。門野は、

「此方こつちにしますか」と甚だ簡単に代助の意向を確たしかめた。座敷へ案内するか、書齋で逢ふかと聞くのが面倒だから、斯かう詰つめて仕舞つたのである。代助はうんと云つて、入口いりぐちに返事を待まつてゐたかどの門野を追ひ払はらふ様に、自分で立つて行いつて、椽側へ首くびを出だした。三千代は椽側と玄関げんくわんの継目つぎめの所に、此方こちらを向むいてためらつて居ゐた。

十の四

三千代の顔かほは此このまへ前逢あつた時ときよりは寧ろ蒼白あをしろかつた。代助に眼め

と顎あごで招かれて書齋まねの入口いりぐちへ近寄ちかよつた時、代助は三千代の息いきを喘はづましてゐることに気が付いた。

「何どうかしましたか」と聞きいた。

三千代は何なににも答へずに室へやの中なかに這入はいて来きた。セルの单衣ひとへの下したに襦袢かきを重ねて、手てに大きな白ゆり百合はなの花を三本許提ばかりげてゐた。
其その百合ゆりをいきなり洋卓テーブルの上うへに投なげる様ように置おいて、其横よこにある椅いす子すへ腰こしを卸おろした。さうして、結ゆつた許ばかりの銀杏返がへしを、構かまはず、椅子いすの脊せに押おし付けて、

「あゝ苦くるしかつた」と云ひながら、代助の方を見て笑わらつた。代助は手たを叩たたいて水みづを取り寄せ様よとした。三千代は黙だまつて洋卓テーブルの上うへを指さした。其所そこには代助の食後しよくごの嗽うがひをする硝子がらすの洋盃コップがあつた。

なか みづ 中に水が 二一口 ふたくちばかり 許残つてゐた。

「奇麗なんでせう」と三千代が聞いた。

「此奴は先刻僕が飲んだんだから」と云つて、洋盃を取り上げたが、蹢躅した。代助の坐つてゐる所から、水を棄てやうとする
と、障子の外に硝子戸が一枚邪魔をしてゐる。門野は毎朝椽側
の硝子戸を一二枚宛開けないで、元の通りに放つて置く癖があつた。
代助は席を立て、椽へ出て、水を庭へ空けながら、門野を呼ん
だ。今ゐた門野は何処へ行つたか、容易に返事をしなかつた。代
助は少しまごついて、又三千代の所へ歸つて来て、
「今すぐ持つて来て上げる」と云ひながら、折角空けた洋盃を其
儘洋卓の上に置いたなり、勝手の方へ出て行つた。茶の間を通

ると、門野^{かどの}は無細工な手をして錫^{すず}の茶壺^{ちやつぼ}から玉露^{つま}を撮^とみ出^だしてゐた。代助^すの姿^{すがた}を見て、

「先生^{ぢき}、今直^{いま}です」と言^い訳^{ひわけ}をした。

「茶^あは後^{あと}でも好^いい。水^{みづ}が要^いるんだ」と云つて、代助は自分で台所へ出^でた。

「はあ、左様^{さう}ですか。上^あがるんですか」と茶壺^{ちやつぼ}を放^だり出して門野^{かどの}も付^ついて来^きた。二人^{ふたり}で洋盃^{コップ}を探^{さが}したが一寸^{ちよつと}見付^みからなかつた。婆^ばさんはと聞くと、今御客^{ごきやく}さんの菓子^{かし}を買^かひに行^いつたといふ答^{こた}であつた。

「菓子^{かし}がなければ、早く買^かつて置^おけば可^いいのに」と代助は水道^{すいどう}の栓^{せん}を振^{ねぢ}つて湯^ゆ呑^ねに水^{みづ}を溢^{あふ}らせながら云^いつた。

「つい、小母をばさんに、御客さんの呉くる事を云つて置かなかつたものですからな」と門野かどのは氣の毒さうに頭あたまを搔かいた。

「ぢや、君が菓子を買かひに行けば可いいのに」と代助は勝手かつてを出でながら、門野かどのに當あたつた。門野はそれでも、まだ、返事をした。

「なに菓子ほかの外ほかにも、まだ色々買物いろ／＼かひがあるつて云ふもんですか
らな。足あしは悪わるし天氣は好よくないし、廃よせば好いいんですのに」

代助は振ふり向きもせず、書齋もとへ戻もどつた。敷居しきゐを跨またいで、中なかへ這入はいるや否や三千代の顔かほを見ると、三千代は先刻さつき代助の置おいて行いつた洋盃コップを膝うへの上に両手で持つてゐた。其洋盃コップの中には、代助が庭にはへ空あけたと同じ位みづに水みづが這入はいつてゐた。代助は湯呑もを持つた儘まま、茫然として、三千代の前まへに立たつた。

「何^どうしたんです」と聞^きいた。三千代は例^{いづも}の通り落ち付いた調子で、

「難^{ありがた}有^う。もう沢山。今あれを飲んだの。あんまり奇麗だつたから」と答へて、リリー、オフ、ゼ、ワレーの漬^つけてある鉢^{はちかへり}を顧^みみた。代助は此大鉢^{おほはち}の中^{なか}に水を八分目程張^はつて置いた。妻楊枝^{つま}位^{ばい}な細^{ほそ}い茎^{くき}の薄^{うす}青^{あを}い色^{いろ}が、水^{みづ}の中^{なか}に揃^{そろ}つてゐる間^{あひだ}から、陶^{やきも}器^のの模^ほ様^のが仄^うかに浮^ういて見えた。

「何^{なぜ}故^なあんなものを飲んだんですか」と代助は呆^{あき}れて聞^きいた。

「だつて毒^{どく}ぢやないでせう」と三千代は手^もに持^もつた洋盃^{コップ}を代助の前^{まへ}へ出^だして、透^すかして見^みせた。

「毒^{どく}でないつたつて、もし二日^{ふつか}も三日^{みつか}も経^たつた水^{みづ}だつたら何^どうす

るんです」

「いえ、先刻^{さつき}来た時、あの傍^{そば}迄^{かほ}顔^もを持つて行つて嗅^かいで見たの。

其時^{そのはち}、たつた今^{みづ}鉢^{みづ}へ水を入れて、桶^{おけ}から移^{うつ}した許^{ばかり}だつて、あ
 の方^{かた}が云^{だま}つたんですもの。大丈夫だわ。好^いい香^{にほひ}ね」

代助は黙^{だま}つて椅子へ腰^{こし}を卸^{うな}した。果^しして詩^{ため}の為^{はち}に鉢^{はち}の水を呑^のん

だのか、又は生理上^での作用^{ぜんしや}に促^{うな}がされて飲^のんだのか、追窮^{てら}する勇^{ゆう}気も出^でなかつた。よし前^{ぜん}者^{しや}とした所で、詩^{てら}を銜^はつて、小説^{てら}の真^ま

似^になぞをした受^う売^{けうり}の所作^{しや}とは認め^められなかつたからである。そ

こで、たゞ、

「気分はもう好^よくなりましたか」と聞^きいた。

十の五

三千代の頬ほに漸はやく色いろがで出でて来きた。袂たもとから手ハンケチ帛ハンケチを取り出だして、口くちの辺あたりを拭ふきながら話はなしを始はじめた。——大抵たいていは伝通院前でんつういんまへから電車でんしゃへ乗のつて本郷迄ほんきょう買物かひものに出でるんだが、人ひとに聞きいて見みると、本郷の方ほんきょうのほうは神楽坂かぐらざかに比くらべて、何どうしても一割ひとわりか二割物ものが高たかいと云いふので、此このあひだ間まから一二度いちにど此方こつちの方ほうへ出でて来きて見みた。此このまへ前まへも寄よる筈はずであつたが、つい遅おそくなつたので急いそいで帰かへつた。今日けふは其積つもりで早はやく宅うちを出でた。が、御息おやすみ中ちゆうだったので、又また通とほり迄行いつて買物かひものを済すまして帰かへり掛かけに寄よる事ことにした。所ところが天気模わり様が悪わるくなつて、藁わ店だなを上あがり掛かけるとぽつ／＼降ふり出だした。傘かさを持もつて来こなかつ

たので、濡れまいと思つて、つい急ぎ過ぎたものだから、すぐ身体に障つて、息が苦しくなつて困つた。――

「けれども、慣れつこに為てるんだから、驚ろきやしません」と云つて、代助を見て淋しい笑ひ方をした。

「心臓の方は、まだ悉皆善くないんですか」と代助は氣の毒さうな顔で尋ねた。

「悉皆善くなるなんて、生涯駄目ですわ」

意味の絶望な程、三千代の言葉は沈んでゐなかつた。織い指を反して穿めてゐる指環を見た。それから、手帛を丸めて、又袂へ入れた。代助は眼を俯せた女の額の、髪に連なる所を眺めてゐた。

すると、三千代は急に思ひ出した様に、此間の小切手の礼を述べ出した。其時何だか少し頬を赤くした様に思はれた。視感の鋭敏な代助にはそれが善く分つた。彼はそれを、貸借に關係した羞恥の血潮とのみ解釈した。そこで話をすぐ他所へ外した。

先刻三千代が提げて這入て来た百合の花が、依然として洋卓の上に載つてゐる。甘たる強い香が二人の間に立ちつゝあつた。代助は此重苦しい刺激を鼻の先に置くに堪へなかつた。けれども無断で、取り除ける程、三千代に対して思ひ切つた振舞が出来なかつた。

「此花は何うしたんです。買って来たんですか」と聞いた。三千

代は黙^{だま}つて首肯^{うなづ}いた。さうして、

「好^いい香^{にほひ}でせう」と云つて、自分の鼻^{はな}を、瓣^{はなびら}の傍^{そば}迄持^もつて来^きて、ふんと嗅^かいで見せた。代助は思はず足^{あし}を真直^{まつすぐ}に踏^ふん張^ばつて、身^みを後^{うしろ}の方^そへ反^そらした。

「さう傍^{そば}で嗅^かいぢや不可^{いけ}ない」

「あら何故^{なぜ}」

「何故^{なぜ}つて理由もないんだが、不可^{いけ}ない」

代助は少し眉をひそめた。三千代は顔をもとの位地に戻した。

「貴方^{あなた}、此花^{このはな}、御嫌^{おきらひ}なの？」

代助は椅子の足^{あし}を斜^なに立^たてゝ、身体^{からだ}を後^{うしろ}へ伸^のばした儘、答^{こた}へをせ

ずに、微笑^{えいごう}して見せた。

「ぢや、買^かつて来^こなくつても好^よかつたのに。詰^{つま}らないわ、回^まり路^{みち}をして。御^{まけ}負^{あめ}に雨^ふに降^{そく}られ損^{そく}なつて、息^{いき}を切^きらして」

雨^{あめ}は本^ふ当^ふに降^ふつて来^こた。雨^{あまたれ}滴^たが樋^{あつ}に集^{あつ}まつて、流^{おと}れる音^{おと}がざ

あ^{きこ}と聞^きえた。代^あ助^はは椅子^あから立^あち上^あがつた。眼^めの前^{まへ}にある百^あ合^はの束^{たば}を取り上^あげて、根^ね元^{もと}を括^くつた濡^ぬ藁^れを撈^{むし}り切^きつた。

「僕^{おほ}に呉^はれたのか。そん^ななら早^なく活^いけやう」と云^いひながら、すぐ先^{さつ}刻^きの大^{おほ}鉢^{はち}の中^{なか}に投^なげ込^こんだ。茎^{くき}が長^{なが}すぎるので、根^ねが水^{みづ}を跳^はねて、飛^とび出^だしさうになる。代^あ助^はは滴^{した}る茎^{くき}を又^{また}鉢^{はち}から抜^ぬいた。さうして洋^{テー}卓^{ブル}の引^ひ出^{きだ}しから西^は洋^さ鋏^{さみ}を出^だして、ぷつりくと半^{はん}分^{ぶん}程^{ほど}の長^{なが}さに剪^きり詰^{つま}めた。さうして、大^{はな}きな花^{はな}を、リリ、オフ、ぜ、ワレーの簇^{むら}がる上^{うへ}に浮^うかした。

「さあ是これで好いい」と代助は鉢はさみを洋卓テーブルの上に置いた。三千代は此不思議に無作法に活いけられた百合を、しばらく見てゐたが、突とつ然ぜ、

「あなた、何時いつから此花が御嫌きらひになつたの」と妙な質問をかけた。昔し三千代の兄あにがまだ生いきてゐる時分、ある日何なにかのはづみに、長い百合ゆりを買かつて、代助が谷中やなかの家を訪ねた事があつた。其時そのとき彼は三千代に危あやしげな花瓶はないけの掃除をさして、自分で、大事さうに買きつて来た花はなを活いけて、三千代にも、三千代の兄あににも、床とこへ向むき直ほつて眺めながめさせた事があつた。三千代はそれを覚えてゐたのである。

「貴方あなただつて、鼻はなを着つけて嗅かいで入らしつたちやありませんか」

と云つた。代助はそんな事があつた様にも思つて、仕方なしに苦笑した。

十の六

そのうち雨は益あめますんか深ふかくなつた。家を包いへんで遠つゝい音が聴おとえた。門野かどのが出て来でて、少すこし寒さむい様さむですな、硝子戸がらすどを閉しめませうかと聞きいた。硝子戸がらすどを引ひく間あひだ、二人は顔かほを揃そろえて庭にはの方みを見てゐた。青あをい木きの葉はが悉ことごとく濡ぬれて、静しづかな湿しめり氣けが、硝子越がらすごしに代助の頭あたまに吹ふき込こんで来きた。世よの中なかの浮ういてゐるものは残のこらず大地だいちの上うへに落おち付ついた様ように見みえた。代助は久ひさし振ぶりで吾われに返かへつた心持こころもちがした。

「好い雨ですね」と云つた。

「些とも好かないわ、私、草履を穿いて来たんですもの」

三千代は寧ろ恨めしさうに樋から洩る雨点を眺めた。

「歸りには車を云ひ付けて上げるから可いでせう。緩りなさい」

三千代はあまり緩り出来さうな様子も見えなかつた。まともに、

代助の方を見て、

「貴方も相変らず呑気な事を仰しやるのね」と窘めた。けれども

其眼元には笑の影が泛んでゐた。

今迄三千代の陰に隠れてぼんやりしてゐた平岡の顔が、此時明

らかに代助の心の瞳に映つた。代助は急に薄暗がりから物に襲は

れた様な気がした。三千代は矢張り、離れ難い黒い影を引き摺つ

て歩いてゐる女であつた。

「平岡君は何うしました」とわざと何気なく聞いた。すると三千代の口元が心持締つて見えた。

「相変らずですわ」

「まだ何にも見付らないんですか」

「その方はまあ安心なの。来月から新聞の方が大抵出来るらしいんです」

「そりや好かつた。些とも知らなかつた。そんなら当分夫で好いぢやありませんか」

「えゝ、まあ難有いわ」と三千代は低い声で真面目に云つた。代助は、其時三千代を大変可愛く感じた。引き続いて、

「彼方あつちの方は差しあた当り責められる様な事もないんですか」と聞きいた。

「彼方あつちの方ほうつて——」と少すこし逡巡ためらつてゐた三千代は、急きうに顔かほを赧あからめた。

「私わたし、実は今日けふ夫それで御詫おわびに上あつたのよ」と云いひながら、一度俯向うつむいた顔を又あ上げた。

代助は少しでも氣不味きまづい様子を見せて、此上にも、女の優やさしい血潮うづを動うごかすに堪えなかつた。同時に、わぎと向むかふの意を迎へる様な言葉を掛かけて、相手を殊更に氣の毒がらせる結果を避けた。

それで静かに三千代の云ふ所を聴いた。

先達せんだつての二百円は、代助から受取うけとるとすぐ借しやく錢せんの方まはへ回

す筈^{はず}であつたが、新^{あた}らしく家^{うち}を持^もつた為^{ため}、色^{いろ}々々入費^{はし}が掛^かつたので、つい其方の用を、あのうちで幾分か弁^{べん}じたのが始^{はじ}りであつた。あととは思つてゐると、今度^{こんど}は毎日の活計^{くわし}に追^おはれ出^だした。自分ながら好^い心^{こころ}持^{もち}はしなかつたけれども、仕方^{しかた}なしに困^{こま}るとは使^{つか}ひ、困^{こま}るとは使^{つか}ひして、とう／＼荒増^{あらまし}亡^なくして仕舞^しつた。尤もさうでもしなければ、夫婦^{こんにち}は今日迄^か斯^かうして暮^くらしては行^いけなかつたのである。今から考へて見ると、一層^{いつそ}の事無^なければ無^ないなり、何^どうか斯^かうか工面^{くめん}も付^ついたかも知れないが、なまじい、手元^{てもと}に有^あつたものだから、苦^{くる}し紛^{まぎ}れに、急場^{きうば}の間に合^あはして仕舞^しつたので、肝心の証書を入れた借^{しゃく}錢^{せん}の方は、いまだに其儘^{まま}にしてある。是^{むし}は寧^{むし}ろ平岡^{へらおか}の悪^{わる}いのではない。全く自分の過^{あやまち}である。

「わたしほんとうす
私、本当に済まない事をしたと思つて、後悔してゐるのよ。けれども拝借するときは、決して貴方あなたを瞞だまして嘘うそを吐く積つもりやなかつたんだから、堪忍かんにんして頂戴」と三千代は甚だ苦くるしさうに言いひわけをけした。

「何どうせ貴方あなたに上あげたんだから、何どう使つかつたつて、誰だれも何とも云ふ訳はないでせう。役やくにさへ立たてば夫それで好いいぢやありませんか」と代助は慰なぐさめた。さうして貴方あなたといふ字をことさらに重おもく且かつつ緩ゆるく響ひびかせた。三千代はたゞ、

「私わたし、夫それで漸く安心したわ」と云つた丈であつた。

雨しきりが頻しきりなので、帰かへるときには約束通り車くるまを雇かつた。寒さむいので、セルの上うへへ男の羽織きを着きせやうとしたら、三千代は笑つて着きな

つた。

十一の一

何時いつの間まにか、人ひとが紹しやうの羽織えりを着きて歩あるく様になつた。二三日、
 宅うちで調しらべ物ものをして庭には先さきより外ほかに眺ながめなかつた代助は、冬帽ふゆぼうしを
 被かぶつて表おもてへ出でて見みて、急に暑あつさを感じた。自分もセルを脱ぬがなけ
 ればならないと思つて、五六町歩あるくうちに、裕あはせを着きた人ひとに二人出ふたりで
 逢あつた。左様さうかと思ふと新らしい氷屋こおりやで書生コッブが洋盃コップを手てにして、
 冷つめたさうなものを飲のみんでゐた。代助は其時誠太郎を思おもひ出だした。
 近頃代助は元もとよりも誠太郎が好すきになつた。外ほかの人にんげん間はなと話はなし

てゐると、人間の皮と話す様で齒痒くつてならなかつた。けれども、顧みて自分を見ると、自分は人間中で、尤も相手を齒痒がらせる様に拵えられてゐた。是も長年生存競争の因果に曝された罰かと思ふと余り難有い心持はしなかつた。

此頃誠太郎はしきりに玉乗りの稽古をしたがつてゐるが、それは、全く此間浅草の奥山へ一所に連れて行つた結果である。あの一図な所はよく、嫂の気性を受け継いでゐる。然し兄の子丈あつて、一図なうちに、何処か逼らない鷹揚な氣象がある。誠太郎の相手をしてゐると、向ふの魂が遠慮なく此方へ流れ込んで来るから愉快である。實際代助は、昼夜の区別なく、武装を解いた事のない精神に、包圍されるのが苦痛であつた。

誠太郎は此この春から中学校へ行き出した。すると急に脊丈せたいが延のびて来る様ように思はれた。もう一二年すると声こゑが変かはる。それから先さき何どんな径路けいろを取つて、生長するかわからないが、到底人間にんげんとして、生存する為ためには、人間から嫌はれると云ふ運命に到着するに違ちがひない。其時そのとき、彼は穩やかかれ おだに人の目に着つかない服装をして、乞食こじきの如く、何物をか求めつゝ、人ひとの市いちをうろついて歩くだらう。

代助は堀端ぼたへ出た。此間このあひだ迄向むかふの土手にむら躑躅つづぢが、団団だんだんと紅白はくの模様を青い中なかに印してゐたのが、丸で跡形あとかたもなくなつて、のべつに草が生おい茂つてゐる高い傾斜うへの上に、大きな松まつが何十本となく並んで、何処どこ迄もつゞいてゐる。空そらは奇麗きれいに晴はれた。代助は電車でんしゃに乗のつて、宅うちへ行つて、嫂あによめに調戲からかつて、誠太郎と遊

ぼうと思つたが、急に厭いやになつて、此松このまつを見ながら、草臥くたびれる

所迄堀端ほりばたを伝つたつて行く氣になつた。

新見付しんみつけへ来ると、向むかふから来たり、此方こつちから行つたりする電車

が苦くになり出だしたので、堀ほりを横切よこぎつて、招魂社の横よこから番町へ出で

た。そこをぐる／＼回まはつて歩いてゐるうちに、かく目的なしに歩ある

いてゐる事ことが、不意に馬鹿らしく思はれた。目的があつて歩あるくも

のは賤民だと、彼かれは平生から信じてゐたのであるけれども、此場

合かぎに限つて、其賤民の方が偉えらい様な氣がした。全まつたく、又アンニ

ユイに襲はれたと悟つて、歸かへりだした。神樂坂へかゝると、ある

商店で大きな蓄音器を吹かしてゐた。其音そのおとが甚きんぞくしく金属性の

刺激を帯びてゐて、大いに代助の頭あたまに應こたへた。

家の門いへもんを這入はいると、今度は門野かどのが、主人の留守を幸ひと、大きな声で琵琶歌をうたつてゐた。夫それでも代助の足音あしおとを聞きいて、ぴたりと已やめた。

「いや、御早うがしたな」と云つて玄関へ出でて来きた。代助は何にも答へずに、帽子を其所そこへ掛かけた儘、椽側から書齋へ這入はいつた。さうして、わざ／＼障子を締め切つた。つゞいて湯呑ゆのみに茶を注ついで持つて来きた門野が、

「締めときですか。暑あつありませんか」と聞きいた。代助は袂たもとからハンケチハンケチを出だして額ひたひを拭ぬいてゐたが、矢つ張り、

「締めて置いてくれ」と命令した。門野は妙な顔をして障子を締めして出でて行つた。代助は暗くらくした室へやのなかに、十分許じつぶんばかりぽかん

としてゐた。

彼は人の羨ひと うらやむ程光沢つやの好い皮膚ひふと、労働者に見出しがたい様に柔かな筋肉を有もつた男であつた。彼は生れて以来、まだ大病と名のつくものを経験しなかつた位、健康に於て幸福を享うけてゐた。彼はこれでこそ、生甲斐いきがひがあると信じてゐたのだから、彼の健康は、彼に取つて、他人たにんの倍以上に価値を有もつてゐた。彼の頭あたまは、彼の肉体と同じく確たしかであつた。たゞ始終論理に苦しめられてゐたのは事実である。それから時々とき／＼、頭あたまの中心ちゅうしんが、大弓だいきうの的まとの様に、二重にぢうもしくは三三重さんぢうにかさなる様に感ずる事があつた。ことに、今日けふは朝あさから左様そんな心持がした。

十一の二

代助が默然^{もくねん}として、自己^{じこ}は何の爲^{ため}に此世^{このよ}の中に生^なれて来^うたかを考へるのは斯^かう云ふ時であつた。彼は今迄何遍も此大問題^{だいもんじ}を捕^{とら}へて、彼の眼^か前^{がんぜん}に据ゑ付けて見た。其動機^{どうき}は、単^{たん}に哲学上の好奇心^{きうしん}から来^きた事もあるし、又世間^{せけん}の現象^{げんしょう}が、余^{あま}りに複雑^{ふくざつ}な色彩^{しきさい}を以て、彼の頭^かを染め付けやうと焦^{あせ}るから来^くる事もあるし、又最後^{さいご}には今日^{こんにち}の如くアンニユイの結果^{けつが}として来^くる事もあるが、其都度^{つど}彼は同じ結論^{けつろん}に到着^{とちやく}した。然し其結論^{けつろん}は、此問題^{このもんじ}の解決^{けっけつ}ではなくつて、寧ろ其否定^{ひてい}と異ならなかつた。彼の考^{こう}によると、人間^{人間}はある目的^{もくてき}を以て、生れたものではなかつた。之^{これ}と反対^{はんたい}に、生^うま

れた人間にんげんに、始めてある目的が出来て来るのであつた。最初から客観的にある目的を搾こしらえて、それを人間にんげんに附着するのは、其人にんげん間の自由な活動を、既に生れる時に奪つたと同じ事になる。だから人間にんげんの目的は、生れた本人が、本人自身に作つたものでなければならぬ。けれども、如何な本人でも、之を随意に作る事は出来ない。自己存在の目的は、自己存在の経過が、既にこれを天下に向つて発表したと同様だからである。

此根本義から出立した代助は、自己本来の活動を、自己本来の目的としてゐた。歩あるきたいから歩あるく。すると歩あるくのが目的になる。考へたいから考へる。すると考へるのが目的になる。それ以外の目的を以て、歩あるいたり、考かんがへたりするのは、歩行と思考の墮落に

なる如く、自己の活動以外に一種の目的を立て、活動するのは活動の墮落になる。従つて自己全体の活動を挙げて、これを方便の具に使用するものは、自ら自己存在の目的を破壊したも同然である。

だから、代助は今日迄、自分の脳裏に願望、嗜欲が起るたび毎に、是等の願望、嗜欲を遂行するのを自己の目的として存在してゐた。二個の相容れざる願望、嗜欲が胸に闘ふ場合も同じ事であつた。たゞ矛盾から出る一目的の消耗と解釈してゐた。これを煎じ詰めると、彼は普通に所謂無目的な行為を目的として活動してゐたのである。さうして、他を偽らざる点に於てそれを尤も道德的なものと心得てゐた。

此主義を出来る丈遂行する彼は、其遂行の途中で、われ知らず、自分のとうに棄却した問題に襲はれて、自分は今何の為に、こんな事をしてゐるのかと考へ出す事がある。彼が番町を散歩しながら、何故散歩しつゝあるかと疑つたのは正に是である。

其時彼は自分ながら、自分の活力の充実に事がない事に気がつく。餓へたる行動は、一気に遂行する勇氣と、興味に乏しいから、自ら其行動の意義を途中で疑ふ様になる。彼はこれをアンニユイと名けてゐた。アンニユイに罹ると、彼は論理の迷乱を引き起すものと信じてゐた。彼の行為の中途に於て、何の為に云ふ、冠履顛倒の疑を起させるのは、アンニユイに外ならなかつたからである。

彼は^{かれ}立て切^{たき}つた室^{へや}の中^{なか}で、一二度頭^{あたまた}を抑^{おさ}えて振^ふり動^{うご}かして見た。彼は^{むかし}昔^{こゝろ}から今日迄^{こんにち}の思索家^{しはしは}の、屢^{しばしば}繰^{かへ}り返^{かへ}した無意義^{むぎぎ}な疑義^{ぎぎ}を、又^{また}脳裏^{のうり}に拈^{ねん}定^{てい}するに堪^かえなかつた。その姿^{すがた}のちらりと眼^{がん}前^{ぜん}に起^{おこ}つた時、またかと云ふ具合^{ぐがひ}に、すぐ切^きり棄^すてゝ仕舞^{しまい}つた。同時に彼は自己^{じこ}の生活力^{せいかうりき}の不足^{ふそく}を劇^{げき}しく感^{かん}じた。従^{したが}つて行^{ぎやう}為^ゐ其物^{そのもの}を目的^{もくてき}として、円満^{えんまん}に遂行^{すいぎやう}する興味^{きやうみ}も有^もたなかつた。彼はたゞ一人^{ひとり}荒野^{こうや}の中^{うち}に立^たつた。茫然^{まうぜん}としてゐた。

彼は高尚^{こうかう}な生活欲^{せいかうりき}の満足^{まんじつ}を冀^{ねが}ふ男^{おとこ}であつた。又ある意味^{いみ}に於^おて道義欲^{だうぎりき}の満足^{まんじつ}を買^かはうとする男^{おとこ}であつた。さうして、ある点^{てん}へ来^くると、此二つのものが火花^{ひばな}を散^ちらして切^きり結^{むす}ぶ関^{くわん}門^{もん}があると予想^{よそう}してゐた。それで生活欲^{せいかうりき}を低い程度^{ていど}に留^{とど}めて我慢^{まんまん}してゐた。

彼の室は普通の日本間であつた。是と云ふ程の大した裝飾もなかつた。彼に云はせると、額さへ氣の利いたものは掛けてなかつた。色彩として眼を惹く程に美しいのは、本棚に並べてある洋書に集められたと云ふ位であつた。彼は今此書物の中に、茫然として坐つた。良あつて、これほど寐入つた自分の意識を強烈にするには、もう少し周囲の物を何うかしなければならぬと、思ひながら、室の中をぐる／＼見廻した。それから、又ぼかんとして壁を眺めた。が、最後に、自分を此薄弱な生活から救ひ得る方法は、たゞ一つあると考へた。さうして口の内で云つた。

「矢つ張り、三千代さんに逢はなくちや不可ん」

十一の三

彼は足の進まない方角へ散歩に出たのを悔いた。もう一遍出直して、平岡の許迄行かうかと思つてゐる所へ、森川町から寺尾が来た。新らしい麦藁帽を被つて、閑静な薄い羽織を着て、暑い／＼と云つて赤い顔を拭いた。

「何だつて、今時分来たんだ」と代助は愛想もなく云ひ放つた。彼と寺尾とは平生でも、この位な言葉で交際してゐたのである。

「今時分が丁度訪問に好い刻限だらう。君、又昼寐をしたな。どうも職業のない人間は、惰弱で不可ん。君は一体何の為に生れて来たのだつたかね」と云つて、寺尾は麦藁帽で、しきりに胸の

あたりへ風かぜを送おくつた。時候はまだ夫程暑くないのだから、此所作は頗る愛嬌を添へた。

「何ための爲うまに生れて来きやうと、余計な御世話だ。夫それより君こそ何しに來きたんだ。又「此所十日許こゝとほかばかりあひだの間」ぢやないか、金かねの相談ならもう御免だよ」と代助は遠慮なく先へ斷つた。

「君も随分礼義を知らない男だね」と寺尾は已を得ず答へた。けれども別段感情を害した様子も見えなかつた。實を云ふと、此位な言葉は寺尾に取つて、少しも無礼とは思へなかつたのである。代助は黙だまつて、寺尾の顔かほを見てゐた。それは、空むなしい壁かべを見てゐるより以上の何等の感動をも、代助に与へなかつた。

寺尾は懷ふところから汚きたない仮綴かりとぢの書物を出だした。

「是を訳さなけりやならないんだ」と云つた。代助は依然として黙つてゐた。

「食ふに困らないと思つて、さう無精な顔をしなくつて好からう。もう少し判然として呉れ。此方は生死の戦だ」と云つて、寺尾は小形の本をとんと椅子の角で二返敲いた。

「何時迄に」

寺尾は、書物の頁をさらりと繰つて見せたが、断然たる調子で、

「二週間」と答へた後で、「何うでも斯うでも、夫迄に片付なけりや、食へないんだから仕方がない」と説明した。

「偉い勢だね」と代助は冷かした。

「だから、本郷からわぎ／＼遣つて来たんだ。なに、金は借りな
くても好い。——貸せば猶好いが——夫より少し分らない所があ
るから、相談しやうと思つて」

「面倒だな。僕は今日は頭が悪くつて、そんな事は遣つてゐられ
ないよ。好い加減に訳して置けば構はないぢやないか。どうせ原
稿料は頁で呉れるんだらう」

「なんぼ、僕だつて、さう無責任な翻訳は出来ないだらうぢやな
いか。誤訳でも指摘されると後から面倒だあね」

「仕様がないな」と云つて、代助は矢つ張り横着な態度を維持し
てゐた。すると、寺尾は、

「おい」と云つた。「冗談ぢやない、君の様に、のらくら遊んで

る人は、たまには其位な事でも、しなくつちや退屈で仕方がない
ひと
だらう。なに、僕だつて、本の善く読める人の所へ行く気なら、
ほん よ
わざ／＼君の所迄来やしない。けれども、左んな人は君と違つて、
き
みんな忙しいんだからな」と少しも辟易した様子を見せなかつた。
いそが すこ
代助は喧嘩をするか、相談に応ずるか何方かだと覺悟を極めた。
どつち
彼の性質として、斯う云ふ相手を輕蔑する事は出来るが、怒り付
か おこ
ける気は出せなかつた。
だ
「ぢや成るべく少しに仕様ぢやないか」と断つて置いて、符号の
すこ
附けてある所丈を見た。代助は其書物の梗概さへ聞く勇氣がなかつた。
ことわ
相談を受けた部分にも曖昧な所は沢山あつた。寺尾は、
あいまい
やがて、

「やあ、難有う」と云つて本を伏せた。

「^{わか}分らない所は何^{どう}する」と代助が聞^きいた。

「なに何^{どう}かする。——誰^{だれ}に聞^きいたつて、さう善^{わか}く分^{わか}りやしまい。

第一時間^{じかん}がないから已を得ない」と、寺尾は、誤訳よりも生活費の方が大事件である如く天^{てん}から極めてゐた。

相談が済^すむと、寺尾は例によつて、文学談を持ち出^だした。不思

議な事に、さうなると、自己の翻訳とは違^{ちが}つて、いつもの通り非

常に熱心になつた。代助は現今の文学者の公けにする創作のうち

にも、寺尾の翻訳と同じ意味のものが沢山あるだらうと考へて、

寺尾の矛盾を可^お笑^かしく思つた。けれども面倒だから、口^{くち}へは出^ださ

なかつた。

寺尾の御蔭で、代助は其日とう／＼平岡へ行きはぐれて仕舞つた。

十一の四

晩食ばんめしの時とき、丸善から小包こづゝみが届とどいた。箸はしを措おいて開あけて見ると、余程前したに外国へ注文した二三の新刊書であつた。代助はそれを腋わきの下したに抱かへ込こんで、書齋へ歸つた。一冊づゝ順々に取り上あげて、暗くらいながら二三頁ページ、捲はぐる様に眼めを通とほしたが何処どこも彼の注意を惹ひく様な所はなかつた。最後の一冊に至つては、其名前さへ既に忘れてゐた。何れいづ其そのうち中讀む事にしやうと云ふ考で、一所に纏まとめた儘、

立つて、本棚うへの上に重ねて置いた。椽側そとうかどから外を窺うと、綺麗な空そらが、高い色いろを失うしひかけて、隣となりの梧桐ごとうの一ひと際は濃く見える上うへに、薄うすい月つきがで出てゐた。

そこへ門野かどのが大きな洋燈ランプを持つて這入はいつて来た。それには絹きぬち縮ぢみのやう様に、豎たてに溝みぞの入いつた青い笠かさが掛かけてあつた。門野かどのはそれを洋卓テーブルの上うへに置おいて、又椽側でへ出たが、出掛でかけに、

「もう、そろ／＼螢ほたるがで出る時分ですな」と云つた。代助は可笑をかな顔かほをして、

「まだ出でやしまい」と答へた。すると門野かどのは例の如く、

「左様さうでしやうか」と云ふ返事をしたが、すぐ真面目まじめな調子で、
 「螢ほたるてえものは、昔むかしは大分流行だいぶんはやつたもんだが、近來あまは余り文士方がたが

騒^{さわ}がない様になりましたな。何^どう云ふもんでせう。蛩^{ほととぎす}だの鳥^{からす}だの

つて、此^{このころ}頃^{ころ}ぢやついぞ見た事がない位なもんだ」と云つた。

「左^{さう}様^{さま}さ。何^どう云ふ訳^{わけ}だらう」と代助も空^{そら}つとぼけて、真面目な

挨拶をした。すると門^{かど}野^のは、

「矢^やつ張^{はり}り、電氣燈に圧倒されて、段々退却するんでせう」と云

ひ終^{みづ}つて、自^{みづ}から、えへゝゝと、洒^{しやれ}落^れの結末をつけて、書生部屋

へ歸^{かへ}つて行^いつた。代助もつゞいて玄關迄^で出^でた。門^{ふりかへつ}野^はは振^{ふりかへつ}返^{かへつ}た。

「また御出掛^{でかけ}ですか。よござんす。洋燈^{ランプ}は私^{わたくし}が氣を付^つけますから。

——小母^{をば}さんが先刻^{さつき}から腹^{はら}が痛^{いた}いつて寐^ねたんですが、何^な大^{たい}した事

はないでせう。御^ご緩^ゆり^つ」

代助は門^{もん}を出^でた。江戸川迄^く来^くると、河^{かは}の水^{みづ}がもう暗^{くら}くなつてゐ

た。彼は固より平岡を訪ねる氣であつた。から何時もの様に川^{かは}辺^りを伝^{つた}はないで、すぐ橋^{はし}を渡^{わた}つて、金剛寺坂^{こんごうじざか}を上^{あが}つた。

実を云ふと、代助はそれから三千代にも平岡にも二三遍逢つてゐた。一遍は平岡から比較的長い手紙を受取つた時であつた。それには、第一に着京以来御世話になつて難有いと云ふ礼が述べてあつた。それから、——其後色々朋友や先輩の尽力を辱うしたが、近頃ある知人の周旋で、某新聞の經濟部の主任記者にならぬかとの勧誘を受けた。自分も遣^やつて見たい様な氣がする。然し着京の当時君に御依頼をした事もあるから、無断では宜^{よろ}しくあるまいと思つて、一応御相談をすると云ふ意味が後^{あと}に書いてあつた。代助は、其^{そのとうじ}当時平岡から、兄^{あに}の会社に周旋してくれと依頼されたの

を、其儘にして、断わりもせず今日迄放つて置いた。ので、其返事を促がされたのだと受取つた。一通の手紙で謝絶するのも、あまり冷淡過ると云ふ考もあつたので、翌日出向いて行つて、色々兄の方の事情を話して当分、此方は断念して呉れる様に頼んだ。平岡は其時、僕も大方左様だらうと思つてゐたと云つて、妙な眼をして三千代の方を見た。

いま一遍は、愈新聞の方が極まつたから、一晩緩り君と飲みたい。何日に來て呉れといふ平岡の端書が着いた時、折悪く差支が出来たからと云つて散歩の序に断わりに寄つたのである。其時平岡は座敷の真中に引繰り返つて寐てゐた。昨夕どこかの会へ出て、飲み過ぎした結果だと云つて、赤い眼をしきりに摩つた。

代助を見て、突然、人間は何うしても君の様に独身でなけりや仕事は出来ない。僕も一人なら満洲へでも亜米利加へでも行くんだが大いに妻帯の不便を鳴らした。三千代は次の間で、こつそり仕事をしてゐた。

三遍目には、平岡の社へ出た留守を訪ねた。其時は用事も何もなくつた。約三十分許り椽へ腰を掛けて話した。

夫から以後は可成小石川の方面へ立ち回らない事にして今夜に至たのである。代助は竹早町へ上つて、それを向ふへ突き抜けて、二三町行くと、平岡と云ふ軒燈のすぐ前へ来た。格子の外から声を掛け、洋燈を持って下女が出た。が平岡は夫婦とも留守であつた。代助は出先も尋ねずに、すぐ引返して、電車へ乗つて、本

郷迄^き来て、本郷から又神田へ乗り換えて、そこで降りて、あるビヤ、ホールへ這入つて、麦酒^{ビール}をぐいぐ飲んだ。

十一の五

翌^{よく}日^{じつ}眼^めが覚^さめると、依然として脳^{のう}の中心から、半^{はん}径^{けい}の違^{ちが}つた円^{えん}が、頭^{あたま}を二重^{にぢう}に仕切つてゐる様な心持がした。斯^かう云ふ時に代助は、頭^{あたま}の内^{うち}側^{がは}と外^{そと}側^{がは}が、質^{しつ}の異^{こと}なつた切り組^くみ細工^こで出^で来^き上^あつてゐるとしか感じ得^くられない癖^{くせ}になつてゐた。夫^{それ}で能^よく自^じ分^{ぶん}で自^じ分の頭^{あたま}を振^ふつてみて、二つのものを混^まぜやうと力^{つと}めたものである。彼^{かれ}は今枕^{いまくら}の上^{うへ}へ髪^{かみ}を着^つけたなり、右^{みぎ}の手^てを固^{かた}めて、耳^{みみ}の

上^{うへ}を二三度敲^{たた}いた。

代助は斯^かゝる脳髓^{のうずい}の異状を以て、かつて酒^{さけ}の咎^{とが}に歸した事は

なかつた。彼は小供の時^{とき}から酒^{さけ}に量を得た男であつた。いくら飲^の

んでも、左程平常を離れなかつた。のみならず、一度^{いちど}熟睡さへす

れば、あとは身体^{からだ}に何の故障も認める事が出来^{でき}なかつた。嘗^{かつ}て何

かのはづみに、兄^{あに}と競^せり飲^のみをやつて、三合入^{さんごういり}の徳利を十三本

倒した事がある。其翌日^{あくるひ}代助は平氣な顔をして学校へ出^でた。兄^{あに}は

ふつか^{あたまたいた}も頭が痛い^{にが}と云つて苦^きり切つてゐた。さうして、これを年^{とし}齡

の違^{ちがひ}だと云つた。

昨^{ゆふべ}夕飲^{ビール}んだ麦酒^{これ}は是^{くら}に比べると愚^{おろか}なものだと、代助は頭^{あたま}を敲^{たた}き

ながら考へた。幸^{さいはひ}に、代助はいくら頭^{あたま}が二重^{にぢう}になつても、脳^{のう}の活

動に狂くるひを受けた事がなかつた。時としては、たゞ頭あたまを使つかふのが臆
劫になつた。けれども努力さへすれば、充分複雑な仕事に堪える
といふ自信があつた。だから、斯こんな異状を感じても、脳の組織
の変化から、精神に悪い影響わるを与へるものとしては、悲観する余
地がなかつた。始めて、こんな感覚があつた時は驚ろいた。二遍
目は寧ろ新奇な経験として喜よろこんだ。この頃ごろは、此経験が、多くの
場合に、精神気力の低落ていらくに伴ふ様になつた。内容の充実しない
行為を敢てして、生活する時の徴候になつた。代助にはそこが不
愉快だつた。

床とこの上うへに起き上あがつて、彼は又頭あたまを振ふつた。朝食あさめしの時、門野かどの
は今朝けさの新聞に出てゐた蛇へびと驚わしたの戦うかひの事を話はなし掛けたが、代助は

応じなかつた。門野は又始まつたなと思つて、茶の間を出た。勝手の方で、

「小母さん、さう働らいちや悪いだらう。先生の膳は僕が洗つて置くから、彼方へ行つて休んで御出」と婆さんを労つてゐた。代助は始めて婆さんの病氣の事を思ひ出した。何か優しい言葉でも掛ける所であつたが、面倒だと思つて已めにした。

ナイフを置くや否や、代助はすぐ紅茶々碗を持つて書齋へ這入つた。時計を見るともう九時過ぎであつた。しばらく、庭を眺めながら、茶を啜り延ばしてゐると、門野が来て、

「御宅から御迎が参りました」と云つた。代助は宅から迎を受ける覚がなかつた。聞き返して見ても、門野は車夫がとか何とか

要領を得ない事を云ふので、代助は頭を振りく／＼玄関へ出て見た。すると、そこに兄の車を引く勝と云ふのがゐた。ちやんと、護謨輪の車を玄関へ横付にして、叮嚀に御辞義をした。

「勝、御迎つて何だい」と聞くと、勝は恐縮の態度で、

「奥様が車を持つて、迎に行つて来いつて、御仰いました」

「何か急用でも出来たのかい」

勝は固より何事も知らなかつた。

「御出になれば分るからつて——」と簡潔に答へて、言葉の尻を

結ばなかつた。

代助は奥へ這入つた。婆さんを呼んで着物を出させやうと思つ

たが、腹の痛むものを使ふのが厭なので、自分で簞笥の抽出を

掻き回して、急いで身支度をして、勝の車に乗つて出た。

其日は風が強^{かぜ}く吹^ふいた。勝は苦^{かつ}しさうに、前^{まへ}の方^{ほう}に曲^こんで馳^かけ

た。乗^のつてゐた代助は、二重^{あた}の頭^{たま}がぐる／＼回^{くわ}転するほど、風^{かぜ}に

吹^ふかれた。けれども、音^{おと}も響^{ひび}もない車^{しや}輪^{りん}が美しく動^{うご}いて、意

識^しに乏^ひしい自分^{おのれ}を、半睡^{ちゆう}の状態^{はこ}で宙^{そら}に運^{はこ}んで行く有^あ様^{やう}が愉快^{うき}であ

つた。青^{あを}山^{やま}の家^{うち}へ着^きく時^{とき}分^{ぶん}には、起^おきた頃^{ころ}とは違^{ちが}つて、気^き色^{しよく}が

余程^{よてい}晴^は々^々して来^きた。

十一の六

何^{なに}か事^{こと}が起^{おこ}つたのかと思^{おも}つて、上^{あが}り掛^かけに、書^{しよ}生^{せい}部^ぶ屋^やを覗^{のぞ}いて

見たら、直木なほきと誠太郎がたつた二人ふたりで、白砂糖しろざとうを振り掛けたいちご苳ごを食くつてゐた。

「やあ、御馳走だな」と云ふと、直木は、すぐ居ゐずまひを直なほして、挨拶をした。誠太郎は唇くちびるの縁ふちを濡ぬらした儘まま、突然、

「叔父おぢさん、奥おくさんは何時いつ貰もらふんですか」と聞きいた。直木はにや

／＼してゐる。代助は一寸返答に窮した。已を得ず、

「今日けふは何故なぜ学が校っこうへ行いかないんだ。さうして朝あさつ腹ばらから苳いちごなんぞを食くつて」と調戲からかふ様に、叱しかる様に云つた。

「だつて今日けふは日曜ぢやありませんか」と誠太郎は真面目まじめになつた。

「おや、日曜か」と代助は驚ろいた。

直木は代助の顔を見てとう／＼笑ひ出した。代助も笑つて、座敷へ来た。そこには誰も居なかつた。替え立ての畳の上に、丸い紫檀の刳拔盆が一つ出てゐて、中に置いた湯呑には、京都の浅井黙語の模様画が染め付けてあつた。からんとした広い座敷へ朝の緑が庭から射し込んで、凡てが静かに見えた。戸外の風は急に落ちた様に思はれた。

座敷を通り抜けて、兄の部屋の方へ来たら、人の影がした。

「あら、だつて、夫ぢや余まりだわ」と云ふ嫂の声が聞えた。代

助は中へ這入つた。中には兄と嫂と縫子がゐた。兄は角帯に金鎖を巻き付けて、近頃流行る妙な絹の羽織を着て、此方に向

いて立つてゐた。代助の姿を見て、

「そら来た^き。ね。だから一所に連れて行^いつて御貫^{おもらひ}よ」と梅子に話しかけた。代助には何の意味だか固より分^{わか}らなかつた。すると、梅子が代助の方に向き直つた。

「代さん、今日貴方^{けふあなた}、無論暇^{ひま}でせう」と云つた。

「えゝ、まあ暇^{ひま}です」と代助は答へた。

「ぢや、一所に歌舞伎座へ行^いつて頂戴」

代助は嫂^{あによめ}の此言葉^{ここのことば}を聞いて、頭^{あたま}の中^{なか}に、忽ち一種の滑稽を感じた。けれども今日^{けふ}は平常^{いつも}の様に、嫂^{あによめ}に調戲^{からか}ふ勇氣がなかつた。面倒だから、平氣な顔^{かほ}をして、

「えゝ宜^{よろ}しい、行きませう」と機嫌^{きげん}よく答へた。すると梅子は、

「だつて、貴方^{あなた}は、最早^{もう}、一遍觀^みたつて云ふんぢやありませんか」

と聞き返した。

「一遍だらうが、二遍だらうが、些ちつとも構かまはない。行きませう」と代助は梅子を見て微笑した。

「貴方あなたも余つ程道楽ものね」と梅子が評した。代助は益滑稽を感かんじた。

兄あには用があると云つて、すぐ出でて行つた。四時頃用が済すんだら芝居の方へ回る約束なんださうである。それ迄自分と縫子丈で見てゐたら好よささうなものだが、梅子は夫それが厭いやだと云つた。そんなら直木を連れて行いけと兄あにから注意された時、直木は紺こん 紺こん 紺こんを着きて、袴はかまを穿はいて、六づかしく坐すはつてゐて不可いけないと答へた。夫それで仕方がないから代助を迎ひに遣やつたのだ、と、是は兄あにが出掛でかけの説

明であつた。代助は少々理窟に合はないと思つたが、たゞ、左様
ですかと答へた。さうして、あによめまゝ 嫂は幕の相間あひまに話し相手ほしが欲しいのと、
夫それからいざと云ふ時に、色々いろく用を云ひ付けたいものだから、わ
ざ／＼自分を呼び寄せたに違ないと解釈した。

梅子と縫子は長い時間を御化粧けに費やした。代助は懇よく御化
粧の監督者になつて、ふたり 両人の傍そばに附いてゐた。さうして時々は、
面白半はんぶん分の冷かしも云つた。縫子からは叔父おぢさん随分だわを二
三度繰り返かへされた。

ち、けさ 父は今朝早くから出で、家うちにゐなかつた。何処どこへ行つたのだから、
あによめ 嫂は知らないと言つた。代助は別に知りたい気もなかつた。たゞ
父のゐないのが難有かつた。此このあひだ 間の会見以後、代助は父とは

たつた二度程しか顔^{かほ}を合せなかつた。それも、ほんの十分か十五分に過^すぎなかつた。話が込み入りさうになると、急に叮嚀な御辞義をして立つのを例にしてゐた。父^{ちち}は座敷の方へ出^でて来^きて、どうも代助は近頃少しも尻^{しり}が落ち付かなくなつた。おれの顔さへ見れば逃^にげ支度^{しど}をすると云つて怒^{おこ}つた。と嫂^{あによめ}は鏡^{がみ}の前^{まへ}で夏帯^{なつおび}の尻^{しり}を撫^{なで}でながら代助に話した。

「ひどく、信用を落^{おと}したもんだな」

代助は斯う云つて、嫂^{あによめ}と縫子^{ぬひこ}の蝙蝠傘^{かはほりがさ}を抱^さげて一足^{ひとあし}先へ玄關^でへ出^でた。車はそこに三挺^{なら}并んでゐた。

十一の七

代助は風を恐れて鳥打帽を被つてゐた。風は漸く歇んで、強い日が雲の隙間から頭の上を照らした。先へ行く梅子と縫子は傘を広げた。代助は時々手の甲を額の前に翳した。

芝居の中では、嫂も縫子も非常に熱心な観客であつた。代助は二返目の所為といひ、此三四日来の脳の状態からと云ひ、左様一図に舞台ばかりに氣を取られてゐる訳にも行かなかつた。堪えず精神に重苦しい暑を感じるので、屡団扇を手にして、風を襟から頭へ送つてゐた。

幕の合間に縫子が代助の方を向いて時々妙な事を聞いた。何故あの人は盥で酒を飲むんだとか、何故坊さんが急に大将にな

れるんだとか、大抵説明の出来ない質問のみであつた。梅子はそれを聞きたんびに笑つてゐた。代助は不図二三日前新聞で見た、ある文学者の劇評を思ひ出した^だ。それには、日本の脚本が、あまりに突飛な筋に富^{すぢ}んでゐるので、楽^{らく}に見物が出来ない^かと書いてあつた。代助は其時^{そのとき}、役者の立場^{たちば}から考へて、何もそんな人^{ひと}に見て貰ふ必要はあるまいと思つた。作者に云ふべき小言^{こごと}を、役者の方へ持つてくるのは、近松の作を知るために、越路の浄瑠璃が聴きたいと云ふ愚物と同じ事だと云つて門野^{かどの}に話した。門野は依然として、左様^{そん}なものでせうかなと云つてゐた。

小供のうちから日本在来の芝居を見慣れた代助は、無論梅子と同じ様に、單純なる芸術の鑑賞家であつた。さうして舞台に於け

る芸術の意味を、役者の手腕しゅわんに就てのみ用ひべきものと狹義に
 解釈してゐた。だから梅子とは大いに話が合はなつた。時々顔を
 見合みあして、黒人くろうとの様な批評を加へて、互に感心してゐた。けれ
 ども、大体に於て、舞台にはもう厭あきが来てゐた。幕の途中でも、
 双眼鏡で、彼方あつちを見たり、此方こつちを見たりしてゐた。双眼鏡の向ふ
 所には芸者が沢山ゐた。そのあるものは、先方むかふでも眼鏡めがねの先さきを此
 方つちへ向けてゐた。

代助の右隣みぎとなりには自分と同年輩の男が丸髻いづに結た美くしい細
 君きを連れて来てゐた。代助は其細君の横顔を見て、自分の近付ちかづき
 のある芸者によく似てゐると思つた。左隣ひだりとなりには男連づれが四人
 許ばかりゐた。さうして、それが、悉く博士こつしであつた。代助は其顔を

一々覚えてゐた。其又隣に、広い所を、たつた二人で専領してゐるものがあつた。その一人は、兄と同じ位な年恰好で、正しい洋服を着てゐた。さうして金縁の眼鏡を掛けて、物を見るときには、顎を前へ出して、心持仰向く癖があつた。代助は此男を見たとき、何所か見覚えのある様な気がした。が、ついに思ひ出さうと力めても見なかつた。其伴侶は若い女であつた。代助はまだ甘になるまいと判定した。羽織を着ないで、普通よりは大きく廂を出して、多くは顎を襟元へぴたりと着けて坐つてゐた。代助は苦しいので、何返も席を立つて、後の廊下へ出て、狭い空を仰いだ。兄が来たら、嫂と縫子を引き渡して早く帰りたい位に思つた。一遍は縫子を連れて、其所等をぐる／＼運動して歩

いた。仕舞には些と酒でも取り寄せて飲まうかと思つた。

兄は日暮とすれ／＼に來た。大變遅かつたぢやありませんかと

云つた時、帶の間から、金時計を出して見せた。實際六時少し回

つた許であつた。兄は例の如く、平氣な顔をして、方々見回して

ゐた。が、飯を食ふ時、立つて廊下へ出たぎり、中々歸つて來

なかつた。しばらくして、代助は不図振り返つたら、一軒置いて

隣りの金縁の眼鏡を掛けた男の所へ這入つて、話をしてゐた。

若い女にも時々話しかける様であつた。然し女の方では笑ひ顔を

一寸見せる丈で、すぐ舞台の方へ真面目に向き直つた。代助は

嫂に其人の名を聞かうと思つたが、兄は人の集る所へさへ出れ

ば、何所へでも斯の如く平氣に這入り込む程、世間の広い、又世

間を自分の家の様に心得てゐる男であるから、氣にも掛けずに黙つてゐた。

すると幕の切れ目に、兄が入口迄歸つて来て、代助一寸来いと云ひながら、代助を其金縁の男の席へ連れて行つて、愚弟だと紹介した。それから代助には、是が神戸の高木さんだと云つて引合した。金縁の紳士は、若い女を顧みて、私の姪ですと云つた。女はしとやかに御辞義をした。其時兄が、佐川さんの令嬢だと口を添へた。代助は女の名を聞いたとき、旨く掛けられたと腹の中で思つた。が何事も知らぬものゝ如く装つて、好加減に話してゐた。すると嫂が一寸自分の方を振り向いた。

十一の八

五六分^{ぶん}して、代助は兄^{あに}と共に自分の席^{かへ}に返つた。佐川の娘^{むすめ}を紹介される迄は、兄^{あに}の見え次第^に逃げる氣であつたが、今^{いま}では左様^{さうい}不可^かなくなつた。余^{あま}り現金に見えては、却^よつて好くない結果を引き起^{おこ}しさうな氣がしたので、苦しいのを我慢^{すは}して坐つてゐた。兄^{あに}も芝居に就ては全^あた興味がなささうだつたけれども、例の如く鷹揚^{あたま}に構えて、黒い頭^{いぶ}を燻^{あたま}す程、葉卷^{はまき}をゆらした。時^{とき}々^{／＼}評をすると、縫子^{ぬひこ}あの幕^{まく}は綺麗^{きれい}だらう位の所であつた。梅子は平生の好奇心にも似ず、高木に就ても、佐川の娘に就ても、何等の質問も掛けず、一言の批評も加へなかつた。代助には其澄^{すま}した様子が却

つて滑稽に思はれた。彼は今日迄嫂このんにちあによめの策略にかゝつた事が時々あつた。けれども、只の一返も腹はらを立てた事はなかつた。今度の狂言も、平生ならば、退屈まじ紛らしの遊戯程度に解釈して、笑つて仕舞たかも知れない。夫許そればかりではない。もし自分が結婚する気なら、却つて、此狂言を利用して、自ら人巧的に、御目出度おめでたい喜劇きげきを作り上げて、生涯自分を嘲あざけつて満足する事も出来た。然し此姉迄このあねが、今の自分を、父や兄ちち、あにと共謀して、漸々窮地ぜんくに誘いざなつて行くかと思ふと、流石さすががに此所作しよさをたゞの滑稽として、觀察する訳には行いかなかつた。代助は此先このさき、嫂あによめが此事件を何う発展させる気だらうと考へて、少々弱つた。家うちのものゝ中で、嫂あによめが一番斯こんな計画に興味をもつてゐたからである。もし嫂あによめが此方面

に向つて代助に肉薄すればする程、代助は漸々家族のものと疎遠にならなければならぬと云ふ恐れが、代助の頭の何処かに潜んでゐた。

芝居の仕舞になつたのは十一時近くであつた。外へ出て見ると、風は全く歇んだが、月も星も見えない静かな晩を、電燈が少し許り照らしてゐた。時間が遅いので茶屋では話をする暇もなかつた。三人の迎は来てゐたが、代助はつい車を逃へて置くのを忘れた。面倒だと思つて、嫂の勸を斥けて、茶屋の前から電車に乗つた。数寄屋橋で乗り易え様と思つて、黒い路の中に、待ち合はしてゐると、小供を負つた神さんが、退儀さうに向から近寄つて来た。電車は向ふ側を二三度通つた。代助と軌道の間には、土か石の積

んだものが、高い土手の様に挟まつてゐた。代助は始めて間違つた所に立つてゐる事を悟つた。

「御神さん、電車へ乗るなら、此所ぢや不可ない。向側だ」

と教へながら歩き出した。神さんは礼を云つて跟いて来た。代助は手探でもする様に、暗い所を好加減に歩いた。十四五間左の方へ濠際を目標に出たら、漸く停留所の柱が見付つた。神さんは其所で、神田橋の方へ向いて乗つた。代助はたつた一人反對の赤坂行へ這入つた。

車の中では、眠くて寐られない様な気がした。揺られながらも今夜の睡眠が苦になつた。彼は大きいに疲労して、白昼の凡てに、惰気を催うすにも拘はらず、知られざる何物かの興奮の為に、

静かな夜を恣にする事が出来ない事がよくあつた。彼の脳裏には、
けふにうちうかは交る／＼痕を残した色彩が、時の前後と形の
差別を忘れて、一度に散らついてゐた。さうして、それが何の色
彩であるか、何の運動であるか慥かに解らなかつた。彼は眼を眠
つて、家へ歸つたら、又中スキーの力を借りやうと覺悟した。
彼は此取り留めのない花やかな色調の反照として、三千代
の事を思ひ出さざるを得なかつた。さうして其所にわが安住の地
を見出した様な気がした。けれども其安住の地は、明らかに、
彼の眼に映じて出なかつた。たゞ、かれの心の調子全体で、それ
を認めた丈であつた。従つて彼は三千代の顔や、容子や、言葉や、
夫婦の關係や、病氣や、身分を一纏にしたものを、わが情調

にしつくり合ふ対象として、発見したに過ぎなかつた。

十一の九

翌よくじつ日代助は但馬にゐる友人から長い手紙を受取つた。此友人は学校を卒業すると、すぐ国へ歸かへつたぎり、今日迄こんにちまでいぞ東京へ出でた事のない男であつた。当人は無論山やまの中なかで暮くらす気はなかつたんだが、親おやの命令で已やむを得ず、故郷に封じ込められて仕舞つたのである。夫それでも一年いちねんばかり許あひだの間は、もう一返親父おやぢを説とき付けて、東京へ出でる出でると云つて、うるさい程手紙を寄よこしたが、此頃は漸く断念したと見みえて、大した不平がましい訴もしい様になつ

た。家は所の旧家で、先祖から持ち伝へた山林を年々伐り出すのが、重なる用事になつてゐるよしであつた。今度の手紙には、彼の日常生活の様子が委しく書いてあつた。それから、一ヶ月前町長に挙げられて、年俸を三百円頂戴する身分になつた事を、面白半分、殊更に真面目な句調で吹聴して来た。卒業してすぐ中学の教師になつても、此三倍は貰へると、自分と他の友人との比較がしてあつた。

此友人は国へ歸つてから、約一年許りして、京都在のある財産家から嫁を貰つた。それは無論親の云ひ付であつた。すると、少時して、直子供が生れた。女房の事は貰つた時より外に何も云つて来ないが、子供の生長には興味があると見えて、時々

代助の可笑^{おかし}くなる様な報知をした。代助はそれを読むたびに、此子供に對して、満足しつゝある友人の生活を想像した。さうして、此子供の爲^{ため}に、彼の細君に對する感想が、貫^{もら}つた當時に比べて、どの位變化したかを疑つた。

友人は時^{とき}々鮎^{あゆ}の乾^ほしたのや、柿の乾^ほしたのを送つてくれた。代助は其返礼に大概は新らしい西洋の文学書を遣^やつた。すると其返事には、それを面白く讀んだ証拠になる様な批評が屹度あつた。けれども、それが長くは続^{つづ}かなかつた。仕舞には受取^{うけと}つたと云ふ札状さへ寄^よこさなかつた。此方^{こつち}からわざわざ問ひ合せると、書物は難有く頂戴した。讀んでから礼を云はうと思つて、つい遅^{おそ}くなつた。実はまだ讀^よまない。白状すると、讀^よむ閑^{ひま}がないと云ふより、

読む気がしないのである。もう一層露骨に云へば、読んでも解らなくなつたのである。といふ返事が来た。代助は夫から書物を廃めて、其代りに新らしい玩具を買つて送る事にした。

代助は友人の手紙を封筒に入れて、自分と同じ傾向を有つてゐた此旧友が、当時とは丸で反対の思想と行動とに支配されて、生活の音色を出してゐると云ふ事実を、切に感じた。さうして、命の絃の震動から出る二人の響を審かに比較した。

彼は理論家として、友人の結婚を肯つた。山の中に住んで、樹や谷を相手にしてゐるものは、親の取り極めた通りの妻を迎へて、安全な結果を得るのが自然の通則と心得たからである。彼は同じ論法で、あらゆる意味の結婚が、都会人士には、不幸を持ち

来^{きた}すものと断定した。其原因を云へば、都会は人^{にんげん}間の展覽会に過ぎないからであつた。彼は此^{この}前提^{ぜんてい}から此^{この}結論に達^たする為^{ため}に斯^かう云ふ徑路^{たど}を辿^{たど}つた。

彼は肉体と精神に於て美^びの類別を認める男であつた。さうして、あらゆる美^びの種類に接触する機会を得るのが、都会人士の権能である^と考へた。あらゆる美^びの種類に接触して、其たび毎^{ごと}に、甲から乙に氣を移し、乙から丙に心を動^{うご}かさぬものは、感受性に乏しい無鑑賞家^かであると断定した。彼は是^{これ}を自家の経験^{ちよう}に徴^{ちよう}して争ふべからざる真理と信じた。その真理から出立して、都会的生活を送る凡ての男女は、両性間の引^{アットラクシオン}力^{りき}に於て、悉く随縁^{ずいえん}臨^{りん}機^きに、測^さりがたき変化を受け^うけつゝあるとの結論に到着した。そ

れを引き延のばすと、既婚きこんの一对いつついは、双方ともに、流俗いはゆるに所謂いインフイデリチリチ不な義ぎの念おに冒かされて、過去から生じた不幸を、始終な嘗めなければならぬ事になつた。代助は、感受性の尤も発達した、又接触点の尤も自由な、都会人士の代表者として、芸妓を撰んだ。彼等のあるものは、生涯に情夫を何人取り替かえるか分わからないではないか。普通の都会人は、より少すくなき程度に於て、みんな芸妓ではないか。代助は渝かはらざる愛を、今いまの世くちに口にするものを偽善家ぎぜんかの第一位に置おいた。

此所こゝ迄考へた時、代助の頭あたまの中なかに、突然三千代の姿が浮うんだ。そのとき其時代助はこの論理中に、或因あや数アクターを数へ込むのを忘れたのではなからうかと疑うたぐつた。けれども、其因フ数アクターは何うしても発見はつけんする

事が出来なかつた。すると、自分が三千代に対する情合も、此論理によつて、たゞ現在のものに過ぎなくなつた。彼の頭は正にこれを承認した。然し彼の心は、慥かに左様だと感ずる勇氣がなかつた。

十二の一

代助は嫂の肉薄を恐れた。又三千代の引力を恐れた。避暑にはまだ間があつた。凡ての娯楽には興味を失つた。読書にしても、自己の影を黒い文字の上に認める事が出来なくなつた。落付いて考へれば、考へは蓮の糸を引く如くに出るが、出たものを纏めて

みると、人の恐ろしがるもの許であつた。仕舞には、斯様に考へなければならぬ自分が怖くなつた。代助は蒼白く見える自分の脳髓を、ミルクセーキの如く廻転させる為に、しばらく旅行しやうと決心した。始めは父の別荘に行く積であつた。然し、是は東京から襲はれる点に於て、牛込に居ると大した変りはないと思つた。代助は旅行案内を買つて来て、自分の行くべき先を調べて見た。が、自分の行くべき先は天下中何処にも無い様な気がした。しかし、代助は無理にも何処かへ行かうとした。それには、支度を調へるに若くはないと極めた。代助は電車に乗つて、銀座迄来た。朗かに風の往來を渡る午後であつた。新橋の勸工場を一回りして、広い通りをぶらぶらと京橋の方へ下つた。其時代助

の眼には、向ふ側の家が、芝居の書割の様に平たく見えた。青
い空は、屋根の上にすぐ塗り付けられてゐた。

代助は二三の唐物屋を冷かして、入用の品を調べた。其中に、

比較的高い香水があつた。資生堂で練齒磨を買はうとしたら、

若いものが、欲しくないと云ふのに自製のものを出して、頻に勧

めた。代助は顔をしかめて店を出た。紙包を腋の下に抱へた

儘、銀座の外れ迄遣つて来て、其所から大根河岸を回つて、鍛冶

橋を丸の内へ志した。当もなく西の方へ歩きながら、是も簡便な

旅行と云へるかも知れないと考へた揚句、草臥れて車をとつた

が、何処にも見当らなかつたので又電車へ乗つて歸つた。

家の門を這入ると、玄關に誠太郎のらしい履が丁寧に並べてあ

つた。門野^{かどの}に聞^きいたら、へえ左様^{さう}です、先方^{さつき}から待^まつて御出^{おいで}ですといふ答^{こたへ}であつた。代助はすぐ書斎^しへ来て見^みた。誠太郎は、代助の坐^{すは}る大きな椅子^{いす}に腰^{こし}を掛^かけて、洋卓^{テーブル}の前^{まへ}で、アラスカ探検^{たんけん}記^きを読^よんでゐた。洋卓^{テーブル}の上^{うへ}には、蕎麦^{そば}麦^{まん}饅頭^{まん}と茶盆^{ちばん}が一所^{いこ}に乗^のつてゐた。

「誠太郎、何^{ひと}だい、人^{ひと}のゐない留守^{るす}に來^きて、御馳走^{ごちそう}だね」と云^いふと、誠太郎は、笑^{わら}ひながら、先^{まづ}アラスカ探検^{たんけん}記^きをポツケツトへ押^おし込^こんで、席^{せき}を立^たつた。

「其所^{そこ}に居^ゐるなら、ゐても構^{かま}はないよ」と云^いつても、聞^きかなかつた。

代助は誠太郎を捕^{つら}まえて、例^{いっつも}の樣^{よう}に調戲^{てうぎ}ひ出^だした。誠太郎は此^こ

のあひだ
間 代助が歌舞伎座でした欠伸の数を知つてゐた。さうして、
「叔父さんは何時奥さんを貰ふの」と、又先達てと同じ様な質
問を掛けた。

此日誠太郎は、父の使に來たのであつた。其口上は、明日の十
一時迄に一 寸來て呉れと云ふのであつた。代助はさうく父や
兄に呼び付けられるが面倒であつた。誠太郎に向つて、半分怒つ
た様に、

「何だい、苛いちやないか。用も云はないで、無暗に人を呼びつ
けるなんて」と云つた。誠太郎は矢つ張りにやゝしてゐた。代
助はそれぎり話を外へそらして仕舞つた。新聞に出てゐる相撲の
勝負が、二人の題目の重なるものであつた。

晩食ばんめしを食くつて行いけと云ふのを学校の下調があると云つて辞退し

て誠太郎は歸つた。歸る前に、

「それぢや、叔父おぢさん、明日あしたは来こないんですか」と聞きいた。代助

は已を得ず、

「うむ。何どうだか分わからない。叔父おぢさんは旅行するかも知れないか

らつて、歸つてさう云つて呉れ」と云つた。

「何時いつ」と誠太郎が聞き返したとき、代助は今日明日けふあすのうちと答

へた。誠太郎はそれで納得して、玄關迄出いて行つたが、沓脱くつぬぎへ

下おりながら振り返つて、突然

「何処どこへ入いらつしやるの」と代助を見上みあげた。代助は、

「何処どこつて、まだ分わかるもんか。ぐる／＼回まはるんだ」と云つたので、

誠太郎は又にくししながら、格子を出た。

十二の二

代助は其夜そのよすぐ立たたうと思つて、グラツドストーンの中なかを門野かどのに掃除じさして、携帶品を少すこし詰め込こんだ。門野は少すくなからざる好奇心を以て、代助の革靴かばんを眺ながめてゐたが、

「少すこし手伝てつだひませうか」と突立つつたまゝ聞いた。代助は、

「なに、訳わけはない」と断ことわりながら、一旦詰め込こんだ香水の壺びんを取とり出だして、封被ふうひを剥はいで、栓せんを抜ぬいて、鼻はなに当あてゝ嗅かいで見た。門野は少すこし愛想を尽つかした様な具合で、自分の部屋へ引き取つた。

二三分^{ぶん}すると又^{また}出て来^きて、

「先生、車^{くるま}を左様^{さう}云つときましますかな」と注意した。代助はグラツドストーンを前^{まへ}へ置いて、顔^{かほ}を上げ^あげた。

「左様^{さう}、少し待^{まち}つて呉^{くれ}れ給へ」

庭^{には}を見ると、生垣^{いけがき}の要目^{かなめ}の頂^{いたゞき}に、まだ薄^{うす}明^{あか}るい日足^{ひあし}がうろ

ついてゐた。代助は外^{そと}を覗^{のぞ}きながら、是から三十分のうちに行く

先^{さき}を極^きめやうと考へた。何でも都合^{ごう}のよささうな時間^{かん}に出^でる汽車

に乗^のつて、其汽車の持^もつて行く所^{ところ}へ降^おりて、其所^{そこ}で明日^{あした}迄暮^くらし

て、暮^くらしてゐるうちに、又新しい運命^{うんめい}が、自分^{自分}を攫^{さら}ひに來^くる

のを待^{まち}つ積^{つも}りであつた。旅費^{りょひ}は無論充分でなかつた。代助の旅装^{りよう}に

適^あした程^{ほど}の宿泊^{しゅぱく}を続^{つづ}けるとすれば、一週間も保^もたない位であつた。

けれども、さう云ふ点になると、代助は無頓着であつた。^{いよく}愈となれば、家から^{うち}金を取り寄せる^{かね}氣であつた。それから、本来が^よ四辺の風氣を換えるのを目的とする移動だから、贅沢の方面へは重きを置かない決心であつた。興に乗れば、^{にもち}荷持を雇つて、^{いちにある}一日歩いても可いと覺悟した。

彼は又旅行案内を開いて、^{ひら}細かい数字を^{たんねん}丹念に調べ出したが、少しも決定の運に^{はこび}近寄らないうちに、又三千代の方に^{あたますべ}頭が滑つて行つた。^{たまへ}立つ前にもう一遍様子を見て、それから東京を出やうと云ふ氣が起つた。グラツドストーンは今夜中に^{こんやちう}始末を付けて、明日の朝^{あす}早く^{あさはや}提げて行かれる様にして置けば構はない事になつた。代助は急ぎ足で玄関迄出た。^で其音を^{おと}聞き付けて、^{かどの}門野も飛び

出した。代助は不斷着の儘、掛釘から帽子を取つてゐた。

「又御出掛ですか。何か御買物ぢやありませんか。私で可ければ

買って来ませう」と門野が驚ろいた様に云つた。

「今夜は已めだ」と云ひ放した儘、代助は外へ出た。外はもう暗

かつた。美しい空に星がぼつ／＼影を増して行く様に見えた。

心持の好い風が袂を吹いた。けれども長い足を大きく動かし

た代助は、二三町も歩かないうちに額際に汗を覺えた。彼は

頭から鳥打を脱つた。黒い髪を夜露に打たして、時々帽子を

わざと振つて歩いた。

平岡の家の近所へ来ると、暗い人影が蝙蝠の如く静かに其

所、此所に動いた。粗末な板塀の隙間から、洋燈の灯が往来へ

うつ映つた。三千代は其そのひかり光の下で新聞を讀んでゐた。今頃新聞を讀むのかと聞いたら、二返目だと答へた。

「そんなに閑なんですか」と代助は座蒲団を敷居の上に移して、椽側へ半分身体を出しながら、障子へ倚りかゝつた。

平岡は居なかつた。三千代は今湯から歸つた所だと云つて、団扇さへ膝の傍に置いてゐた。平生の頬に、心持暖い色を出して、もう歸るでせうから、緩くりしてゐらつしやいと、茶の間へ茶を入りに立つた。髪は西洋風に結つてゐた。

平岡は三千代の云つた通りには中々歸らなかつた。何時でも斯んなに遅いのかと尋ねたら、笑ひながら、まあ左んな所でせうと答へた。代助は其笑の中に一種の淋しさを認めて、眼を正し

て、三千代の顔を凝^{かほ}と見た。三千代は急に団扇^{うちほ}を取つて袖^{そで}の下を煽^{あほ}いだ。

代助は平岡の経済の事が氣に掛^かつた。正面から、此頃^{このごろ}は生活費には不自由はあるまいと尋ねて見た。三千代は左様^{さう}ですと云つて、又前の様な笑^{わら}ひ方^{かた}をした。代助がすぐ返事をしなかつたものだから、

「貴方^{あなた}には、左様^{さう}見えて」と今度は向ふから聞き直^{なほ}した。さうして、手に持った団扇^{うちほ}を放り出^だして、湯^ゆから出^でたての奇麗^{ほそ}な織^{ゆび}い指^{ゆび}を、代助の前に広^{ひろ}げて見せた。其指^{ゆび}には代助の贈^{おく}つた指環^{ゆびわ}も、他の指環^{ゆびわ}も穿^はめてゐなかつた。自分の記念^{いっ}を何時^{いつ}でも胸^{むね}に描^{えが}いてゐた代助には、三千代^{みちよ}の意味^{みちよ}がよく分^{わか}つた。三千代は手を引き込^こめ

ると同時に、ぽつと赤い顔をした。

「仕方がないんだから、堪忍して頂戴」と云つた。代助は憐れな心持がした。

十二の三

代助は其夜九時頃平岡の家を辞した。辞する前、自分の紙入なかの中なかに有るものを出して、三千代に渡した。其時は、腹の中なかで多く少くの工夫を費やした。彼は先づ何気なく懷中物くわいちゅうものを胸の所で開あけて、中なかにある紙幣を、勘定もせずまへに攫つかんで、是これを上げるから御お使つかなさいと無雑作に三千代の前まへへ出だした。三千代は、下女を憚は

かる様な低い声で、

「そんな事を」と、却かへつて両手をぴたりと身体からだへ付けて仕舞つた。代助は然し自分の手を引き込ひこめなかつた。

「指環を受取うけとるなら、これを受取つても、同じ事でせう。紙の指環びわだと思つて御貰ひなさい」

代助は笑ひながら、斯う云つた。三千代はでも、余あんなまりだからとまだ蹢躅した。代助は、平岡に知れると叱しかられるのかと聞いた。三千代は叱しかられるか、賞ほめられるか、明あきらかに分わからなかつたので、矢張り愚図々々してゐた。代助は、叱しかられるなら、平岡に黙だまつてゐたら可よからうと注意した。三千代はまだ手を出ださなかつた。代助は無論出だしたものを引き込こめぬ訳わけに行いかなかつた。已やむを得ず、

少し及び腰こしになつて、掌てのひらを三千代の胸むねの傍そば迄持もつて行いつた。同時に自分の顔かほも一尺許ばかりの距離ちかよに近寄ちかせて、

「大丈夫だから、御取おとんなさい」と確しつりした低ひくい調子で云つた。

三千代は顎あごを襟えりの中なかへ埋うづめる様あとに後へ引ひいて、無言の儘右の手を前へ出だした。紙幣は其上うへに落ちた。其時三千代は長い睫毛まつげを二三度打ち合あはした。さうして、掌てのひらに落ちたものを帯おびの間あひだに挟はさんだ。

「又く来る。平岡君こうちによろしく」と云つて、代助は表おもてへ出でた。町まちを横断こうたんして小路こうちへ下くだると、あたりは暗くくなつた。代助は美うくしい夢ゆめを見た様くに、暗くらい夜よを切きつて歩あるいた。彼は三十分と立たないうちに、吾家わがいへの門もん前ぜんに來きた。けれども門もんを潜くづる氣がしなかつた。彼は高かれい星ほしを戴いたて、静しづかな屋敷町やしきまちをぐる／＼徘徊徘徊した。自分

では、夜半迄歩きつゞけても疲れる事はなからうと思つた。兎角
 するうち、又自分の家の前へ出た。中は静かであつた。門野と婆
 さんは茶の間で世間話をしてゐたらしい。

「大變遅うがしたな。明日は何時の汽車で御立ちですか」と玄関
 へ上るや否や問を掛けた。代助は、微笑しながら、

「明日も御已めだ」と答へて、自分の室へ這入つた。そこには床
 がもう敷いてあつた。代助は先刻栓を抜いた香水を取つて、括
 枕の上に一滴垂らした。夫では何だか物足りなかつた。壘を
 持った儘、立つて室の四隅へ行つて、そこに一二滴づゝ振りかけ
 た。斯様に打ち興じた後、白地の浴衣に着換えて、新しい小搔
 卷の下に安かな手足を横たへた。さうして、薔薇の香のする眠

に就いた。

眼が覚めた時は、高い日が椽に黄金色の震動を射込んでゐ

た。枕元には新聞が二枚揃えてあつた。代助は、門野が何時

雨戸を引いて、何時新聞を持つて来たか、丸で知らなかつた。代

助は長い伸を一つして起き上つた。風呂場で身体を拭いてゐると、

門野が少し狼狽へた容子で遣つて来て、

「青山から御兄いさんが御見えになりました」と云つた。代助

は今直行く旨を答へて、奇麗に身体を拭き取つた。座敷はまだ

掃除が出来てゐるか、ゐないかであつたが、自分で飛び出す必要

もないと思つたから、急ぎもせず、いつもの通り、髪を分けて

剃を中て、悠々と茶の間へ歸つた。そこでは流石にゆつくりと膳

につく氣も出なかつた。立ちながら紅茶を一杯啜つて、タエルでちよつとくちひげこす一寸口髭を摩つて、それを、其所へ放り出すと、すぐ客間へ出て、

「やあ兄さん」と挨拶をした。兄は例の如く、色の濃い葉巻の、火の消えたのを、指の股に挟んで、平然として代助の新聞を読んでゐた。代助の顔を見るや否や、

「此室は大変好い香がする様だが、御前の頭かい」と聞いた。ぼくあたま「僕の頭の見える前からでせう」と答へて、昨夜の香水の事を話した。兄は、落ち付いて、

「はゝあ、大分洒落た事をやるな」と云つた。

十二の四

兄は滅多に代助の所へ来た事のない男であつた。たまに來れば必ず来なくつてならない用事を持つてゐた。さうして、用を済ますとさつさと歸つて行つた。今日も何事か起つたに違ないと代助は考へた。さうして、それは昨日誠太郎を好加減に胡魔化して返した反響だらうと想像した。五六分雑談をしてゐるうちに、兄はとう／＼斯う云ひ出した。

「昨夕誠太郎が歸つて来て、叔父さんは明日から旅行するつて云ふ話だから、出て来た」

「えゝ、実は今朝六時頃から出やうと思つてね」と代助は嘘の様

な事を、至極冷静に答へた。兄も真面目な顔をして、

「六時に立てる位な早起の男なら、今時分わざわざ青山から

遣つて来やしない」と云つた。改めて用事を聞いて見ると、矢張

り予想の通り肉薄の遂行に過ぎなかつた。即ち今日高木と佐川

の娘を呼んで午餐を振舞ふ筈だから、代助にも列席しろと云ふ父

の命令であつた。兄の語る所によると、昨夕誠太郎の返事を聞い

て、父は大いに機嫌を悪くした。梅子は氣を揉んで、代助の立た

ない前に逢つて、旅行を延ばさせると云ひ出した。兄はそれを留

めたさうである。

「なに彼奴が今夜中に立つものか、今頃は革靴の前へ坐つて

考へ込んでゐる位のものだ。明日になつて見ろ、放つて置いても

遣つて来るからつて、己おれが姉ねえさんを安心させたのだよ」と誠吾は
 落付おちつき払つてゐた。代助は少し忌々いまくしくなつたので、

「ぢや、放ほうつて置いて御覧なされば好いのに」と云つた。

「所が女と云ふものは、氣の短みぢかいもので、御父おとうさんに悪いから

つて、今朝けさ起きるや否や、己おれをせびるんだからね」と誠吾は可笑おかし

い様な顔かほもしなかつた。寧ろ迷惑むしさうに代助を眺ながめてゐた。代助

は行くとも、行かないとも決答を与へなかつた。けれども兄かへに對

しては、誠太郎同様に、要領を握らせないで返かへして仕舞ふ勇氣も

出なかつた。其そのうへ上午餐を斷つて、旅行するにしても、もう自分

の懷くわい中ちゆうを当あてにする訳わけには行かなかつた。矢張り、兄とか嫂あによめと

か、もしくは父ちちとか、いづれ反対派だれの誰だれかを痛いためなければ、身みうご

動きが取れない位地にゐた。そこで、即つかず離はなれずに、高木たかぎと佐川むすめの娘の評判をした。高木には十年程前まへに一遍逢あつた限ぎりであつたが、妙なもので、何処どこかに見覚みがあつて、此このあひだ間歌舞伎座で眼めに着ついた時は、はてなと思つた。これに反して、佐川むすめの娘の方は、つい先達せんだつて、写真を手にした許ばかりであるのに、実物に接せつしても、丸で聯想うかが浮うかばなかつた。写真は奇体なもので、先づ人間を知つてゐて、その方から、写真の誰だれかれ彼を極きめるのは容易であるが、その逆ぎやくの、写真から人間にんげんを定める方は中々六づかしい。是これを哲学にすると、死しから生せいを出すのは不可能だが、生せいから死しに移るのは自然の順序であると云ふ真理に帰着する。

「私わたしは左様考さうへた」と代助が云つた。兄あには成程と答へたが別段感

心した様子もなかつた。葉巻の短はまき みぢくなつて、口髭くちひげに火が付き
さうなのを無暗くわに啣かへ易かえて、

「それで、必ずしも今日けふ旅行する必要もないんだらう」と聞きいた。
代助はないと答へざるを得なかつた。

「ぢや、今日餐けふめしを食くひに来きても好いいんだらう」

代助は又好いいと答へない訳わけに行いかなかつた。

「ぢや、己おれはこれから、一寸ちよつと他所まはへ回まはるから、間違まちがひのない様やうに
来きてくれ」と相変あひらず多忙たひやうに見えた。代助はもう度胸どきやうを据すゑたか
ら、何どうでも構かまはないといふ氣で、先方に都合あにの好いい返事へんじを与よへ
た。すると兄あにが突然、

「一体何どうなんだ。あの女を貰もらふ氣はないのか。好いいぢやないか

貰^{もら}つたつて。さう撰^えり好^{この}みをする程女房に重きを置くと、何だか元^{げん}禄^{ろく}時代の色男の様で可笑しいな。凡てあの時代の人^{にん}間^{げん}は男女に限らず非常に窮屈^{こひ}な恋をした様だが、左^さ様^{よう}でもなかつたのかい。——まあ、どうでも好^いいから、成る可^べく年^{とし}寄^{より}を怒^{おこ}らせない様に遣^やつてくれ」と云つて歸つた。

代助は座敷へ戻^{もど}つて、しばらく、兄^{あに}の警句を咀嚼してゐた。自分も結婚に対しては、實際兄と同意見であるとか考へられない。だから、結婚を勧^{すす}める方^{ほう}でも、怒^{おこ}らないで放つて置くべきものだと、兄とは反対に、自分に都合の好^いい結論を得た。

十二の五

兄あにの云ところふ所によると、佐川の娘は、今度ひさ久し振ぶりに叔父おぢに連つれられて、見物かた／＼旁上京したので、叔父の商用が済み次第又連つれられてくに国へ歸るのださうである。父ちちが其機会を利用して、相互の關係に、永遠の利害を結びむす付けやうと企くだてたのか、又は先達せんだつての旅行先で、此機会をも自発的にこしら拵えて歸つて来たのか、どつちにしても代助はあまり研究の余地を認めなかつた。自分はたゞ是等ひとの人と同じ食卓しよくたくで、旨さうまうに午餐ごさんを味あぢはつて見せれば、社交上の義務は其所に終るものと考へた。もしそれより以上に、何等の発展が必要になつた場合には、其時に至つて、始めて処置を付つけるより外ほかに道みちはないと思案した。

代助は婆さんと呼んで着物を出さした。面倒だと思つたが、敬意を表するために、紋付の夏羽織を着た。袴は一重のがなかったから、家へ行つて、父か兄かのを穿く事に極めた。代助は神経質な割に、子供の時から習慣で、人中へ出るのを余り苦にしなかつた。宴会とか、招待とか、送別とかいふ機会があると、大抵は都合して出席した。だから、ある方面に知名な人の顔は大分覚えてゐた。其中には伯爵とか子爵とかいふ貴公子も交つてゐた。彼は斯んな人の仲間入をして、其仲間なりの交際に、損も得も感じなかつた。言語動作は何処へ出ても同じであつた。外部から見ると、其所が大変能く兄の誠吾に似てゐた。だから、よく知らない人は、此兄弟の性質を、全く同一型に属するものと信じ

てゐた。

代助が青山に着いた時は、十一時五分前であつたが、御客はまだ来てゐなかつた。兄もまだ帰らなかつた。嫂丈がちゃんと支度をして、座敷に坐つてゐた。代助の顔を見て、

「あなたも、随分乱暴ね。人を出し抜いて旅行するなんて」と、いきなり遣り込めた。梅子の場合によると、決して論理を有ち得ない女であつた。此場合にも、自分が代助を出し抜いた事には丸で気が付いてゐない挨拶の仕方であつた。それが代助には愛嬌に見えた。で、直そこへ坐り込んで梅子の服装の品評を始めた。父は奥にゐると聞いたが、わざと行かなかつた。強ひられたとき、「今に御客さんが来たら、僕が奥へ知らせに行く。其時挨拶をす

れば好^よからう」と云つて、矢つ張り平常^{へいぜい}の様な無駄^{むだ}口^{くち}を叩^{たた}いてゐた。けれども佐川の娘^{なん}に關しては、一言^{ひとこと}も口^{くち}を切^きらなかつた。梅子は^{なん}何^{なん}とかして、話^{はなし}を其所^{そこ}へ持つて行かうとした。代助には、それが明^{あき}らかに見えた。だから、猶^{なほ}空^{くら}とぼけて讐^{かたき}を取つた。

其うち待ち設けた御客^きが來たので、代助は約束通りすぐ父^{ちち}の所へ知^しらせに行^いつた。父^{ちち}は、案^{あん}のじよう、

「左^さ様^{やう}か」とすぐ立^あち上^あがつた丈であつた。代助に小言^{こごと}を云^ひふ暇^{ひま}も何^{なに}も無^なかつた。代助は座敷^{ざしき}へ引^かき返^{かへ}して來て、袴^{はかま}を穿^はいて、それから応接間^{おうていかん}へ出た。客^{きやく}と主人^{しゅじん}とはそこで悉^{ことごと}く顔^{かほ}を合^あはせた。父^{ちち}と高木^{たかぎ}とが第一^{はなし}に話^{はなし}を始めた。梅子^{おも}は重^{おも}に佐川の令嬢^{れいじやう}の相手^{あて}になつた。そこへ兄^{あに}が今朝^{けさ}の通^{とほり}りの服^{ふく}装^{なり}で、のつそりと這^き入^いつて來た。

「いや、何うも遅くなりまして」と客の方に挨拶をしたが、席に就いたとき、代助を振り返つて、

「大分早かつたね」と小さな声を掛けた。

食堂には応接室の次の間を使つた。代助は戸の開いた間から、白い卓布の角の際立つた色を認めて、午餐は洋食だと心づいた。梅子は一寸席を立つて、次の入口を覗きに行つた。それは父に、食卓の準備が出来上つた旨を知らせる為であつた。

「では何うぞ」と父は立ち上がった。高木も会釈して立ち上がった。佐川の令嬢も叔父に継いで立ち上がった。代助は其時、女の腰から下の、比較的細く長い事を発見した。食卓では、父と高木が、真中に向き合つた。高木の右に梅子が坐つて、父の左に

令嬢が席を占めた。女同志が向き合つた如く、誠吾と代助も向き合つた。代助は五^{クルエツト、スタンド}味台^{なか}を中に、少し斜^{なぐめ}に反れた位地から令嬢の顔^{かほ}を眺める事になつた。代助は其頬^ほの肉と色が、著^{いちぢ}るしく後^{うしろ}の窓から射^さす光線の影響を受けて、鼻^{さかひ}の境に暗過ぎる影^{かげ}を作つた様に思つた。其代り耳に接した方は、明^{あき}らかに薄^{うすくな}紅であつた。殊に小さい耳が、日^ひの光を透^{とほ}してゐるかの如くデリケートに見えた。皮膚^{ひふ}とは反対に、令嬢は黒い鳶色の大きな眼^めを有したゐた。此二つの対照から華^{はな}やかな特長を生ずる令嬢の顔の形は、寧ろ丸い方であつた。

十二の六

食卓は、人数が人数だけに、左程大きくはなかつた。部屋の広さに比例して、寧ろ小さ過ぎる位であつたが、純白な卓布を、取り集めた花で綴つて、其中に肉刀と肉匙の色が冴えて輝いた。

卓上の談話は重に平凡な世間話であつた。始のうちは、それさへ余り興味が乗らない様に見えた。父は斯う云ふ場合には、よく自分の好きな書画骨董の話を持ち出すのを常としてゐた。さうして気が向けば、いくらでも、蔵から出して来て、客の前に陳べたものである。父の御蔭で、代助は多少斯道に好悪を有てる様になつてゐた。兄も同様の原因から、画家の名前位は心得てゐた。

たゞし、此方このほうは掛物かけものの前まへに立つて、はあ仇英きうえいだね、はあ応挙おうきよだねと云ふ丈であつた。面白おもしろい顔かほもしないから、面白い様にも見えなかつた。それから真偽しんぎの鑑定たみんの爲ために、虫眼鏡むしめがねなどを振り舞まはさない所は、誠吾も代助も同じ事であつた。父ちちの様に、こんな波なみは昔むかしの人は描かかないものだから、法になつてゐない杯はつといふ批評は、双方共に、未だ嘗て如何なる画に対しても加へた事はなかつた。

父ちちは乾かはいた会話くわいわに色彩しきさいを添そへるため、やがて好きすきな方面の問題問題に触ふれて見た。所が一二言いちにげんで、高木はさう云ふ事ことに丸まるで無頓着な男であるといふ事が分わかつた。父ちちは老巧ひとの人だから、すぐ退却した。けれども双方に安全な領分に帰ると、双方共に談話の意

味を感じなかつた。父は己^ちを得^{やむ}ず、高木に何んな娯樂があるかを確^{たしか}めた。高木は特別に娯樂を持たない由^{よし}を答へた。父は万^ち事休すといふ体裁で、高木を誠吾と代助に托して、しばらく談話の圈外に出^でた。誠吾は、何の苦もなく、神戸の宿屋^{やどや}やら、楠公神社やら、手当り次第に話題を開拓して行つた。さうして、其^{そのうち}中に自然令嬢の演^{こしら}すべき役割を拵^{こしら}えた。令嬢はたゞ簡単に、必要な言葉丈を点じては逃げた。代助と高木とは、始め同志社を問題にした。それから亜米利加の大学の状況に移つた。最後にエマーソンやホーソーンの名が出^でた。代助は、高木に斯^かう云ふ種類の知識があると、いふ事を確めたけれども、たゞ確めた丈で、それより以上に深^{ふかい}入^りもしなかつた。従つて文学談は単に二三の人名と書名に終つ

て、少しも発展しなかつた。

梅子は固より初はじめから断たえず口くちを動うごかしてゐた。其努力おもの重なる

ものは、無論自分の前にゐる令嬢の遠慮と沈黙を打ち崩すにあつ

た。令嬢は礼義上から云つても、梅子の間断かんだんなき質問に応じな

い訳に行かなかつた。けれども積極的に自分から梅子の心こころを動うごか

さうと力つとめた形迹は殆んどなかつた。たゞ物ものを云ふときに、少し

首くびを横よこに曲まげる癖くせがあつた。それすらも代助には媚こびを売うるとは解

釈でき出来なかつた。

令嬢は京都で教育を受けた。音楽は、始めはじは琴ことを習つたが、後

にはピアノに易かえた。ワイオリンも少し稽古けいこしたが、此方このほうは手の

使つかい方かたが六つかしいので、まあ遣やらないと同じである。芝居は滅

多に行つた事がなかつた。

「先^{せん}達^{だつ}ての歌舞伎座は如何^{いか}でした」と梅子が聞^きいた時、令嬢は何とも答へなかつた。代助には夫^{それ}が劇^かを解^{かい}しないと云ふより、劇を輕蔑^{けいべつ}してゐる様^{よう}に取れた。それなのに、梅子はつゞけて、同じ問題^{もんだい}に就^ついて、甲の役者は何^どうだの、乙の役者は何^{なん}だのと評^{ひやう}し出した。代助は又^あ嫂^{にようめ}が論理^{ろんり}を踏^ふみ外^{はづ}したと思つた。仕方がないから、横^{よこ}合^{あひ}から、

「芝居は御嫌^{きら}ひでも、小説は御読^よみになるでせう」と聞^きいて芝居の話^わを已^やめさした。令嬢は其時^{そのとき}始めて、一寸^{ちよつと}代助の方^{かた}を見^みた。けれども答^{こた}は案外^{はんがい}に判^{はつ}然^{きり}してゐた。

「いえ小説も」

令嬢の答を待ち受けてゐた、主客はみんな声を出して笑つた。

高木は令嬢の為^{ため}に説明の勞を取つた。その云ふ所によると、令嬢の教育を受けたミス何^{なん}とか云ふ婦人の影響で、令嬢はある点では殆んど清教徒^{ピュリタン}の様に仕込まれてゐるのださうであつた。だから余程時代後^{おく}れだと、高木は説明のあとから批評さへ付け加へた。其時は無論誰^{だれ}も笑はなかつた。耶蘇教に対して、あまり好意を有^もつてゐない父^{ちち}は、

「それは結構だ」と賞^ほめた。梅子は、さう云ふ教育の価値を全く解^{かい}する事が出来^{でき}なかつた。にも拘はらず、

「本当にね」と趣味に適^{かな}はない不得要領の言葉を使^{つか}つた。誠吾は梅子の言葉が、あまり重い印象を先方に与へない様に、すぐ問題

を易えた。

「ぢや英語は御上手でせう」

令嬢はいゝえと云つて、心持顔を赤くした。

十二の七

食^{しょくじ}事が済^すんでから、主^{しゅかく}客は又応接間^まに戻^{もど}つて、話^{はなし}を始^{はじ}めたが、蠟燭^{ろうそく}を継^つぎ足^たした様に、新^{あた}らしい方^{あた}へは急に火^あが移^{うつ}りさうにも見えなかつた。梅子は立つて、ピアノの蓋^{ふた}を開^あけて、

「何^{なに}か一つ如何^{いかゞ}ですか」と云ひながら令嬢を顧^みみた。令嬢は固^{かた}より席を動^{うご}かなかつた。

「ぢや、代さん、皮切かはきりに何か御遣りや」と今度は代助に云つた。

代助は人ひとに聞かせる程の上手でないのを自覺してゐた。けれども、そんな弁解べんげをすると、問答くさが理窟くさ臭く、しつこくなる許ばかりだから、「まあ、蓋ふたを開けて御置おきなさい。今いまに遣やるから」と答へたなり、何かなしに、無関係はなの事を話はなしつつゐた。

一時間程きやくかへして客は歸つた。四人は肩かたを揃へて玄關迄出た。奥へ這入る時、

「代助はまだ歸かへるんぢやなからうな」と父ちちが云つた。代助はみんなから一足ひとあし後れて、鴨居かもゐの上うへに両手とびが届く様な伸のびを一つした。それから、人ひとのゐない応接間まと食堂を少しうろくして座敷へ来て見ると、兄あにと嫂あによめが向き合あつて何か話はなしをしてゐた。

「おい、すぐ帰かへつちや不可いけない。御父おとうさんが何か用があるさうだ。奥おくへ御出おいで」と兄あにはわざとらしい真面目まじめな調子で云つた。梅子は薄わら笑わらひをしてゐる。代助は黙だまつて頭あたまを搔かいた。

代助は一人ひとりで父ちちの室へやへ行く勇氣がなかつた。何とか蚊とか云つて、兄夫婦あにを引張ひつて行いかうとした。それが旨うまく成功せいこうしないので、とう／＼其所そこへ坐すはり込んで仕舞しまつた。所へ小間使こまづかひが来きて、

「あの、若旦那様わかしらに一寸ちよつと、奥迄おく入いらつしやる様に」と催促そそした。

「うん、今行くいまい」と返事こたへをして、それから、兄夫婦あにに斯かういふ理

窟くつを述べた。——自分一人ひとりで父ちちに逢あふと、父ちちがあゝ云ふ氣象けいさうの所

へ持つて来きて、自分がこんな凶法げうぽう螺らだから、殊ことによると大といに老

人しよりを怒おこらして仕舞しまふかも知れない。さうすると、兄夫婦あにだつて、

後あとから面倒くさい調停てうていをしたり何かしなければならぬ。其方そのほうが却かえつて迷惑めいわくになる訳わけだから、骨ほね惜おしをせずおしみに今いま一寸ちよつと一所いしょに行いつて呉くれたら宜よろからう。

兄あには議論ぎろんが嫌おとこな男おとこなので、何なんだ下くだらないと云いはぬ許ばかりの顔かほをし
たが、

「ぢや、さあ行かう」と立あち上あがつた。梅子も笑わらひながらすぐに立たつた。三人さんして廊下ちやうを渡わつて父ちやうの室へやに行いつて、何なに事ごとも起おこらな
かつたかの如ごとく着坐おとした。

そこでは、梅子うめこが如じよ才さいなく、代助だいてすけの過去ちやうに父ちやうの小言こごとが飛とばな
い様てな手加減かへんをした。さうして談話だんわの潮流ちやうりゅうを、成なるべく今帰いまつた
来客きやくの品評ひんひやうの方もへ持もつて行いつた。梅子うめこは佐川さがわの令嬢れいぢやうを大變おと大人となし

さうない子こだと賞ほめた。是には父ちちも兄あにも代助も同意を表した。けれども、兄あには、もし亜米利加のミスの教育を受けたと云ふのが本當なら、もう少しは西洋流にはきくしさうなものだと云うたふ疑がひを立てた。代助は其疑うたがひにも賛成した。父と嫂は黙もくつてゐた。そこで代助は、あの大人おとなしさは、羞恥はにかむ性質の大人さだから、ミスの教育とは独立に、日本の男女の社交的關係から来たものだらうと説明した。父ちちはそれも左さうだと云つた。梅子は令嬢あにの教育地が京都だから、あゝなんぢやないかと推察した。兄あには東京だつて、御お前まへ見た様なばかりの許ゆるはゐないと云つた。此時父ちちは嚴正げんせいな顔かほをして灰は吹いを叩たたいた。次に、容色きりようだつて十人並なみより可いいぢやありませんかと梅子が云つた。是には父ちちも兄あにも異議はなかつた。代助も賛

成の旨^{むね}を告白した。四人は夫^{それ}から高木の品評に移った。温健の好人物と云ふ事で、其^{その}方^{ほう}はすぐ方付^{かたづ}いて仕舞った。不幸にして誰^{だれ}も令嬢の父母を知らなかつた。けれども、物^{もの}堅^{がた}い地味^{ひと}な人だと云ふ丈は、父^{ちち}が三人^{さんにん}の前で保証した。父^{ちち}はそれを同県下の多額納税議員の某^{たしか}から確めたのださうである。最後に、佐川家の財産に就ても話^{はなし}が出た。其^{その}時父は、あゝ云ふのは、普通の実業家より基礎^{しつか}が確りしてゐて安全だと云つた。

令嬢の資格^{ほびきだ}が略定^{りやくてい}まつた時、父^{ちち}は代助に向つて、「大した異存もないだらう」と尋ねた。其語調と云ひ、意味と云ひ、何^どうするかね位の程度ではなかつた。代助は、「左様^{さよう}ですな」と矢つ張り煮^にえ切^きらない答をした。父^{ちち}はじつと代

助を見てゐたが、段々皺だんくしわの多い額ひたひくもを曇らした。兄あには仕方なしに、
 「まあ、もう少し善よく考へて見るが可いい」と云つて、代助の為ために
 余裕を付つけて呉れた。

十三の一

四日よつかほど程してから、代助は又父ちちの命令で、高木の出立しつたつを新橋
 迄見送みおくつた。其日そのひは眠ねむい所を無理に早く起おこされて、寐足ねたらない頭あたま
 を風かぜに吹ふかした所せゐ為か、停車場に着つく頃、髪かみの毛なかの中に風邪かぜを引ひ
 いた様な気がした。待合所まちあひじよに這入はいるや否や、梅子から顔色かほいろが
 可よくないと云ふ注意を受けた。代助は何なんにも答へずに、帽子を脱ぬ

いで、時々濡れた頭を抑えた。仕舞には朝奇麗に分けた髪がもぢや／＼になつた。

プラツトフォームで高木は突然代助に向つて、

「何うです此汽車で、神戸迄遊びに行きませんか」と勧めた。代助はたゞ難有うと答へた丈であつた。愈汽車の出る間際に、梅子
はわざと、窓際に近寄つて、とくに令嬢の名を呼んで、

「近い内に又是非入らつしやい」と云つた。令嬢は窓のなかで、

叮嚀に会釈したが、窓の外へは別段の言葉も聞えなかつた。汽車
を見送つて、又改札場を出た四人りは、それぎり離れ／＼にな

つた。梅子は代助を誘つて青山へ連れて行かうとしたが、代助は
頭を抑えて応じなかつた。

くるま
車に乗つてすぐ牛込へ歸つて、それなり書齋へ這入つて、仰
け
向に倒れた。門野は一寸其様子を覗きに來たが、代助の平生
を知つてゐるので、言葉も掛けず、椅子に引つ掛けてある羽織丈
を抱へて出て行つた。

代助は寐ながら、自分の近き未来を何うなるものだらうと考へ
た。斯うして打遣つて置けば、是非共嫁を貰はなければならな
なる。嫁はもう今迄に大分断つてゐる。此上断れば、愛想を尽
かされるか、本当に怒り出されるか、何方かになるらしい。もし
愛想を尽かされて、結婚勧誘をこれ限り断念して貰へれば、それ
に越した事はないが、怒られるのは甚だ迷惑である。と云つて、
進まぬものを貰ひませうと云ふのは今代人として馬鹿氣てゐる。

代助は此このデレンマの間にあひだ 徊した。

彼は父と違つて、当初からある計画を拵らえて、自然を其計画通りに強ひる古風な人ではなかつた。彼は自然を以て人間の拵こしらへた凡ての計画よりも偉大なものと信じてゐたからである。だから父が、自分の自然に逆らつて、父の計画通りを強ひるならば、それは、去られた妻が、離縁状を楯に夫婦の關係を証拠立てやうとすると一般であると考へた。けれども、そんな理窟を、父に向つて述べる気は、丸でなかつた。父を理攻にする事は困難中の困難であつた。其困難を冒した所で、代助に取つては何等の利益もなかつた。其結果は父の不興を招く丈で、理由を云はずに結婚を拒絶するのと撰む所はなかつた。

かれは父と兄と嫂の三人の中で、父の人格に尤も疑を置いた。

今度の結婚にしても、結婚其物が必ずしも父の唯一の目的ではあ

るまいと迄推察した。けれども父の本意が何処にあるかは、固より

明らかに知る機会を与へられてゐなかつた。彼は子として、父

の心意を斯様に揣摩する事を、不徳義とは考へなかつた。従つて

自分丈が、多くの親子のうちで、尤も不幸なものであると云ふ様

な考は少しも起さなかつた。たゞ是がため、今日迄の程度より以

上に、父と自分の間が隔つて来さうなのを不快に感じた。

彼は隔離の極端として、父子絶縁の状態を想像して見た。さう

して其所に一種の苦痛を認めた。けれども、其苦痛は堪え得られ

ない程度のもではなかつた。寧ろそれから生ずる財源の杜絶の

方が恐ろしかった。

もし馬鈴薯ポテトが金剛石ダイヤモンドより大切になつたら、人間にんげんはもう駄目

であると、代助は平生から考へてゐた。向後父ちひいかりの怒に触れて、万

一金錢きんせん上の關係が絶えたとすれば、彼は厭かれいやでも金剛石ダイヤモンドを放り

出して、馬鈴薯ポテトに噛かぢり付かなければならない。さうして其償つぐなひには

自然の愛が残る丈である。其愛の対象は他人の細君であつた。

彼は寐ながら、何時いつ迄も考へた。けれども、彼の頭あたまは何時いつ迄も

何処どこへも到着ちやくする事が出来なかつた。彼は自分の寿命を極きめる権

利を持たぬ如く、自分の未来をも極め得なかつた。同時に、自分

の寿命に、大抵の見当を付つけ得る如く、自分の未来にも多少の影かげ

を認めた。さうして、徒らに其影を捕捉しやうと企てた。

十三の二

其時代助の腦の活動は、夕闇を驚ろかす蝙蝠かはほりの様な幻像を
 ちらり／＼と産み出すに過ぎなかつた。其羽搏はばたきの光を追ひ掛け
 て寐ねてゐるうちに、頭が床から浮き上がつて、ふわ／＼する様に
 思はれて来たき。さうして、何時いつの間にか軽い眠に陥つた。

すると突然誰だれか耳の傍で半鐘を打つた。代助は火事と云ふ意識
 さへまだ起おこらない先に眼を醒さました。けれども跳ね起きもせずに
 寐ねてゐた。彼の夢に斯んな音の出るのは殆んど普通であつた。あ
 る時はそれが正氣に返つた後迄も響ひびいてゐた。五六日前彼は、彼

の家の大いに揺れる自覺と共に眠を破つた。其時彼は明らかに、
彼の下に動く畳の様を、肩と腰と脊の一部に感じた。彼は又夢に
得た心臓の鼓動を、覺めた後迄持ち伝へる事が屢あつた。そんな
場合には聖徒の如く、胸に手を当て、眼を開けた儘、じつと
天井を見詰めてゐた。

代助は此時も半鐘の音が、じいんと耳の底で鳴り尽して仕舞ふ
迄横になつて待つてゐた。それから起きた。茶の間へ来て見ると、
自分の膳の上に簀垂が掛けて、火鉢の傍に据ゑてあつた。柱時計
はもう十二時回つてゐた。婆さんは、飯を済ました後と見えて、
下女部屋で御櫃の上に肱を突いて居眠りをしてゐた。門野は何処
へ行つたか影さへ見えなかつた。

代助は風呂場へ行つて、頭あたまを濡ぬらしたあと、独ひとり茶ちやの間まの膳ぜんに就いた。そこで、淋さみしい食事を済すまして、再ふたび書齋ふたに戻つたが、久し振ぶりに今日けふは少し書見をしようと云ふ心こころ組ぐみであつた。

かねて読よみ掛かけてある洋書を、栞しをりの挟はさみである所で開あけて見ると、前後の關係を丸で忘れてゐた。代助の記憶に取とつて斯かう云ふ現象は寧ろ珍めづらしかつた。彼かれは学校生活の時代から一種の読書家であつた。卒業の後のちも、衣食わづらひの煩わづらひなしに、講読の利益を適意に収め得る身分みぶんを誇ほこりにしてゐた。一頁ページも眼めを通とほさないで、日ひを送ることがあると、習慣な上何なにとなく荒癢の感を催ふした。だから大抵な事故があつても、成るべく都合して、活字したしに親したしんだ。ある時は読書そのものが、唯一なる自己の本領の様な氣がした。

代助は今茫然として、烟草たばこを燻くゆらしながら、読み掛けた頁ページを二三枚あとへ繰くつて見た。そこに何どんな議論があつて、それが何どう続つづくのか、頭あたまを拵まこしらへる為ために一ち寸骨よつとを折つた。其努力は舁はしから棧橋へ移る程うごく樂らくではなかつた。食くひ違ちがつた断面の甲に迷まごつてゐるものが、急に乙に移るべく余儀なくされた様であつた。代助はそれでも辛抱して、約二時間程め眼ページを頁うへの上に曝さらしてゐた。が仕舞にとうとう堪え切れなくなつた。彼かれの読よんでゐるものは、活字の集あつまり合あとして、ある意味を以て、彼かれの頭あたまに映えいずるには違ちがひないが、彼かれの肉や血ちに廻まはる気色は一向見えなかつた。彼は氷囊を隔て、氷こほりに食くひ付いた時の様に物足らなく思つた。

彼は書物を伏ふせた。さうして、こんな時に書物を読よむのは無理

だと考へた。同時にもう安息する事も出来なくなつたと考へた。彼の苦痛は何時ものアンニユイではなかつた。何も為るのが憚いと云ふのとは違つて、何か為なくてはゐられない頭の狀態であつた。

彼は立ち上がつて、茶の間へ来て、畳である羽織を又引掛た。さうして玄關に脱ぎ棄てた下駄を穿いて馳け出す様に門を出た。時は四時頃であつた。神樂坂を下りて、当もなく、眼に付いた第一の電車に乗つた。車掌に行先を問はれたとき、口から出任せの返事をした。紙入を開けたら、三千代に遣つた旅行費の余りが、三折の深底の方にまだ這入つてゐた。代助は乗車券を買つた後で、札の数を調べて見た。

彼は其晩を赤坂のある待合で暮らした。其所で面白い話を聞いた。ある若くて美しい女が、去る男と関係して、其種を宿した所が、愈子を生む段になつて、涙を零して悲しがつた。後から其訳を聞いたら、こんな年で子供を生ませられるのは情ないからだと答へた。此女は愛を専らにする時機が余り短か過ぎて、親子の関係が容赦もなく、若い頭の上を襲つて来たのに、一種の無定を感じたのであつた。それは無論堅気（かたぎ）の女ではなかつた。代助は肉の美と、霊の愛にのみ己れを捧げて、其他を顧みぬ女の心理状態として、此話を甚だ興味あるものと思つた。

十三の三

翌よくじつ日になつて、代助はどうく又三千代に逢あひに行つた。其時かれはらなか彼は腹の中で、先達せんだつて置いて来た金きかねの事を、三千代が平岡に話したらうか、話はなさなかつたらうか、もし話はなしたとすれば何どんな結果を夫婦うへの上に生じたらうか、それが氣掛きがりだからと云ふ口実を拵こしらえた。彼は此氣掛きがり、自分を驅かつて、凝じつと落ち付つかれな様に、東西に引張回ひっぱりまはした揚句、遂ついに三千代の方に吹ふき付つけるのだと解釈した。

代助は家いへを出る前でに、昨夕着た肌着ゆふべきも単衣はだぎも悉く改ひとへめて氣きを新あらたにした。外そとは寒暖計の度盛どもりの日を逐おふて騰あがる頃ころであつた。歩あるいてゐると、湿しめっぽい梅雨つゆが却とほつて待ち遠しい程熾さかんに日ひが照てつた。

代助は昨夕ゆうべの反動で、此陽気な空気なかの中に落ちる自分の黒い影くろかげが苦くになつた。広い鰐ひろつばの夏帽なつぼうを被りながら、早く雨季うきに入れば好いと云ふ心持があつた。其雨季うきはもう二三日の眼前にちがんぜんに逼せまつてゐた。彼の頭かれあたまはそれを予報するかの様に、どんよりと重おもかつた。

平岡の家うちの前まへへ来た時は、曇くもつた頭あたまを厚く掩あつふ髪かみの根元ねもとが息切いきれてゐた。代助は家いへに入る前まへに先づ帽子まを脱ぬいだ。格子しには締しまりがしてあつた。物音ものおとを目的めあてに裏うらへ回まはると、三千代は下女はりもと張はり物ものをしてゐた。物置ものおきの横よこへ立たて掛かけた張板はりいたの中途ちうとから、細ほそい首くびを前まへへ出だして、曲こみながら、苦茶々くちや々々になつたものを丹念たんねんに引き伸のばしつゝあつた手を留とめて、代助を見みた。一寸ちよつとは何なんとも云はなかつた。代助も、しばらくは唯立ただたつてゐた。漸たくにして、

「又来きました」と云つた時とき、三千代は濡ぬれた手を振つて、馳はけ込
 む様に勝手から上あがつた。同時に表おもてへ回まはれと眼めで合図をした。三
 千代は自分で沓くつぬぎ脱おへ下りて、格子の締しまりを外はづしながら、
 「無用心ぶじんだから」と云つた。今いま迄まで日の透とほる澄すんだ空気の下したで、
 手てを動うごかしてゐた所せ為ゐで、頬ほの所ところが熱ほてつて見えた。それが額ひたひぎ
 際はへ来きて何時いつもの様ように蒼白あをしろく變かはつてゐる辺あたりに、汗あせが少し煮染にじみ
 出だした。代助は格子の外そとから、三千代の極きわめて薄手うすな皮膚を眺め
 て、戸あの開あくのを静かに待まつた。三千代は、
 「御待遠さま」と云つて、代助を誘いざなふ様に、一ひと足横あしよこへ退のいた。
 代助は三千代とすれすれゝになつて内うちへ這入はいつた。座敷へ来きて見る
 と、平岡の机まへの前に、紫むらさきの座蒲団がちゃんと据すゑてあつた。代助

はそれを見た時ちよつといや一寸厭な心持がした。土つちの和なれない庭にはの色いろが黄き色いろに光ひかる所に、長い草ながが見苦はしく生はえた。

代助は又忙いそがしい所を、邪魔きに来て済まないといふ様な尋常な云いひわけ訳わけを述べながら、此無趣味な庭にはを眺めた。其時三千代をこん

な家うちへ入れて置くおのは實際氣の毒だといふ氣が起おこつた。三千代は

水みづいぢりで爪つまさき先の少すこしふやけた手てを膝ひざの上うへに重ねかさねて、あまり退た

屈いくつだから張物はりものをしてゐた所だと云つた。三千代の退屈たいくつといふ

意味おつとは、夫が始終外そとへ出てゐて、單調な留守居の時間を無聊に苦

しむと云ふ事であつた。代助はわざと、

「結構な身分みぶんですね」と冷ひやかした。三千代は自分の荒涼な胸むねの中うち

を代助に訴へる様子もなかつた。黙だまつて、次つぎの間まへ立たつて行いつた。

用簾笥くわんひびの環わを響ひびかして、赤あかい天鷲絨てんじゆで張はつた小ちさい箱はこを持もつて出でて來きた。代助だいすけの前まへへ坐すはつて、それを開あけた。中なかには昔むかし代助だいすけの遺やつた指環さしわがちやんと這入はいつてゐた。三千代さん千代は、たゞ

「可いでせう、ね」と代助だいすけに謝罪せんざいする様ように云いつて、すぐ又立たつて次つぎの間まへ行いつた。さうして、世よの中なかを憚はづかる様ように、記念きねんの指環さしわをそこゝに用簾笥くわんひびに仕舞もつて元もとの坐まに戻もつた。代助だいすけは指環さしわに就つては何事かたも語かたらなかつた。庭にはの方はうを見て、

「そんなに閑ひまなら、庭にはの草くさでも取とつたら、何どうです」と云いつた。すると今度は三千代さん千代の方が黙だまつて仕舞もつた。それが、少しば時らく続つづいた後あとで代助だいすけは又改あらためて聞きいた。

「此このあひだ間の事ことを平岡君へいおかに話はなしたんですか」

三千代は低い声で、

「いゝえ」と答へた。

「ぢや、未だ知らないんですか」と聞き返した。

其時三千代の説明には、話さうと思つたけれども、此頃平岡は
ついぞ落ち付いて宅にゐた事がないので、つい話しそびれて未だ
知らせずにゐると云ふ事であつた。代助は固より三千代の説明を
嘘とは思はなかつた。けれども、五分の閑さへあれば夫に話され
る事を、今日迄それなりに為てあるのは、三千代の腹の中に、何
だか話し悪い或蟠まりがあるからだと思はずにはゐられなかつた。
自分は三千代を、平岡に対して、それだけ罪のある人にして仕舞
つたと代助は考へた。けれども夫は左程に代助の良心を螫すには

至らなかつた。法律の制裁はいざ知らず、自然の制裁として、平岡も此結果に対して明かに責^{せめ}を分^{わか}たなければならぬと思つたからである。

十三の四

代助は三千代に平岡の近來の模様を尋ねて見た。三千代は例によつて多くを語る事を好ま^{この}なかつた。然し平岡の妻に対する仕打^{しうち}が結婚当時と變つてゐるのは明か^{あきら}であつた。代助は夫婦が東京へ歸つた当時^{すでに}既にそれを見抜いた。夫^{それ}から以後^{あらた}改まつて兩人^{ふたり}の腹^{はら}の中^{なか}を聞いた事^{こと}はないが、それが日毎に好^よくない方に、速度を加へ

て進行しつゝあるのは殆んど争ふべからざる事実と見えた。夫婦の間に、^{あひだ}代助と云ふ第三者が点ぜられたがために、此疎隔^{そかく}が起つたとすれば、代助は此方面に向つて、もつと注意深く働らいたかも知れなかつた。けれども代助は自己の悟性に訴へて、さうは信ずる事が出来なかつた。彼は此結果の一部分を三千代の病氣に歸した。さうして、肉体上の關係が、^{おつと}夫の精神に反響を与へたものと斷定した。又其一部分を子供の死亡に歸した。それから、他の一部分を平岡の遊蕩に歸した。又他の一部分を会社員としての平岡の失敗に歸した。最後に、残りの一部分を、平岡の放埒から生じた經濟事狀に歸した。凡てを概括した上^{うへ}で、平岡は貰^{もら}ふべからざる人^{ひと}を貰^{もら}ひ、三千代は嫁^{とつ}ぐ可^べからざる人^{ひと}に嫁^{とつ}いだのだと解決し

た。代助は心の中で痛く自分が平岡の依頼に応じて、三千代を彼
 の為^{ため}に周旋した事を後悔した。けれども自分が三千代の心を動か^{うご}
 すが為^{ため}に、平岡が妻から離れたとは、何うしても思ひ得なかつた。

同時に代助の三千代に対する愛情は、此夫婦の現在の關係を、
 必須条件として募りつゝある事もまた一方では否^{いな}み切れなかつた。
 三千代が平岡に嫁ぐ前^{とつまへ}、代助と三千代の間^{あひだ}柄^{がら}は、どの位の程
 度迄進んでゐたかは、しばらく措^おくとしても、彼は現在^{かれ}の三千代
 には決して無頓着である訳には行かなかつた。彼は病氣に冒され
 た三千代をたゞの昔^{むかし}の三千代よりは氣の毒に思つた。彼は小供を
 亡^なくした三千代をたゞの昔^{むかし}の三千代よりは氣の毒に思つた。彼
 は夫^{おつと}の愛を失ひつゝある三千代をたゞの昔^{むかし}の三千代よりは氣の毒

に思つた。彼は生活難に苦しみつゝある三千代をたゞの昔の三千代よりは氣の毒に思つた。但し、代助は此夫婦の間を、正面から永久に引き放さうと試みる程大胆ではなかつた。彼の愛はさう逆上してはゐなかつた。

三千代の眼のあたり、苦しんでゐるのは經濟問題であつた。平岡が自力で給し得る丈の生活費を勝手の方へ回さない事は、三千代の口吻で慥であつた。代助は此点丈でもまづ何うかしなければなるまいと考へた。それで、

「一つ私が平岡君に逢つて、能く話して見やう」と云つた。三千代は淋しい顔をして代助を見た。旨く行けば結構だが、遣り損なへば益三千代の迷惑になる許だとは代助も承知してゐたので、強

ひて左様^{さよう}しやうとも主張しかねた。三千代は又立つて次の間^{つぎま}から
 一封^{いっふう}の書状^もを持つて来た。書状は薄^{うす}青^{あを}い状袋へ這入つてゐた。
 北海道にゐる父^{ちち}から三千代へ宛^{あて}たものであつた。三千代は状袋の
 中^{なか}から長い手紙を出^だして、代助に見せた。

手紙には向^{むか}ふの思はしくない事や、物価の高くて活計^{くわし}にくい事
 や、親類も縁者もなくして心細い事や、東京の方^でへ出^でたいが都合は
 つくまいかと云ふ事や、——凡て憐れな事ばかり書^かいてあつた。
 代助は叮嚀^{めい}に手紙を巻^まき返して、三千代に渡^{わた}した。其時三千代は
 眼^めの中^{なか}に涙^{なみだ}を溜^ためてゐた。

三千代の父はかつて多少の財産と称^{とな}へらるべき田畠の所有者であつた。
 日露戦争の当時、人の勧^{すす}め^めに應じて、株に手を出して全く

遣^やり損^{そく}なつてから、潔よく祖先の地を売り払つて、北海道へ渡つたのである。其^{その}後の消息は、代助も今^{いま}此手紙を見せられる迄一向知らなかつた。親類はあれども無^なきが如しだとは三千代の兄^{あに}が生きてゐる時分よく代助に語つた言葉であつた。果^{はた}して三千代は、父^{ちち}と平岡ばかりを便^{たより}に生きてゐた。

「貴^{あなた}方は羨^{うらや}ましいのね」と瞬^{また}きながら云つた。代助はそれを否定する勇氣に乏しかつた。しばらくしてから又、

「何^{なん}だつて、まだ奥^{おく}さんを御^{おも}貰^{もら}ひなさらないの」と聞いた。代助は此^{この}問^{とひ}にも答^{こた}へる事が出来なかつた。

十三の五

しばらく黙然^{もくねん}として三千代の顔を見てゐるうちに、女の頬^ほから血^ちの色^{いろ}が次第^{しだい}に退^{しり}ぞいて行^いつて、普通^{ふつう}よりは眼^めに付^つく程蒼白^{あをしろ}くなつた。其^{そのとき}時代助は三千代と差^さ向^{むかひ}で、より長く坐^{すは}つてゐる事の危険^{けんけん}に、始めて氣^きが付^ついた。自然^{しぜん}の情合^{あひ}から流^{なが}れる相互^{さうご}の言葉^{ことば}が、無意識^{むいしぎ}のうちに彼等^{かれら}を駆^かつて、準繩^{じゆん}の埒^{らち}を踏^ふみ超^こえさせるのは、今^{いま}二三分^{ふん}の裡^{うち}にあつた。代助は固^{かた}より夫^{それ}より先^{さき}へ進^{すす}んでも、猶^{そし}素知^{そし}らぬ顔^{かほ}で引返^{ひきかへ}し得^うる、会話^{かいわ}の方^{かた}を心^{こゝろ}得^えてゐた。彼は西洋^{せいよう}の小説^{せうた}を読^よむたびに、そのうちに出^でて来^くる男女^{なんにょ}の情話^{じやうわ}が、あまりに露骨^{ろこつ}で、あまりに放肆^{はうし}で、且つあまりに直線^{ちくせん}的に濃厚^{どんこう}なのを平生^{へいぜい}から怪^{あやし}んでゐた。原語^{げんご}で読^よめば兎^うに角^{かく}、日本^{にっぽん}には訳^{わけ}し得^えぬ趣^{おもむき}

味のものと考へてゐた。従つて彼は自分と三千代との關係を發展させる^{ため}に、舶来^{せりふ}の台詞を用ひる意志は毫もなかつた。少なくとも^{ふたりあひだ}も二人の間では、尋常の言葉で充分用が足りたのである。が、其所^こに、甲の位地から、知らぬ間に乙^まの位置に滑^{すべ}り込む危険が潜^{ひそ}んでゐた。代助は辛^{から}うじて、今一步^{いまいっぽ}と云ふ際^{きは}とい所で、踏^とみ留^どまつた。帰る時、三千代は玄関迄送^きつて来て、「淋^{さむ}しくつて不可^{いけ}ないから、又来^きて頂戴」と云つた。下女はまだ^{うら}裏^{はりもの}で張物をしてゐた。

表へ出た代助は、ふら／＼と一丁程歩^{ある}いた。好^いい所^{ところ}で切^きり上^あげたといふ意識があるべき筈であるのに、彼の心^{かれこころ}にはさう云ふ満足^{ちつ}が些^なとも無かつた。と云つて、もつと三千代と対座してゐて、自

然の命めいずるが儘ままに、話し尽して帰れば可よかつたといふ後悔くわいもなかつた。彼は、彼所あそこで切り上げても、五分十分の後切り上げても、必竟は同じ事であつたと思ひ出した。自分と三千代との現在の關係は、此このまへ前逢つた時、既に発展してゐたのだと思ひ出した。否、其前逢つた時既に、と思ひ出した。代助は二人ふたりの過去を順次さかに溯さかぼつて見て、いづれの断面だんめんにも、二人ふたりの間に燃る愛ほのほの炎を見出さない事はなかつた。必竟は、三千代が平岡に嫁とつぐ前、既に自分すでに嫁とついでゐたのも同じ事だと考へ詰めた時、彼は堪えがたき重いものを、胸むねの中なかに投げ込まれた。彼は其重量そのの為ために、足あしがふらつた。家いへに歸つた時、門野かどのが、

「大變顔かほの色いろが悪わるい様ですね、何どうかなさいましたか」と聞いた。

代助は風呂場へ行つて、蒼い額から奇麗に汗を拭き取つた。さうして、長く延び過ぎた髪を冷水に浸した。

それから二日程代助は全く外出しなかつた。三日目の午後、電車に乗つて、平岡を新聞社に尋ねた。彼は平岡に逢つて、三千代の為に充分話をする決心であつた。給仕に名刺を渡して、埃だらけの受付に待つてゐる間、彼はしばしば袂から手帛を出して、鼻を掩ふた。やがて、二階の応接間へ案内された。其所は風通しの悪い、蒸し暑い、陰気な狭い部屋であつた。代助は此所で烟草を一本吹かした。編輯室と書いた戸口が始終開いて、人が出たり這入つたりした。代助の逢ひに來た平岡も其戸口から現はれた。先達て見た夏服を着て、相変らず奇麗な襟とカフスを掛けてゐ

た。^{いそが}忙しきうに、

「やあ、^{しばらく}暫く」と云つて代助の^{まへ}前に立^たつた。代助も相手に^{その}唆かされた様に立ち上^あがつた。二人は^{ふたり}立ちながら一寸^{ちよつとはなし}話をした。丁度編輯のいそがしい時^{とき}で緩^{ゆつ}くり何^どうする事も出来なかつた。代助は改めて平岡の都合を聞いた。平岡はポケットから時計を出^だして見て、

「失敬だが、もう一時間程して来^きてくれないか」と云つた。代助は帽子を取つて、又暗^{くら}い埃^{ほこり}だらけの階段を下^おりた。表へ出^でると、^{それ}夫でも涼^{すず}しい風が吹いた。

代助はあてもなく、其^{そこ}所^{そこ}いらを^{ぶら}逍遥^ついた。さうして、愈平岡と逢^はつたら、どんな風^{はなし}に話^きを切り出^ださうかと工夫した。代助の意は、

三千代に刻下の安慰を、少しでも与へたい^{ため}に外ならなかつた。けれども、夫^{それ}が為^{ため}に、却つて平岡の感情を害^{がい}する事があるかも知れないと思つた。代助は其惡結果の極端として、平岡と自分の間に起り得る破裂をさへ予想した。然し、其時は何^どんな具合にして、三千代を救はうかと云ふ成案^{あん}はなかつた。代助は三千代と相對^{あひたい}づくで、自分等^{じぶんらふたり}二人の間^{あひだ}をあれ以上に何^どうかする勇氣を有^もたなかつたと同時に、三千代のために、何^{なに}かなくては居られなくなつたのである。だから、今日^{けふ}の会見は、理知の作用から出^でた安全の策と云ふよりも、寧ろ情の旋風^{つむじ}に捲^まき込まれた冒険の働^{はたら}きであつた。其^{そこ}所に平生の代助と異なる点があらはれてゐた。けれども、代助自身は夫^{それ}に氣が付いてゐなかつた。一時間の後^{のち}彼は又編輯室

の入口いりぐちに立つた。さうして、平岡と一所に新聞社の門を出た。

十三の六

裏通りを三四丁来た所で、平岡が先へ立つて或家あるいへに這入はいつた。
 座敷ざしきの軒のきに釣つりしのぶの忍かゝが懸かつて、狭せまい庭にはが水で一面に濡ぬれてゐた。
 平岡は上衣うはぎを脱ぬいで、すぐ胡坐あぐらをかいだ。代助は左程暑あついとも思
 はなかつた。団扇は手にした丈で済すんだ。

会話は新聞社内ありさまの有様から始まつた。平岡は忙いそがしい様で却つ
 て楽らくな商買で好いいと云つた。其語気には別まけに負惜おしみの様子も見
 えなかつた。代助は、それは無責任だからだらうと調戲からつた。平

岡は真面目になつて、弁解をした。さうして、今日の新聞事業程競争の烈しくて、機敏な頭あたまを要するものはないと云ふ理由わけを説明した。

「成程たゞ筆ふでが達者な丈ぢや仕様があるまいよ」と代助は別に感服した様子を見せなかつた。すると、平岡は斯かう云つた。

「僕は経済方面の係りだが、単にそれ丈でも中々なか／＼面白い事実が挙あがつてゐる。ちと、君の家の会社うちの内幕うちまくでも書いて御覧に入れやうか」

代助は自分の平生の觀察から、斯こんな事を云はれて、驚ろく程ぼんやりしては居ゐなかつた。

「書かくのも面白おもしろいだらう。其代り公平に願ひたいな」と云つた。

「無論嘘は書かない積だ」

「いえ、僕の兄の会社ばかりでなく、一列一体に筆誅して貰ひたいと云ふ意味だ」

平岡は此時邪氣のある笑ひ方をした。さうして、

「日糖事件丈ぢや物足りないからね」と奥歯に物の挟まつた様に云つた。代助は黙つて酒を飲んだ。話は此調子で段々はずみを失ふ様に見えた。すると平岡は、実業界の内状に關聯するとも思つたものか、何かの拍子に、ふと、日清戦争の当時、大倉組に起つた逸話を代助に吹聴した。その時、大倉組は広島で、軍隊用の食料品として、何百頭かの牛を陸軍に納める筈になつてゐた。それを毎日何頭かづつ、納めて置いては、夜になると、そつと行

つて偷み出して来た。さうして、知らぬ顔をして、翌日同じ牛を又納めた。役人は毎日々同じ牛を何遍も買つてゐた。が仕舞に気が付いて、一遍受取つた牛には焼印を押した。所がそれを知らずに、又偷み出した。のみならず、それを平氣に翌日連れて行つたので、とう／＼露見して仕舞つたのださうである。

代助は此話を聞いた時、その実社会に触れてゐる点に於て、現代的滑稽の標本だと思つた。平岡はそれから、幸徳秋水と云ふ社会主義の人を、政府がどんなに恐れてゐるかと思ふ事を話した。幸徳秋水の家の前と後に巡査が二三人宛昼夜張番をしてゐる。一時は天幕を張つて、其中から覗つてゐた。秋水が外出すると、巡査が後を付ける。万一見失ひでもしやうものなら非常な事件に

なる。今本郷に現はれた、今神田へ来た^きと、夫^{それ}から夫^{それ}へと電話が掛^かつて東京市中大騒^{さわ}ぎである。新^{しん}宿^{じゆく}警察署では秋水^{ひとり}一人^{ため}の爲^{ため}に月^{つき}々^{／＼}百円^{つか}使^{つか}つてゐる。同じ仲間^{なかま}の飴屋^{あめや}が、大道^{あめざいく}で飴細工^{あめざいく}を拵^{こしら}えてゐると、白^{しろ}服^{ふく}の巡査^{しうさ}が、飴^{あめ}の前^{まへ}へ鼻^{はな}を出^だして、邪魔^{じゃま}になつて仕方^{しかた}がない。

是も代助^{みよ}の耳^{みみ}には、真面目^{まじめ}な響^{ひび}を与^よへなかつた。

「矢^やつ張り現代的滑稽^{げんてききげき}の標本^{ひょうぽん}ぢやないか」と平岡^{へいおか}は先刻^{さつぎ}の批評^{ひつぷ}を繰^くり返^{かへ}しながら、代助^{だいすけ}を挑^{いど}んだ。代助^{だいすけ}はさうさと笑^{わら}つたが、此方^{こなた}面^{おもて}にはあまり興^{きよう}味^みがないのみならず、今日^{けふ}は平生^{いつしよ}の様^{よう}に普通^{ふつど}の世間話^{せけんわ}をする氣^きでないの^{さつき}で、社会主義^{しやかいしぎ}の事^{こと}はそれなりにして置^おいた。先刻^{さつき}平岡^{へいおか}の呼^よばうと云^いふ芸者^{げんしや}を無理^{むり}に已^やめさしたのも是^{ため}が爲^{ため}であ

つた。

「実は君に話したい事があるんだが」と代助は遂に云ひ出した。

すると、平岡は急に様子を變へて、落ち付かない眼を代助の上に注いだが、卒然として、

「そりや、僕も疾うから、何うかする積なんだけれども、今の所

ぢや仕方がない。もう少し待つて呉れ玉へ。其代り君の兄さんや

御父さんの事も、斯うして書かずにあるんだから」と代助には意

表な返事をした。代助は馬鹿馬鹿しいと云ふより、寧ろ一種の憎

悪を感じた。

「君も大分變つたね」と冷かに云つた。

「君の變つた如く變つちまつた。斯う摺れちや仕方がない。だか

ら、もう少し待つて呉れ給へ」と答へて、平岡はわざとらしい笑ひ方をした。

十三の七

代助は平岡の言語の如何に拘はらず、自分の云ふ事丈は云はうと極めた。なまじい、借金の催促に來たんぢやない抔と弁明すると、又平岡が其裏を行くのが癪だから、向ふの疳違は、疳違で構はないとして置いて、此方は此方の歩を進める態度に出た。けれども第一に困つたのは、平岡の勝手元の都合を、三千代の訴へによつて知つたと切り出しては、三千代に迷惑が掛る

かも知れない。と云つて、問題が其所そこに触ふれなければ、忠告も助言も全く無益である。代助は仕方なしに迂回うくわいした。

「君きみは近來斯かう云ふ所へ大分頻繁だいぶんひんぱんに出ではいりをすると思みえて、家うちのものとは、みんな御馴染なじみだね」

「君きみの様に金かね回まはりが好よくないから、さう豪遊も出来ないが、交つ際きあひだから仕方がないよ」と云つて、平岡は器用な手付てつきをして猪ち口よくくちを口へ着つけた。

「余計な事だが、それで家うちの方ほうの経済は、収支償つぐなふのかい」と代助は思ひ切つて猛進した。

「うん。まあ、好いい加減かげんにやつてるさ」

斯おとう云つた平岡は、急に調子を落おとして、極きわめて氣のない返事を

した。代助は夫限食ひ込めなくなつた。已を得ず、

「不斷は今頃もう家へ歸つてゐるんだらう。此間僕が訪ね

た時は大分遅かつた様だが」と聞いた。すると、平岡は矢張問題を回避する様な語氣で、

「まあ歸つたり、歸らなかつたりだ。職業が斯う云ふ不規則な性質だから、仕方がないさ」と、半ば自分を弁護するためらしく、曖昧に云つた。

「三千代さんは淋しいだらう」

「なに大丈夫だ。彼奴も大分變つたからね」と云つて、平岡は代

助を見た。代助は其眸の内に危しい恐れを感じた。ことによると、

此夫婦の關係は元に戻せないと思つた。もし此夫婦が自然の斧

で割き^{きり}限^きに割かれるとすると、自分の運命は取り歸^{かへ}しの付かない
 未来を眼^めの前^{まへ}に控えてゐる。夫婦が離れゝば離れる程、自分^{じぶん}と三
 千代はそれ丈接近しなければならぬからである。代助は即座^{そくざ}の
 衝動^{しやうどう}の如くに云つた。――

「そんな事が、あらう筈^{はづ}がない。いくら、変^{かは}つたつて、そりや唯^{ただ}
 年^{とし}を取^とつた丈の変化だ。成るべく歸^{かへ}つて三千代さんに安慰を与へ
 て遣^やれ」

「君はさう思ふか」と云ひさま平岡はぐいと飲んだ。代助は、た
 だ、

「思ふかつて、誰^{だれ}だつて左様思^{さう}はざるを得んぢやないか」と半ば
 口^{くち}から出^で任^{まか}せに答へた。

「君は三千代を三年前の三千代と思つてゐるか。大分變つたよ。あゝ、大分變つたよ」と平岡は又ぐいと飲んだ。代助は覺えず胸の動悸を感じた。

「同なじだ、僕の見るところでは全く同じだ。少しも變つてゐやしない」

「だつて、僕は家へ歸つても面白くないから仕方がないぢやないか」

「そんな筈はない」

平岡は眼を丸くして又代助を見た。代助は少し呼吸が逼つた。けれども、罪あるものが雷火に打たれた様な氣は全たくなかつた。彼は平生にも似ず論理に合はない事をたゞ衝動的に云つた。

然しそれは眼の前にある平岡のためだと固く信じて疑はなかつた。彼は平岡夫婦を三年前の夫婦にして、それを便に、自分を三千代から永く振り放さうとする最後の試みを、半ば無意識的に遣つた丈であつた。自分と三千代の關係を、平岡から隠す為の、糊塗策とは毫も考へてゐなかつた。代助は平岡に對して、左程に不信な言動を敢てするには、余りに高尚であると、優に自己を評價してゐた。しばらくしてから、代助は又平生の調子に歸つた。

「だつて、君がさう外へ許出てゐれば、自然金も要る。従つて家の經濟も旨く行かなくなる。段々家庭が面白くなくなる丈ぢやないか」

平岡は、白襯衣の袖を腕の中途迄捲り上げて、

「家庭か。家庭もあまり下さつたものぢやない。家庭を重く見るのは、君の様な独身者に限る様だね」と云つた。

十三の八

此言葉ことばを聞いたとき、代助は平岡が悪くなつた。あからさまに自分の腹はらの中を云ふと、そんなに家庭が嫌きらなら、嫌きらでよし、其代り細君を奪とつちまふぞと判然はつきり知らせたかつた。けれども二人の問答は、其所そこ迄行くには、まだ中中なかなか間があつた。代助はもう一遍ほかの方面から平岡の内部に触れて見た。

「君が東京へ着たてに、僕は君から説教されたね。何か遣れつて」

「うん。さうして君の消極な哲学を聞かされて驚ろいた」

代助は實際平岡が驚ろいたらうと思つた。その時の平岡は、熱病に罹つた人間の如く行爲に渴いてゐた。彼は行爲の結果として、富を冀つてゐたか、もしくは名譽、もしくは權勢を冀つてゐたか。夫でなければ、活動としての行爲、其物を求めてゐたか。それは代助にも分らなかつた。

「僕のように精神的に敗残した人間は、已を得ず、あゝ云ふ消極な意見も出すが。——元來意見があつて、人がそれに則るのぢやない。人があつて、其人に適した様な意見が出て来るのだから、僕の説は僕丈に通用する丈だ。決して君の身の上を、あの説で、何うしやうの斯うしやうのと云ふ訳ぢやない。僕はあの時の君の

意気に敬服してゐる。君はあの時自分で云つた如く、全く活動の人だ。是非共活動して貰ひたい」

「無論大いに遣る積だ」

平岡の答はたゞ此一句限であつた。代助は腹の中で首を傾けた。

「新聞で遣る積かね」

平岡は一寸躊躇した。が、やがて、判然云ひ放つた。――

「新聞にゐるうちは、新聞で遣る積だ」

「大いに要領を得てゐる。僕だつて君の一生涯の事を聞いてゐるんぢやないから、返事はそれで沢山だ。然し新聞で君に面白い活動が出来るかね」

「出来る積だ^{できつもり}」と平岡は簡明な挨拶をした。

はなしこい

話は此所迄来ても、たゞ抽象的に進んだ丈であつた。代助は言

葉の上^{うへ}でこそ、要領を得たが、平岡の本体を見届ける事は些^{ちつ}とも

でき

出来なかつた。代助は何となく責任のある政府委員か弁護士を相

手にしてゐる様な気がした。代助は此時思ひ切つた政略的な御世

辞を云つた。それには軍神広瀬中佐の例が出て来た。広瀬中佐は

日露戦争のときに、閉塞隊に加はつて斃れたため、当時^{ひと}の人から

アイドル

偶像視されて、とう／＼軍神と迄崇められた。けれども、四五

こんにち

年後の今日に至つて見ると、もう軍神広瀬中佐の名を口にするも

ヒーロー

はやみたり

のも殆んどなくなつて仕舞つた。英雄^{ヒーロー}の流行廃^{はやみたり}はこれ程急劇な

ものである。と云ふのは、多くの場合に於て、英雄^{ヒーロー}とは其時代

に極めて大切な人といふ事で、名前丈は偉さうだけれども、本来は甚だ實際的なものである。だから其大切な時機を通り越すと、世間は其資格を段々奪ひにかゝる。露西亞と戦争の最中こそ、閉塞隊は大事だらうが、平和克復の暁には、百の広瀬中佐も全くの凡人に過ぎない。世間は隣人に対して現金である如く、英雄に対しては現金である。だから、斯う云ふ偶像にも亦常に新陳代謝や生存競争が行はれてゐる。さう云ふ訳で、代助は英雄なぞに担がれたい見は更でない。が、もし茲に野心があり覇氣のある快男子があるとすれば、一時的の劍の力よりも、永久的の筆の力で、英雄になつた方が長持がする。新聞は其方面の代表的事業である。

代助は此所迄述べて見たが、元來が御世辞の上に、云ふ事があり書生らしいので、自分の内心には多少滑稽に取れる位、氣が乗らなかつた。平岡は其返事に、

「いや難有う」と云つた丈であつた。別段腹を立てた様子も見えなかつたが、些とも感激してゐないのは、此返事でも明かであつた。

代助は少々平岡を低く見過ぎたのに恥ぢ入つた。実は此側から、彼の心を動かして、旨く油の乗つた所を、中途から転がして、元の家庭へ滑り込ませるのが、代助の計画であつた。代助は此迂遠で、又尤も困難の方法の出立点から、程遠からぬ所で、蹉跌して仕舞つた。

十三の九

其夜そのよ代助は平岡と遂に愚図々々で分わかれた。会見の結果から云ふと、何の為ために平岡を新聞社に訪ねたのだから、自分にも分わからなかつた。平岡の方から見れば、猶更左様さうであつた。代助は必竟何なにしに新聞社迄出掛て来たのか、帰る迄きいに問ひ詰つめずに済んで仕舞つた。

代助は翌日よくじつになつて独り書齋で、昨夕ゆふべの有様ありさまを何遍なんべんとなく頭あたまの中なかで繰り返した。二時間かんも一所はなに話してゐるうちに、自分が平岡に対して、比較的真面目まじめであつたのは、三千代を弁護した

時丈であつた。けれども其真面目は、単に動機どうきの真面目まじめで、口くちにした言葉は矢張好加減いゝかげんな出任でまかせに過ぎなかつた。嚴酷に云へば、嘘うそ許ばかりと云つても可よかつた。自分で真面目まじめだと信じてゐた動機でさへ、必竟は自分の未来を救ふ手段である。平岡から見れば、固もとより真摯なものとは云へなかつた。まして、其他の談話に至ると、始めから、平岡を現在の立場から、自分の望む所おとへ落とし込まうと、たくらんで掛かつた、打算ださん的のものであつた。従つて平岡を何どうする事も出来なかつた。

もし思ひ切つて、三千代を引合ひきあひに出だして、自分の考へ通りを、遠慮なく正面から述のべ立てたら、もつと強い事が云へた。もつと平岡を動揺ゆすぶる事が出来た。もつと彼かれの肺腑に入る事が出来た。に

ちがひ
違ちがひない。其代り遣やり損そこなへば、三千代に迷惑がかゝつて来る。平岡と喧嘩になる。かも知れない。

代助は知らずくあひだの間に、安全にして無能力な方針を取つて、

平岡に接してゐた事を腑甲斐なく思つた。もし斯かう云ふ態度で平岡に当あたりながら、一方では、三千代の運命を、全然平岡に委ゆたねて置けない程の不安があるならば、それは論理の許ゆるさぬ矛盾を、厚こ顔うがんに犯してゐたと云はなければならぬ。

代助は昔むかしのひとが、頭腦づのうの不明瞭な所から、実は利己本位の立場に居りながら、自みづからは固かたく人ひとの為ためと信じて、泣ないたり、感じたり、激したり、して、其結果遂に相手を、自分の思ふ通りに動うごかし得たのを羨うらやましく思つた。自分の頭あたまが、その位のぼんやりさ加減で

あつたら、昨夕ゆうふべの会談にも、もう少し感激して、都合のいゝ効果を収める事が出来たかも知れない。彼は人ひとから、ことに自分の父ちちから、熱誠の足りない男だと云はれてゐた。彼の解剖かれによると、事實は斯かうであつた。人間にんげんは熱誠を以て当あたつて然るべき程に、高尚な、真摯な、純粹な、動機や行為を常住に有するものではない。夫よりも、ずっと下等なものである。其下等な動機や行為を、熱誠に取り扱ふのは、無分別なる幼稚な頭腦の所有者か、然らざれば、熱誠を銜てらつて、己れを高くする山師やましに過ぎない。だから彼かれの冷淡は、人間としての進歩とは云へまいが、よりよく人間を解剖した結果には外ほかならなかつた。彼は普通自分の動機や行為を、よく吟味して見て、其そのあまりに、狡黠ずるくつて、不真面目ふまじめで、大抵

は虚偽きよぎを含んでゐるのを知つてゐるから、遂に熱誠な勢力を以てそれを遂行する氣になれなかつたのである。と、彼は断然信じてゐた。

此所こゝで彼は一いつのデレンマに達した。彼は自分と三千代との關係を、直線的に自然の命ずる通り發展させるか、又は全然其反對に出て、何も知らぬ昔むかしに返るか。何方どつちかにしなければ生活の意義を失つたものと等しいひとと考へた。其他のあらゆる中途半端ちうとはんぱの方法は、偽いつはに始つて、偽いつはに終るより外ほかに道はない。悉く社会的に安全であつて、悉く自己に対して無能無力である。と考へた。

彼は三千代と自分の關係を、天意によつて、——彼はそれを天意としか考へ得られなかつた。——醜酵させる事の社会的危険を

承知してゐた。天意には叶ふが、人の掟おきてに背く恋は、其恋こひの主ぬしの死によつて、始めて社会から認められるのが常であつた。彼は万一の悲劇を二人の間に描えがいて、覚えず慄然とした。

彼は又反対に、三千代と永遠の隔離を想像して見た。其時は天かれ意に従ふ代りに、自己の意志に殉ひとする人にならなければ済すまなかつた。彼は其手段として、父や嫂ち、あによめから勧められてゐた結婚に思ひひ至つた。さうして、此結婚を肯うけがふ事が、凡ての關係を新あらたにするものと考へた。

十四の一

自然の児にならうか、又意志の人にならうかと代助は迷つた。

彼は彼の主義として、弾力性のない硬張つた方針の下に、寒暑にさへすぐ反応を呈する自己を、器械の様に束縛するの愚を忌んだ。同時に彼は、彼の生活が、一大断案を受くべき危機に達して居る事を切に自覚した。

彼は結婚問題に就て、まあ能く考へて見ろと云はれて歸つたぎり、未だに、それを本気に考へる閑を作らなかつた。歸つた時、まあ今日も虎口を逃れて難有かつたと感謝したぎり、放り出して仕舞つた。父からはまだ何とも催促されないが、此二三日は又青山へ呼び出されさうな気がしてならなかつた。代助は固より呼び出される迄何も考へずにゐる氣であつた。呼び出されたら、父

の顔^{かほいろ}色と相談の上、又何とか即席に返事を拵^{ぐみ}らえる心組であつた。代助はあながち父^{ちち}を馬鹿にする了見ではなかつた。あらゆる返事は、斯^かう云ふ具合に、相手と自分を商量して、臨機に湧いて来るのが本当だと思つてゐた。

もし、三千代に対する自分の態度が、最後の一步前迄押し詰^つめられた様な氣持^{もち}がなかつたなら、代助は父^{ちち}に對して無論さう云ふ所置を取つたらう。けれども、代助は今相手の顔^{かほいろ}色如何^{いかん}に拘はらず、手に持つた賽^{さい}を投^なげなければならなかつた。上^{うへ}になつた目^めが、平岡に都合^{わる}が悪^{わる}からうと、父^{ちち}の氣に入らなからうと、賽を投^なげる以上は、天の法則通りになるより外^{ほか}に仕方^{しかた}はなかつた。賽を手に持^もつ以上は、又賽^{さい}が投^なげられ可^べく作^{つく}られたる以上は、賽^{さい}の目^め

を極めるものは自分以外にあらう筈はなかつた。代助は、最後の權威は自己にあるものと、腹のうちで定めた。父も兄も嫂も平岡も、決断の地平線上には出て来なかつた。

彼はたゞ彼の運命に対してのみ卑怯であつた。此四五日は掌に載せた賽を眺め暮らした。今日もまだ握つてゐた。早く運命が戸外から来て、其手を軽く敲いて呉れれば好いと思つた。が、一方では、まだ握つてゐられると云ふ意識が大層嬉しかつた。

門野は時々書斎へ来た。来る度に代助は洋卓の前に凝としてゐた。

「些と散歩にでも御出になつたら如何です。左様御勉強ぢや身体に悪いでせう」と云つた事が一二度あつた。成程顔色が好くな

かつた。夏向なつむきになつたので、門野かどのが湯ゆを毎日沸わかして呉れた。代助は風呂場に行くたびに、長ながい間鏡あひだぐみを見た。髯ひげの濃こい男なので、少すこし延びると、自分には大層見苦しく見えた。触さわつて、ざら／＼すると猶不愉快だつた。

飯めしは依然として、普通の如く食くつた。けれども運動の不足と、睡眠の不規則と、それから、脳の屈托くたくとで、排泄機能に変化を起した。然し代助はそれを何とも思はなかつた。生理状態は殆んど苦にする暇いとまのない位、一つ事をぐる／＼回まはつて考へた。それが習慣になると、終局なく、ぐる／＼回まはつてゐる方が、埒らちの外そとへ飛び出だす努力よりも却つて楽になつた。

代助は最後に不決断の自己嫌悪けんおに陥つた。已を得ないから、三

千代と自分の關係を發展させる手段として、佐川の縁談を断らうかと迄考へて、覺えず驚ろいた。然し三千代と自分の關係を絶つ手段として、結婚を許諾して見様かといふ氣は、ぐる／＼回轉してゐるうちに一度も出で来なかつた。

縁談を断る方は单独にも何遍となく決定が出来た。たゞ断つた後、其反動として、自分をまともに三千代の上に浴せかけねば已まぬ必然の勢力が来るに違ないと考へると、其所に至つて、又恐ろしくなつた。

代助は父からの催促を心待に待つてゐた。しかし父からは何の便もなかつた。三千代にもう一遍逢はうかと思つた。けれども、それ程の勇氣も出なかつた。

一番仕舞に、結婚は道德の形式に於て、自分と三千代を遮断するが、道德の内容に於て、何等の影響を二人ふたりの上に及ぼしさうもないと云ふ考が、段々代助の脳裏に勢力を得て来たき。既に平岡に嫁とついだ三千代に対して、こんな關係が起り得るならば、此このうへ上自分自分に既婚者の資格を与へたからと云つて、同様の關係が続かない訳には行かない。それを続つづかないと見るのはたゞ表向の沙汰で、心を束縛そくばくする事の出来できない形式は、いくら重ねかさねても苦痛を増す許である。と云ふのが代助の論法であつた。代助は縁談を断るより外に道みちはなくなつた。

十四の二

斯^かう決心^{よくじつ}した翌^{よくじつ}日^{よくじつ}、代助^{だいてすけ}は久し振^ぶりに髪^{かみ}を刈^かつて髯^{ひげ}を剃^そつた。
 梅雨^{つゆ}に入^いつて二三日^{ふたつき}凄^{すさ}まじく降^ふつた揚句^{やうぐ}なので、地面^{ぢめん}にも、木^きの
 枝^えにも、埃^{ほこり}らしいものは悉^{ことごと}くしつとりと静^{しづ}まつてゐた。日^ひの色^{いろ}は
 以前^{いぜん}より薄^{うす}かつた。雲^{くも}の切れ間^まから、落^おちて来^くる光線^{くわんせん}は、下界^{げかい}の
 湿^{しめ}り気^けのために、半^{はん}ば反射^{はんし}力を失^うつた様に柔^ならかに見^みえた。代助^{だいてすけ}
 は床屋^{とこや}の鏡^{かがみ}で、わが姿^{すがた}を映^{うつ}しながら、例^{れい}の如^{ごと}くふつくらしした頬^ほを
 撫^なで、今日^{けふ}から愈^い積^じ極^{ごく}的^{てき}生活^{しんかつ}に入^いるのだと思^{おも}つた。

青山^{あおやま}へ来^きて見^みると、玄関^{くわん}に車^{くるま}が二台^{ふただい}程^{ほど}あつた。供^{とも}待^{まち}の車夫^{しやふ}は
 蹴^け込^こみに倚^より掛^かつて眠^ねつた儘^{まま}、代助^{だいてすけ}の通^とり過^かぎるのを知^しらなかつた。
 座敷^{ざしき}には梅子^{ばいし}が新聞^{しんぶん}を膝^{ひざ}の上^{うへ}へ乗^のせて、込^こみ入^いつた庭^{には}の緑^{みどり}をば

んやり眺めてゐた。是もぽかんと眠むさうであつた。代助はいきなり梅子の前へ坐つた。

「御父さんは居ますか」

あによめ

嫂は返事をする前に、一応代助の様子を、試験官の眼で見た。

「代さん、少し瘡せた様ぢやありませんか」と云つた。代助は又頬を撫でて、

「そんな事も無いだらう」と打ち消した。

「だつて、色沢が悪いのよ」と梅子は眼を寄せて代助の顔を覗

き込んだ。

「庭の所為だ。青葉が映るんだ」と庭の植込の方を見たが、「だ

から貴方だつて、矢つ張り蒼いですよ」と続けた。

「わたし、此二三日具合が好くないんですもの」

「道理でぽかんとして居ると思つた。何うかしたんですか。風邪ですか」

「何だか知らないけれど生欠許り出て」

梅子は斯う答へて、すぐ新聞を膝から卸すと、手を鳴らして、

小間使を呼んだ。代助は再び父の在、不在を確めた。梅子は其

問をもう忘れてゐた。聞いて見ると、玄関にあつた車は、父の客

の乗つて来たものであつた。代助は長く懸ゝらなければ、客の帰

る迄待たうと思つた。嫂は判然しないから、風呂場へ行つて、

水で顔を拭いて来ると云つて立つた。下女が好い香のする葛の粽

を、深い皿に入れて持つて来た。代助は粽の尾をぶら下げて、頻

りに嗅いで見た。

梅子が涼しい眼付になつて風呂場から歸つた時、代助は粽の一つを振子の様に振りながら、今度は、

「兄さんは何うしました」と聞いた。梅子はすぐ此陳腐な質問に答へる義務がないかの如く、しばらく椽鼻に立つて、庭を眺めてゐたが、

「二三日の雨で、苔の色が悉皆出た事」と平生に似合はぬ觀察をして、故の席に返つた。さうして、

「兄さんが何うしましたつて」と聞き直した。代助は先の質問を繰り返した時、嫂は尤も無頓着な調子で、

「何うしましたつて、例の如くですわ」と答へた。

「相変らず、留守勝がちですか」

「えゝ、えゝ、朝あさも晩ばんも滅多うちに宅うちに居た事はありません」

「姉ねえさんは夫それで淋さむしくはないですか」

「今いまさあ更あらた改かまつて、そんな事ことを聞きいたつて仕方しかたがないぢやありま

せんか」と梅子は笑だひ出した。調からか戲かふんだと思つたのか、あんま

り小供染みてゐると思つたのか殆んど取り合ふ氣色けしきはなかつた。

代助も平生の自分ふを振り返つて見て、真面目まじめに斯こんな質問かを掛かけ

た今の自分を、寧ろ奇体に思つた。今日迄こんにち兄あにと嫂あによめの關係あひだを長い間

目撃してゐながら、ついぞ其所そこには氣が付つかなかつた。嫂あによめも亦代

助の氣が付つく程物足りない素振そぶりは見せた事がなかつた。

「世間せけんの夫婦ふは夫それで済すんで行くものかな」と独ひとりごと言ことの様に云つ

たが、別に梅子の返事を予期する気もなかつたので、代助は向の顔も見ず、たゞ畳の上に置いてある新聞に眼を落した。すると梅子は忽ち、

「何ですつて」と切り込む様に云つた。代助の眼が、其調子に驚ろいて、ふと自分の方に視線を移した時、

「だから、貴方が奥さんを御貰ひなすつたら、始終宅に許めて、たと可愛がつて御上げなさいな」と云つた。代助は始めて相手が梅子であつて、自分が平生の代助でなかつた事を自覚した。それで成るべく不断の調子を出さうと力めた。

十四の三

けれども、代助の精神は、結婚謝絶と、其謝絶に次いで起るべき、三千代と自分の關係にばかり注がれてゐた。従つて、いくら平生の自分に歸つて、梅子の相手になる積でも、梅子の予期してゐない、變つた音色が、時々、会話の中に、思はず知らず出て来た。

「代さん、貴方今日はどうかしてゐるのね」と仕舞に梅子が云つた。代助は固より嫂の言葉を側面へ摺らして受ける法をいくらでも心得てゐた。然るに、それを遣るのが、輕薄の樣で、又面倒な樣で、今日は厭になつた。却つて真面目に、何処が變か教へて呉れと頼んだ。梅子は代助の問が馬鹿氣てゐるので妙な顔をした。

が、代助ますんたのが益頼むので、では云つて上げあませうと前置をして、代助の何どうかしてゐる例を挙げ出した。梅子は勿論わざと真面目まじめを装つてゐるものと代助を解釈した。其中そのなかに、

「だつて、兄にいさんが留守勝るすがちで、嘸御淋さむしいでせうなんて、あんまり思遣おもひやりが好過よすぎる事を仰おつしやるからさ」と云ふ言葉があつた。代助は其所そこへ自分はさを挟んだ。

「いや、僕の知つた女をんなに、左様云ふのが一人ひとりあつて、実は甚じつだ氣きの毒だから、つい他ほかの女をんなの心こころ持もちも聞きいて見たくなつて、伺うかゞつたんで、決して冷ひやかした積つもぢやないんです」

「本当に？ 夫そりや一寸何ちよいなんてえ方かたなの」

「名前は云いひ悪にくいんです」

「ぢや、貴方あなたが其旦那に忠告をして、奥さんをもつと可愛かわいがるやうにして御上あげになれば可いいのに」

代助は微笑した。

「姉ねえさんも、さう思ひますか」

「当り前ですわ」

「もし其夫おつとが僕の忠告を聞きかなかつたら、何どうします」

「そりや、何どうも仕様がないわ」

「放ほうつて置おくんですか」

「放ほうつて置おかなけりや、何どうなさるの」

「ぢや、其細君は夫おつとに對たいして細君の道を守まもる義務があるでせうか」

「大變理責りぜめなのね。夫そりや旦那の不親切の度合どあひにも因よるでせう」

「もし、其細君に好き^すな人があつたら何^どうです」

「知らないわ。馬鹿らしい。好き^すな人がある位なら、始めつから其方^{そつち}へ行^いつたら好^いいぢやありませんか」

代助は黙^{だま}つて考へた。しばらくしてから、姉^{ねえ}さんと云つた。梅子は其深い調子に驚^あろかされて、改^{あら}ためて代助の顔^{かほ}を見た。代助は同じ調子で猶^{なほ}云つた。

「僕は今度の縁談^{えんだん}を断^{ことわ}らうと思^{おも}ふ」

代助の巻烟草^{まきたばこ}を持^もつた手が少^{すこ}し顫^{ふる}へた。梅子は寧^{うしな}ろ表情^{うしな}を失^{うしな}つた顔^{かほ}付^{つき}をして、謝絶^{しゃてつ}の言葉^{ことば}を聞^きいた。代助は相手の様子^{ようす}に頓^{とん}着^{ちやく}なく進^{しん}行^{こう}した。

「僕は今迄結婚問題^{けっこんもんだい}に就^ついて、貴方^{あなた}に何返^{なんへん}となく迷惑^{めいわく}を掛^かけた上^{うへ}

に、今度こんども亦心配して貰もらつてゐる。僕ぼくももう三十だから、貴方あなたの云ふ通り、大抵な所で、御勧め次第になつて好いのですが、少し考があるから、この縁談もまあ已やめにしたい希望です。御父おとうさんにも、兄にいさんにも済すまないが、仕方しかたがない。何も当人なにが氣に入らないと云ふ訳ではないが、断ことわるんです。此間御父おとうさんによく考へて見ろと云はれて、大分考へて見たが、矢つ張り断ことわる方が好い様だから断ことわります。実は今日けふは其用で御父おとうさんに逢あひに来きたんですが、今御客いまおきやくの様だから、序ついでと云つては失礼だが、貴方あなたにも御話おはなしをして置きます」

梅子は代助の様子が真面目なので、何時いつもの如く無駄口くちも入れずに聞いてゐたが、聞き終つた時、始めて自分の意見を述べた。

それが極めて簡単かんたんな且つ極めて實際的な短かい句であつた。

「でも、御父さんおとうは屹度御困りですよ」

「御父さんおとうには僕が直ちかに話すから構ひません」

「でも、話はなしがもう此所迄進すすんでゐるんだから」

「話どこが何所迄進んでゐやうと、僕はまだ貰もらひますと云つた事はあ

りません」

「けれども判はつきり然貫もらはないとも仰しやらなかつたでせう」

「それを今云きひに來た所です」

代助と梅子むかは向あひ合つたなり、しばらく黙だまつた。

十四の四

代助の方では、もう云ふ可き事を云ひ尽くした様な気がした。

すく
少なくとも、是より進んで、梅子に自分を説明しやうといふ考は
丸で無かつた。梅子は語るべき事、聞くべき事を沢山持つてゐ
た。たゞ夫が咄嗟の間に、前の問答に繋がり好く、口へ出て来
なかつたのである。

「貴方の知らない間に、縁談が何れ程進んだのか、私にも能く分
らないけれど、誰にしたつて、貴方が、さう的確御断りなさ
らうとは思ひ掛けないんですもの」と梅子は漸くにして云つた。
「何故です」と代助は冷かに落ち付いて聞いた。梅子は眉を動か
した。

「何故なぜですつて聞いたつて、理窟きぢやありませんよ」

「理窟かまでなくつても構はなはないから話くだして下さい」

「貴方あなたの様にさう何遍断ことわつたつて、詰りつま同じ事ぢやありませんか」

と梅子は説明した。けれども、其意味がすぐ代助の頭あたまには響ひびかなかつた。不可解ふかかいの眼めを挙あげて梅子を見た。梅子は始めて自分の本意を布衍かしに掛かかつた。

「つまり、貴方あなただつて、何時いつか一度は、御奥さんを貰もらふ積つもりなんでせう。厭いやだつて、仕方がないぢやありませんか。其様さう何時迄いつまでも我

儘を云つた日には、御父おとうさんに済すまない丈だけですわ。だからね。何どうせ誰だれを持つて行いつても氣きに入らない貴方あなたなんだから、つまり誰だれを持もたしたつて同おんなじだらうつて云ふ訳わけなんです。貴方あなたには何どんな

ひと

人を見せても駄目なんですよ。世の中に一人も氣に入る様なもの

は生きてやしませんよ。だから、奥さんと云ふものは、始めから

氣に入らないものと、諦^{あき}らめて貰ふより外に仕方がないぢやあり

ませんか。だから私達^{わたし}が一番好^いいと思ふのを、黙^{だま}つて貰^{もら}へば、夫

で何所^{どこ}も彼所^{かしこ}も丸く治^{おさ}まつちまふから、——だから、御父^{おとう}さんが、

殊によると、今度^{こんど}は、貴方^{あなた}に一から十迄相談して、何か^{なに}為^なさるな

いかも知れませんか。御父^{おとう}さんから見れば夫^{それ}が当り前ですもの。

さうでも、為^しなくつちや、生^いきてる内^{うち}に、貴方^{あなた}の奥^{おく}さんの顔を見

る事は出来ないぢやありませんか」

代助は落ち付いて嫂^{あによめ}の云ふ事を聴^きいてゐた。梅子^{うめこ}の言葉が切れ

ても、容易^{くちう}に口を動かさなかつた。若^もし反駁^{はんぱく}をする日には、話^{はなし}

が段々込み入る許で、此方の思ふ所は決して、梅子の耳へ通らないと考へた。けれども向ふの云ひ分を肯ふ氣は丸でなかつた。實際問題として、双方が困る様になる許と信じたからである。それで、あによめ 嫂に向つて、

「貴方あなたの仰しやる所も、一理あるが、私わたしにも私の考があるから、まあ打遣つて置いて下さい」と云つた。其調子には梅子の干渉を面倒がる氣色けしきが自然と見えた。すると梅子は黙つてゐなかつた。「そりや代さんだつて、小供ぢやないから、一人前の考の御有おありな事は勿論ですわ。私わたしなんぞの要らない差出口は御迷惑でせうから、もう何にも申しますまい。然し御父さんの身になつて御覽なさい。月々つき／＼の生活費は貴方あなたの要ると云ふ丈今でも出して入だ

らつしやるんだから、つまり貴方あなたは書生時代よりも余計御父さんおとうの厄介になつてゐる訳わけでせう。さうして置いて、世話になる事は、もとより世話になるが、年を取つて一人前いちにんまへになつたから、云ふ事は元の通りもとには聞かれなかつて威張つたつて通用しないぢやありませんか」

梅子は少し激したと見えて猶も云ひ募らうとしたのを、代助が遮つた。

「だつて、女房を持てば此上うへ猶御父さんとうの厄介に為ならなくつちや為ならないでせう」

「宜いぢやありませんか、御父さんおとうが、其方そのほうが好いと仰しやるんだから」

「ぢや、御父^{おとう}さんは、いくら僕の氣に入らない女房でも、是非^も持

たせる決心なんですね」

「だつて、貴方^{あなた}に好^すいたのがあればですけども、そんなのは日

本中探^{さが}して歩^{ある}いたつて無いんぢやありませんか」

「何^どうして、夫^{それ}が分^{わか}ります」

梅子は張^{はり}の強い眼^めを据^もゑて、代助を見た。さうして、

「貴方^{あなた}は丸で代言人の様な事を仰^{あや}しやるのね」と云つた。代助は
あをじろ
蒼白^{あせ}くなつた額^{ひたひ}を嫂^{あに}の傍^{そば}へ寄^よせた。

「姉^{ねえ}さん、私^{わたし}は好^すいた女があるんです」と低^{ひく}い声で云ひ切つた。

十四の五

代助は今迄冗談に斯んな事を梅子に向つて云つた事が能くあつた。梅子も始めはそれを本氣に受けた。そつと手を廻まはして真相を探つて見た杯といふ滑稽もあつた。事実が分つて以後は、代助の所謂好すいた女は、梅子に対して一向利目き、めがなくなつた。代助がそれを云ひ出だしても、丸で取り合はなかつた。でなければ、茶化してゐた。代助の方でも夫それで平氣であつた。然し此場合丈は彼かれに取つて、全く特別であつた。顔付かほつきと云ひ、眼付めつきと云ひ、声の低ひくい底そこに籠こもる力と云ひ、此所迄押こゝし逼せまつて来た前後の關係と云ひ、凡ての点から云つて、梅子をはつと思はせない訳に行かなかつた。
 嫂あによめみじかは此短ひらい句を、閃ひらめく懷劍の如くに感じた。

代助は帯おびの間から時計を出して見た。父ちちの所へ来きてゐる客は中な々かく歸りさうにもなかつた。空そらは又曇くもつて来きた。代助は一旦引き上げて又改あらためて、父ちちと話を付けに出直でなほす方が便宜かんがだと考へた。「僕は又来きます。出直でなほして来きて御父おとうさんに御目かに掛かる方が好いいでせう」と立ちにかかつた。梅子は其間あひだに回復した。梅子は飽く迄人の世話を焼く実意のある丈に、物を中途で投なげる事の出来ない女であつた。抑おさえる様に代助を引き留とめて、女の名を聞いた。代助は固より答へなかつた。梅子は是非にと逼つた。代助は夫それでも応じなかつた。すると梅子は何故なぜ其女を貰もらはないのかと聞き出した。代助は單純に貰もらへないから、貰もらはないのだと答へた。梅子は仕舞に涙を流した。他ひとの尽力を出し抜ぬいたと云つて恨んだ。何故なぜ

始^{はじめ}から打ち明けて話さないかと云つて責めた。かと思ふと、氣の毒だと云つて同情して呉れた。けれども代助は三千代に就ては、遂に何事も語^{かた}らなかつた。梅子はどうく我^がを折つた。代助^{いよく}の愈歸ると云ふ間際になつて、

「ぢや、貴方^{あなた}から直^{ぢか}に御父^{おとう}さんに御話^{おはなし}なさるんですね。それ迄は私^{わたくし}は黙^{だま}つてゐた方が好いでせう」と聞いた。代助は黙^{だま}つてゐても、貰^{もら}ふ方が好いか、話^{はな}して貰^{もら}ふ方が好いか、自分にも分^{わか}らなかつた。「左様^{さう}ですね」と躑^{ちう}躑^{ちよ}したが、「どうせ、断^{ことわ}りに来るんだから」と云つて嫂^{あに}の顔^{よめ}を見^{かほ}た。

「ぢや、若^もし話^{はな}す方が都合^よが好^よささうだつたら話^{はな}しませう。もし又^わ悪^{わる}い様だつたら、何にも云はずに置くから、貴方^{あなた}が始^{はじめ}から御^お

はなし
話なさい。夫それが宜いいいでせう」と梅子は親切に云つて呉れた。代

助は、

「何なに分ぶん宜よろしく」と頼たのんで外そとへ出でた。角かどへ来きて、四谷よつやから歩あるく積もり

で、わざと、塩町しほ行ゆきの電車でんしゃに乗のつた。練兵場れんぺいじやうの横よこを通るとき、重おも

い雲くもが西で切れて、梅雨つゆには珍めづらしい夕陽せきが、真赤まっかになつて広ひろい

原はら一面いちめんを照てらしてゐた。それが向むかふゆくるまわあたに中あたつて、輪わが

回まはる度たびに鋼鉄はがねの如ひかく光くわつた。車くるまは遠はらい原なかちい

は車くるまの小こさく見みえる程ひろ、広ひろかつた。日ひは血ちの様に毒々どくどくしく照てつた。

代助は此光景けいを斜なめに見みながら、風かぜを切きつて電車でんしゃに持もつて行いかれ

た。重おもい頭あたまの中なかがふらふらした。終点きり迄来きた時は、精神からだが身体からだを

冒おかしたのか、精神からだの方が身体からだに冒いされたのか、厭いやな心持こころがして早

く電車を降りたかつた。代助は雨の用心に持った蝙蝠傘を、杖の如く引き摺つて歩いた。

歩きながら、自分は今日、自ら進んで、自分の運命の半分を破壊したのも同じ事だと、心のうちに囁いだ。今迄は父や嫂を相手に、好い加減な間隔を取つて、柔らかに自我を通して来た。今度は愈本性を露はさなければ、それを通し切れなくなつた。同時に、此方面に向つて、在来の満足を求め得る希望は少なくなつた。けれども、まだ逆戻りをする余地はあつた。たゞ、夫には又父を胡魔化す必要が出て来るに違なかつた。代助は腹の中で今迄の我を冷笑した。彼は何うしても、今日の告白を以て、自己の運命の半分を破壊したものと認めたかつた。さうして、それから受

ける打撃の反動として、思ひ切つて三千代の上に、掩おつ被かぶさる様に烈はたらしく働き掛けたかつた。

彼は此このつぎ次父に逢ふときは、もう一歩いつぽも後あとへ引けない様に、自分の方を拵こしらえて置きたかつた。それで三千代と会見する前に、又父ちから呼び出される事を深く恐れた。彼は今日け嫂あによめに、自分の意思を父ちに話す話はなさないの自由を与へたのを悔いた。今夜こんやにも話はなされれば、明日あしたの朝呼あさよばれるかも知れない。すると今夜中よるに三千代に逢つて己れを語つて置く必要が出来る。然し夜よるだから都合がよくないと思つた。

十四の六

角^{つの}上^{かみ}を下^おりた時、日は暮^ひれ掛^くかつた。士官学校^{まへ}の前^{まへ}を真^{まつ}直^{すぐ}に濠^{ほり}端^{ばた}へ出^でて、二三町来^くると砂^さ土^ど原^{はら}町へ曲^まがるべき所を、代助はわざと電^{でん}車^{しゃ}路^ろに付^ついて歩^{ある}いた。彼^{かれ}は例^{れい}の如^{ごと}くに宅^{うち}へ歸^{かへ}つて、一夜^{いちや}を安^{やす}閑^{かん}と、書^{しよ}齋^{さい}の中^{なか}で暮^{くら}すに堪^かえなかつたのである。濠^{ほり}を隔^{へだ}て、高^{たか}い土^{つち}手^ての松^{まつ}が、眼^めのつゞく限^{かぎ}り黒^{くろ}く並^{なら}んである底^{そこ}の方^{ほう}を、電^{でん}車^{しゃ}がしきりに通^{とほ}つた。代助は輕^{かる}い箱^{はこ}が、軌^{レール}道^{うへ}の上^{うへ}を、苦^{くる}もなく滑^{すべ}つて行^いつては、又^{また}滑^{すべ}つて歸^{かへ}る迅^{てき}速^はな手^て際^はに、輕^{かる}快^{かい}の感^{かん}じを得^えた。其^{その}代^{しろ}り自^{みづか}分^{ぶん}と同^{おな}じ路^{みち}を容^{ゆる}赦^{しや}なく往^ゆ来^きする外^{そと}濠^{ほり}線^{せん}の車^{くるま}を、常^{とこ}よりは騒^{しやう}々^く敷^し悪^{あく}んだ。牛^{うし}込^こ見^み附^{つけ}迄^き来^きた時、遠^{とほ}くの石^{いし}川^{がわ}の森^{もり}に数^{かず}点^{てん}の灯^ひ影^{かげ}を認^{みと}めた。代助は夕^{ゆふ}飯^{めし}を食^くふ考^{かんが}もなく、三^{さん}千^{せん}代^{だい}のゐる方^{ほう}角^{かく}へ

むいて歩いて行つた。

約二十分の後、彼は安藤坂を上つて、伝通院の焼跡の前へ出た。大きな木が、左右から被さつてゐる間を左りへ抜けて、平岡の家の傍迄来ると、板塀から例の如く灯が射してゐた。代助は塀の本に身を寄せて、凝と様子を窺つた。しばらくは、何の音もなく、家のうちは全く静であつた。代助は門を潜つて、格子の外から、頼むと声を掛けて見様かと思つた。すると、椽側に近く、ぴしやりと脛を叩く音がした。それから、人が立つて、奥へ這入つて行く気色であつた。やがて話声が聞えた。何の事か善く聴き取れなかつたが、声は慥に、平岡と三千代であつた。話声はしばらくで歇んで仕舞つた。すると又足音が椽側迄近づい

て、どさりと尻を卸す音が手に取る様に聞えた。代助は夫なり堀
 の傍を退いた。さうして元来た道とは反対の方角に歩き出した。
 しばらくは、何処を何う歩いてゐるか夢中であつた。其間
 代助の頭には今見た光景ばかりが煎り付く様に踊つてゐた。それ
 が、少し衰へると、今度は自己の行為に對して、云ふべからざる
 汚辱の意味を感じた。彼は何の故に、斯る下劣な真似をして、
 恰かも驚ろかされたかの如くに退却したのかを怪しんだ。彼は暗
 い小路に立つて、世界が今夜に支配されつゝある事を私かに喜ん
 だ。しかも五月雨の重い空氣に鎖されて、歩けば歩く程、窒息
 する様な心持がした。神樂坂上へ出た時、急に眼がぎら／＼し
 た。身を包む無数の人と、無数の光が頭を遠慮なく焼いた。代助

は逃にげる様に藁わら店だなを上あつた。

家うちへ帰ると、門野かどのが例の如く漫然まんぜんたる顔をして、

「大分だいぶん遅うがしたな。御飯ごはんはもう御済おすみになりましたか」と聞いた。

代助は飯めしが欲ほしくなかつたので、要いらない由よしを答へて、門野かどのを追おひ帰かへす様に、書斎しゆざいから退しりぞけた。が、二三分ふんた立たない内に、又手を鳴らして呼び出だした。

「宅うちから使つかひきは来きやしなかつたかね」

「いゝえ」

代助は、

「ぢや、宜よろしい」と云つた限ぎりであつた。門野かどのは物足りなさうに入

りぐち

口に立つてゐたが、

「先生は、何なんですか、御宅おたくへ御出おいでになつたんぢや無なかつたんです

か」

「何故なぜ」と代助は六づかしい顔をした。

「だつて、御出掛でかけになるとき、そんな御話おはなしでしたから」

代助は門野かどのを相手にするのが面倒になつた。

「宅うちへは行つたさ。——宅うちから使つかひが来なければそれで、好いぢや

ないか」

門野かどのは不得要領ふとくに、

「はあ左様さうですか」と云ひ放はなして出て行つた。代助は、父ちやうがあら

ゆる世界に対してよりも、自分に対して、性急であるといふ事を

知つてゐるので、ことによると、歸つた後あとから直使すゐかひでも寄よこしはしまいかと恐れて聞きき糺たゞしたのであつた。門野が書生部屋へ引き取つたあとで、明日あしたは是非共三千代に逢はなければならぬと決心した。

其夜代助は寐ねながら、何どう云ふ手段で三千代に逢はうかと云ふ問題を考へた。手紙を車夫に持たせて宅うちへ呼びに遣やれば、来くる事は来くるだらうが、既すでに今日け嫂あによめとの会談が済んだ以上は、明日あしたにもあによめのため兄あにか嫂あにの爲に、向ふから襲はれないとも限かぎらない。又平岡のうちへ行つて逢ふ事は代助に取つて一種の苦痛があつた。代助は已を得ず、自分にも三千代にも關係のない所で逢ふより外ほかに道はないと思つた。

夜半から強く雨が降り出した。釣つてある蚊帳が、却つて寒く見える位な音がどうくと家を包んだ。代助は其音の中に夜の明けるのを待った。

十四の七

雨は翌日迄晴れなかつた。代助は湿っぽい椽側に立つて、暗い空模様を眺めて、昨夕の計画を又変えた。彼は三千代を普通の待合杯へ呼んで、話をするのが不愉快であつた。已むなくんば、蒼い空の下と思つてゐたが、此天気では夫も覺束なかつた。と云つて、平岡の家へ出向く気は始めから無かつた。彼は何うしても、

三千代を自分の宅へ連れて来るより外に道はないと極めた。門野が少し邪魔になるが、話のし具合では書生部屋に洩れない様にも出来るかと考へた。

午少し前迄は、ぼんやり雨を眺めてゐた。午飯を済ますや否

や、護謨の合羽を引き掛けて表へ出た。降る中を神樂坂下迄来

て青山の宅へ電話を掛けた。明日此方から行く積であるからと、

機先を制して置いた。電話口へは嫂が現れた。先達ての事は、

まだ父に話さないであるから、もう一遍よく考へ直して御覧なさ

らないかと云はれた。代助は感謝の辞と共に号鈴を鳴らして談話

を切つた。次に平岡の新聞社の番号を呼んで、彼の出社の有無を

確めた。平岡は社に出てゐると云ふ返事を得た。代助は雨を衝い

て又坂を上った。花屋へ這入つて、大きな白百合の花を沢山買つて、夫を提げて、宅へ歸つた。花は濡れた儘、二つの花瓶に分けて挿した。まだ余つてゐるのを、此間の鉢に水を張つて置いて、茎を短かく切つて、はばく放り込んだ。それから、机に向つて、三千代へ手紙を書いた。文句は極めて短かいものであつた。たゞ至急御目に掛けて、御話したい事があるから来て呉れろと云ふ丈であつた。

代助は手を打つて、門野を呼んだ。門野は鼻を鳴らして現れた。手紙を受取りながら、

「大変好い香ですな」と云つた。代助は、
 「車を持つて行つて、乗せて来るんだよ」と念を押した。門野は

雨あめの中なかを乗のりつけの帳場迄出でて行いつた。

代助は、百合ゆりの花はなを眺ながめながら、部屋おふを掩おふ強い香かの中なかに、残のこりなく自己みを放ほう擲てきした。彼は此嗅覚このの刺激しのうちに、三千代みちよの過去ふんを分み明ように認めた。其過去そのには離はなすべからざる、わが昔むかしの影かげが烟けむりの如ごとく這はひ纏まつはつてゐた。彼はしばらくして、

「今日けふ始はじめて自然しぜんの昔むかしに帰かへるんだ」と胸むねの中なかで云いつた。斯かう云いひ得えた時とき、彼は年頃としごろにない安慰あんゐを総身そうしんに覺さえた。何故なぜもつと早はやく歸かへる事が出来でなかつたのかと思おもつた。始はじめから何故なぜ自然しぜんに抵抗ていこうしたのかと思おもつた。彼は雨あめの中なかに、百合ゆりの中なかに、再現さいげんの昔むかしのなかに、純一無雜じゅんいちむざくに平和な生命せいめいを見出み出した。其生命せいめいの裏うらにも表おもてにも、慾得よくとくはなかつた、利害りがいはなかつた、自己みを圧迫えつぱくする道德もくたはなかつ

た。雲の様な自由と、水の如き自然とがあつた。さうして凡てが
 ブリス
 幸であつた。だから凡てが美しかった。

やがて、夢から覺めた。此一刻の幸から生ずる永久の苦痛が

其時卒然として、代助の頭を冒して来た。彼の唇は色を失つた。

彼は默然として、我と吾手を眺めた。爪の甲の底に流れてゐる血

潮が、ぶる／＼顫へる様に思はれた。彼は立つて百合の花の傍へ

行つた。唇が瓣に着く程近く寄つて、強い香を眼の眩う迄嗅いだ。

彼は花から花へ唇を移して、甘い香に咽せて、失心して室の中に

倒れたかつた。彼はやがて、腕を組んで、書斎と座敷の間を往つ

たり来たりした。彼の胸は始終鼓動を感じてゐた。彼は時々

椅子の角や、洋卓の前へ来て留まつた。それから又歩き出した。

彼^{かれ}の心^{こころ}の動揺^{どうご}は、彼^{かれ}をして長く一^{いつ}所^{しよ}に留^{とど}まる事を許^{ゆる}さなかつた。同時に彼は何物^{なニモノ}をか考^{たも}へる為^{ため}に、無暗^{むやみ}な所^{ところ}に立^たち留^どまらざるを得なかつた。

其^{その}内^{うち}に時は段々^{うづ}移^{うつ}つた。代助^{だいすけ}は断^はえず置時計^{はり}の針^{はり}を見た。又覗^{のぞ}く様に、軒^{のき}から外^{そと}の雨^{あめ}を見た。雨^{あめ}は依然^{いぜん}として、空^{そら}から真直^{まつすぐ}に降^ふつてゐた。空^{そら}は前^{まへ}よりも稍暗^{くら}くなつた。重^{かさ}なる雲^{くも}が一つ所^{ひとところ}で渦^{うづ}を捲^まいて、次第^{しだい}に地面^{うへ}の上^{うへ}へ押^おし寄^よせるかと怪^{あや}しまれた。其時^{そのとき}に光^{あめ}る車^{ひかくるま}を門^{もん}から中^{うち}へ引^ひき込^こんだ。輪^わの音^{おと}が、雨^{あめ}を圧^{あつ}して代助^{だいすけ}の耳^{みみ}に響^{ひび}いた時^{とき}、彼は蒼白^{あをしろ}い頬^ほに微笑^{みえう}を洩^もしながら、右^{みぎ}の手^てを胸^{むね}に当^あてた。

十四の八

三千代は玄関から、門野かどのに連れられて、廊下づた伝つたひに這入きつて来た。銘仙めいせんの紺こん緋がすりに、唐草からくさ模様ひとえの一重帯しを締めて、此前ことは丸ちがで違なりつた服装なりをしてゐるので、一目ひとめ見た代助あたには、新らしい感じかんがした。色いろは不斷いの通り好よくなかつたが、座敷いりぐちの入口いりぐちで、代助かほと顔あはを合あはせた時め、眼めも眉まゆも口くちもあひだぴたりと活動あしうごを中止あした様かたに固かたくなつた。敷居しきゐに立たつてゐる間あひだは、足あしも動うごけなくなつたとしか受取うけとれなかつた。三千代は固もとより手紙てがみを見た時ときから、何事なにことをか予期きして来きた。其予期きのうちには恐おそれと、喜よろこびと、心配しんぱとがあつた。車くるまから降おりて、座敷ざしきへ案内あんないされる迄、三千代の顔そのは其予期きの色いろを

もつて漲つてゐた。みなぎ三千代の表情はそこで、はたと留まつた。と代

助の様子は三千代に夫丈の打衝シヨックを与へる程に強烈であつた。

代助は椅子の一つを指さした。ゆび三千代は命ぜられた通りに腰を

掛けた。代助は其そのむかふ向に席を占めた。ふたり二人は始めて相對した。

然し良少時やうしばらくは二人とも、口を開かなかつた。ふたり

「何か御用なの」と三千代は漸くにして問ふた。代助は、たゞ、

「えゝ」と云つた。ふたり二人は夫限で、又しばらく雨の音を聴いた。あめ

「何か急な御用なの」と三千代が又尋ねた。代助は又、

「えゝ」と云つた。双方共何時いつもの様に軽くは話し得なかつた。

代助は酒の力を借りて、己れを語らなければならぬ様な自分を恥ぢた。彼は打ち明けるときは、必ず平生の自分でなければなら

ないものと兼て覚悟をして居た。けれども、改たまつて、三千代に對して見ると、始めて、一滴の酒精が恋しくなつた。ひそかに次の間へ立つて、例のキスキーを洋盃で傾け様かと思つたが、遂に其決心に堪えなかつた。彼は青天白日の下に、尋常の態度で、相手に公言し得る事でなければ自己の誠でないと信じたからである。酔と云ふ牆壁を築いて、其掩護に乗じて、自己を大胆にするのは、卑怯で、残酷で、相手に汚辱を与へる様な氣がしてならなかつたからである。彼は社会の習慣に對しては、徳義的な態度を取る事が出来なくなつた、其代り三千代に對しては一点も不徳義な動機を蓄へぬ積であつた。否、彼をして卑吝に陥らしむる余地が丸でない程に、代助は三千代を愛した。けれども、彼は三千代

から何の用かを聞かれた時に、すぐ己れを傾ける事が出来なかつ

た。二度聞かれた時に猶躑躅した。三度目には、己を得ず、

「まあ、緩くり話しませう」と云つて、卷烟草に火を点けた。

三千代の顔は返事を延ばされる度に悪くなつた。

雨は依然として、長く、密に、物に音を立て、降つた。二人は

雨の為に、雨の持ち来す音の為に、世間から切り離された。同じ

家に住む門野からも婆さんからも切り離された。二人は孤立の儘、

白百合の香の中に封じ込められた。

「先刻表へ出て、あの花を買つて来ました」と代助は自分の周囲

を顧みた。三千代の眼は代助に随いて室の中を一回した。其

後で三千代は鼻から強く息を吸ひ込んだ。

「兄にいさんと貴方あなたと清水町しみづにゐた時分の事を思ひ出ださうと思つて、

成るべく沢山買つて来きました」と代助が云つた。

「好いい香にほひですこと」と三千代は翻ひるがへる様に綻ほころびた大きな花はな瓣びら

を眺ながめてゐたが、夫それから眼めを放はなして代助に移した時、ぽうと頬ほを

薄赤くした。

「あの時分の事を考へると」と半分云つて已やめた。

「覚えてゐますか」

「覚えてゐますわ」

「貴方あなたは派手な半襟かきを掛けて、銀杏返しに結つてゐましたね」

「だつて、東京へ来立きたてだつたんですもの。ぢき已やめて仕舞つたわ」

「此このあひだ間 百合の花を持つて来きて下くださつた時も、銀杏返しぢやな

かつたですか」

「あら、気が付いて。あれは、あの時限ぎりなのよ」

「あの時はあんな鬘きまぐに結び度たくなつたんですか」

「えゝ、気迷きまぐれに一寸結ちよいとゆつて見たかつたの」

「僕はあの鬘まげを見て、昔むかしを思ひ出した」

「さう」と三千代は恥はづかしさうに肯うけがつた。

三千代が清水町にゐた頃、代助と心安くちく口を聞く様になつてからの事だが、始めて国くにから出て来きた当時の髪かみの風を代助から賞ほめられた事があつた。其時三千代は笑つてゐたが、それを聞いた後あとでも、決して銀杏返しには結はなかつた。二人は今も此事をよく記憶してゐた。けれども双方共口くちへ出だしては何も語らなかつた。

十四の九

三千代の兄と云ふのは寧ろ豁達な氣性で、懸隔てのない交際振から、友達には甚く愛されてゐた。ことに代助は其親友であつた。此兄は自分が豁達である丈に、妹の大人しいのを可愛がつてゐた。国から連れて来て、一所に家を持つたのも、妹を教育しなければならぬと云ふ義務の念からではなくて、全く妹の未来に対する情合と、現在自分の傍に引き着けて置きたい欲望とからであつた。彼は三千代を呼ぶ前、既に代助に向つて其旨を打ち明けた事があつた。其時代助は普通の青年の様に、多大の好奇心を以て此計画を迎へた。

三千代が来てから後、兄あにと代助とは益親したしくなつた。何方どっちが友情の歩を進めたかは、代助自身にも分わからなかつた。兄あにが死んだ後あとで、當時を振り返つて見る毎に、代助は此親密このの裡うちに一種の意味を認めない訳に行かなかつた。兄あには死ぬ時迄それを明言しなかつた。代助も敢て何事をも語らなかつた。斯かくして、相互の思おもはくは、相互の間の秘密として葬られて仕舞つた。兄あには在生中に此意味を私ひそかに三千代に洩もらした事があるかどうか、其所そこは代助も知らなかつた。代助はたゞ三千代の挙止動作と言語談話からある特別な感じを得た丈であつた。

代助は其頃から趣味の人として、三千代の兄あにに臨んでゐた。三千代の兄あには其方面に於て、普通以上の感受性を持つてゐなかつた。

深い話^{はなし}になると、正直に分^{わか}らないと自白して、余計な議論を避^さけた。何処^{どこ}からか arbiter 《アービター》 elegantiarum 《エレガンシアルム》と云ふ字を見^み付^{つけ}だして来て、それを代助の異名の様に濫用したのは、其頃の事であつた。三千代は隣^{とな}りの部屋で黙^{だま}つて兄^{あに}と代助の話^{はなし}を聞いてゐた。仕舞にはとう／＼ arbiter 《アービター》 elegantiarum 《エレガンシアルム》と云ふ字を覚えた。ある時其意味を兄^{あに}に尋ねて、驚ろかれた事があつた。

兄^{あに}は趣味に関する妹の教育を、凡て代助に委任した如くに見えた。代助を待つて啓発されべき妹の頭脳に、接触の機会を出来る丈与へる様に力めた。代助も辞退はしなかつた。後^{あと}から顧みると、自^{みづか}ら進んで其任に当つたと思はれる痕迹もあつた。三千代は固よ

り喜んで彼の指導を受けた。三人は斯くして、巴の如くに回転しつゝ、月から月へと進んで行つた。有意識か無意識か、巴の輪は回るに従つて次第に狭まつて来た。遂に三巴が一所に寄つて、丸い円にならうとする少し前の所で、忽然其一つが欠けたため、残る二つは平衡を失なつた。

代助と三千代は五年の昔を心置なく語り始めた。語るに従つて、現在の自己が遠退いて、段々と当時の学生時代に返つて来た。二人の距離は又元の様に近くなつた。

「あの時兄さんが亡くならないで、未だ達者であつたら、今頃私は何うしてゐるでせう」と三千代は、其時を恋しがる様に云つた。「兄さんが達者であつたら、別の人になつて居る訳ですか」

「別な人^{ひと}にはなりませんわ。貴方^{あなた}は？」

「僕も同じ事です」

三千代は其時、少し窘める様な調子で、

「あら嘘^{うそ}」と云つた。代助は深い眼^めを三千代の上^{うへ}に据ゑて、

「僕は、あの時も今^{いま}も、少しも違つてゐやしないのです」と答へ

た儘、猶しばらくは眼^めを相手から離さなかつた。三千代は忽ち視

線^そを外らした。さうして、半ば独り言^{なかにごと}の様に、

「だつて、あの時から、もう違つてゐらしたんですもの」と云

つた。

三千代の言葉は普通の談話としては余りに声^{こゑ}が低過^{ひくすぎ}た。代助は消^きえて行く影^{かげ}を踏^ふまへる如くに、すぐ其尾^{おし}を捕^{とら}えた。

「違ちがやしません。貴方あなたにはたゞ左様さう見える丈だけです。左様さう見えたつて仕方がないが、それは僻目ひがめだ」

代助の方は通例よりも熱心に判然はつきりした声で自己を弁護する如くに云つた。三千代の声は益低ひくかつた。

「僻目ひがめでも何でも可よくつてよ」

代助は黙だまつて三千代の様子を窺うかつた。三千代は始めから、眼めを伏ふせてゐた。代助には其長い睫毛まつげの顫ふるへる様さまが能く見えた。

十四の十

「僕の存在あなには貴方なたが必要だ。何どうしても必要だ。僕ぼくは夫丈はくの事

を貴方あなたに話はなしたい為ためにわざ／＼貴方あなたを呼よんだのです」

代助の言葉には、普通の愛人あいじんの用ひる様な甘い文彩あまあやふくを含んで

ゐなかつた。彼の調子は其言葉と共に簡単に素朴であつた。寧ろ

嚴肅の域に逼せまつてゐた。但たゞ、夫丈それだけの事を語かたる為ために、急用として、

わざ／＼三千代を呼んだ所が、玩具おもちゃの詩歌しに類してゐた。けれ

ども、三千代は固より、斯う云ふ意味での俗を離れた急用を理解

し得る女であつた。其上世間せけんの小説でに出て来る青春せいしゅん時代の修

辞には、多くの興味を持つてゐなかつた。代助の言葉が、三千代

の官能はなに華やかな何物をも与へなかつたのは、事実であつた。三

千代がそれに渴いてゐなかつたのも事実であつた。代助の言葉は

官能を通り越して、すぐ三千代の心こころに達した。三千代は顫ふるへる睫ま

毛つげあひだの間から、涙ほを頬うへの上に流した。

「僕はそれを貴方あなたに承知もらして貰もらひたいのです。承知くだして下さい」

三千代は猶泣ないた。代助に返事をする所どころではなかつた。袂たもとから

ハンケチだを出して顔かほへ当てた。濃い眉まゆの一部分と、額ひたひと生はえぎは際丈が

代助の眼めに残くたつた。代助は椅子を三千代の方へ摺すり寄せた。

「承知くだして下さるでせう」と耳みみの傍はたで云つた。三千代は、まだ顔かほ

を蔽おほつてゐた。しやくり上げながら、

「余あんまりだわ」と云ふ声が手ハンケチ帛なかの中で聞えた。それが代助の聴覚

を電流の如くに冒した。代助は自分の告白おそが遅過おそぎたと云ふ事を

切に自覚した。打ち明けるならば三千代が平岡とつへ嫁ぐ前に打ち明

けなければならぬ筈であつた。彼は涙なみだと涙なみだの間あひだをぼつ／＼綴つぎる

三千代の此一語を聞くに堪えなかつた。

「僕は三四年前に、貴方あなたに左様打ち明けなければならなかつたの

です」と云つて、慚然ぶぜんとして口くちを閉ぢた。三千代は急に手帛ハンケチを

顔かほから離はなした。瞼まぶたの赤くなつた眼めを突然代助の上に睜みはつて、

「打ち明けて下くださらなくつても可いいから、何故なぜ」と云ひ掛かけて、

一寸蹢躅ちよつとちうちよしたが、思ひ切つて、「何故なぜ棄すて、仕舞つたんです」

と云ふや否や、又手帛ハンケチを顔かほに当あて、又泣ないた。

「僕ぼくが悪い。堪忍わるして下ください」

代助は三千代の手頸てくびを執とつて、手帛ハンケチを顔かほから離はなさうとした。

三千代は逆さかはうとしなかつた。手帛ハンケチは膝ひざの上に落うへちた。三千

代は其膝ひざの上を見また儘かす、微かな声で、

「残酷だわ」と云つた。小さい口元くちもとの肉が顫ふるふ様に動いた。

「残酷と云はれても仕方ありません。其代り僕は夫丈それだけの罰ばつを受けてゐます」

三千代は不思議な眼めをして顔かほを上げたが、

「何どうして」と聞きいた。

「貴方あなたが結婚して三年以上になるが、僕はまだ独身どくしんでゐます」

「だつて、夫それは貴方あなたの御勝手ぢやありませんか」

「勝手ぢやありません。貰もらはうと思つても、貰もらへないので。そ

れから以後、宅うちのものから何遍結婚を勧められたか分わかりません。

けれども、みんな断つて仕舞ひました。今度こんども亦ひとりとわ一人断りました。

其結果僕と僕の父ちちとの間あひだが何どうなるか分わかりません。然し何どうなつ

でも構はない、断ことわるんです。貴方が僕に復讐ふくしうしてゐる間は断あひだことわらなければならぬんです」

「復讐」と三千代は云つた。此二字を恐るゝものゝ如くに眼めを働かした。「私は是わたくしでも、嫁よめに行つてから、今日迄こんにちいちにち一日も早く、貴方なたが御結婚なされば可いいと思はないで暮くらした事はありません」と稍改あらたまつた物の言いひ振ふりであつた。然し代助はそれに耳を貸さなかつた。

「いや僕は貴方あなたに何所迄どこも復讐して貰もらひたいのです。それが本望なのです。今日斯けふこうやつて、貴方あなたを呼んで、わざゝ自分の胸を打ち明けるのも、実は貴方あなたから復讐ふくしうされてゐる一部分としか思やしません。僕は是で社会的に罪を犯したと同じ事です。然し僕

はさう生れて来た人間なのだから、罪を犯す方が、僕には自然なのです。世間に罪を得ても、貴方の前に懺悔する事が出来れば、夫で沢山なんです。是程嬉しい事はないと思つてゐるんです」

十四の十一

三千代は涙の中で始めて笑つた。けれども一言も口へは出さなかつた。代助は猶己れを語る隙を得た。――

「僕は今更こんな事を貴方に云ふのは、残酷だと承知してゐます。それが貴方に残酷に聞えれば聞える程僕は貴方に対して成功したも同様になるんだから仕方がない。其上僕はこんな残酷な事を打

ち明けなければ、もう生きてゐる事が出来なくなつた。つまり我^わ儘^{がま}です。だから詫^{あやま}るんです」

「残酷では御座いけません。だから詫^{あや}まるのはもう廃^よして頂戴」

三千代の調子は、此時急に判^{はつきり}然^しした。沈^{しづ}んではゐたが、前に比べると非常に落ち着^ついた。然ししばらくしてから、又

「たゞ、もう少し早く云つて下さると」と云ひ掛けて涙ぐんだ。

代助は其時斯う聞いた。――

「ぢや僕が生涯^{だま}黙つてゐた方が、貴方^{あなた}には幸福だつたんですか」

「左様^{さう}ぢやないのよ」と三千代は力を籠めて打ち消した。「私^{わたくし}だ

つて、貴方^{あなた}が左様^{さう}云つて下さ^{くだ}らなければ、生きてゐられなくなつ

たかも知れませんわ」

今度は代助の方が微笑した。

「^{それ}夫ぢや構はないでせう」

「^{かま}構はないより難有いわ。たゞ——」

「たゞ平岡に済まないと云ふ^すんでせう」

三千代は不安らしく首肯^{うなづ}いた。代助は斯う聞いた。——

「三千代さん、正直に云つて御覧。^{あなた}貴方は平岡を愛してゐるんですか」

三千代は答へなかつた。見るうちに、顔の色が蒼くなつた。眼^めも口も固^{かた}くなつた。凡てが苦痛の表情であつた。代助は又聞いた。

「では、平岡は^{あなた}貴方を愛してゐるんですか」

三千代は矢張り俯^うつ向^むいてゐた。代助は思ひ切つた判断を、自

分の質問しつもんの上に与へやうとして、既に其言葉が口迄出掛つた時、

三千代は不意に顔を上げたあ。其顔には今見た不安も苦痛も殆んど

消えてゐた。涙さへ大抵は乾いたなみだ。頬の色は固より蒼かつたが、

唇は確として、動く気色はなかつたくちびる。其間から、低く重い言

葉が、繋がらない様に、一字づゝ出たつな。

「仕様がなきい。覚悟を極めませう」

代助は脊中から水を被つた様に顫へたせなか。社会から逐ひ放たるべ

き二人の魂は、たゞ二人対ひ合つて、互を穴の明く程眺めてゐたふたりたましひ。

さうして、凡てに逆つて、互を一所に持ち来たした力を互と怖れ

戦おのいた。

しばらくすると、三千代は急に物に襲はれた様に、手を顔に当

てて泣き出した。代助は三千代の泣く様を見るに忍びなかつた。肱を突いて額を五指の裏に隠した。二人は此態度を崩さずに、恋愛の彫刻の如く、凝としてゐた。

二人は斯う凝としてゐる中に、五十年を眼のあたりに縮めた程の精神の緊張を感じた。さうして其緊張と共に、二人が相並んで存在して居ると云ふ自覚を失はなかつた。彼等は愛の刑と愛の賚とを同時に享けて、同時に双方を切實に味はつた。

しばらくして、三千代は手帛を取つて、涙を奇麗に拭いたが、静かに、

「私もう歸つてよ」と云つた。代助は、

「御歸りなさい」と答へた。

雨は小降こふりになつたが、代助は固より三千代を独ひとり返す気はなかつた。わざと車くるまを雇はずに、自分で送でつて出た。平岡の家迄ついに行く所を、江戸川の橋の上で別わかれた。代助は橋の上に立つて、三千代が横町を曲まがる迄見送みおくつてゐた。夫それから緩ゆるくり歩を回めぐらしながら、腹はらの中で、

「万事終る」と宣告した。

雨は夕方歇やんで、夜に入よつたら、雲がしきりに飛とんだ。其中洗うちつた様な月が出でた。代助は光ひかりを浴あびる庭の濡葉ぬれはを長い間あひだ椽側から眺ながめてゐたが、仕舞に下駄はを穿はいて下へ降したりた。固より広い庭でうへに立木たちきの数かずが存外多まんなかいので、代助の歩あるく積せきはたんと無なかつた。代助は其真中まんなかに立つて、大きな空そらを仰おほいだ。やがて、座敷

から、昼間^{ひるま}買った百合^{ゆり}の花を取つて来て、自分の周囲^{まはり}に蒔^まき散らした。白い花瓣^{くわべん}が点々^{てんく}として月の光^{ひかり}に冴^さえた。あるものは、木下^{やみ}闇^{ほの}に仄^{ほの}めいた。代助は何をするともなく其間^{あひだ}に曲^{かゞ}んでゐた。寐^ねる時になつて始めて座敷^あへ上^あがつた。室^{へや}の中は花^なの香^かがまだ全く抜^ぬけてゐなかつた。

十五の一

三千代に逢つて、云ふべき事を云つて仕舞つた代助は、逢はな
い前に比べると、余程心の平和に接近し易くなつた。然し是は彼
の予期する通りに行^いつた迄で、別に意外の結果と云ふ程のもので

はなかつた。

会見の翌日彼は永らく手に持つてゐた賽^{さい}を思ひ切つて投げた人の決心を以て起きた。彼は自分と三千代の運命^{きのみち}に対して、昨日から一種の責任を帯びねば済まぬ身^みになつたと自覺した。しかも夫^{それ}は自ら進んで求めた責任に違^{ちが}ひなかつた。従つて、それを自分の脊^せに負ふて、苦しいとは思へなかつた。その重^{おも}みに押されるがため、却つて自然と足^{あし}が前に出る様な氣がした。彼は自ら切り開いた此運命の断片を頭^{あたま}に乗せて、父と決戦すべき準備を整へた。父の後^{あと}には兄^{あに}がゐた、嫂^{あによめ}がゐた。是等と戦つた後^{あと}には平岡がゐた。是等を切り抜^ぬけても大きな社会があつた。個人の自由と情実を毫も斟酌^くして呉れない器械の様な社会があつた。代助には此社会が

今全然暗黒に見えた。代助は凡てと戦ふ覚悟をした。

彼は自分で自分の勇氣と胆力に驚ろいた。彼は今日迄、熱烈を厭ふ、危きに近寄り得ぬ、勝負事ぶぎとを好まぬ、用心深い、太平の好紳士と自分を見倣してゐた。徳義上重大な意味の卑怯はまだ犯した事がないけれども、臆病と云ふ自覺はどうしても彼の心かれから取り去る事が出来なかつた。

彼は通俗なある外国雑誌の購読者であつた。其中なかのある号で、

Mountain 《マウンテン》 Accidents 《アクシデンツ》と題する一

篇に遭あつて、かつて心こころを駭おどろかした。夫それには高山を攀よぢ上る冒険者

の、怪我過あやまちが沢山に並ならべてあつた。登山の途中雪崩ゆきなだれに圧おされ

て、行き方知れずになつたものゝ骨が、四十年後ごに氷河の先さきへ引

懸つて出た話や、四人の冒険者が懸崖の半腹にある、真直に立つた大きな平岩を越すとき、肩から肩の上へ猿の様に重なり合つて、最上の一人の手が岩の鼻へ掛かるや否や、岩が崩れて、腰の縄が切れて、上の三人が折り重なつて、真逆様に四番目の男の傍を遙かの下に落ちて行つた話などが、幾何となく載せてあつた間に、鍊瓦の壁程急な山腹に、蝙蝠の様に吸ひ付いた人間を二三ヶ所点綴した挿画があつた。其時代助は其絶壁の横にある白い空間のあなたに、広い空や、遙かの谷を想像して、怖ろしさから来る眩暈を、頭の中に再現せずには居られなかつた。

代助は今道德界に於て、是等の登攀者と同一な地位に立つてゐると云ふ事を知つた。けれども自ら其場に臨んで見ると、怯む気

は少しもなかつた。怯^{ひる}んで猶予する方が彼に取つては幾倍の苦痛であつた。

彼は一日も早く父^{ちち}に逢つて話をしたかつた。万一の差支を恐れて、三千代が来^きた翌日、又電話を掛けて都合を聞き合せた。父^{ちち}は留守だと云ふ返事を得た。次の日又問ひ合せたら、今度は差支があると云つて断^{ことわ}られた。其次には此方^{こちら}から知らせる迄は来^くるに及ばんといふ挨拶であつた。代助は命令通り控^{ひか}えてゐた。其間^{あによめ}嫂^{あに}からも兄^{あに}からも便^{たより}は一向なかつた。代助は始めは家^{うち}のものが、自分^たに出来る丈長い、反省再考の時間を与へる為^{ため}の策略ではあるまいかと推察して、平氣に構へてゐた。三度の食事^{うま}も旨^くく食つた。夜^{よる}も比較的安^{やす}らかな夢を見た。雨^{あめ}の晴間^{はれま}には門野^{かどの}を連れて散歩を一

二度した。然し宅からは使も手紙も来なかつた。代助は絶壁の途中で休息する時間の長過ぎるのに安からずなつた。仕舞に思ひ切つて、自分の方から青山へ出掛けて行つた。兄は例の如く留守であつた。嫂は代助を見て氣の毒さうな顔をした。が、例の事件に就ては何にも語らなかつた。代助の来意を聞いて、では私が一寸奥へ行つて御父さんの御都合を伺つて来ませうと云つて立つた。梅子の態度は、父の怒りから代助を庇う様にも見えた。又彼を疎外する様にも取れた。代助は兩方の何れだらうかと煩つて待つてゐた。待ちながらも、何うせ覺悟の前だと何遍も口のうちに繰り返した。

奥から梅子が出て来る迄には、大分暇が掛つた。代助を見て、

又氣の毒さうに、今日^{けふ}は御都合が悪いさうですよと云つた。代助は仕方なしに、何時^{いつ}来たら宜^よからうかと尋ねた。固より例^{れい}の様な元氣はなく悄然とした問ひ振りであつた。梅子は代助の様子に同情の念を起した調子で、二三日中に屹度自分が責任を以て都合の好い時^{いい}日を知らせるから今日^{けふ}は帰れと云つた。代助が内玄関を出^でる時、梅子はわざと送つて来^きて、

「今度^{こんだ}こそ能く考へて入らつしやいよ」と注意した。代助は返事もせず^{もん}に門を出た。

十五の二

歸る途中とちうも不愉快で堪たまらなかつた。此この間あひだ三千代に逢あつて以

後、味はう事を知つた心の平和を、父ちちや嫂あによめの態度で幾分か破壊さ

れたと云ふ心持が路みち々募つた。自分は自分の思ふ通りを父ちちに告

げる、父ちちは父の考へを遠慮なく自分に洩らす、それで衝突する、

衝突の結果はどうあらうとも潔よく自分で受ける。是が代助の予

期であつた。父ちちの仕打しうちは彼の予期かれ以外に面白くないものであつた。

其仕打は父ちちの人格を反射する丈夫丈多く代助を不愉快にした。

代助は途みちすがら、何なにを苦くるんで、父ちちとの会見を左迄に急いだもの

かと思ひ出だした。元來が父ちちの要求に対する自分の返事に過ぎない

のだから、便宜は寧ろ、是を待ち受ける父ちちの方にあるべき筈であ

つた。其父ちちがわざとらしく自分を避ける様にして、面会を延のばす

ならば、それは自己の問題を解決する時間が遅くなると云ふ不結果を生ずる外に何も起り様がない。^{なに}代助は自分の未来に関する主要な部分は、もう既に片付けて仕舞つた積^{かつ}でゐた。彼は父から時日を指定して呼び出^だされる迄は、宅^{うち}の方の所置を其儘にして放つて置く事に極めた。

彼は家^{いへ}に歸つた。父^{ちち}に対しては只薄^{うすぐら}暗い不愉快の影^{かげ}が頭に残つてゐた。けれども此影は近き未来に於て必ず其暗^{くら}さを増してくべき性質のものであつた。其他には眼前に運命の二つの潮流を認めた。一つは三千代と自分が是から流れて行くべき方向を示してゐた。一つは平岡と自分を是非共一所に捲^まき込むべき^{すさま}凄じいものであつた。代助は此^{このあひだ}間三千代に逢^あつたなりで、片^{かた}片^{かた}の方

は捨てゝある。よし是これから三千代の顔かほを見るにした所で、——また長い間あひだ見ずにゐる気はなかつたが、——二人ふたりの向後取るべき方針に就て云へば、当分は一步も現在状態より踏み出す見は持たなかつた。此点に関して、代助は我ながら明瞭な計画を拵こしらへてゐなかつた。平岡と自分とを運び去るべき将来に就ても、彼はたゞ何時いつ、何事なにことにでも用意ありと云ふ丈であつた。無論彼は機きを見て、積極的に働らき掛ける心組はあつた。けれども具体的な案は一つも準備しなかつた。あらゆる場合に於て、彼の決して仕損しそんじまいと誓つたのは、凡てを平岡に打ち明けると云ふ事であつた。従つて平岡と自分とで構成すべき運命の流は黒く恐ろしいものであつた。一つの心配は此恐ろしい暴風あらしの中なかから、如何にして三千

代を救^{すく}ひ得べきかの問題であつた。

最後に彼の周囲を人間のあらん限り包^{かぎ}む社会^{つゝ}に對しては、彼は何の考も纏めなかつた。事実として、社会は制裁の権を有してゐた。けれども動機行為の権は全く自己の天分から湧^でいて出るより外に道はないと信じた。かれは此点に於て、社会と自分との間には全く交渉のないものと認めて進行する氣であつた。

代助は彼^{かれ}の小^{ちい}さな世界の中心に立つて、彼^{かれ}の世界を斯様に觀て、一順其關係比例を頭^{あたま}の中で調べた上、

「善^よからう」と云つて、又家^{いへ}を出た。さうして一二丁^{ある}歩いて、乗り付けの帳場迄^き来て、奇麗^{はや}で早さうな奴^{やつ}を掴んで飛び乗^のつた。何^ど處^こへ行く當^{あて}もないのを好加減な町を名指^{なざ}して二時間程ぐる／＼乗

り廻まはして歸かへつた。

翌日も書齋なの中で前日同様、自分の世界の中心に立つて、左右前後を一応隈くまなく見渡あした後、

「宜よろしい」と云つて外そとへ出て、用もない所を今度は足に任せてぶら／＼歩あるいて歸つた。

三日目にも同じ事を繰くり返した。が、今度は表へ出でるや否や、すぐ江戸川を渡つて、三千代の所きへ來た。三千代は二人ふたりの間あひだに何事も起おこらなかつたかの様に、

「何故夫なぜそれから入らつしやらなかつたの」と聞きいた。代助は寧ろ其落ち付はらき払つた態度に驚ろかされた。三千代はわざと平岡の机の前に据ゑてあつた蒲団を代助の前へ押し遣やつて、

「何なんでそんなに、そわ／＼して居ゐらつしやるの」と無理に其上そのうへに坐すはらした。

一時間ばかり話してゐるうちに、代助の頭あたまは次第に穩おだやかになつた。車くるまへ乗つて、当あてもなく乗り回まはすより、三十分でも好いいから、早く此所こゝへ遊びに來くれば可よかつたと思ひ出した。歸るとき代助は、「又來きます。大丈夫だから安心して入いらつしやい」と三千代を慰める様に云つた。三千代はたゞ微笑した丈であつた。

十五の三

其夕ゆふがた方始ちひめて父ちちからの報知しらせに接した。其時代助は婆さんの給

仕で飯めしを食くつてゐた。茶碗を膳うへの上へ置いて、門野かどのから手紙を受取つて読むと、明朝何時迄に御出いでの事といふ文句があつた。代助は、

「御役所風だね」と云ひながら、わざと端書はがきを門野かどのに見せた。門野かは、

「青山あをやまの御宅おたくからですか」と叮嚀に眺めてゐたが、別に云ふ事がないものだから、表おもてを引つ繰り返して、

「何どうも何なんですな。昔むかしの人は矢つ張り手蹟てが好いい様ですな」と御世辞を置き去りざにして出て行つた。婆さんは先刻さつきから曆こよみの話はなしをしきりに為してゐた。みづのえだのかのとだの、八朔だの友引だの、爪つめを切る日だの普請きをする日だのと頗うるさる煩わづらいものであつた。代助

は固より上の空で聞いてゐた。婆さんは又門野の職の事を頼んだ。十五円でも宜いから何方へ出して遣つて呉れないかと云つた。代助は自分ながら、何んな返事をしたか分らない位気にも留めなかつた。たゞ心のうちでは、門野所か、この己が危しい位だと思つた。

食事を終るや否や、本郷から寺尾が来た。代助は門野の顔を見て暫らく考へてゐた。門野は無雑作に、

「断りますか」と聞いた。代助は此間から珍らしくある会を一回欠席した。来客も逢はないで済むと思ふ分は両度程謝絶した。

代助は思ひ切つて寺尾に逢つた。寺尾は何時もの様に、血眼になつて、何か探してゐた。代助は其様子を見て、例の如く皮肉

で持ち切る気にもなれなかつた。翻訳だらうが焼き直したらうが、生きてゐるうちは何処^{どこ}迄も遣^やる覚悟だから、寺尾の方がまだ自分より社会の兎^じらしく見えた。自分がもし失脚して、彼と同様の地位に置かれたら、果して何^どの位の仕事に堪えるだらうと思ふと、代助は自分に対して氣の毒になつた。さうして、自分が遠からず、彼^{かれ}よりも甚^{ひど}く失脚するのは、殆んど未発の事實の如く確^{たしか}だと諦めてゐたから、彼は侮蔑の眼^めを以て寺尾を迎へる訳には行かなかつた。

寺尾は、此間の翻訳を漸くの事で月末迄に片付けたら、本屋の方で、都合が悪いから秋迄出版を見合せると云ひ出したので、すぐ労力を金^{かね}に換算する事が出来ずに、困つた結果^や遣^きつて來たので

あつた。では書肆と契約なしに手を着けたのかと聞くと、全く左様でもないらしい。と云つて、本屋の方が丸で約束を無視した様にも云はない。要するに曖昧であつた。たゞ困つてゐる事丈は事実らしかつた。けれども斯う云ふ手違に慣れ抜いた寺尾は、別に徳義問題として誰にも不満を抱いてゐる様には見えなかつた。失敬だとか怪しからんと云ふのは、たゞ口の先許で、腹の中の屈托は、全然飯と肉に集注してゐるらしかつた。

代助は気の毒になつて、当座の經濟に幾分の補助を与へた。寺尾は感謝の意を表して歸つた。歸る前に、実は本屋からも少しは前借はしたんだが、それは疾の昔に使つて仕舞つたんだと自白した。寺尾の歸つたあとで、代助はあゝ云ふのも一種の人格だと思

つた。たゞ斯^かう樂に活計^{くわし}てゐたつて決して為^なれる訳のものぢやない。今の所謂文壇が、あゝ云ふ人格を必要と認めて、自然に産み出した程、今の文壇は悲しむべき状況の下に呻吟^{もと}してゐるんではなからうかと考へて茫^{ぼん}乎^{やり}した。

代助は其^{その}晩^{ばん}自分の前途をひどく氣に掛けた。もし父^{ちち}から物質的に供給の道を鎖^{とぎ}された時、彼は果して第二の寺尾になり得る決心があるだらうかを疑^{うたぐ}つた。もし筆を執つて寺尾の真似さへ出来なかつたなら、彼は当然餓死すべきである。もし筆を執^とらなかつたら、彼は何をする能力があるだらう。

彼は眼^めを開^あけて時^{とき}々蚊帳^{かや}の外^{そと}に置^おいてある洋燈^{ランプ}を眺めた。
 夜中^{よなか}に燐寸^{マッチ}を擦^すつて烟草^{たばこ}を吹^ふかした。寐返りを何遍も打つた。固

より寐^ね苦しい程暑い晩ではなかつた。雨が又ざあ〜と降^ふつた。代助は此雨の音^{おと}で寐^ね付くかと思ふと、又雨の音^{おと}で不意に眼^めを覚^さました。夜は半醒半睡のうちに明け離れた。

十五の四

定^{てい}刻^{こく}になつて、代助は出掛^{でか}けた。足駄^{あしだ}穿^{ばき}で雨傘^{あまがさ}を提^さげて電車^{でん}に乗^のつたが、一方の窓^{まど}が締め切^{しき}つてある上^{うへ}に、革紐^{かはひも}にぶら下^さがつてゐる人^{ひと}が一杯なので、しばらくすると胸^{むね}がむかついて、頭^{あたま}が重^{おも}くなつた。睡眠不足が影響したらしく思はれるので、手^てを窮屈^{きうくつ}に伸^のばして、自分の後丈^{うしろ}を開^あけ放^{はな}つた。雨は容赦なく襟から

帽子に吹き付けた。二三分の後隣の人の迷惑さうな顔に気が付いて、又元の通りに硝子窓を上げた。硝子の表側には、弾けた雨の珠が溜つて、往来が多少歪んで見えた。代助は首から上を振ぢ曲げて眼を外面に着けながら、幾たびか自分の眼を擦すつた。然し何遍擦つても、世界の恰好が少し變つて来たと云ふ自覚が取れなかつた。硝子を通して斜に遠方を透かして見るときは猶左様いふ感じがした。

弁慶橋で乗り換えてからは、人もまばらに、雨も小降りになつた。頭も楽に濡れた世の中を眺める事が出来た。けれども機嫌の悪い父の顔が、色々な表情を以て彼の脳髓を刺戟した。想像の談話さへ明かに耳に響いた。

玄関を上つて、奥へ通る前に、例の如く一応嫂に逢つた。嫂は、

「鬱陶しい御天気ぢやありませんか」と愛想よく自分で茶を汲んで呉れた。然し代助は飲む気にもならなかつた。

「御父さんが待つて御出でせうから、一寸行つて話をして来ませう」と立ち掛けた。嫂は不安らしい顔をして、

「代さん、成らう事なら、年寄に心配を掛けない様になさいよ。

御父さんだつて、もう長い事はありませんから」と云つた。代助は梅子の口から、こんな陰気な言葉を聞くのは始めてであつた。

不意に穴倉へ落ちた様な心持がした。

父は烟草盆を前に控えて、俯向いてゐた。代助の足音を聞いても顔を上げなかつた。代助は父の前へ出て、叮嚀に御辞儀をした。

定めて六づかしい眼付めつきをされと思ひの外、父は存外おだや穩かなもので、

「降ふるのに御苦労だつた」と労いたはつて呉れた。其時始めて気が付いて見ると、父ちちの頬ほが何時いつの間まにかぐつと瘡こけてゐた。元來にが肉くの多い方だつたので、此變化が代助には余計目立つて見えた。代助は覺えず、

「何どうか為なさいましたか」と聞いた。

父ちちは親おやらしい色いろを一ちよつとかほ寸顔うごに動うごかした丈で、別に代助の心配しぱくを物ものにする様子もなかつたが、少しば時話はなしてゐるうちに、

「己おれも大分年を取つてな」と云ひ出だした。其調子ちうしが何時いつもの父ちちとは全く違ちがつてゐたので、代助は最前あによめ嫂の云つた事を愈重いく見なけ

ればならなくなつた。

父は年の所為で健康の衰へたのを理由として、近々実業界を退く意志のある事を代助に洩らした。けれども今は日露戦争後の商工業膨脹の反動を受けて、自分の経営にかゝる事業が不景気の極端に達してゐる最中だから、此難関を漕ぎ抜けた上でなくては、無責任の非難を免かれる事が出来ないので、当分已を得ずに辛抱してゐるより外に仕方がないのだと云ふ事情を委しく話した。代助は父の言葉を至極尤もだと思つた。

父は普通の実業なるものゝ困難と危険と繁劇と、それ等から生ずる当事者の心の苦痛及び緊張の恐るべきを説いた。最後に地方の大地主の、一見地味であつて、其實自分等よりはずつと鞏固の

基礎を有してゐる事を述べた。さうして、此比較を論拠として、新たに今度の結婚を成立させやうと力めた。

「さう云ふ親類が一軒位あるのは、大變な便利で、且つ此際甚だ必要ぢやないか」と云つた。代助は、父ちちとしては寧ろ露骨過ぎる此政略的結婚の申し出いでに対して、今更驚ろく程、始めから父を買ひ被つてはゐなかつた。最後の会見に、父ちちが従来の仮面かめんを脱ぬいで掛かかつたのを、寧ろ快こころよく感じた。彼自身かれじしんも、斯こんな意味の結婚を敢てし得る程度の人間にんげんだと自ら見積みづかみてゐた。

其そのうへち上父に対して何時いつにない同情があつた。其顔かほ、其声こゑ、其代助を動かさうとする努力、凡てに老後の憐れを認める事が出来た。代助はこれをも、父の策略とは受取り得なかつた。私わたくしは何うでも

宜^よう御座いますから、貴方^{あなた}の御都合の好^いい様に御極^きめなさいと云ひたかつた。

十五の五

けれども三千代と最後の会^{くわいけん}見^{けん}を遂^とげた今更^{いまさら}、父^{ちち}の意^いに叶^{かな}ふ様な当座の孝行は代助には出来かねた。彼は元来が何方^{どつちつ}付かずの男であつた。誰^{だれ}の命令も文字通りに拝承した事のない代りには、誰^{だれ}の意見にも露^{むき}に抵抗した試がなかつた。解釈のしやうでは、策士^{さくし}の態度とも取れ、優柔の生れ付^{つき}とも思はれる遣口^{やりぐち}であつた。彼^{かれ}自身さへ、此二つの非難^{いづ}の何れを聞^きいた時に、左様^{さう}かも知れな

いと、腹はらの中なかで首くびを振ひねらぬ訳わけには行いかなかつた。然し其原因の大
部分は策略でもなく、優柔でもなく、寧ろ彼かれに融通きの利ふたく両つの
眼めが付ついてゐて、双方を一時に見みる便宜を有してゐたからであつ
た。かれは此能力の為に、今日迄一図ものに物に向つて突進する勇氣
を挫くちかれた。即かず離れず現状に立ち竦すくんでゐる事が屢しばしばあつた。
此現状維持の外観が、思慮の欠乏から生ずるのでなくて、却つて
明白な判断に本いて起ると云ふ事實は、彼かれが犯すべからざる敢為
の氣象を以て、彼の信ずる所を断行した時に、彼自身にも始めて
解わかつたのである。三千代の場合、即ち其適てき例であつた。

彼は三千代の前に告白した己おのれを、父ちちの前で白紙にしやうとは
想おもひ到いたらなかつた。同時に父ちちに對しては、心しんから氣の毒であつた。

平生の代助が此際に執るべき方針は云はずして明らかであつた。^{あき}

三千代との關係を撤回する不便なしに、父に満足を与へる為^{ため}の結

婚を承諾するに外^{ほか}ならなかつた。代助は斯^かくして双方を調和する

事^{でき}が出来た。何方^{どつちつ}付かずに真^ま中^{んなか}へ立^たつて、煮え切らずに前進す

る事は容易であつた。けれども、今^{いま}の彼^{かれ}は、不^ふ断^{だん}の彼とは趣^{おもむき}を異

にしてゐた。再び半身を埒^{らつぐわい}外^{ぬきん}に挺^たでて、余人と握手するのは

既^{おそ}に遅^{おそ}かつた。彼は三千代に對する自己の責任を夫程深く重^{おも}いも

のと信じてゐた。彼の信念は半^{なか}ば頭^{あたま}の判断から來^きた。半^{こころ}ば心^{こころ}の憧

憬^きから來^きた。二つのものが大きな濤^{なみ}の如くに彼を支配した。彼は

平生の自分から生れ變つた様に父^{ちち}の前に立^たつた。

彼^{かれ}は平生の代助の如く、成る可^{くちかず}く口^{くちかず}数^きを利^きかずに控^{ひか}えてゐた。

父^ちから見れば何時^{いづ}も代助と異なる所はなかつた。代助の方では却^かつて父^ちの変^{かは}つてゐるのに驚^{おど}ろいた。実は此間^{こゝ}から幾^{いく}度も会^あ見^みを謝^{あや}絶^まされたのも、自分^{おのれ}が父^ちの意志^{いし}に背^{そむ}く恐^{おそ}れがあるから父^ちの方^{かた}でわざと、延^のばしたものと推^{おし}してゐた。今日^{けふ}逢^あつたら、定^{さだ}めて苦^{くる}い顔^{かお}をされる事と覚^し悟^ごを極^きめてゐた。ことによれば、頭^{あたま}から叱^{しか}り飛^とばされるかも知^しれないと思^{おも}つた。代助には寧^{その}ろ其^{ほう}方^{かた}が都合^{ぐうご}が好^よかつた。三分^ぶの一^{いち}は、父^ちの暴^{ぼう}怒^どに對^{たい}する自己^{じこ}の反^{はん}動^{どう}を、心理^{しんり}的に利用^{りよう}して、判^き然^{ぜん}断^とらうと云^いふ下^{した}心^{こゝろ}さへあつた。代助は父^ちの樣^{よう}子^こ、父^ちの言^い葉^は遣^{つかひ}、父^ちの主意^{しゆい}、凡^{たゞ}てが予^よ期^きに反^{はん}して、自分^{おのれ}の決^{けつ}心^{しん}を鈍^{にぶ}らせる傾^{けい}向^{かう}に出^でたのを心^{こゝろ}苦^{くる}しく思^{おも}つた。けれども彼^{かれ}は此^{こゝろ}心^{しん}苦^{くる}しさにさへ打^うち勝^かつべき決^{けつ}心^{しん}を蓄^{たくは}へた。

「貴方あなたの仰おつしやる所は一々いち／＼御尤もだと思ひますが、私わたくしには結婚を承諾する程の勇氣がありませんから、断ことわるより外に仕方がなからうと思ひます」ととう／＼云つて仕舞つた。其時父ちちはたゞ代助の顔かほを見てゐた。良やあつて、

「勇氣が要いるのかい」と手に持もつてゐた烟管を畳きせるの上に放ほうり出した。代助は膝ひざ頭がしらを見詰だまめて黙だまつてゐた。

「当人が氣に入らないのかい」と父が又聞きいた。代助は猶返事をしなかつた。彼は今迄父ちちに対して己おのれの四半分も打ち明あけてはゐなかつた。その御蔭かげで父と平和の關係を漸く持續して來きた。けれども三千代の事丈は始めから決して隠かくす氣はなかつた。自分の頭あたまの上に当然落うへちかゝるべき結果を、策で避さける卑怯が面白くなか

つたからである。彼はたゞ自白の期に達してゐないと考へた。従つて三千代の名は丸で口へは出さなかつた。父は最後に、

「ぢや何でも御前の勝手にするさ」と云つて苦い顔をした。

代助も不愉快であつた。然し仕方がないから、礼をして父の前を退がらうとした。ときに父は呼び留めて、

「己の方でも、もう御前の世話はせんから」と云つた。座敷へ歸

つた時、梅子は待ち構へた様に、

「何うなすつて」と聞いた。代助は答へ様もなかつた。

十六の一

翌日^{あくるひめ}眼^さが覚^さめても代助の耳^{みみ}の底^{そこ}には父^{ちち}の最後の言葉^{ことば}が鳴^なつてゐた。彼^{かれ}は前後の事情^{しじょう}から、平生以上の重^{おも}みを其内容^{そのよう}に附着^{つづ}しななければならなかつた。少^{すく}なくとも、自分丈では、父^{ちち}から受ける物質^{ぶつしつ}的^{てき}の供給^{ききゅう}がもう絶えたものと覺悟^{かくご}する必要^{ひつやう}があつた。代助の尤も恐るゝ時期^{きじ}は近づいた。父^{ちち}の機嫌^{きげん}を取り戻^{もど}すには、今度の結婚^{けっこん}を断^{ことわ}るにしても、あらゆる結婚^{けっこん}に反対^{はんたい}してはならなかつた。あらゆる結婚^{けっこん}に反対^{はんたい}しても、父^{ちち}を首肯^{うなづ}かせるに足る程^{ほど}の理由^{りゆう}を、明白^{めいぱく}に述べなければならなかつた。代助に取つては二つのうち何れも不可能^{ふ可能}であつた。人生^{じんせい}に対する自家^{じか}の哲^{てい}学^{がく}の根本^{こんぽん}に触^ふれる問題^{もんだい}に就いて、父^{ちち}を欺^{あや}くのは猶更不可能^{ふ可能}であつた。代助は昨日^{きのふ}の会^{かい}見^{けん}を回顧^{かくこ}して、凡^{たゞ}てが進むべき方向^{きやう}に進んだとしか考^{かんが}へ得^えなかつ

た。けれども恐ろしかった。自己が自己に自然な因果を發展させながら、其因果の重みおもを脊中せなかに負しよつて、高い絶壁の端はじ迄押し出された様な心持であつた。

彼かれは第一の手段として、何か職業を求めなければならぬと思つた。けれども彼の頭かれあたまの中には職業と云ふ文字がある丈で、職業其物は体を具えて現あらはれて来なかつた。彼は今日迄如何なる職業にも興味を有つてゐなかつた結果として、如何なる職業を想うかひ浮べて見ても、只其上たゞそのうへを上滑うはすべりに滑すべつて行く丈で、中なかに踏ふみ込んで内部から考へる事は到底出来なかつた。彼には世間が平たい複雑な色いろわけ分の如くに見えた。さうして彼自身かれは何等の色いろを帯びてゐないとか考へられなかつた。

凡ての職業を見渡した^{のち}後、彼の^{かれ}眼は漂泊者^{うへ}の上^きに来て、そこで留^とまつた。彼は明^{あき}らかに自分の影を、犬と人^{ひと}の境^{さかい}を迷^{まよ}ふ乞食^{こつじき}の群^{むれ}の中^{なか}に見^い出した。生活の墮落は精神の自由を殺す点に於て彼の尤も苦痛とする所であつた。彼は自分の肉体に、あらゆる醜^{しう}穢^えを塗^ぬり付けた後、自分の心^{こころ}の状態が如何に落魄するだらうと考へて、ぞつと身^み振^{ふる}をした。

此落魄のうちに、彼は三千代を引張り廻^{まは}さなければならなかつた。三千代は精神的に云つて、既に平岡の所有ではなかつた。代助は死に至る迄^{かのをんな}彼女^{かのをんな}に対して責任を負ふ積であつた。けれども相当の地位を有^もつてゐる人の不実^{ふじつ}と、零落^{れいらく}の極に達した人の親切とは、結果に於て大^{たい}した差違はないと今更ながら思はれた。

死ぬ迄三千代に対して責任を負ふと云ふのは、負ふ目的があると
 いふ迄で、負つた事実には決してなれなかつた。代助は惘然と
 して黒内障に罹つた人の如くに自失した。

彼は又三千代を訪ねた。三千代は前日の如く静に落ち着いて
 ゐた。微笑と光輝とに満ちてゐた。春風はゆたかに彼

女の眉を吹いた。代助は三千代が己を挙げて自分に信頼してゐ

る事を知つた。其証拠を又眼のあたりに見た時、彼は愛憐の情
 と気の毒の念に堪えなかつた。さうして自己を悪漢の如くに呵
 責した。思ふ事は全く云ひそびれて仕舞つた。帰るとき、

「又都合して宅へ来ませんか」と云つた。三千代はえゝと首肯い
 て微笑した。代助は身を切られる程酷かつた。

代助は此このあひだ間まから三千代を訪問する毎ごとに、不愉快ながら平岡

の居ゐない時を択えらまなければならなかつた。始めはそれを左程にも

思はなかつたが、近頃では不愉快と云ふよりも寧ろ、行き悪い度

が日毎に強くなつて来た。其そのうへ上留守の訪問が重かさなれば、下女に

不審を起させる恐れがあつた。氣の所為せゐか、茶を運ぶ時はこにも、妙

に疑ぐり深い眼付めつきをして、見られる様でならなかつた。然し三千

代は全く知らぬ顔をしてゐた。少すくなくとも上部丈うはべは平氣であつた。

平岡との關係に就ては、無論詳しく尋ねる機会もなかつた。会たま

に一ひとこと言二ふたこと言夫となく問を掛けて見ても、三千代は寧ろ応じな

かつた。たゞ代助の顔を見みれば、見てゐる其そのあひだ間丈うれの嬉しさに

溺おぼれ尽つくすのが自然の傾向であるかの如くに思はれた。前後を取り

囲^{かこ}む黒い雲が、今にも逼^{せま}つて来はしまいかと云ふ心配は、陰^{かげ}では
いざ知らず、代助の前^{まへ}には影^{かげ}さへ見せなかつた。三千代は元来神
経質の女であつた。昨今の態度は、何^どうしても此女の手際ではな
いと思ふと、三千代の周囲の事情が、まだ夫程險惡に近づかない
証拠になるよりも、自分の責任が一層重くなつたのだと解釈せざ
るを得なかつた。

「すこし又話したい事があるから来^きて下^{くだ}さい」と前よりは稍真面
目に云つて代助は三千代と別れた。

十六の二

なかふつかお
中二日置いて三千代が来る迄、代助の頭は何等の新しい路を

開拓し得なかつた。彼の頭の中には職業の二字が大きな楷書で

焼き付けられてゐた。それを押し退けると、物質的供給の杜絶が

しきりに踊り狂つた。それが影を隠すと、三千代の未来が凄じく

荒れた。彼の頭には不安の旋風が吹き込んだ。三つのものが巴の

如く瞬時の休みなく回転した。其結果として、彼の周囲が悉く回

転しだした。彼は船に乗つた人と一般であつた。回転する頭と、

回転する世界の中に、依然として落ち付いてゐた。

青山の宅からは何の消息もなかつた。代助は固よりそれを予

期してゐなかつた。彼は力めて門野を相手にして他愛ない雑談に

耽つた。門野は此暑さに自分の身体を持ち扱つてゐる位、用のな

い男であつたから、頗る得意に代助の思ふ通り口を動かした。それでも話し草臥くたびれると、

「先生、将棋は何うです」杯と持ち掛けた。夕方ゆふがたには庭に水を打つた。二人共跣足ふたり はだしになつて、手桶を一杯宛持づもつて、無分別に其所等こいらぬを濡ぬらして歩いた。門野かどのが隣の梧桐ととなりの天辺てつべん迄水みづにして御目みめにかけると云つて、手桶の底を振り上げる拍子あに、滑すべつて尻持しりもちを突ついた。白粉草おしろいそうが垣根そばの傍で花を着けた。手水鉢てすいばちの蔭かげに生えた秋海棠いちはぎの葉が著きるしく大きくなつた。梅雨つゆは漸く晴れて、昼は雲くもの峰みねの世界となつた。強い日は大きな空そらを透すき通とほす程焼いて、空そら

一杯の熱を地上に射り付ける天気となつた。

代助は夜よに入あつて頭あたまの上の星ばかり眺ながめてゐた。朝あさは書齋しよさいに這

入った。二三日は朝から蝉の聲が聞える様になつた。風呂場へ行
 つて、度々頭を冷した。すると門野がもう好い時分だと思つて、
 「何うも非常な暑さですな」と云つて、這入つて来た。代助は斯
 う云ふ上の空の生活を二日程送つた。三日目の日盛に、彼は書
 斎の中から、ぎら／＼する空の色を見詰めて、上から吐き下す焰
 の息を嗅いだ時に、非常に恐ろしくなつた。それは彼の精神が此
 猛烈なる氣候から永久の変化を受けつゝあると考へた為であつた。
 三千代は此暑を冒して前日の約を履んだ。代助は女の聲
 を聞き付けた時、自分で玄関迄飛び出した。三千代は傘をつぼめ
 て、風呂敷包を抱へて、格子の外に立つてゐた。不斷着の儘宅を
 出たと見えて、質素な白地の浴衣の袂から手帛を出し掛けた所で

あつた。代助は其^{そのすがた}姿^{ひとめ}を一目見た時、運命が三千代の未来を切り抜^ぬいて、意地悪く自分の眼の前に持つて来^きた様に感じた。われ知らず、笑ひながら、

「馳^{かけ}落^{おち}でもしさうな風ぢやありませんか」と云つた。三千代は穩^{おだや}かに、

「でも買物をした序でないと上^{あが}り悪^{にく}いから」と真面目な答をして、代助の後^{あと}に跟^ついて奥迄入つて来^きた。代助はすぐ団扇を出^だした。照^てり付^けけられた所^せ為^ゐで三千代の頬^ほが心持よく輝^{かが}やいた。何時^{いつ}もの疲^{つか}れた色は何処^{どこ}にも見えなかつた。眼^めの中^{なか}にも若い沢^{わか}が宿^{つや}つてゐた。代助は生^{いき}々^くした此美しくしさに、自己の感覺を溺^ならして、しばらくは何事も忘れて仕舞つた。が、やがて、此美しくしさを冥々

の裡に打ち崩しつゝあるものは自分であると考へ出したら悲しくなつた。彼は今日も此美しくしさの一部分を曇らす為に三千代を呼んだに違なかつた。

代助は幾度か己れを語る事を躊躇した。自分の前に、これ程幸福に見える若い女を、眉一筋にしろ心配の為に動かさせるのは、代助から云ふと非常な不徳義であつた。もし三千代に対する義務の心が、彼の胸のうちに鋭どく働らいてゐなかつたなら、彼は夫から以後の事情を打ち明ける事の代りに、先達ての告白を再び同じ室のうちに繰り返して、単純なる愛の快感の下に、一切を放擲して仕舞つたかも知れなかつた。

代助は漸くにして思ひ切つた。

「其後貴方そのごあなたと平岡との關係は別に變りはありませんか」

三千代は此問を受けた時でも、依然として幸福であつた。

「あつたつて、構かまはないわ」

「貴方あなたは夫程僕を信用してゐるんですか」

「信用してゐなくつちや、斯かうして居られないぢやありませんか」

代助は目映まばしさうに、熱あつい鏡かゞみの様な遠い空そらを眺ながめた。

十六の三

「僕には夫程信用される資格がなさうだ」と苦笑くしながら答へたが、頭あたまの中なかは焙炉ほいろの如く火照ほてつてゐた。然し三千代は氣にも掛か

からなかつたと見えて、何故^{なぜ}とも聞き返さなかつた。たゞ簡単に、「まあ」とわざとらしく驚ろいて見せた。代助は真面目^{まじめ}になつた。「僕は白状するが、実を云ふと、平岡君より頼^{たより}にならない男なんです。買ひ被つてゐられると困るから、みんな話^{はな}して仕舞ふが」と前置^{まへおき}をして、夫^{それ}から自分と父^{ちち}との今日迄の關係を詳しく述べ^のた上^{うへ}、

「僕の身分^{みぶん}は是から先何^{さきど}うなるか分^{わか}らない。少^{すく}なくとも当分は一^い人前^{ちになまへ}ぢやない。半人前にもなれない。だから」と云ひ淀^{よど}んだ。

「だから、何^どうなさるんです」

「だから、僕の思ふ通り、貴方^{あなた}に対して責任が尽せないだらうと心配してゐるんです」

「責任つて、何んな責任なの。もつと判然^{はつきり}仰しやらくつちや解^{わか}らないわ」

代助は平生から物質的狀況に重きを置くの結果、たゞ貧苦が愛人の満足に価^{あたひ}しないと云ふ事丈を知つてゐた。だから富^{とみ}が三千代に対する責任の一つと考へたのみで、夫^{それ}より外^{ほか}に明らかな觀念は丸で持つてゐなかつた。

「徳義上の責任ぢやない、物質上の責任です」

「そんなものは欲^ほしくないわ」

「欲^ほしくないと云^いつたつて、是非必要になるんです。是から先僕^{さき}が貴方^{あなた}と何^どんな新^{あた}らしい關係に移つて行くにしても、物質上の供給が半分は解決者ですよ」

「解決者でも何でも、今更左様な事を気にしたつて仕方がないわ」

「口ではさうも云へるが、いざと云ふ場合になると困るのは眼に見えてゐます」

三千代は少し色を変へた。

「今貴方の御父様の御話を伺つて見ると、斯うなるのは始めから解つてゐるぢやありませんか。貴方だつて、其位な事は疾うから氣が付いて入つしやる筈だと思ひますわ」

代助は返事が出来なかつた。頭を抑えて、

「少し脳が何うかしてゐるんだ」と独り言の様に云つた。三千代は少し涙ぐんだ。

「もし、夫それが氣になるなら、私わたくしの方は何どうでも宜よう御座ごんすから、おとうさまなかと仲直りをなすつて、今迄通り御交際つきあひになつたら好いぢやありませんか」

代助は急に三千代の手頸てくびを握にぎつてそれを振ふる様に入いれて云つた。――

「そんな事を為する氣なら始めから心配をしやしない。たゞ氣の毒だから貴方あなたに詫あやまるんです」

「詫あやまるなんて」と三千代は声を顫ふるはしながら遮さへぎつた。「私わたくしが源因とで左様さうなつたのに、貴方あなたに詫あやまらしちや済すまないぢやありませんか」

三千代は声を立てゝ泣いた。代助は慰撫なだめる様に、

「ぢや我慢しますか」と聞きいた。

「我慢はしません。当まへり前ですもの」

「是さきから先まだ変化がありますよ」

「ある事は承知してゐます。何どんな変化があつたつて構やしませ

ん。わたくしこのあひだ私は此間から、——此間このあひだから私は、若もしも事があれ

ば、死ぬ積で覚悟を極きめてゐるんですもの」

代助は慄然りつぜんとして戦おのいた。

「貴方あなたこれに是から先何さきこうしたら好いいと云ふ希望はありませんか」と聞

いた。

「希望なんか無いわ。何なんでも貴方あなたの云ふ通りになるわ」

「漂泊——」

「漂泊でも好いわ。死ねと仰しやれば死ぬわ」

代助は又竦ぞつとした。

「此儘このまゝでは」

「此儘このまゝでも構はないわ」

「平岡君は全く気が付いてゐない様ですか」

「気が付いてゐるかも知れませんが。けれども私わたくしもう度胸を据ゑて

ゐるから大丈夫なのよ。だつて何時いつ殺ころされたつて好いんですもの」

「さう死ぬの殺されるのと安やすつぽく云ふものぢやない」

「だつて、放ほうつて置おいたつて、永ながく生きられる身体からだぢやないぢや

ありませんか」

代助は硬かたくなつて、竦すくむが如く三千代を見詰めた。三千代は歇ヒ

私^ス的^テ里^リの発^ほ作^つに襲^おはれた様に思^{おも}ひ切^きつて泣^ないた。

十六の四

一^{ひと}仕^し切^き経^りつと、発^ほ作^つは次第^おに収^おまつた。後^あは例^いの通^とり静^しかな、
しとやかな、奥^{おく}行^ゆのある、美^うくしい女^をになつた。眉^{まゆ}のあたりが
殊^はに晴^れ／＼しく見えた。其時代助は、

「僕^わが自^{みづか}分で平岡君に逢^あつて解決^{けっけつ}を付^つけても宜^よう御座^{ござ}んすか」と
聞^きいた。

「そんな事^{こと}が出来^{でき}て」と三千代は驚^{おどろ}ろいた様^{よう}であつた。代助は、
「出来^{でき}る積^{つも}です」と確^{しつ}り答^かへた。

「ぢや、何うでも」と三千代が云つた。

「さうませう。二人が平岡君を欺あざむいて事をするのは可よくない様だ。無論事實を能く納得でき出来る様に話はなす丈です。さうして、僕の悪い所はちやんと詫あやまる覚悟です。其結果は僕の思ふ様に行いかないかも知れない。けれども何う間違まちがつたつて、そんな無暗な事は起らない様にする積つもりです。斯かう中途半端ちうとはんぱにしてゐては、御互も苦痛だし、平岡君に対しても悪い。たゞ僕が思ひ切つて左様さうすると、あなたが、嘸さぞ平岡君に面目なからうと思つてね。其所そこが御氣の毒なんだが、然し面目ないと云へば、僕だつて面目ないんだから。自分の所為に対しては、如何に面目なくつても、徳義上の責任を負ふのが当然だとすれば、外ほかに何等の利益がないとしても、御互

の間に有^{あつ}た事丈は平岡君に話さなければならぬでせう。其上今の
場合では是からの所置を付^つける大事の自白なんだから、猶更必
要になると思ひます」

「能^{わか}く解りましたわ。何^どうせ間違^{まちが}へば死ぬ積なんですから」

「死ぬなんて。——よし死ぬにしたつて、是^{さきど}から先何の位間^{くらあひだ}があるか——又そんな危険がある位なら、なんで平岡君に僕から話す
もんですか」

三千代は又泣^だき出した。

「ぢや能^よく詫^{あやま}ります」

代助は日^ひの傾^{かへ}くのを待^まつて三千代を歸^{かへ}した。然し此前の時の様
に送^{おく}つては行^いかなかつた。一時間程書齋の中で蟬の聲を聞^きいて暮^{くら}

した。三千代に逢つて自分の未来を打ち明けてから、気分が薩張りした。平岡へ手紙を書^かいて、会見の都合を聞き合せ様として、筆を持つて見たが、急に責任の重いのが苦になつて、拜啓以後を書き続^{つづ}ける勇氣が出なかつた。卒然、襯衣^{しやつ}一枚になつて素足で庭へ飛^とび出^だした。三千代が帰る時は正体なく午睡^{ひるね}をしてゐた門野^{かどの}が、「まだ早いぢやありませんか。日が当つてゐますぜ」と云ひながら、坊主頭^{あたま}を両手で抑えて椽端にあらはれた。代助は返事もせず、庭の隅へ潜^{もぐ}り込んで竹の落葉^{おちば}を前の方へ掃き出^だした。門野^{かどの}も己^{おの}を得^きず着物^{きもの}を脱^ぬいで下^おりて来^きた。

狭い庭だけでも、土^{つち}が乾^{かは}いてゐるので、たつぷり濡^ぬらすには大分^{だいぶん}骨が折れた。代助は腕^{うで}が痛^{いた}いと云つて、好加減^{いゝかげん}にして足

を拭^ふいて上^あつた。烟草^{たばこ}を吹^ふいて、椽側^{えんがわ}に休^{やす}んでゐると、門野^{かど}が其姿^{すがた}を見て、

「先生^{せんせい}心臓^{しんざう}の鼓動^{こどう}が少々^{くさう}狂^{くる}やしませんか」と下^{した}から調戲^{てうぎ}つた。

晩^{ばん}には門野^{かど}を連^つれて、神楽坂^{かぐらざか}の縁日^{えんじつ}へ出^で掛けて、秋草^{あきくさ}を二鉢^{ふたはち}買^かつて来^きて、露^{つゆ}の下^おりる軒^{のき}の外^{そと}へ並^{なら}べて置^おいた。夜^よは深^そく空^{から}は高^{たか}かつた。星^{ほし}の色^{いろ}は濃^こく繁^{しげ}く光^{ひか}つた。

代助^{だいすけ}は其晩^{あま}わざと雨戸^{あまど}を引^ひかずに寐^ねた。無用心^{むしん}と云^いふ恐^{おそ}れが彼^{かれ}の頭^{あたま}には全^なく無^なかつた。彼^{かれ}は洋燈^{ランプ}を消^けして、蚊帳^{かや}の中^{なか}に独^{ひと}り寐^ね転^{ころ}びながら、暗^{くら}い所^{ところ}から暗^{くら}い空^{そら}を透^すかして見^みた。頭^{あたま}の中^{なか}には昼^{ひる}の事^{こと}が鮮^{あざ}かに輝^{かがや}いた。もう二三日^{にち}のうちには最後^{さいご}の解決^{けつげつ}が出来^{でき}ると思^{おも}つて幾度^{たび}か胸^{むね}を躍^{おど}らせた。が、そのうち大^{おほ}いなる空^{そら}と、大^{おほ}いなる

夢^{ゆめ}のうちに、吾知らず吸収^{あきゅう}された。

翌日^{あさ}の朝彼は思ひ切つて平岡へ手紙を出^だした。たゞ、内々で少し話したい事があるが、君の都合を知らせて貰^{もら}ひたい。此方^{こつち}は何時^つでも差支ない。と書いた丈だが、彼は^{かれ}わざとそれを封書にした。状袋^{のり}の糊を湿^しめて、赤い切手をとんと張^はつた時には、愈クライシスに証券を与へた様な気がした。彼は門野^{かどの}に云ひ付けて、此運命^{つかひ}の使を郵便函^{ぽうこ}に投^なげ込みました。手渡^{わた}しにする時、少し手先^{ふくろ}が顫へたが、渡したあとでは却つて茫然として自失した。三年前三代と平岡^{あひだ}の間に立^たつて幹旋^{あつせん}の勞を取つた事を追想すると丸で夢の様であつた。

十六の五

翌^{よくじつ}日は平岡の返事を心^{こゝろまち}待^{まち}に待ち暮^くらした。其^あ明^ある日も当^{あて}にして終^{しうじつうち}日^{じつ}宅^{たく}にゐた。三日^{みつかよつか}四^{よつか}日^{にち}と経^たつた。が、平岡^{ひら}からは何^{なん}の便^{たより}もなかつた。其^{そのうち}中^{なかい}例^{れい}月^{げつ}の通^{とほ}り、青^{あを}山^{やま}へ金^{かね}を貰^{もら}ひに行くべ^きき日^ひが来^きた。代助^{だいてすけ}の懷^{くわい}中^{ちゆう}は甚^{てう}だ手^す薄^{はく}になつた。代助^{だいてすけ}は此^{こゝ}前^{ぜん}父^ふに逢^あつた時^{とき}以後^{いご}、もう宅^{うち}からは補助^{ほすけ}を受けられないものと覺悟^{かくご}を極^きめてゐた。今^{いま}更^{さら}平氣^{へいき}な顔^{かほ}をして、のそ／＼出^で掛^{かけ}て行^いく了^{りやう}見^{けん}は丸^{まる}でなかつた。何^{なに}二^にヶ^が月^{げつ}や三^{さん}ヶ^が月^{げつ}は、書物^{しよぶつ}か衣類^{いるい}を売^うり払^{はら}つても何^どうかならんと腹^{はら}の中^{なか}で高^{たか}を括^{くく}つて落^おち付^ついてゐた。事^{こと}の落^お着^{ちやう}次第^{じだい}緩^{ゆつ}くり職業^{しごく}を探^{さが}すと云^いふ分^{ぶん}別^{べつ}もあつた。彼^{かれ}は平生^{へいしやう}から人^{ひと}のよく口^{くちく}

癖にする、人間は容易な事で餓死するものぢやない、何うにか
なつて行くものだと言ふ半、はんことわざ諺の真理を、経験しない前から信
じ出した。だ

いつか五日目に暑を冒して、電車へ乗つて、平岡の社迄出掛けて行つ
て見て、平岡は二三日出社しないと云ふ事が分つた。わか代助は表へ
出て薄汚うすぎたない編輯局の窓を見上げながら、足あしを運ぶ前に、一応
電話で聞き合あはすべき筈だつたと思つた。先達ての手紙は、果して
平岡の手に渡つたかどうか、夫さそれへ疑うたがはしくなつた。代助はわざ
と新聞社宛でそれを出したからである。歸りに神田へ廻まはつて、買
ひつけの古本屋ふるほんに、売払ひたい不用の書物があるから、見みに來
てくれろと頼たのんだ。

其晩は水ばんみづを打つ勇氣も失うせて、ぼんやり、白い網襦あみしやつ衣きを着た

門野の姿すがたを眺ながめてゐた。

「先生けふ今日は御疲おつかれですか」と門野かどのが馬尻ばけつを鳴らしながら云つた。

代助の胸は不安ふあんに圧おされて、明あきらかな返事も出でなかつた。夕食ゆふめし

のとき、飯めしの味あじは殆んどなかつた。呑のみ込む様に咽喉のどを通して、

箸はしを投なげた。門野かどのを呼んで、

「君、平岡の所へ行つてね、先達せんだつての手紙は御覧になりました

か。御覧になつたら、御返事を願ひますつて、返事を聞いて来きて

呉れ玉へ」と頼たのんだ。猶要領を得おそれぬ恐おそれがありさうなので、先達て

これ／＼の手紙を新聞社の方へ出して置いたのだと云ふ事迄説明

して聞きかした。

門野を出した後で、代助は椽側に出て、椅子に腰を掛けた。門野の帰った時は、洋燈を吹き消して、暗い中に凝としてゐた。門野は暗がりで、

「行つて参りました」と挨拶をした。「平岡さんは御居でゝした。手紙は御覧になつたさうです。明日の朝行くからといふ事です」

「左様かい、御苦労さま」と代助は答へた。

「実はもつと早く出るんだつたが、うちに病人が出来たんで遅くなつたから、宜しく云つてくれると云はれました」

「病人？」と代助は思はず問ひ返した。門野は暗い中で、

「えゝ、何でも奥さんが御悪い様です」と答へた。門野の着てゐる白地の浴衣丈がぼんやり代助の眼に入つた。夜の明りは二人の

顔を照らすには余り不充分であつた。代助は掛^かけてゐる籐^と椅子の
 肱^{ひぢかけ}掛^{にぎ}を両手で握つた。

「余程^{わる}悪いのか」と強く聞いた。

「何^どうですか、能く分^{わか}りませんが。何^{なん}でもさう軽^{かる}さうでもない様

でした。然し平岡さんが明日御出^{あしたおいで}になられる位^{くらい}なことから、大^{たい}し
 た事^{こと}ぢやないでせう」

代助は少し安心した。

「何^{なん}だい。病^{びょう}氣^きは」

「つい聞^きき落^{おと}しましたがな」

ふたり 二人の問答は夫^{それ}で絶^たえた。門野^{かどの}は暗^{くら}い廊下を引き返して、自分

の部屋へ這入つた。静^{しづ}かに聞いてゐると、しばらくして、洋燈^{ランプ}の

蓋かさをホヤに打ぶつける音おとがした。門野は灯火あかりを点つけたと見えた。

代助は夜よの中なかに猶凝じつとしてゐた。凝じつとしてゐながら、胸むねがわく

くした。握にぎつてゐる肱掛ひぢかけに、手から膏あぶらが出でた。代助は又手を

鳴らして門野を呼び出した。門野かどののぼんやりした白地しろぢが又廊下の

はづれに現あらはれた。

「まだ暗闇くらやみですな。洋燈ランプを点つけますか」と聞いた。代助は洋燈ランプ

を断ことわつて、もう一度いちど、三千代の病氣を尋ねた。看護婦の有無ためやら、

平岡の様子やら、新聞社を休んだのは、細君の病氣ための為ためだか、何ど

うだか、と云ふ点に至る迄、考へられる丈問ひ尽した。けれども

門野の答は必竟前と同じ事を繰り返すのみであつた。でなければ、

好加減あてな当あてずつぽうに過ぎなかつた。それでも、代助には一人ひとりで

黙つてゐるよりも堪え易かつた。

十六の六

寐る前に門野が夜中投函から手紙を一本出して来た。代助は暗い中でそれを受取つた儘、別に見様ともしなかつた。門野は、「御宅からの様です。灯火を持つて来ませうか」と促がす如くに注意した。

代助は始めて洋燈を書斎に入れさして、其下で、状袋の封を切つた。手紙は梅子から自分に宛てた可なり長いものであつた。

「此間から奥さんの事で貴方も嘸御迷惑なすつたらう。此方でも御父様始め兄さんや、私は随分心配をしました。けれども其甲斐もなく先達て御出の時、とう／＼御父さんに断然御断りなすつた御様子、甚だ残念ながら、今では仕方がないと諦らめてゐます。けれども其節御父様は、もう御前の事は構はないから、其積でゐると御怒りなされた由、後で承りました。其後あなたが御出にならないのも、全く其為ぢやなからうかと思つてゐます。例月のものを上げる日には何うかとも思ひましたが、矢張り御出にならないので、心配してゐます。御父さんは打遣つて置けと仰います。兄さんは例の通り吞氣で、困つたら其内来るだらう。其時親爺によく詫らせるが可い。もし来ない様だつたら、おれの方から行つ

てよく異見してやると云つてゐます。けれども、結婚の事は三人とももう断念してゐるんですから、其点では御迷惑になる様な事はありませんまい。尤も御父さんは未だ怒つて御出の様子です。私の考では当分昔の通りになる事は、六づかしいと思ひます。それを考へると、貴方が入らつしやらない方が却つて貴方の為に宜いかも知れません。たゞ心配になるのは月々上げる御金の事です。貴方の事だから、さう急に自分で御金を取る氣遣はなからうと思ふと、差し当り御困りになるのが眼の前に見える様で、御氣の毒で堪りません。で、私の取計で例月分を送つて上げるから、御受取の上は是で来月迄持ち応へて入らつしやい。其内には御父さんの御機嫌も直るでせう。又兄さんからも、さう云つて頂く積です。

わたくしわたくしいいをり折があれば、御託わびをして上げます。それ迄は今迄通り遠慮して入らつしやる方が宜よう御座います。……」

まだ後あとが大分あつたが、女の事だから、大抵は重複に過ぎなかつた。代助は中なかに這入つてゐた小切手を引き抜ぬいて、手紙丈をもう一遍よく読み直した上うへ、丁寧ていねいに元の如くに巻き収めて、無言の感謝を改めて嫂あによめに致した。梅子よりと書いた字は寧ろ拙であつた。手紙の体の言文一致なのは、かねて代助の勧めた通りを用ひたのであつた。

代助は洋燈ランペンの前にある封筒を、猶つくづくと眺ながめた。古い寿命ふるじゆが又一ヶ月延のびた。晩おそかれ早かれ、自己を新たにする必要のある代助には、嫂あによめの志は難有いにもせよ、却つて毒になる許ばかりであつた。

たゞ平岡と事を決する前は、麵麩パンための為に働らく事を肯うけがはぬ心を持つてゐたから、嫂あによめの贈物おくりものが、此際このさい糧食としてことに彼には貴たつとかつた。

其晩も蚊帳へ這入はいる前にふつと、洋燈ランプを消けした。雨戸あまどは門野かどのが立てたに來きたから、故障も云はずに、其儘まづにして置いた。硝子戸がらすどだから、戸越とごしにも空そらは見えた。たゞ昨夕ゆうべより暗くらかつた。曇くもつたのかと思つて、わざ／＼椽側で迄出でて、透すかす様にして軒のきを仰ぐと、ひか光るものが筋すぢを引いて斜なめに空そらを流れた。代助は又蚊帳かやまくを捲まくつて這入はいつた。寐付ねつかれないので団扇あふぎをはたはた云はせた。

家の事いへは左のみ氣に掛かからなかつた。職業もなるが儘になれと度胸を据ゑた。たゞ三千代の病氣と、其原因と其結果が、ひどく

代助の頭あたまを悩なやました。それから平岡との会見の様子も、様々さま／＼に想像して見た。それも一方ひとかたならず彼の脳髓かれを刺激した。平岡は明日あしたの朝九時頃べごろあんまり暑くならないうちに来るといふ伝言であつた。代助は固より、平岡に向つて何う切り出ださう抔と形式的の文句を考へる男ではなかつた。話す事は始めから極きまつてゐて、話す順序は其時の模様次第もだから、決して心配にはならなかつたが、たゞ成る可く穩かに自分の思ふ事が向ふに徹する様にしたかつた。それで過度の興奮を忌んで、一夜の安静を切に冀つた。成るべく熟じゆくすい睡すいしたいと心掛けて臉まぶたを合せたが、生憎眼が冴えて昨夕ゆふべよりは却つて寐苦ねしかつた。其内夏うちの夜がぼうと白み渡しらつて来きた。代助は堪たまりかねて跳ね起きた。跣足はだしで庭先へ飛び下りて冷たい露つゆ

を存分に踏んだ。夫から又椽側の籐椅子に倚つて、日の出を待つてゐるうちに、うとくした。

十六の七

門野が寐惚け眼を擦りながら、雨戸を開けに出た時、代助ははつとして、此仮睡から覚めた。世界の半面はもう赤い日に洗はれてゐた。

「大變御早うがすな」と門野が驚ろいて云つた。代助はすぐ風呂場へ行つて水を浴びた。朝飯は食はずに只紅茶を一杯飲んだ。新聞を見たが、殆んど何が書いてあるか解らなかつた。読むに従

つて、読んだ事が群がつて消えて行つた。たゞ時計の針ばかりが
気になつた。平岡が来る迄にはまだ二時間あまりあつた。代助は
其間を何うして暮らさうかと思つた。凝としてはゐられなかつた。
けれども何をしても手に付かなかつた。責めて此二時間をぐつと
寐込んで、眼を開けて見ると、自分の前に平岡が来てゐる様にし
たかつた。

仕舞に何か用事を考へ出さうとした。不図机の上に乘せてあつ
た梅子の封筒が眼に付いた。代助は是だと思つて、強いて机の前
に坐つて、嫂へ謝状を書いた。成るべく丁寧に書く積であつたが、
状袋へ入れて宛名迄認めて仕舞つて、時計を眺めると、たつた十
五分程しか経つてゐなかつた。代助は席に着いた儘、安からぬ眼

を空^{くう}に据^あゑて、頭^{あたま}の中^{なか}で何^{なに}か搜^{さが}す様^{よう}に見^みえた。が、急^{いそ}に起^おつた。

「平岡が来たら、すぐ帰るからつて、少し待たして置いて呉れ」

と門野に云ひ置いて表へ出た。強い日が正面から射竦める様な勢

で、代助の顔を打つた。代助は歩きながら絶えず眼と眉を動かし

た。牛込見附を這入つて、飯田町を抜けて、九段坂下へ出て、

きのふよ
昨日寄つた
ふるほんや
古本屋迄来て、

「昨日不要の本を取りに来て呉れと頼んで置いたが、少し都合が

あつて見合わせる事にしたから、其積で」と断つた。帰りには、暑

さが余り酷ひどかつたので、電車で飯田橋へ回まはつて、それから揚場あけぼを

筋違に毘沙門前へ出た。

家の前には車が一台下りてゐた。玄関には靴が揃へてあつた。

代助は門野かどのの注意を待たないで、平岡の来きてゐる事を悟あせつた。汗あせを拭ふいて、着物きものを洗あらひ立たての浴衣ゆかたに改かめて、座敷でへ出でた。
 「いや、御使おつかひで」と平岡が云つた。矢張り洋服を着きて、蒸むされる様に扇を使つた。

「何どうも暑あつい所を」と代助も自おのづから表おもてだつ立たた言葉遣づかひをしなればならなかつた。

二人ふたりはしばらく時候の話をした。代助はすぐ三千代の様子を聞きいて見たかつた。然しそれが何どう云いふものか聞き悪にくかつた。其そのう内うち通例の挨拶も済すんで仕舞つた。話はなしは呼び寄せた方から、切り出すのが順当であつた。

「三千代さんは病氣だつてね」

「うん。夫それで社しやの方ほうも二三日休やすませられた様な訳で。つい君の所へ返事を出すのも忘れて仕舞つた」

「そりや何どうでも構はないが。三千代さんはそれ程悪わるいのかい」

平岡は断然たる答を一言ひとことばでなし得なかつた。さう急に何どうの斯かうのといふ心配もない様だが、決して輕かるい方ではないといふ意味を手短かに述べた。

此前暑あつい盛さかりに、神楽坂へ買物に出た序に、代助の所へ寄つた

明日あくるひの朝あさ、三千代は平岡の社でへ出掛ける世話をしてみながら、とつおつと襟えり飾かざりを持つた儘卒倒した。平岡も驚ろいて、自分の

支度したくは其儘に三千代を介抱した。十分の後三千代はもう大丈夫だから社へ出て呉くれと云ひ出だした。口元くちもとには微笑の影さへ見えた。

横よこにはなつてゐたが、心配する程ほどの様子もないので、もし悪い様
だつたら医者と呼ぶ様に、必要があつたら社へ電話を掛ける様に
云ひ置いて平岡は出勤した。其晩は遅くおそ帰つた。三千代は心持が
悪いわるといつて先へ寐ねてゐた。何んな具合かと聞きいても、判然はつきり
した返事をしなかつた。翌日朝起きて見ると三千代の色いろつや沢が非常
に可よくなかつた。平岡は寧ろ驚ろいて医者を迎へた。医者は三千
代の心臓を診察して眉をひそめた。卒倒は貧血ための為だと云つた。
随分強い神経衰弱に罹かつてゐると注意した。平岡は夫それから社を休
んだ。本人は大丈夫だから出て呉くれろと頼む様に云つたが、平岡
は聞きかなかつた。看護をしてから二日目の晩ばんに、三千代みちよが涙なみだを流
して、是非詫あやまらなければならぬ事があるから、代助の所へ行

つて其訳を聞いて呉れろと夫に告げた。平岡は始めてそれを聞いた時には、本當にしなかつた。腦のうの加減かげんが悪いのだらうと思つて、好よし／＼と氣休きやすめを云つて慰めてゐた。三日目みつかめにも同じ願が繰り返された。其時平岡は漸やく三千代の言葉に一種の意味を認みとめた。すると夕方ゆふがたになつて、門野が代助から出した手紙の返事を聞ききにわざ／＼小石川迄遣やつて来きた。

「君の用事と三千代の云ふ事と何か関係があるのかい」と平岡は不思議さうに代助を見た。

十六の八

平岡の話は先刻から深い感動を代助に与へてゐたが、突然此思はざる問とひに來た時とき、代助はぐつと詰つまつた。平岡の問は實に意表に、無邪氣に、代助の胸むねに応こたへた。彼かれは何時いつになく少し赤面せきめんして俯う向つむいた。然し再顔ふたゝかほを上げた時は、平生の通り静かな悪わるびれない態度を回復してゐた。

「三千代さんの君きみに詫あやまる事と、僕の君に話したい事とは、恐らく大いなる關係があるだらう。或おんは同じ事なかも知れない。僕は何どうしても、それを君に話さなければならぬ。話す義務があると思ふから話はなすんだから、今日迄の友誼めんに免めんじて、快こころよく僕に僕の義務はたを果はたして呉くれ給へ」

「何だい。改あらたまつて」と平岡は始めて眉たゞを正した。

「いや前置をすると言訳らしくなつて不可ないから、僕も成る可くなら卒直に云つて仕舞ひたいのだが、少し重大な事件だし、夫それに習慣に反した嫌きらひもあるので、若し途中で君に激されて仕舞ふと、甚だ困るから、是非仕舞迄君に聞きいて貰ひたいと思つて」

「まあ何だい。其話はなしと云ふのは」

好奇心と共に平岡の顔かほが益真面目まじめになつた。

「其代り、みんな話はなしした後で、僕は何どんな事を君から云はれても、矢張り大人しく仕舞迄聞く積だ」

平岡は何にも云はなかつた。たゞ眼鏡めがねの奥から大きな眼めを代助のうへ上に据すゑた。外そとはぎら／＼する日が照てり付けて、椽側迄射返いかへしたが、二人は殆んど暑さを度外に置いた。

代助は一段声を潜^{ひそ}めた。さうして、平岡夫婦が東京へ来^きてから以来、自分と三千代との関係が何^どんな変化を受けて、今日に至つたかを、詳しく語り出^だした。平岡は堅^{かた}く唇^{くちびる}を結^{むす}んで代助の一語一句に耳^{みみ}を傾^かけた。代助は凡^{たゞ}てを語るに約一時間余を費やした。其間に平岡から四遍程極めて単簡な質問を受けた。

「ざつと斯^かう云ふ経過だ」と説明の結末を付^つけた時、平岡はたゞ唸^{うな}る様に深^{ふか}い溜^{ため}息^{いき}を以て代助に答へた。代助は非常に酷^{つら}かつた。「君の立場^{たちば}から見れば、僕は君を裏切りした様に当る。怪^けしからん友^{とも}達^{だち}だと思^{おも}ふだらう。左様^{さう}思^{おも}れても一言^{いちごん}もない。済^すまない事になつた」

「すると君は自分のした事を悪^{わる}いと思^{おも}つてゐるんだね」

「無論」

「悪いと思ひながら今日迄歩を進めて来たんだね」と平岡は重ねて聞いた。語気は前よりも稍切迫してゐた。

「左様だ。だから、此事このことに対して、君の僕等に与へやうとする制裁は潔よく受ける覚悟だ。今のはたゞ事実を其儘に話した丈で、君の処分の材料にする考だ」

平岡は答へなかつた。しばらくしてから、代助の前へ顔を寄せて云つた。

「僕の毀損された名誉が、回復出来る様な手段が、世の中なかにあり得ると、君は思つてゐるのか」

今度は代助の方が答へなかつた。

「法律や社会の制裁は僕には何にもならない」と平岡は又云つた。
「すると君は当事者丈のうちで、名誉を回復する手段があるかと聞くんだね」

「左様さ」

「三千代さんの心機を一転して、君を元よりも倍以上に愛させる様にして、其上僕を蛇蝎の様に悪ませさへすれば幾分か償にはなる」

「夫が君の手際で出来るかい」

「出来ない」と代助は云ひ切つた。

「すると君は悪いと思つた事を今日迄発展させて置いて、猶其悪いと思ふ方針によつて、極端押して行かうとするのぢやないか」

「矛盾かも知れない。然し夫は世間の掟おきてと定めてある夫婦関係と、自然の事実として成り上あがつた夫婦関係とが一致しなかつたと云ふ矛盾なのだから仕方がない。僕は世間の掟として、三千代さんのおつとおつとの夫たる君に詫あやまる。然し僕の行為其物に対しては矛盾も何も犯してゐない積だ」

十六の九

「ぢや」と平岡は稍声を高めた。「ぢや、僕等二人は世間の掟おきてに叶かなふ様な夫婦関係は結むすべないと云ふ意見だね」

代助は同情のある氣の毒さうな眼めをして平岡を見た。平岡の陰けわ

しい眉が少し解けた。

「平岡君。世間^{せけん}から云へば、これは男子の面目^{かみ}に關^かはる大事件だ。だから君が自己の權利を維持^{たも}する為^{ため}に、——故意に維持しやうと思はないでも、暗に其心が働^{はたら}いて、自然と激^くして来るのは已を得ないが、——けれども、こんな關係の起らない學校時代の君になつて、もう一遍僕の云ふ事をよく聞いて呉れないか」

平岡は何とも云はなかつた。代助も一寸^{ひか}控えてゐた。烟草^{たばこ}を一口^{ひとくち}吹^ふいた後^{あと}で、思ひ切つた。

「君は三千代さんを愛してゐなかつた」と静^{しづ}かに云つた。

「そりや」

「そりや余計な事だけれども、僕は云はなければならぬ。今度

の事件に就て凡ての解決者はそれだらうと思ふ」

「君には責任がないのか」

「僕は三千代さんを愛してゐる」

「他の妻を愛する権利が君にあるか」

「仕方がない。三千代さんは公然君の所有だ。けれども物件ぢやない人間だから、心迄こころ所有する事は誰にも出来ない。本人以外にどんなものが出て来たきつて、愛情の増減や方向を命令する訳には行かない。夫の権利は其所迄は届きやしない。だから細君の愛を他へ移さない様にするのが、却つて夫の義務だらう」

「よし僕が君の期待する通り三千代を愛してゐなかつた事が事実としても」と平岡は強いて己を抑える様に云つた。拳を握つてゐる

た。代助は相手の言葉の尽きるのを待った。

「君は三年前の事を覚えてゐるだらう」と平岡は又句を更へた。

「三年前は君が三千代さんと結婚した時だ」

「さうだ。其時の記憶が君の頭の中に残つてゐるか」

代助の頭は急に三年前に飛び返つた。当時の記憶が、闇を回る

松明の如く輝いた。

「三千代を僕に周旋しやうと云ひ出したものは君だ」

「貰いたいと云ふ意志を僕に打ち明けたものは君だ」

「それは僕だつて忘れやしない。今に至る迄君の厚意を感謝してゐる」

平岡は斯う云つて、しばらく冥想してゐた。

「ふたりふたりで、夜上野よるうへのを抜ぬけて谷中やなかへ下おりる時だつた。雨上あめあがりで谷中やなかの下したは道みちが悪わるかつた。博物館の前まへから話わしつゞけて、あの橋はしの所迄き来た時、君は僕の為ために泣ないて呉くれた」

代助は黙然としてゐた。

「僕は其時程朋友を難有うれいと思つた事はない。嬉うれしくつて其晩は少しも寐ねられなかつた。月のある晩ばんだつたので、月の消える迄ききてゐた」

「僕もあの時は愉快だつた」と代助が夢の様に云つた。それを平岡は打ち切る勢さへぎで遮さへぎつた。――

「君は何だつて、あの時僕たの為ために泣ないて呉くれたのだ。なんだつて、僕たの為ために三千代を周旋ちかしやうと盟ちかつたのだ。今日こんにちの様な事を引き

起す位なら、何故あの時、ふんと云つたなり放つて置いて呉れなかつたのだ。僕は君からは程深刻な復讐かたきを取られる程、君に向つて悪い事をした覚おぼえがないぢやないか」

平岡は声を顫ふるはした。代助の蒼い額に汗の珠が溜あせつた。さうして訴たへる如くに云つた。

「平岡、僕は君より前から三千代さんを愛してゐたのだよ」

平岡は茫然として、代助の苦痛の色を眺めた。

「其時の僕は、今の僕でなかつた。君から話を聞いた時、僕の未来を犠牲にしても、君の望のぞみを叶かなへるのが、友達の本分だと思つた。それが悪わるかつた。今位頭あたが熟してゐれば、まだ考へ様があつたのだが、惜しい事に若わかかつたものだから、余りに自然を輕蔑し

過ぎた。僕はあの時の事を思つては、非常な後悔の念に襲はれてゐる。自分の為ばかりぢやない。實際君の為に後悔してゐる。僕が君に対して真に濟まなと思ふのは、今度の事件より寧ろあの時僕がなまじいに遣り遂げた義侠心だ。君、どうぞ勘弁して呉れ。僕は此通り自然に復讐を取られて、君の前に手を突いて詫まつてゐる」

代助は涙を膝の上に零した。平岡の眼鏡が曇つた。

十六の十

「どうも運命だから仕方がない」

平岡は呻吟く様な声を出した。二人は漸く顔を見合せた。

「善後策に就て君の考があるなら聞かう」

「僕は君の前に詫まつてゐる人間だ。此方から先へそんな事を云ひ出す権利はない。君の考から聞くのが順だ」と代助が云つた。

「僕には何にもない」と平岡は頭を抑えてゐた。

「では云ふ。三千代さんを呉れないか」と思ひ切つた調子に出た。

平岡は頭から手を離して、肱を棒の様に洋卓の上に倒した。同時に、

「うん遣らう」と云つた。さうして代助が返事をし得ないうちに、又繰り返した。

「遣る。遣るが、今は遣れない。僕は君の推察通り夫程三千代を

愛して居なかつたかも知れない。けれども悪んぢやゐなかつた。

三千代は今病氣だ。しかも余り軽い方ぢやない。寐ねてゐる病人を君に遣やるのは厭いやだ。病氣が癒なほる迄君に遣やれないとすれば、夫迄は

僕おつとが夫だから、夫として看護する責任がある」

「僕は君に詫あやまつた。三千代さんも君に詫あやまつてゐる。君から云へ

ば二人とも、不埒ふたりな奴やつには相違ないが、——幾何いくらあや詫あやまつても勘弁

でき出来んかも知れないが、——何しろ病氣をして寐ねてゐるんだから」

「夫は分それわかつてゐる。本人の病氣に付つけ込んで僕が意趣ぼ晴らしに、

虐ぎやくたい待たいでもすると思つてゐるんだらうが、僕だつて、まさか」

代助は平岡の言ことを信じた。さうして腹なかの中で平岡に感謝した。

平岡は次つぎに斯かう云つた。

「僕は今日けふの事がある以上は、世間的おつとの夫たちの立場ばからして、もう君と交際する訳には行かない。今日けふ限り絶交するから左様さう思つて呉れ玉へ」

「仕方がない」と代助は首を垂れた。

「三千代の病氣は今云ふ通り軽い方ぢやない。此この先さき何どんな変化がないとも限かぎらない。君も心配だらう。然し絶交した以上は已やむを得ない。僕の在不在かゝに係かゝはらず、宅うちへ出入ではいりする事丈は遠慮して貰もらひたい」

「承知した」と代助はよろめく様に云つた。其その頬ほは益あを蒼さへかつた。平岡は立ち上あがつた。

「君、もう五分許ばかすは坐まつて呉れ」と代助が頼たのんだ。平岡は席に着つい

た儘無言であつた。

「三千代さんの病氣は、急に危険きけんな虞おそれでもありさうなのかい」

「さあ」

「夫丈それ教へて呉れないか」

「まあ、さう心配しないでも可いいだらう」

平岡は暗くらい調子で、地ぢに息いきを吐はく様に答へた。代助は堪たえられない思がした。

「若もしだね。若もし万一の事がありさうだつたら、其前にたつた一遍丈で可いいから、逢はして呉れないか。外ほかには決して何も頼たのまない。たゞ夫丈だ。夫丈を何どうか承知して呉くれ玉へ」

平岡は口くちを結むすんだなり、容易に返事をしなかつた。代助は苦痛

の遣り所がなくて、両手の掌を、垢の縋れる程揉んだ。

「夫はまあ其時の場合にしよう」と平岡が重さうに答へた。

「ぢや、時々病人の様子を聞きに遣つても可いかね」

「夫は困るよ。君と僕とは何にも関係がないんだから。僕は是か

ら先、君と交渉があれば、三千代を引き渡す時丈だと思つてるん

だから」

代助は電流に感じた如く椅子の上で飛び上がった。

「あつ。解つた。三千代さんの死骸丈を僕に見せる積なんだ。そ

れは苛い。それは残酷だ」

代助は洋卓の縁を回つて、平岡に近づいた。右の手で平岡の脊

広の肩を抑えて、前後に揺りながら、

「苛い、苛い」と云つた。

平岡は代助の眼のうちに狂へる恐ろしい光を見出した。肩を揺られながら、立ち上がった。

「左んな事があるものか」と云つて代助の手を抑えた。二人は魔に憑かれた様な顔をして互を見た。

「落ち付かなくつちや不可ない」と平岡が云つた。

「落ち付いてゐる」と代助が答へた。けれども其言葉は喘ぐ息の間を苦しさに洩れて出た。

暫らくして発作の反動が来た。代助は己れを支ふる力を用ひ尽した人の様に、又椅子に腰を卸した。さうして両手で顔を抑えた。

十七の一

代助は夜の十時過すぎになつて、こつそり家いへを出た。

「今いまから何方どちらへ」と驚ろいた門野かどのに、

「何なににちよつと

「何一寸」と曖昧な答をして、寺町てらまちの通り迄き来た。暑い時分あつ

の事なので、町まちはまだ宵よひの口くちであつた。浴衣ゆかたを着きた人が幾人とな

く代助の前後ぜんごを通つた。代助には夫それが唯動たどうくものとしか見えな

つた。左右さゆうの店みせは悉く明あかるかつた。代助は眩まぼしさうに、電気燈でんきとうの

少すくない横町まがへ曲つた。江戸川えどがわの縁ふちへ出た時、暗くらい風かすが微かすかに吹ふい

た。黒い桜くろざくらの葉はが少し動うごいた。橋はしの上うへに立つて、欄干らんかんから下したを

見下おろしてゐたものが二人ふたりあつた。金剛寺坂ざかでは誰にも逢あはなかつ

た。岩崎家の高い石垣が左右から細い坂道を塞いでゐた。

平岡の住んでゐる町は、猶静かであつた。大抵な家は灯影を洩

らさなかつた。向ふから来た一台の空車の輪の音が胸を躍ら

す様に響いた。代助は平岡の家の塀際迄来て留つた。身を寄せて

中を窺ふと、中は暗かつた。立て切つた門の上に、軒燈が空しく

標札を照らしてゐた。軒燈の硝子に守宮の影が斜めに映つた。

代助は今朝も此所へ来た。午からも町内を彷徨いた。下女が買

物にでも出る所を捕まへて、三千代の容体を聞かうと思つた。然

し下女は遂に出て来なかつた。平岡の影も見えなかつた。塀の傍

に寄つて耳を澄まして、夫らしい人声は聞えなかつた。医者

を突き留めて、詳しい様子を探らうと思つたが、医者らしい車は

平岡の門前には留とまらなかつた。そのうち、強い日に射付けられた
 頭あたまが、海うみの様に動うごき始めた。立ち留どまつてゐると、倒れさうにな
 った。歩あるき出すと、大地が大きな波紋を描えがいた。代助は苦しさを
 忍しのんで這はふ様に家へ歸うちつた。夕ゆふめし食も食くはずに倒れたなり動うごかず
 にゐた。其時おそ恐るべき日は漸く落おちて、夜が次第だいに星ほしの色を濃こく
 した。代助は暗くらさと涼しさのうちに始めて蘇よみがへ生なつた。さうして
 頭あたまを露つゆに打うたせながら、又三千代のゐる所迄遣やつて来きたのである。
 代助は三千代の門前を二三度行いつたり来きたりした。軒燈したの下へ
 来るたびに立ち留どまつて、耳を澄すました。五分乃至十分は凝じつとし
 てゐた。しかし家うちの中なかの様子は丸で分わからなかつた。凡てが寂しんとし
 てゐた。

代助が軒燈けんとうの下へ来て立ち留とまるたびに、守宮やもりが軒燈けんとうの硝子がらすにぴたりと身体からだを貼はり付けてゐた。黒い影は斜はすに映うつつた儘何時いつでも動うごかなかつた。

代助は守宮やもりに氣が付く毎ごとに厭いやな心持がした。其動うごかない姿が妙に氣に掛かつた。彼の精神は鋭どきの余りから來くる迷信に陥おつた。三千代は危険だと想像した。三千代は今苦しみつゝあると想像した。三千代は今死につゝあると想像した。三千代は死ぬ前に、もう一遍自分に逢あひたがつて、死に切れずに息いきを偷ぬすんで生きてゐると想像した。代助は拳こぶしを固めて、割れる程平岡の門かどを敲たたかずにはゐられなくなつた。忽ち自分は平岡のものに指ゆびさへ触れる權利がない人間だと云ふ事に氣が付いた。代助は恐おそろしさの余り馳かけ出だした。

した。静かな小路こうぢの中に、自分の足音あしおと丈が高く響ひびいた。代助は馳かけながら猶恐ろしくなつた。足を緩あしゆるめた時は、非常に呼息いきが苦しくなつた。

道端みちばたに石段いしだんがあつた。代助は半ば夢中で其所そこへ腰を掛けたなり、額ひたひを手で抑おさえて、固かたくなつた。しばらくして、閉ふさいだ眼めを開あけて見ると、大きな黒い門もんがあつた。門の上うへから太い松が生垣そとの外迄枝を張つてゐた。代助は寺の這入り口くちに休んでゐた。

彼は立たち上あがつた。惘然もうぜんとして又歩あるき出した。少し来きて、再び平岡の小路へ這入つた。夢の様に軒燈の前で立留たちどまつた。守宮やもりはまだ一つ所に映うつつてゐた。代助は深い溜息ためいきを洩もらして遂に小石川を南側みなみがはへ降りた。

其晩は火の様に、熱くて赤い旋風つむじの中に、頭あたまが永久に回轉した。代助は死力を尽して、旋風つむじの中から逃れ出様のがと争つた。けれども彼の頭あたまは毫も彼の命令に応じなかつた。木の葉の如く、遲疑ちぎする様子もなく、くるりくと焰ほのほの風かぜに巻かれて行つた。

十七の二

翌日あくるひは又燬やけ付く様に日ひが高く出た。外そとは猛烈な光ひかりで一面にいらくし始めた。代助は我慢して八時過すぎに漸く起きた。起きるや否や眼めがぐらついた。平生の如く水みづを浴あびて、書齋へ這入はいつて凝じつと竦すくんだ。

所へ門野^{かどの}が来て、御客さまですと知らせたなり、入口^{いりぐち}に立つて、驚ろいた様に代助を見た。代助は返事をするのも退儀であつた。客は誰だと聞き返しもせず、手で支へた儘^{かほ}の顔を、半分ばかり門野^{かどの}の方へ向き易^かへた。其時^{そのとき}客の足音^{あしおと}が椽側^{えんがわ}にして、案内も待たずに兄^{あに}の誠吾^{まことご}が這入^まつて来^きた。

「やあ、此方^{こつち}へ」と席を勧めたのが代助にはやうやうであつた。誠吾は席に着^つくや否や、扇子を出して、上布^{じやうふ}の襟^{えり}を開^{ひら}く様に、風^{かぜ}を送つた。此暑^{あつ}さに脂肪^{しぼう}が焼^やけて苦しいと見えて、荒い息^{いきづか}遣^ひをした。

「暑い^{あつ}な」と云つた。

「御宅^{おたく}でも別に御変りもありませんか」と代助は、左も疲^{つか}れ果^はて

ひとり
た人の如くに尋ねた。

ふたり
二人は少時例の通りの世間話をした。代助の調子態度は固

より尋常ではなかつた。けれども兄は決して何うしたとも聞か

かつた。話の切れ目へ来た時、

けふ
「今日は実は」と云ひながら、懐へ手を入れて、一通の手紙を取

り出した。

じつ
「実は御前に少し聞きたい事があつて来たんだがね」と封筒の裏

を代助の方へ向けて、

「此男を知つてゐるかい」と聞いた。其所には平岡の宿所姓名が自

筆で書いてあつた。

「知つてます」と代助は殆んど器械的に答へた。

「元、御前のおまへと同級生だつて云ふが、本当か」

「さうです」

「此男の細君も知つてゐるのかい」

「知つてゐます」

兄は又扇を取り上げて、二三度ぱち／＼と鳴らした。それから、

少し前へ乗り出す様に、声を一段落した。

「此男の細君と、御前のおまへが何か関係があるのかい」

代助は始めから万事を隠す気はなかつた。けれども斯う単簡に聞かれたときに、何うして此複雑な経過を、一言で答へ得るだらうと思ふと、返事は容易に口へは出なかつた。兄は封筒の中から、手紙を取り出した。それを四五寸ばかり捲き返して、

「実は平岡と云ふ人が、斯う云ふ手紙を御父さんの所へ宛々寄こしたんだがね。——読んで見るか」と云つて、代助に渡した。代助は黙つて手紙を受取つて、読み始めた。兄は凝と代助の額の所を見詰めてゐた。

手紙は細かい字で書いてあつた。一行二行と読むうちに、読み終つた分が、代助の手先から長く垂れた。それが二尺余になつても、まだ尽きる気色はなかつた。代助の眼はちらちらした。頭が鉄の様に重かつた。代助は強いでも仕舞迄読み通さなければならぬと考へた。総身が名状しがたい圧迫を受けて、腋の下から汗が流れた。漸く結末へ来た時は、手に持つた手紙を巻き納める勇氣もなかつた。手紙は広げられた儘洋卓の上に横はつた。

「其所そこに書いてある事は本当なのかい」と兄あにが低い声で聞いた。

代助はたゞ、

「本当です」と答へた。兄あには打衝を受けた人の様に一寸扇ちよつとの音おとを留とどめた。しばらくは二人とも口くちを聞き得なかつた。良やうあつて兄あにが、

「まあ、何どう云ふ了見で、そんな馬鹿な事をしたのだ」と呆あきれた調子で云つた。代助は依然として、口くちを開ひらかなかつた。

「何どんな女だつて、貰もらはうと思へば、いくらでも貰もらへるぢやないか」と兄がまた云つた。代助はそれでも猶黙つてゐた。三度目あにに兄が斯かう云つた。――

「御前おまへだつて満まん更ざら道楽をした事のない人間でもあるまい。こん

な不始末を仕出^{しで}かす位なら、今迄折角金^{かね}を使つた甲斐がないぢやないか」

代助は今更兄^{あに}に向つて、自分の立場^{たちば}を説明する勇氣もなかつた。彼は^{かれ}ついで此^{このあひだ}間迄全く兄^{あに}と同意見であつたのである。

十七の三

「姉^{ねえ}さんは泣^ないてゐるぜ」と兄^{あに}が云つた。

「さうですか」と代助は夢の様に答へた。

「御父^{おとう}さんは怒^{おこ}つてゐる」

代助は答をしなかつた。たゞ遠い所を見る眼^めをして、兄^{あに}を眺め

てゐた。

「御前おまへは平生から能く分わからない男だつた。夫でも、いつか分わかる時機きが来くるだらうと思つて今日迄こんにち交際つきあつてゐた。然し今度こんだと云ふ今度んだは、全く分わからない人間だと、おれも諦あきらめられて仕舞つた。世の中に分わからない人間にんげん程危険なものはない。何を為するんだか、何を考へてゐるんだか安心が出来ない。御前おまへは夫それが自分の勝手だから可よからうが、御父おとうさんやおれの、社会上の地位を思つて見ろ。御前だつて家族の名誉と云ふ觀念は有もつてゐるだらう」

兄あにの言葉は、代助の耳みみを掠かすめて外へ零そとこぼれた。彼はたゞ全身に苦痛を感じた。けれども兄あにの前に良心の鞭撻を蒙る程動揺してはゐなかつた。凡てを都合よく弁解して、世間的の兄あにから、今更同情

を得やうと云ふ芝居氣は固より起らなかつた。彼は彼の頭の中に、彼自身に正當な道を歩んだといふ自信があつた。彼は夫で満足であつた。その満足を理解して呉れるものは三千代丈であつた。三千代以外には、父も兄も社会も人間も悉く敵であつた。彼等は赫々たる炎火の裡に、二人を包んで焼き殺さうとしてゐる。代助は無言の儘、三千代と抱き合つて、此焰の風に早く己れを焼き尽すのを、此上もない本望とした。彼は兄には何の答もしなかつた。重い頭を支へて石の様に動かなかつた。

「代助」と兄が呼んだ。「今日はおれは御父さんの使に來たのだ。御前は此間から家へ寄り付かない様になつてゐる。平生なら御父さんが呼び付けて聞き糺す所だけでも、今日は顔を見るの

が厭いやだから、此方こつちから行つて実否たしかを確めて来いと云ふ訳で来たのだ。それで——もし本人に弁解があるなら弁解を聞きくし。又弁解も何もない、平岡の云ふ所が一々根拠のある事実なら、——御父おとうさんは斯かう云はれるのだ。——もう生涯代助には逢はない。何処どこへ行いつて、何なにをしようと当人とうじんの勝手だ。其代り、以来子としても取り扱はない。又親おやとも思つて呉くれるな。——尤もの事だ。そこで今御前いままへの話を聞はなしいて見ると、平岡の手紙には嘘うそは一つも書いてないんだから仕方がない。其上御前は、此事に就て後悔もしなければ、謝罪もしない様に見受うけられる。それぢや、おれだつて、歸かへつて御父おとうさんに取り成し様がない。御父おとうさんから云はれた通りを其儘御前に伝へて歸る丈の事だ。好いいか。御父おとうさんの云はれる

事は分つたか^{わか}

「よく分りました」と代助は簡明に答へた。

「貴様^{きさま}は馬鹿だ」と兄^{あに}が大きな声を出した。代助は俯向いた儘^{かほ}顔を上げなかつた。

「愚図だ」と兄^{あに}が又云つた。「不断^{ふだん}は人並^{ひとなみ}以上に減らず口^{ぐち}を敲く癖に、いざと云ふ場合には、丸で唾^{だま}の様に黙つてゐる。さうして、陰^{かげ}で親の名譽^{かゝ}に關^{かゝ}はる様な悪戯^{いたづら}をしてゐる。今日^{こんにち}迄何^{ため}の爲に教育を受けたのだ」

兄^{あに}は洋卓の上の手紙を取つて自分で巻^まき始めた。静かな部屋の中に、半切^{はんきり}の音^{おと}がかさ／＼鳴^なつた。兄^{あに}はそれを元^{もと}の如^{ごと}くに封筒に納めて懷中した。

「ぢや帰るよ」と今度は普通の調子で云つた。代助は叮嚀に挨拶をした。兄は、

「おれも、もう逢はんから」と云ひ捨てて玄關に出た。

兄の去つた後、代助はしばらくして元の儘じつと動かずにゐた。門野が茶器を取り片付けに来た時、急に立ち上がつて、

「門野さん。僕は一寸職業を探して来る」と云ふや否や、鳥打帽を被つて、傘も指さずに日盛りの表へ飛び出した。

代助は暑い中を馳けない許に、急ぎ足に歩いた。日は代助の頭の上から真直に射下した。乾いた埃が、火の粉の様に彼の素足を包んだ。彼はぢり／＼と焦る心持がした。

「焦る／＼」と歩きながら口の内で云つた。

飯田橋へ来て電車に乗つた。電車は真直に走り出した。代助は車のなかで、

「あゝ動く。世の中が動く」と傍の人に聞える様に云つた。彼の頭は電車の速力を以て回転し出した。回転するに従つて火の様に焙つて来た。是で半日乗り続けたら焼き尽す事が出来るだらうと思つた。

なか 忽ち赤い郵便筒が眼に付いた。すると其赤い色が忽ち代助の頭の中なかに飛び込んで、くるくると回転し始めた。傘屋の看板に、赤い蝙蝠傘を四つ重ねて高く釣るしてあつた。傘の色が、又代助の頭あたまに飛び込んで、くるくると渦を捲いた。四つ角に、大きい真赤な風船玉を売つてゐるものがあつた。電車が急に角を曲るとき、風

船玉は追懸おっかけて来て、代助の頭あたまに飛び付いた。小包郵便こづゝみを載のせた赤い車のはつと電車と摺すれ違ふとき、又代助の頭あたまの中なかに吸ひ込まれた。烟草屋の暖簾が赤かつた。売出しの旗も赤かつた。電柱が赤かつた。赤ペンキの看板がそれから、それへと続つゞいた。仕舞には世の中が真赤まつかになつた。さうして、代助の頭あたまを中心としてくるりくると焰ほの息いきを吹いて回転した。代助は自分の頭が焼け尽きる迄電車に乗つて行かうと決心した。

青空文庫情報

底本：「漱石全集 第六卷」岩波書店

1994（平成6）年5月9日発行

初出：「東京朝日新聞」、「大阪朝日新聞」

1909（明治42）年6月27日～10月4日

※底本の本文は、漱石の自筆原稿によっています。

※ルビは、漱石の原稿にあったルビのみ付け、岩波編集部が付けたルビは省きました。

※ルビ、文字遣い、語句の混在は底本の通りとしました。

入力：Godot、野口英司、oto

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年4月16日作成

2013年3月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

それから

夏目漱石

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>